ネギま～道士の破壊物語～

天笑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギま～道士の破壊物語～

【Ｎコード】
Ｎ１９２９Ｕ

【作者名】
天笑

【あらすじ】
この作品はラブコメ６、バトル３、シリアス１の割合で提供します。更にご都合主義、キャラ崩壊、原作ブレイク、オリ主最強、ハーレムなどテンプレ展開が繰り広げられてますので、それでも構わないという方のみお読み下さい。
では、【ネギま】に転生したオリ主の物語が始まります。

始まり（前書き）

つい勢いで書いてしまった。
駄文ですが、これからよろしくお願いしますm（＿＿）m

誤字、脱字があれば教えて下さい

始まり

え〜、はじめまして。皆様。
俺は日々を平凡に生きていた普通の大学生の陽神　霞です。そして
俺は……死んだようです。
……いきなり、何言ってんだ?と思ったでしょう。
ですけどね、目の前に現在進行形でいる神様?っぽいのがいてそう
教えてくれたんです。
ちなみに、よく神様ってのを聞くと髭が生えた老人やらめちゃめち
ゃ美人な人とかを想像するでしょうが、目の前にいるのがね……
……赤いアフロっぽい髪に丸く赤いつけっ鼻、白粉をぬり
たくった顔、なんか黄色いツナギを着てそこそこ背が高い。
ぶっちゃけ言うと……ドナルドなんだ。
……ランランル〜乙。

改めて、神様……いやドナルド曰わく俺はドナルドの部下が人の
一生が記された書類を整理していたら誤って俺の書類を破いてしま
い、俺死亡。
で、死んだ俺の魂を呼び寄せ謝罪している最中。
これが、今の状況なんだと。
状況整理をしているとドナルドが

「でね、君には流石に申し訳ないから普通の転生ではなく特典付き
の転生をさせてあげようかと思ってるんだ〜。…ハンバーガー食べ
る?」

と言いながらハンバーガーを差し出された。

「あ、ども。それとピクルス抜きでお願いします。……モグモグ、特典っつーとどんなのがあるんっすか？（モグモグ。コーラ下さい。」

「はい、コーラ。色々あるんだ～。だから、何か欲しい能力があったら注文してごらん。……テリヤキいる？」

「ください。あっ、テリソ抜きで。スイマじゃなくテリソです。」

テリヤキソース抜きは密かにマイブームだ。

特典ね～……何も思いつかんぞ。（モグモグ。

「テリソ抜きとは通だね～。思いつかないなら君が死ぬ直前に持ってた漫画やアニメを参考にしたらどうだい？……ナゲットいる？」

「ナゲットはファミリーサイズで。そうですね……そうします。あっ、ソースはマスタードで。」

マスタードは俺の中で鉄板だ。

「了解～。…はいコレ。」

そしてドナルドは俺の鞄を出し、ナゲットと共に渡してくれた。ちなみに聞いた所によると俺の死因は……大学の帰り、たまたま開いていたマンホールに気付かずに落ちて死亡。

……情けねぇｏｒｚ

「（モグモグ。う～ん、どれにしようか？」

鞄を漁りながら考える。荷物の中身は

・封神演義２２、２３巻（フジリュー版）
・リリカルなのはｓｔｒｉｋｅｒｓ　ＤＶＤ全巻
・マルボロ１カートン
・ネギま最新巻
・レポート、筆箱等々

「（モグモグ。そうだな～……そういえば転生する世界は元の世界じゃないんですよね？」

「うん、悪いけどそうなるんだ～。ドナルドにも限界があるんだ。ちなみに行ってもらおうとしてる世界は君が持ってる【ネギま】だよ。……ダブルチーズバーガーいる？」

「あっ、ポテトも下さい、Ｌサイズで。……ネギまって行けるんですか？」

「うん、大丈夫だよ。ドナルド頑張るよ～。……ビックマックいる？」

「メガマックにして下さい（モグモグ。……う～ん、よし決めた！。……あっ！？ビックマックもピクルス抜きで！！」

「わかったよ～。……シェイクいる？」

「メロン味お願いします。（モグモグ、ズズゥ～。」

「はい、シェイク。じゃあ、願いを聞こうかな。何が言いんだい？……コーヒーいる？」

「食後にコーヒーjk。えっとですね……」

出されたバーガーを全部食べ、シェイクも飲み、食後のコーヒーを味わいながら言った。

・封神演義のスーパー宝貝全部。
・仙人又は道士の肉体（上記の宝貝を使えるぐらいの肉体に）
・肉体年齢操作
・ネギまの魔法知識
・高町なのはとフェイト・テスタロッサを従者として連れていきたい

「これでお願いします。……できますか？」

「全然大丈夫だよ。むしろ、これだけでいいのかい？」

ドナルドはまだイケるよ～って顔してるけど、俺的にこれで充分なので頷いた。

「う～ん、まあいいか。じゃあ、願いを叶えて向こうに送るね。従者の2人は向こうで会ってね。目が覚めたら側にいるから。」

「了解です。後、部下の人はあまり怒らないであげてください。人生なんて今回のことも含み色々あるってのが俺の信条なんで、あまり気にしてないですから。」

俺がそう言うと、ドナルドは少しキョトンとしてすぐに笑顔になっ

た。

「わかったよ～。君は優しいね～。ドナルドは感激しちゃったよ。」

「優しくないっすよ。アバウトなだけです。……後…。」

「？なんだい？？」

「転生するのは構わんが……別に、原作を破壊してしまって構わんのだろう？」

背中を見せながら某弓兵の漢台詞を言ってみたり。

「ウホッ！？イイオトコ（ジュル。……おっと、イケない。別にいいよ～。限りなく原作に近い世界だから。世界の修正力とかも君には働かないようにしておくよ～。だから、原作破壊やハーレムなんてのも別にＯＫだよ。……それより、少しヤ・ラ・ナ・イ・カ？」

「わっかりました～。そして、断る！？俺はノーマルだ！！」

ドナルドのキャラが崩れてきた所で、俺の周囲に光が集まる。

「チッ。……それじゃ、世界に送るよ。来世は良き人生を。ランランル～。」

舌打ちした後にドナルドが別れの言葉とかけ声？を言い、光が強くなり……足元に穴が開いた。

勿論、落ちる俺。

「また落ちるのかあぁぁぁぁぁーーーー……。」

ドナルドｓｉｄｅ

「行ったね～。しかし、あの出されたものをあそこまで食べれる人間は凄いね～。しかも、ポテトまで注文してきたよ。いやはや、末恐ろしいね～。」

と開いた穴を見ながら呟くドナルド。

「ああ、そうだ。ちょいと彼に伝言もしとかないと。ドナルドはアフターサービスも万全だよ。ランランル～。」

そう言いながら消えるドナルド。

ｓｉｄｅ終了

始まり（後書き）

何故か段落分けする時の空白が削られる……。

読みにくいとおもいます。

すいません。

設定（前書き）

設定です。

なのはとフェイトは大好きだから出した。

反省も後悔もしてない！！

設定

◆陽神（ひのかみ）　霞（かすみ）♂

◆享年１９歳

◆ドナルドの部下の失敗により死んだ主人公。

性格は基本的にアバウト。

だけど、やるときはとことんまでやるというかやってしまう面もある。

本人は平凡だと思ってるが、周囲の友人曰わくバグキャラ。

見たものは大抵真似できるし、何気に絶対記憶能力を有し頭脳も相当良いんだが、生来の怠け癖により学校の成績などは平均。

趣味は多種多様。

容姿は、前髪を伸ばし目が隠れるようにして伊達メガネを掛け地味な感じにしているが、顔立ちは整っており髪をしっかりセットすればかなり格好いい。

それを知っているのは親しい友人と両親とブラコンの姉だけ。

彼らは口を揃えて勿体無い（姉はそのままにしろと言う）と言うが本人は全く気にしない。

ギャルゲー主人公の如く鈍感ではないし、好きな者にはためらいなく好きと言うが１人の女性だけではなく複数の女性を好きになったりもするので今まで誰か特定の個人と付き合った事はない。何故か恨まれない羨ましい体質をしてる。

◆能力

・絶対記憶能力

・見様見真似（オリジナルと寸分違わずに真似でき、それ以上に昇華することも可能）

・不老長寿（仙人又は道士の肉体を得た為）

・肉体及び精神強化及び操作（スーパー宝貝を全種使えるようにした為）
・魔力（近衛木乃香の約３０倍）、気（ラカンの約５０倍）↑この二つについては次話で明らかに
・本契約又は仮契約をした者に不老長寿を与える。また、魔力、気共に増強↑ドナルドのおせっかい

◆究極宝貝
・四宝剣ドナルド作（ぶっちゃけ最強だが、これを使用時は他の宝貝との同時使用は不可。更に威力がでかすぎて使う場面が滅多にない。ドナルドが勝手に持たせた）

◆スーパー宝貝ドナルド作
・太極図（打神鞭付き）、雷公鞭、盤古幡（火えん剣付き）、金こうせん、傾世元じょう、六魂幡、禁鞭

◆高町なのは♀
◆１９歳

◆能力
・不老長寿
・肉体強化及び精神強化及び操作
・魔力（近衛木乃香の約３０倍）、気（ラカンの約１０倍）の増強
・魔王化（ヤン度がＭＡＸ時のみ）

◆アーティファクト
・番天印ドナルド作（なのはの意志により威力や射程等が変化可能）

◆ドナルドにより霞の従者として呼ばれた。

◆フェイト・テスタロッサ♀

◆１９歳

◆能力

・不老長寿

・肉体強化及び精神強化及び操作

・魔力（近衛木乃香の約２０倍）、気（ラカンの約２０倍）の増強

・死神化（ヤン度がＭＡＸ時のみ）

◆アーティファクト

・莫耶の宝剣ドナルド作（フェイトの意志により長さ、形態変化可能。柄の上下からも出せる。）

注）なのはと同じく従者として呼ばれた。

設定（後書き）

宝貝の漢字変換が出来ないため、一部平仮名を使います。

……携帯じゃあ、これが限界だよｏｒｚ

なのはとフェイトのアーティファクトに関しては少し自重しましたが、ドナルド作と入っているのでかなり魔改造されてます。

基本的にパクティオーをしたら宝貝が出ますので。
もし、このキャラに会った宝貝はコレだ！？と言うのがあれば言って下さい。なるべく善処します。

今の所、パクティオーメンバーとして
鉄板
エヴァ（如意羽衣）、真名（金せん）、木乃香（五化七禽扇）、刹那（斬仙剣）、千雨（太極符印）
パクティオー予定
アキラ、裕奈、千鶴
です

途中で変更するなら、報告します。

原作５０年前～絆の誕生～（前書き）

始まります

大丈夫かな、これ？

原作５０年前～絆の誕生～

「え～、皆様。改めて俺こと陽神　霞はドナルドのヤローに転生を薦められＯＫをして能力もらい落とされたんですよ。というわけで落とされたら意識がなくなり起きたら転生する世界に着く。なーんてテンプレ展開を味わうとおもってたんですけど……意識がなくなることなく、落ちた穴の先が光ったと思ったら……周りは白と青が広がり、下の方をみると茶色が広がってるんですよ～。……ええ、そうです。お分かりでしょう……今進行形で落ちてんだよーーーーー！！！！！」

霞は叫ぶ。

彼は現在、空に放り出されて落下しているところだった。

「ヤバい！ヤバい！！！ヤバい！！！転生してすぐにバッドエンドって洒落になんねーー！！」

焦る霞。

ドナルドから貰った能力なんてすっかり忘れて焦る……。

ネギま～道士の破壊物語～

完

「完。じゃねー！！！ってなんか変な電波受信したぁぁぁ！？違う、それどころじゃないし！？」

いい感じに壊れ出す（笑）。

本気でヤバいと感じ始めた、その時

「「レイジングハート／バルディッシュ！！」」

どこかで聞いたような女性の声を霞は聞き取り、自身の両腕が誰かに掴まれるのを感じ、落ちる感覚がなくなった。

「へっ？……助かっ……た？」

間抜けな声を出す霞。

「「大丈夫？」」

安心していたら両側から霞の安否を確認する女性の声が聞こえた。

片方を見ると

茶色がかった長い髪を両側でくくり、白い服を来た美人。

反対側をみると金の髪をした瞳が赤く、黒いマントと黒い服を着た美人。

高町なのはとフェイト・テスタロッサであった。

その２人を見て霞は

「……結婚してください（キリッ。」

真剣な顔で言い放った。
いきなりのプロポーズになのはとフェイトは

「「えぇっ／／」」

驚き、思わずパッと両手を離した。

「「「あっ」」」

3者の声が重なる。
そして

「あああぁぁぁぁぁーーーー……」

ドップラー効果を残しながら落ちていく主人公。次に

ズウゥゥン！

何かが地面と激突する音。何かはもちろん、霞である。

「……フェイトちゃん。彼……大丈夫かな？」

「……たぶん。大丈夫……かな？」

なのはは漫画のような汗をタラリと流しフェイトに聞き、フェイトもそれに苦笑しながら答える。

「とりあえず……降りよっか？」

「うん……そうだね。」

2人は霞が着弾したであろう場所に降りていった。

「ごめんなさい!? いきなり離しちゃって。」

「私も。ごめんなさい。大丈夫だった?」

なのはとフェイトは霞に頭を下げ謝っていた。

「別に気にしないでいいよ。いきなり変な事を言った俺も悪いし。」

と何でもないように手を振りながら言う。実際、彼を見れば服は汚れているものの、傷自体は全くついてない。

「それより、お互い自己紹介しない? もしかしたら知ってるかもしれないけど、会うのは初めてなんだし。」

霞が提案すると異論はないのか2人は頷く。

「じゃあ、俺から。初めまして。陽神　霞です。よろしく。」

「初めまして。私は、高町なのはです。よろしくね、霞くん。私のことは、なのはでいいからね。」

なのはが明るい笑顔を浮かべて言う。

次に

「フェイト・テスタロッサです。よろしくね、霞…でいいかな？」

自分の名前を言った後に不安そうに聞くフェイト。
霞はいいよ～と返事をすると

「私もフェイトでいいから／／。」

同年代の男性とあまり仕事以外で接触のないフェイトは少し照れながら言う。
これを見た霞は

（……フェイトって狙ってやってるわけじゃないよね……恐ろしい娘（驚）。でも、可愛すぎるからＯＫです。）

平静を保つふりをなんとかして、内心では悶えまくっていた。

霞は自己紹介の後にどこまでお互いの事を知ってるか話そうと提案しようとしたとき、なのはが

「霞くん、これ。あの神様？からお手紙だよ。こっちで会った後にすぐに渡してって言われたんだ。……すぐじゃないけどね、あはは。」

手紙を差し出し言ってきた。
霞はお礼を言い、受け取った紙を読み始めた。

《やあドナルドだよ。この紙を受け取ったっていうことは2人と無事に会えたんだね～、良かったよ～。ドナルドは感激だ。
それでわざと言ってなかったけど、キミが食べたハンバーガーとかって何気に強化薬みたいなものでね。
あれを食べると魔力や気なんかが増強されるんだけど、平均の人がハンバーガーを1個か2個ぐらいしか食べることができないのに対してキミはバクバク食べて平然としていたからドナルドはビックリだよ～、ランランル～♪ちなみに限界ぐらいまで食べちゃうと魂が壊れちゃうぐらいの激痛が走るんだけどね～。だからビックリ、ウワァオゥ～。》

1枚目を読み終わり霞は思った。

（……まだまだ食えたんだけど……自重して良かった（汗。）

ホッとした表情を霞が浮かべたらなのはとフェイトは?顔をしたので、1枚目を2人に渡して霞は2枚目を読み始めた。

《でね、どれぐらい上がったかというとね、基準を魔力では近衛木乃香嬢、気をラカン氏で比較すると

木乃香嬢：キミ＝１：３０
ラカン氏：キミ＝１：５０

になるんだ～。従者の2人もキミに伴い上がってね～

木乃香嬢：なのは嬢＝１：３０
ラカン氏：なのは嬢＝１：１０

木乃香嬢：フェイト嬢＝１：２０

ラカン氏：フェイト嬢＝１：２０

ぐらいになってるから～。やったね！ドナルドは嬉しくなって後方宙返りをしちゃうんだ～。

それと、もしそっちで誰かと契約すると相手は不老長寿になって魔力と気もなのは嬢とフェイト嬢程じゃないけど上がるようにしたから。

パートナーとはずっと一緒にいたいだろうと思ったドナルドのお節介さ～、ランランル～♪

ああ、長寿っていっても寿命で死ぬことはないから。他の要因で死ぬという事での長寿だから。それはキミもなのは嬢とフェイト嬢も然り。宝貝の出し方はキミが念じれば出せるようになるから、一度やってみてね～、ランランル～♪

余談だけど、七つの宝貝がキミを主として簡単に認めたことにドナルドは更に驚いて前方宙返りをしちゃった～。

もう１つ余談で３人は肉体年齢操作も使用できるよ。これは何となく入れてみただけなんだ～、ヤッフー♪

それと送った年代はキミにわかりやすく言えば原作５０年ぐらい前だよ、やったね！大戦に介入！！俺無双ができちゃう！？ドナルドはそこに痺れる！憧れるぅ！！

それじゃあ、死んだらまた会おうね～。

ドナルドは一億と二千年前からキミを愛してるんだ～。

だから……次はヤるからな……（真剣（マジ）で）

言い忘れるとこだった。キミに究極宝貝の【四宝剣】も上げちゃった♪

あの宝貝もちゃんとキミに扱えるようになってるゾ。≫

最後らへんで、自分の後ろの貞操の危機が真剣に感じられた霞はこう思った。

（絶対に死なねー！？）と

更に一番最後の宝貝に関しては、あまり使わないでおこうと同時に思った。

自分が読み終わり、2枚目もなのはとフェイトに渡してこれからの事を考え始めた。

それからなのはとフェイトも2枚目を読み終わり（少しだけ不憫な目をして霞を見たのは気のせいだと全力で思った霞）、2人にまず言いたいことがあったので言った。

「えっとな、2人とも。まずは、ごめんなさい。」

いきなり謝る霞に、なのはとフェイトは若干焦って、何故謝ったかを聞いた。

「俺のわがままで2人を強引に連れてきて、更に不老長寿なんてものを2人の了解をとらずに与えちゃったから。きっと今日から長い…ほんとに長い時間を生きて辛いことがたくさんあるから。だから、ごめんなさい。

俺も全身全霊を尽くして責任を取ります。もし、契約なのかな？…それが嫌ならなんとかしてドナルドに連絡を取って消してもらう。だけど……良ければ俺と一緒に生きて欲しいのが俺のわがままで

す。」

なのはとフェイトは何故謝罪してきたのか理解した。
そこでなのはが

「どうして私達を従者に選んだの？」

と聞いてきた。
フェイトの方も聞きたいという目をしていた。

霞はその問いに少し照れながら

「えっと、改めて言うとアレだけど……単純に2人が俺の中でダントツに好きだったからかなぁ～。」

あまりの直球に2人は真っ赤になる。
なんとか起動したフェイトが

「はやてとかはどうだったの？はやては私から見ても魅力的だったけど……。」

「はやても好きだけど……どっちかというとバカ騒ぎして一緒に悪ノリする親友って感じが強かったから……かな？」

それを聞いたなのはとフェイトは納得した。

《非道い！！私の事は遊びやったんやね！？私はあまりに悲しゅうて……シグナムの乳を揉んじゃう～！！》

《主！？やめっ！やめてください～！！》

どこかから変な電波を受け取った3人はタラリと汗を流し、スルーすることにした。

少し脱線しかけたが、霞は話を戻してなのはとフェイトの返事を待った。

なのはとフェイトはお互いに見て頷き、霞に近づいた。
霞は叩かれようが罵倒されようが全て受け止める覚悟で2人を真っ直ぐ視た。
そして、なのはとフェイトは

右手をなのはが握り、左手をフェイトが握り、2人は頬を赤らめながら言ってきた。

「霞くん、よろしくね／／」

「私も。霞……よろしくね／／」

全く正反対の反応をした2人に霞は驚いた。
そんな霞を見て笑いながらなのはとフェイトは教えてくれた。

２人はここに送られる前に霞の起こった出来事をドナルドに教えてもらい、霞がどういう人かも知りたいと言ったら霞の人生を映画館ぐらいの大きさのモニターで物語風にした映像（音声付き）で見せて貰ったのだ。
それを見て
最初は会ってみてもいいかな↓会いたいなぁ↓会いたい↓会って話してみたい
と変化しいつの間にか霞に恋をしていた。ということを２人は照れながら教えてくれた。
当の霞は

（ウオォォォォォォォォォォォォーー／／／／／
それって俺の黒歴史まで見られたって事か！！！！！！！！！！？？？？？？？？死ねる！！マジ死ねる！！！！！）

自分の好きな２人に自分の黒歴史まで知られた事というあまりの羞恥にゴロゴロと地面を転がっていた。
そこで霞は一縷の望みを賭けて聞いてみた。
「…………２人は…………俺の小学生の事とかも……知ってる……の？」
なのはとフェイトは初めは言ってる意味がわからなかったが、すぐに気付き満面の笑顔で
「うん♪可愛かったよ、か・す・み・ちゃ・ん。」

「うん／／／可愛かった……抱きしめてナデナデしたかったよ♪」

霞にとって死の宣告をした。

「……先立つ不幸をお許し下さい。」

霞の後ろにどこからともなく現れた首吊り台に、霞が登っていくのを慌てて止めるなのはとフェイトであった。

3人はひとまず落ち着き、霞は自分を許してくれたなのはとフェイトに感謝をした。

ふとフェイトが何かを思い出したように霞に尋ねてきた。

「／／／あのね、霞。さっき……空中の時なんだけど……あの時、言った事って……本気にしていいの？／／／／」

フェイトが言ったのは、この世界に現れた時に2人に助けられ2人を見たときにポロッと言ってしまった言葉の事である。

それを思い出したなのはも「どうなの？」ってな顔で聞いてきた。

霞は

「えっ？本気だったけど。」

しれっと言った。

あまりの平然ぶりになのはとフェイトは驚き、困惑、照れ、と大忙

し。
それらが終わると霞の前世を思い出し
「「ああ、こういう人だった」」
と溜め息をつくと同時に自分達みたいな女性が増えるんだろうなぁ
と思った。

（うぅ、霞くんがあまりにアレだったら……少し、頭を冷やしても
らおうかな？）
少し魔王化するなのは。

（霞……浮気は…ダメだよ？……でも、霞は格好いいから仕方ない
のかなぁ……うぅ、ちゃんと見張っておかなきゃ！）
少し黒いオーラを滲み出すフェイト。

何にせよ霞から離れるということが全く出てこない2人は既に手遅
れである。

霞はなのは達にある意味で更なる追撃をした。

「そういえばそうだよな。これからも一緒にいてくれるんだし……
……よし！！なのは！？フェイト！？」

「「ふぇ！？／はい！？」」

黒い考え事をしていたら、いきなり呼ばれ驚いた。
それに構わず霞は言った。

「良ければ結婚して下さい。一緒に幸せになっていきましょう！！」

４５度の綺麗なお辞儀をして躊躇いもなくプロポーズ。

……漢だ。
なのはとフェイトは
「「……」」沈黙
「「……（ボッ／／」」赤面
「「……はい♪」」
幸せ一杯の綺麗な笑顔をして了承の返事
「「霞くん！？／霞！？」」
2人で同時に抱きつき
「「幸せになろうね」」同時に言った。
霞も万感いや億感の思いを込め
「ああ、幸せになろう」
と言った。

原作５０年前～絆の誕生～（後書き）

霞の黒歴史

小学５年途中まで姉に女として育てられた。
故に５年生の半ばまで女として登校していた。
プール等、姉の手回しにより見学になっていたし女装に全く違和感がなかった為、周りも男だと気づかず女として接していた。
ぶっちゃけ全て姉が原因。
見かねた両親が、霞に真実を告げ再教育した。
それから目立つというか女として見られるのが嫌なため目元を髪で隠しメガネを掛け地味男に変身し、地味に過ごした。

成長してからは顔立ちも男っぽくなり服装さえちゃんとすれば普通に男として見られるのだが、長年の地味姿が馴染み本人も問題はないということでそのままにしておいた。

という感じです。

誤字、脱字があれば教えて下さい。
すぐに修正します。

駄文でありきたりな作品ですが、これからもよろしくお願いします。

修行～環境は大切に～（前書き）

この話において

色々ツッコム場所が多々あると思います。

気にしないで読み進めていってください。

修行～環境は大切に～

「ディバインバスターー！」

なのはが自身の得意魔法を山に向け発射した。

桜色の魔力砲が轟音を伴い山に向かい
着弾
次に閃光、次に凄まじい爆音がして

山が丸々消えていた。

放った本人もこれほどとは思わなくて呆然。
霞とフェイトはなのはに白い目を向ける。
今はなのは達の世界の結界を張ってあるため実世界に影響が出ないようにしているんだが、あと少し威力が高ければ影響があっただろう。
結界を張ったバルディッシュが機転を利かせてそこそこの強度を保っていたため、難を逃れた。

「なのは、やり過ぎだよ。」

フェイトが言った言葉に慌てて弁解するなのは。

「ち、違うよ！？いつも通りの魔力配分をしたらあんな威力になったんだよ！ほんとだって！？」

あまりの慌てぶりにフェイトも流石に本当だろうと思った。

霞はそれを聞いてなんとなく理解したので、聞いてみた。

「もしかして何だけど、なのははその魔力配分だっけ？それって物凄く簡単に言うとなのはの保有魔力から……例えば3割ぐらい抜き出して使ったり…とかしてない？」

その質問に対してなのはは頷いた。

「うん、大体そんな感じかな。それがどうしたの？」

「いや、俺達ってこの世界に来るときにあのドナルドから強化されてるじゃん。で、なのはとフェイトの保有魔力も大幅に上がっちゃったから今までの3割が前の世界の……単純に考えるのは無理か…木乃香の保有魔力が前のなのはと比べてどれぐらいかわかんないし。う～ん、2人にもっとわかりやすく言うと…なのは達の世界でＥＸランクには軽くなってるんじゃないかなぁ。あくまで軽く見て。」

霞が言った言葉に驚愕する2人。

なのは達の世界での、ＥＸランクは測定不能だから便宜上ＥＸなのだ。それを軽く見てなのだから実質どれぐらい自分達が魔力を保有してるかなんてわからない。

そこでレイハが

「マスターは現在ＳＬＢｅｘ－ｆｂクラスの魔法を２００発打てば魔力切れを起こすはずです。」

と言ってきた。

その言葉にもっと驚愕するなのはとフェイト。

霞はレイジングハートが日本語を喋った事に驚いた。

フェイトは自身のデバイスに急いで聞いてみた。

「バルディッシュ！私はどれくらいかわかる？」

「主の現在保有してる魔力から推察すると……ＰＬＢクラスを１８０発打てば魔力切れを起こすと思います。」

バルディッシュまでもが日本語か！？と霞は思った。

なのはとフェイトは自分達の魔力制御と限界魔力の確認を急いでしようと思った。

霞は思った。

自分はどれぐらいなんだろう？と

すると頭の上に何か落ちてきた。

それを手に取り見てみると

《やあ、ドナルドだよ。キミは【四宝剣】を最大威力で５発程度打てば息切れを起こすと考えたらいいよ。

５回は星が壊せるね♪

まああれは規格外だから雷公鞭を例えにして２５０発程度かな。そんな感じだよ～、ランランル～♪

さらにさらにドナルドはやっちゃったんだ～……キミたちに魔力限界量をつけることを…。

だから、キミたちは長く生きれば生きるほど修行すればするほど魔力量が増えちゃう～♪

現状でもキミたちは普通の戦闘や大規模な戦闘をしても簡単に魔力切れは起こらないから安心、安心～♪

できるなら、魔力制御をした方が懸命だね。

それとドナルドから更なるプレゼントで指輪とダイオラマ球ドナルド作を上げるんだ～。指輪はキミたちの魔力感知を出来ないようにする、そして魔力０状態にまで封印できる代物さ。自分の意思で開

封と念じれば指輪を着けていても魔力は使用出来る便利仕様♪
ご都合主義万歳！
その場合、指輪はそちらの世界の魔法発動体に自動的に切り替わるからね～。ただキミ達専用なんだ～。
ダイオラマ球はキミたちでも全力全開（四宝剣込み）しても壊れない仕様で拡張、時間設定などは自由に決めてね～。キミたちには関係ないけど老化防止はつけれないから、普通の人がもし入ったら普通に年を取っちゃうよ～。
場所はキミの影の中。影は倉庫みたいになってるからキミの任意で出し入れすることが可能。
アッハッハッハ～、なんかチートっぽくなっていってドナルド嬉しくて空中3回転捻りをしちゃうよ～、ランランル～♪
それじゃ、ほんとにこれがラストのアフターサービスさ。バイビーン≫

ドナルドのふざけた手紙を破りたい衝動に駆られたけど、我慢してなのはとフェイトに見せた。

手紙の中で星が壊せるという文と魔力限界量の文を見て驚き、指輪とダイオラマ球には興味津々で聞いてきた。

霞はとりあえずダイオラマ球の事を説明した後、手紙に書いてあった通り影へと手を突っ込み出してみた。

球体の中には土と水が5：5で入っており、霞は時間設定をとりあえず原作と同じにして空間出入りは自由にした。設定を弄っているときに【四宝剣試し撃ち場】と別枠があることもわかった。

「とりあえず修行はこれからこの中でしようか。ドナルドが言うには俺達が全力で修行しても大丈夫みたいだし。」

それを聞いた2人は頷いた。
そこでなのはが

「えっと霞くんがやってもほんとに大丈夫なの？なんか星が壊せるねって手紙に書いてたけど……。」

なのはの疑問にフェイトもうんうんと頷いたが、その目には不安3割、興味7割ぐらいの感情が混じっていた。

「一応、別枠であるみたい。……1回やってみる？」

霞がそう聞くと2人は

「「見てみたい」」

と声を揃えていってきた。

霞は試し撃ち場に設定してダイオラマ球を置き、指輪を嵌め魔法発動体状態にして周りに認識阻害及び人払いの結界を張り中に入っていった。なのはとフェイトも霞に続き入っていく。

3人が中に入って目にしたのは、空が一面真っ暗。地面は目に届く範囲で地平線まで続いているけど、草木が一本もなくただただ更地が続いている。

そこでフェイトが上を見て気づいた。

「あれって地球？かな？」

言われて見るとそこには確かに青い星、地球があった。

そこで霞は思った。

あれがもしかして練習台か？と。

そこでなのはが足元に落ちていた手紙に気づき、それを拾い読んで……言ってきた。

「霞くん……あの星を狙えだって……。」

それを聞き、やっぱりと思った。

そこでなのはが

「試しに全力でアレを撃ってみていいかな？」

なんて聞いてきたので、了承した。

なのはは少し前に出て、バリアジャケットを装着しレイジングハートに指示を出す。

「レイジングハート！ブラスター３リリース。全力でいくよ！！」

「了解です。」

するとブラスタービットが４機射出されそれぞれが星をロックし、レイジングハートを星に向けた。

魔法陣が展開しこの空間に満ちているマナを限界まで集め始めた。

なのはが少し楽しそうなのはきっと気のせいだと思い霞はスルーしておくことにした。
フェイトはなんかワクワクしてなのはを見ている。

そしてなのはの準備が整い

「これが私の全・力・全・壊!!スターライト!!ブレイカァァーーーー!!!!!」

「スターライトブレイカー!」

なのはとレイジングハートが唱えた直後（なのはの開が壊に聞こえたのは幻聴だろうと霞は思った）、アニメで見たときなんて比較にならないテラ太の魔王砲撃が発射された。

砲撃は星に一直線に向かっていき……着弾、星にぼわぁと丸い光ができそれが収まると……よくわからなかった。

どれだけの威力が出ていたのかわからない3人は首を傾げていたら空中にモニターが現れ文字が表記された。

《ただいまの威力により日本の関東圏及び中部西域が消滅被害を受けました。修復可能な為、修復します》

それを読み霞達は

「「「おお～」」」

とこのシステムに感動した。

「じゃあ、本命をやってみますか」

霞はそう言いながら【四宝剣】を喚び出す。

霞が右手を前に出した瞬間、右手に歪な形をした剣のような物が顕現した。

「それが【四宝剣】なの？」

フェイトが聞いてきた。

「そうだね。これは確率歪曲宝貝……物の存在確率を変動させる剣……みたい。原理はよくわからん。」

それを聞いたなのはとフェイトも？顔をしていた。

無理もないだろう、この剣は原作においてもよく分かってない剣なのだから。

「まあ、難しく考えずに極悪な剣と思えばいいよ。……よし、いくよ～。」

霞は【四宝剣】を振りかぶり、力を溜めた。

……そして

「ハアァァァ！！」

放った。

【四宝剣】から先程のなのはの砲撃と変わらないぐらいの太さの閃光が放たれ

星に着弾。

……少し経つと

星に亀裂が走りそこから幾筋もの閃光が迸り……

爆発、凄まじい轟音

あまりの光に3人は目を閉じた。

光が収まり目を開け、星の方を見ると

そこには何も無かった。

霞は思った。

（これ……使い道…あんのか？）

と。

なのはとフェイトは思った。

（（あれは使わせないようにしないと））

と。

3人は試し撃ち場から出て今後の修行に関して話し合いを始め方針

を決めた。

それから現実世界で１０年、３人がダイオラマ球の時間を弄って１００年程修行をした。

その頃には１人１人が《紅き翼》とガチで勝負をしても余裕勝ちするレベルまで上がり、一旦修行は終了となった。

修行～環境は大切に～（後書き）

もし本作品の設定ならこれぐらいはいけるよ～なんて意見があれば教えて下さい

作者は適当に作っちゃったので

後、なのはとフェイトの魔法はデバイスがないと使えないということで彼女達の専用です。

一応、なのフェイはネギまの魔法も修得済みです。

主人公においてはバグと思って下さい

これから、休日やおまけなどの話を書くときがあります。

その時の書き方は、キャラｓｉｄｅの視点でお送りしますので。

それではひとまず

サヨ～ナラ～

美幼女に出会う（前書き）

テオドラは流石に出番の箇所がないから、霞の嫁には……。

入れたいけどね！

作者的に、あの妾口調とテオドラの我が侭ボディは大好きです！？

……どうせ原作破壊するならトコトンまでやるかな？

美幼女に出会う

修行漬けの日々を卒業した霞達は現在、世界を旅して回っている。

修行期間はお互いに厳しくいこうと決めていたので、今はそれを取り戻すかのように3人はイチャつきながら旅を満喫。

もちろん夜も留まることはなく大人の時間を過ごしたのは言うまでもない。

ただ霞は初めてを体験したとき

「2人は最高でした」

と漏らしていたのは余談である。

霞達は現在、魔法世界ヘラス帝国城下町のオープンテラスがある喫茶店でくつろいでいた。

「あ～、しかし魔法世界が戦争真っ只中ってのをすっかり忘れてたなぁ。」

「あはは、そうだね～。まあ霞は戦争に介入しようと思ってないんでしょ。」

「まあね～、巻き込まれたのなら蹴散らすけど、自分から進んで戦争にはいかないよ～。そんな事してる暇があったらなのはとフェイトと思う存分イチャつくし～。」

「／／／私も…霞と一緒に遊ぶ方が嬉しいかな。」

「私もフェイトちゃんと同じかな～。」

ほのぼのとした会話をしていると

「……くのじゃぁ！」

と霞達の耳に何かの声が聞こえた。

「??今、何か聞こえたような?」

「あ、霞くんも?私も聞こえたよ。フェイトちゃんは?」

「うん、聞こえた。」

3人は周囲を見渡しどこから聞こえたか確認するが、声を上げている人なんていない。

「??気のせいか?」

「けど、3人が聞こえたって事は気のせいじゃないと思うけど……。」

霞とフェイトが喋っていると、なのはが

「……あっ！霞くん危ない！?」

「えｔ「どくのじゃぁぁぁ!?」はっ?ッぐぼぉっ!!」

上を見て声を掛けたが既に遅く、霞の頭上からナニかが声を上げながら墜落してきた。

なのはとフェイトはいきなりの事に呆然としたけど、すぐに我に返り霞に近寄る。

そして霞の側にいくと霞とその上にフードを被った子供が重なって倒れていた。

「イテテテテッ。～～ッ。一体なんだよ、たく。」

「イタいのじゃ～。」

霞と子供がそう言いながら体を起こすと　同時に４人の周りからガシャガシャと金属音が鳴り響いた。なのはとフェイトはその音を聞き見渡すと……なんかゴツい鎧を着た集団が取り囲んでいた。

「もしかして……」

「たぶん……そうかなぁ」

いきなり自分達が囲まれる理由なんてないのは明らかなので、原因は十中八九落ちてきた子供だろうと２人は簡単に予想できた。
当人は後ろで

「おまえなぁ、いきなり人様の上に落ちてくんなよ。これが俺じゃなかったら大怪我してたぞ！」

「なら、お主の上に落ちた妾は運が良かったのじゃな。流石、妾じ

や。」

「何、どや顔してんだこの幼女は！ってか早く退いてくれ、重いから。」

「なっ！？淑女に対して重いとは何じゃ！！失礼じゃぞ！……はは～ん、お主実は嬉しいのじゃろ？妾みたいな愛らしい姿の女に触れられて。全く素直じゃないのぅ。」

「はんっ！？どうせならフェイトみたいな我が侭ボディの持ち主に密着されたいね！？」

「ぬ？何じゃその我が侭ボディとは？それにフェイトとは誰じゃ？」

「ん？そこにいるだろ、ほれ。あそこの金髪美女のスタイルを見てみろ。」

「……なっ！？……確かにあれは我が侭ボディと言われれば納得してしまうのじゃ……。」

このような口論をしている。

話題に上ったフェイトは羞恥の為か両手で胸を隠すようにして少し縮こまっている。

その行動は胸を両側から抑えているので更に強調するように見える……。

「知ってるか？あれ、天然でやってるんだぜ？」

「……天然は罪じゃのぅ。」

それを聞いたフェイトは

「／／／私は天然じゃないよぅ……だよね、なのは？」

そう言いなのはに同意を求めたが

「……（サッ。」

なのはは視線を逸らした。

そんなやり取りをしていると鎧の集団から1人が前に出てきて

「あの…そちらのお方をこちらに渡してもらえませんか？」

と言ってきた。

この言葉に霞達はこの娘は身分の高い女の子だろうと思った。

霞は面倒事の予感がしたので、さっさと引き渡すことにしようとすると、少女が思いもよらぬ事を言ってきた。

「よい。大人しく捕まるわ。ただし、この者達に迷惑をかけたのじゃ。詫びをしたいからこの者達も連れていくからの。」

この言葉に

「いや、迷惑なんて思ってないから、詫びはいい。だから、早く行け。」

予感が的中しそうなんで霞はそう言った。

「駄目じゃ。もしお主らが来ぬなら……また逃げるのじゃ！」

理不尽な事を言うお子様。
それを聞いた鎧の人が

「あの…お願いできませんか？このお方に逃げられると我々としてもかなり困る事になりますし…今は戦時中なので逃げた先に命が狙われる可能性もあるので極力大人しくしていてほしいのです。」

丁寧な物言いで懇願してきたので、なのはとフェイトはこの人達が不憫だからついて行こうよという目をして霞を見た。
嫁に弱い霞は

「……わかったよ、わかりました。一緒にいけばいいんでしょ…
……ハァ。」

諦めた。
その言葉に少女ははしゃぎながらフードを脱ぎ自己紹介をしてきた。

「そうか！ありがとうなのじゃ。妾はテオドラ。テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア。この国の第三皇女じゃ。名前は長いからテオで良いぞ。」

霞はそれを聞き
（原作キャラで戦争巻き込まれフラグが立ったじゃないかｏｒｚ）
なのはとフェイトも苦笑しながら霞を見ていた。

3人は城に招かれ客室に案内された。
今、テオドラは着替えをしに部屋におらず、召使いの人が淹れた紅茶を飲みながら霞は2人とこれからの相談をした。

「で、2人も原作知識って有ったんだよね？」

「うん、この世界に来るときに神様？が霞くんの持ってる知識をくれたから。」

なのはがそう答えた。

「けど、テオに会っても戦争に関わるわけじゃないんだから、いいんじゃないかな？」

そうフェイトが言うけど霞が

「ん～……なのはとフェイトはテオと知り合っちゃって、テオが危ない目に遭ったら助けにいくんじゃない？大丈夫とわかってても……。」

と言ってきた。
2人は反論できずに苦笑い。
2人を見て霞も苦笑しながら言う。

「まあ俺も知り合っちゃった以上は、テオを助けちゃうんだろうけどね。」

なんにせよ霞達はテオを助けてしまう事に変わりはないということだった。

「けど、ここの腐った政治家が近付いてくるのは嫌だから、魔力は今のままにしておこうか。」

霞の言葉に頷く2人。
ちなみに現在3人は指輪のリミッターを掛け平均より少し下ぐらいまで抑えている。
この指輪を貰って色々調べてみると自分の意志で魔力をどれぐらい抑えるかを決めることが出来るというのがわかり、浮遊術とか便利なのでそれを行使するぐらいの魔力は残した。（3人は近接戦闘の修行もしたので魔力がなくても充分に強いのだ。）

方針を決めた直後に部屋のドアがバァーンと開かれテオドラが入ってきた。

「ん？何を話しておったのじゃ？妾も混ぜてくれ。」

と言いながらなのはとフェイトの間に座り会話に加わってきた。

「いやなに。この後、どこに行こうかと相談していたんだよ」

霞が答えてあげるとテオドラが

「お主たち……そういえば名前を聞いていないのじゃ。……こっちの我が仮ボディはフェイトと聞いたが…。」

そう言ってきた。
テオドラに変な言葉を教えた霞を少し睨んでテオドラの方を向き笑顔を浮かべ自己紹介した。

「私はフェイト。フェイト・T・陽神だよ。よろしく。」

続いてなのはが

「私は陽神なのはだよ。よろしくね、テオ。」

最後に霞が

「陽神　霞だ。よろしく」

それぞれが自己紹介をするとテオドラが聞いてきた。

「霞達は兄弟なのか？顔などは似てないが、名字が同じじゃの？」

その疑問になのはが答えてあげた。

「私とフェイトちゃんは霞くんと結婚してるんだよ♪要するに夫婦だね。」

その返答にテオドラは驚き霞を見てフェイトを見てなのはを見る。

そしてもう一度霞を見て

「……世の中は不思議じゃの。なのはとフェイトはこんなに見目麗しいのに旦那が地味じゃぞ。２人は霞のどこに惹かれたのじゃ？」

テオドラの言葉に霞は確かに自分は地味だなと改めて思ったので

「むぅ、やっぱり２人に少しでも釣り合うように髪でも切ろうかな？メガネももう少しマシな感じにした方が……。」

そう呟いたら

「「絶対にダメ」」

と2人から念押しされた。なのはとフェイトの剣幕にテオドラは少し驚き霞は以前も似たような事があり、やっぱりと溜め息をついて諦めた。

テオドラはちょっとだけ好奇心が湧き霞に近付いていく。

「「？？……ッ！？テオ待って！！」」

「どした？」

なのはとフェイトは最初は分からなかったが、テオドラが何をしようとしてるか思い当たり止めようとした。

霞はいきなり近付いてきたテオドラに無警戒。

そしてテオドラが霞の前髪をサッと上げてメガネも取り霞の顔を拝見すると

「ッ！！？……／／／」

テオドラは真っ赤になった。

その時なのはとフェイトが瞬間移動をしたかの如くテオドラを抱え部屋の隅に行った。

霞は目の前で起きた出来事に目をパチクリさせたけど、まあいいやって感じで紅茶を飲み始めた。

部屋の隅にテオドラを連れて行ったなのはとフェイトはテオドラと話し合った。

「テオ、だから待ってって言ったでしょ？」

なのはがテオドラに注意する。

「／／うむ、悪かったのじゃ。しかし、あんな反応をしたら逆に気になって仕方ないぞ。」

「まあ、そうだね。私もテオの立場だったら興味が湧いちゃうかな。……でも、なんで私となのはが止めたか分かったでしょ？」

「それは充分に理解したぞ。しかし、霞は自覚しておらぬのか？」

霞が自分の事を地味だと言われていたのに気にした様子もなくむしろ肯定気味だったのを思い出し聞く。

「ちょっと昔に色々あってね。それから目立たないように今の格好になったんだけど、長年あれをしてたせいか見事に自分の容姿に関しては無頓着になっちゃったんだよ。最近は私達と一緒にいて釣り合うようにって言ってるんだけど…。」

「私となのはが一応止めてるんだ。……容姿に釣られて寄ってくる人がいるから……。」

少し黒いオーラを滲み出しながら言うフェイト。

「フェイト、少し怖いのじゃ。……まあ分かったの。妾もあれに関

しては黙っておく。……で、2人は霞のどこが好きなのじゃ?あの容姿だけで2人が好きになるというのは考えられんのじゃが。」

テオドラは聞きなのはとフェイトが照れながら惚気始めた。
※長くなるので略します。

テオドラはあまりの惚気ぶりに疲れ果てていた。

「分かった、分かったから!もう良いじゃろ。霞も待ちくたびれておるから。」

2人の惚気に一息ついた所でストップの声を掛ける。
なのはとフェイトはまだ言い足りないと不満そうにしたが自重して、3人は霞が待っているテーブルに戻り、また4人で会話に花を咲かせた。

美幼女に出会う（後書き）

一旦区切ってみた。

とりあえずテオは保留にする。

大戦は飛ばし飛ばし行きます。

ご容赦を

《夜の迷宮》へ行こう（前書き）

やっと投稿でけた。

駄文になってますが、どうぞ。

《夜の迷宮》へ行こう

テオドラとの出会いを果たした霞達は数日の間だけテオドラの世話になりお詫びとしては充分だということを告げ、城を出た。
出るときにテオドラがゴネたのは言うまでもなく、また会いにくるからと約束をして別れた。

それから少しだけ時が進み

霞となのははは、自分達が取っている宿でフェイトの帰りを待っていた。

「フェイトちゃん、まだかな？」

「もうすぐ戻ってくるだろ。」

なのはの言葉に霞が答える。
そこでなのはがニマ～と口元を歪め何かを思いついたような顔をして言った。

「意外に……ナンパとかされたりして～？」

それを耳にした霞はピタッと止まる。

「……ちょっと迎えに行ってくる。」

そう言い立ち上がりドアに向かう……手に禁鞭を持って。
流石にマズいと思ったなのはは霞に羽かい締めをして止めるように促し始めた。

「ストップ!?スト～ップ!!?冗談だから!だから、禁鞭は駄目なの～～!!」

「ＨＡ・ＮＡ・ＳＥ!!今こうしている間にもフェイトに毒牙が!?それと胸が当たって気持ちいいです!?」

「駄目～!離したら大変な事になる!!それと霞くんのＨ!?」

止めるなのは。
離せ＆気持ちいい宣言をする霞。
両者一歩も譲らず、５分程度このやり取りをしているとドアが開き

「ただいま。戻っ……何してるの?」

フェイトが戻ってきた。そして２人の様子を見て当たり前のように疑問を抱く。
フェイトを見たなのははは

「危なかった～」

霞を抑えるのを辞めて座り込む。
霞はフェイトに詰め寄り

「フェイト、大丈夫だったか?変な男に絡まれなかったか?触られなかったか?」

無事を確認する。

「え？え？」

フェイトは2人の様子を見て更に困惑することなった。

3人はそれぞれ落ち着き、さっきの出来事をなのはが説明した。それを聞いたフェイトが笑い霞は憮然としなのはは苦笑い。霞は咳払いをしてフェイトに頼んだ事を聞くことにした。

「それより《紅き翼》が指名手配を受けたのは本当だった？」

「うん。昨夜の間にね。懸けたのは連合側だよ。……だからテオは知ってる通りなら…。」

霞達は確認しあう。

戦争はまだまだ続いており魔法世界を旅していた霞達は行く先で戦争の状況を逐一手に入れていった。

特に連合側のグレートブリッジ奪還作戦の成功と《紅き翼》の名が広まり始めた時からは念入りに。

霞達は本来戦争に参加するつもりは全くなかった。

しかし、テオドラと成り行きとはいえ友人関係になり、いかに原作

知識がありテオドラが無事でいるとわかっていても放っておける性格ではない霞達である。
なので原作知識を活用し、テオドラが《夜の迷宮》に幽閉される時に救出しようと3人で決めたのであった。

「じゃあ……どうしよっか?救出するなら3人で行く必要がないと思うんだけど。」

霞はそう言って2人にどうする?と尋ねた。

「テオが心配だし、私は行くよ。」

「私もなのはと同じ。テオの事が心配だから。」

なのはとフェイトはそう返事をした。
霞はそれを聞き

「りょ〜かい。んじゃま、ちっちゃい姫君を悪の組織から奪還しますか〜。」

「「うん!!」」

3人が表舞台へ上がることになる時であった。

《紅き翼》ｓｉｄｅ

よう、俺はナギ・スプリングフィールド。最強無敵の魔法使い、ま

たの名をサウザンドマスターだ！
っても魔法は5、6個しか使えねーけどな。
それより、俺たち《紅き翼》は今現在、指名手配を受けてるんだ。
今回の戦争が気に入らなくて早く終わらそうと思い参戦して帝国を蹴散らしていたんだけど、どうもこの戦争がきな臭くてな。
ある時、メンバーのガトウが裏で戦争の手引きしてる組織がいることが判明した。
んで、その組織を潰すため協力者となった姫さん、名前はアリカ…
…長いから忘れた。とにかく姫さんと協力して証拠を集めていたら大物が引っかかったんだわ。姫さんの方は帝国に協力者ができそうだからそっちの交渉、俺たちは大物が関わった証拠を持ってマクギルのじーさん（じーさんも協力者）に会いに行ったら偽物がいて罠に掛けられ俺達は今まで味方だった連合側から指名手配を受けた。
そん時に姫さんもあぶねーと思ったが、時既に遅く攫われちまった。
んで今は隠れ家で姫さんの居場所の情報待ちってな所だ。

「しっかし、ガトウ達はまだか～？」

「ふふっ。そんなにアリカ姫が心配ですか？」

俺の呟きに変なツッコミを入れるアルビレオ・イマ。通称アル。

「まあ心配っつったら心配だな。姫さん結構ムチャするしな。」

「お～お～、いっちょ前に騎士気取りか、ナギ。ガハハハッ。」

言いながら俺の頭をグリグリしやがるジャック・ラカン。

「何言ってんだ？ジャック。それよりイテーからやめろゴラ。喧嘩なら買うぞ、筋肉達磨！」

「アアン、やるか鳥頭。」

睨み合う俺とジャック。

「やめんか、馬鹿者共が。今は大人しくしてろ。」

「まあ、馬鹿者共は血の気が多いからのぅ。仕方ないわい。」

俺達を止めてくる青山　詠春。次に俺の魔法のお師匠であるフィリウス・ゼクト。

「ハッ、命拾いしたな筋肉達磨。」

「こっちの台詞だぜ、鳥頭。」

「「アアン!?」」

「だから、やめんか!!」「ふふふっ、賑やかですね～。」「やれやれ。」

俺とジャックのバカ騒ぎにそれぞれの反応を見せる。

「ふ～、この馬鹿弟子にはあやつらを見習って欲しいものなんじゃが……。」

「うん?ゼクト、誰の事ですか?」

お師匠が呟いた事にアルが食いつく。

俺も気になってそっちに興味を持った。

お師匠はしまったって顔をしたけど、アルの追求がしつこくて渋々喋り出した。

「４０年ぐらい前かのう、旧世界をブラブラしていたら男と女２人の３人組に会ってな。その者達とまあなんやかんやで仲良くなってな。ちとその３人を思い出しただけじゃて。」

「なんでお師匠は、そいつらを見習って～なんて言ったんだ？」

俺は聞いてみた。

「うむ……まあ、お主らになら…いいかのぅ。……そやつらは儂らと同じく魔法使いでの。魔力は平均よりか下ぐらいなんじゃが、魔力運用効率が桁違いに上手くてな。あれは下手をすると儂より上手かったんじゃよ。ナギにはあやつらとまでは言わぬが多少は見習って欲しいと思ったんじゃ。」

お師匠より上手いってすげぇな。まっ、俺の方が強いけどな。

「なら、最初の失敗したような顔は何だったのですか？今の話ならさして問題なかったでしょう？」

とアルが聞いた。それもそうだなと思った。

「いや、あやつらに自分達が魔法使いということは内緒にしておいてくれと言われてたからな。平穏に過ごしたいとも言っておったし…。じゃから、約束を破ってしまったの。」

それを聞いて俺は笑いながら言ってやった。

「気にすんなよ、お師匠。俺らだって無闇に喋んねーし、そいつら

も今はいい年してんだろ?旧世界で平和に過ごしてるって。それに、お師匠のダチって事はぜってー良い奴らだろうし、約束破ったことぐらいで怒んねーよ。」

聞いたお師匠は目が点になった後、笑って言った。

「ふふっ、確かに。あやつらはそんな狭量ではないの。……馬鹿弟子に励まされるとは儂もまだまだじゃ。」

「へっ、いつかお師匠よりも上手く魔法を使ってやらぁ。」

笑うお師匠にそう言ってやったら

「無理だろ」

「無理ですね」

「無理に決まってんだろ、バカ頭。」

「まあ無理じゃろ。」

詠春、アル、ジャック、お師匠が続けて言いやがった。

「てめーら!けn「見つけたぞ」…あん?」

いきなりガトウが入ってきて言ってきた。

まさか!?

「姫さんの居場所か!?」

「ああ、場所は……夜の迷宮だ。」

ガトウの言葉に俺達は立ち上がった。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

霞達は古代遺跡《夜の迷宮》を少し離れた所で認識阻害を掛けて観察している。

入り口には見張りの魔法使いが数名立っていた。

「さて、たぶん中にも魔法使いがいるんだろうし、テオと一緒にいるアリカ姫2人をどうやって無傷で助けるかね～。」

霞が考えているとなのはが提案した。

「フェイトちゃんが中に潜入してテオ達の側に行き保護。私達は外で陽動はどうかな？」

「人選の理由は？」

「フェイトちゃんのアーティファクトは近接用で室内では使い勝手がいいし、私と霞くんってどっちかと言えば対軍向きでしょ？だから、外で派手に暴れた方がいいかなって。……駄目？」

なのはは不安そうに2人に聞く。

フェイトはその通りだと思い賛成。

霞も問題ないということで賛成した。

「じゃあ、フェイト。認識＇妨害＇使ってテオの側まで行ったら念話で教えて。それから暴れるし。」

「うん、わかった。……ねぇ霞……もう一度聞くけど……ほんとにこの姿で行くの？」

フェイトは作戦については了解した。
だが、霞が提案した件についてはいまだに渋っていた。

「便利だと思うけど、なんで今やるかは私もわかんないの。」

なのはもフェイトと同じような意見である。

それについて霞は答えた。

「いや、単にテオがどういう反応するかな～と。後……《紅き翼》と鉢合わせになったときに……ゼクトの混乱する姿も見たい。」

清々しい程にくだらない理由であった。
そして何について話しているかというと

「だからといって……9歳児はないと思う。」

「私もなの。」

「なのは……何気に乗り気でしょ？口調が昔の頃に戻ってるよ。」

フェイトにツッコまれるなのは。

「にゃはは、気分的に。」

「まあまあ、俺も2人に合わせて9歳児になったんだからいいじゃないか。」

霞もなのはとフェイトの要望で同じ歳にしている。
トラウマが発動しそうになったのは割愛する。

「とにかく時間がないし、フェイトよろしく。」

「うん、わかった。」

フェイトはそう言いながら認識・妨害・を発動し普通に入り口から中に入っていく。

「俺達はここで待機してようか。」

「うん、わかったの。」

霞はなのはの返事を聞きいきなり立ち上がり、なのはの後ろにつき座り込んだあと抱きしめた。

「にゃ!?いきなり何するの、霞くん!」いきなりの行動に驚き声をあげる。

「いや、待ってる間は暇だからなのは分を補充しようかと……嫌？」

「嫌じゃないけど…ッン…時と場所を考えようよ……ャン。」

なのはの言葉を聞きながら後ろから回した手を服の中に入れ胸をまさぐり、うなじに口づけをする霞。

「なのは、相変わらずいい匂いだぞ。……ただ9歳児だから反応しないのが虚しい。」

そう言いながらも霞はなのはに悪戯するのをやめない。

「ッン、アッ……霞くん…ダ…めだよぅ…ァン。フェイトちゃんが頑張って…るんだから。」

そう言われた霞は手を止めて

「ん、そうだね。流石に自重しなきゃ駄目か。ありがとう、なのは。……ただ抱きしめるのはいいでしょ？」

「うん、どう致しまして。私も…抱きしめられるのは好きだからいいよ。」

そう言いつつ2人は見つめ合い、……お互いに唇を近づけていく。
唇と唇が触れ合う
瞬間

『霞、なのは。着いたよ。』

フェイトからの念話が来て驚く2人。

『霞？なのは？何かあった？』

2人が念話に応答しないので、少しばかり心配するような声色だった。

『いや、何でもないぞ。』

『にゃ!?うん!大丈夫だよ、フェイトちゃん。』

霞はなんとか無難に返したが、なのはが少し慌てて返してしまい、女の勘だろうかフェイトは怪しいと思い

『……後で問い詰めるからね、2人とも。……とにかくテオは無事。アリカ姫もね。側についているから開始して。』

『あいあい。フェイト、妨害は張ったままにしときな。予め側にいるよりかは誰もいないように見せた方が敵も油断するし。』

『わかった。そっちも気をつけてね。』

念話を切り、霞はなのはの方を見ると

「アデアット」

アーティファクトを展開し準備完了を確認した。

「俺はこのまま禁鞭で行きますか。念の為……傾世元ジョウ」

防御の為に傾世元ジョウを腰に巻き禁鞭を持ち

「なのは、最初に入り口の奴らをよろしく。」

「わかったの。いくよ！」

なのははアーティファクト・番天印を構え入り口の人間に印を着け、砲撃を開始した。

敵はいきなり現れた印に戸惑うが……前方から突如現れた閃光に次々とやられ倒れていく。

「俺も派手にいきますか！！」

霞は禁鞭を解放し思いっきり振るい始めた。

《紅き翼》ｓｉｄｅ

俺達は《夜の迷宮》に着き裏口から侵入しようと作戦を練っていたら正面の入り口からいきなり

ドォォン！！

でかい爆発音が響いた。

「なんだ！？」

俺達が見ると正面側から煙が上がってやがった。

「魔獣か何かが暴れているのですかね？」

アルがそんな疑問を口に出していたが、そんなの関係ねー！
裏口を見たら見張りの兵も正面側に急いで向かったみたいでがら空きだ。
「なんでもいいから、今がチャンスだ！！行くぞ、テメーら。」
ヤロー共に声を掛け、俺は全力で《夜の迷宮》に入っていく。

（無事でいろよ……姫さん！！）

《紅き翼》ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ドォォン！！

迷宮内部で捕らわれていたアリカとテオドラはその音と共に迷宮が揺れるのを感じ

「何じゃ？魔獣でも暴れているのかの？」

テオドラは疑問に思った。
その疑問にアリカが

「いや。これは恐らく……。」

答えようとしたら、壁の向こうから破壊音が聞こえ徐々に大きくなってきた。

そして、一際大きな音が鳴ると捕らわれていた部屋の壁が崩れ、そこから赤毛の少年が現れた。

「へへ、迎えに来たぜ姫さん。」

赤毛の少年・ナギはアリカに向かって笑いながら言った。

「遅いぞ、我が騎士。」

アリカはナギを見て不遜に言った。
それを聞いたナギは少し?顔をしたが、状況を思い出しアリカとテオドラを連れ出した。

侵入経路から脱出したナギ達は全員が無事な事を確認して隠れ家に転移しようとしたら突如後ろにあった《夜の迷宮》から轟音が響いたので振り向くと……

瓦礫の山しかなかった。

それを見た《紅き翼》のメンバーは呆然、すぐに我に返りここは危険だと思い急いで転移した。

認識妨害を張りテオの側に付いていたフェイトは思った。

（2人ともやり過ぎだよ（汗。）

少し時間を巻き戻し

フェイトからテオ達と共に脱出したと連絡を受けた2人は切り上げようと考えたけど……なかなか出来ずにいた。

理由は

「もぅ～！霞くんが派手にやっちゃったからこうなってるの！？反省してよ！」

襲いかかる魔獣達を次々と撃ち貫きながら文句を言うなのは。

隣にいる霞も縦横無尽に禁鞭を振るい魔獣達を叩き殺していく。

「だって！こんな事になるなんて思ってなかったんだよ！！！」

実はこの2人、《完全なる世界》の構成員は既に蹴散らしているのだ。

ただ最初に霞が《夜の迷宮》を攻撃し派手な音を立てたのはいいが、思いの外に迷宮が脆くて結構な穴を開けてしまい、そこから中にいた魔獣がわらわらと出てきたのだ。

まあ出てきた瞬間に2人の弾幕と鞭打でやられていってるのだが。

組織の増援は霞が崩した瓦礫に巻き込まれ全滅……乙。

要するに次々出てくる魔獣を何とかすればいいのだが、いい考えが思いつかずひたすらに魔獣を狩っているのが現状である。

するとなのはが霞に提案をした。その間も砲撃を緩めずに…

「ねえ……もう中にいないんだったら……壊してもいいと思わない？」

そんな恐ろしいことをいうなのは9歳児ｖｅｒ。

霞も攻撃を緩めずに

「……ナイス提案！？それ採用！」

まさに天啓を受けたような顔をし同意する。

２人は攻撃の威力を強めていき、もう魔獣なんてお構いなしに標的を《夜の迷宮》自体に移し

「「ハハハハッ、楽しぃーーーー！！」」

……破壊活動に勤しんだ。

余談だが、後世の学者は《夜の迷宮》が崩れたのは最深部に密かに住んでいた爵位級もしくは魔王級の悪魔、または同等の魔獣が暴れて崩れたのでは？

はたまた隕石が落ちたのでは？

等、様々な推測が飛びかったが真相は闇に包まれたままであった。

《夜の迷宮》へ行こう（後書き）

……ドナルドによる超展開を原作時にやろうか迷ったのですが…
没にしました……たぶん。

作者とドナルドは自重という言葉を置き去りにしてるから、いつか
馬鹿な展開をしちゃうんだろうなぁ

再会～ロリロリみたいな～（前書き）

ストック出します。

……楽しみにしてくれる人がいればいいけど

再会～ロリロリみたいな～

タルシス大陸極西部オリンポス山の麓にある《紅き翼》の隠れ家に着いたナギ達。

それを見たテオドラは

「これが噂の紅き翼の秘密基地か！どんなところかと思えば掘っ建て小屋ではないか！！」

素直な感想を言った。

ラカンはそれにカチンと来たのか

「俺ら逃亡者に何を期待してんだ、チビジャリが。」

「むっ！？無礼者、妾を誰だと思っているのじゃ！！」

「へへ～ん、ヘラスの皇族に貸しは有っても借りはねーんだよ。」

「なんじゃと？貴様、何者じゃ！？」

「俺様は伝説の傭兵剣士ジャック・ラカンだ。」

「なっ！？貴様が…千の刃だと……こんな筋肉達磨馬鹿が……。」

「んだと、コラァ。」

ギャーギャー騒ぎながらラカンとテオドラが戯れる。

それを見ているナギ達は

「あのやけに元気な少女が……」

「ええ。ヘラス帝国第三皇女テオドラ殿下ですね。アリカ姫と交渉のため出向いたところを一緒に捕らえられたようですね。」

「さーて姫さん。助けてやったはいいが、こっから大変だぜ。連合にも…帝国にも……あんたの国…オスティアにも味方はいねぇ。」

ナギはアリカを見ながら言う。

次いでガトウが報告する。

「恐れながら事実です。殿下のオスティアも似たような状態で……：最新の調査ではオスティア上層部が最も黒いという可能性もあがっております。」

その報告にアリカはしばし黙考…だがすぐに我に戻り、ナギを見ながら口を開く。

「そうか……我が騎士よ。」

「だから姫さんその《我が騎士》ってのはなんだよ!?俺はクラスで言ったら魔法使いだぜ。」

ナギは騎士という言葉がむず痒いのか抗議する。しかし、アリカは構わず言う。

「もう連合の兵ではないのじゃろ。なら主はもはや私のものじゃ。」

それを聞いたナギは唖然とする。

アリカはお構いなしに続ける。

「連合に帝国…そして我がオスティア、世界全てが敵というわけじゃ。じゃが……主と主の紅き翼は無敵なのじゃろ？」

その問いにナギは不敵な笑みで

「当たり前だろ、姫さん。俺らを誰だと思ってんだ。」

そう答えた。

「ふふ、世界全てが敵…良いではないか。こちらの兵はたったの８人、だが最強の８人じゃ。」

「今世界は《完全なる世界》に操られておる。ならば我らが世界を救おう！我が騎士ナギよ、我の盾となり我が剣となれ！！」

アリカは言う。

ナギは

「……へっ。やれやれ相変わらずおっかない姫さんだぜ。」

笑いながら言う。そして、アリカの前に行き決意の眼差しを向けた後、膝を降ろし忠誠の姿勢をとりアリカに告げる。

「いいぜ。俺の杖と翼…あんたに預けよう。」

陽に照らされる２人を紅き翼のメンバーは見守った。

と、唐突にアルが口を挟んできた。

「良い雰囲気の所、誠に申し訳ありませんが少しよろしいですか？」

その場にいる紅き翼のメンバーとテオドラがアルに目を向ける。

「害はないようでしたので……いえむしろ守っているようでしたから放って置いたのですが。流石に、これ以上つき纏われるのも少々どうかと思いまして。」

その言葉にメンバー以外の人間がここにいるということを暗に示していたため紅き翼は緊張し警戒態勢に入る。

それはそうだろう先程自分達が最強だと言った直後にも関わらずアル以外の誰にも気付かれずにいるのだから、並大抵の者ではないのは明白である。

ナギはアルに聞く。

「おい、アル。そいつは今もいるのか？」

その問いに

「はい。……私でもかなり注意していなければわからなかったのですが……」

言いながらテオドラの方へ向き

「テオドラ殿下の側に絶えずいる……筈です。」

その言葉を聞き全員の視線がテオドラに向き、テオドラは困惑する。

「へっ?妾かぇ?…知らんぞ!?妾はそんな護衛なぞ付けておらぬのじゃ!!」

叫び慌てるテオドラ。
そこに不可視の人物がテオドラに声を掛けた。

「テオ、大丈夫だよ。……はぁ、まさかバレるなんて思わなかった。」

少女の声が全員の耳に聞こえた（アルは何かショックを受けていた）。
姿がうっすらと浮かび上がり鮮明になっていき現れたのは、金の髪、紅い瞳、端正な顔立ちをして黒いマント、黒の服装を着たテオドラと同年代ぐらいの美少女だった。

テオドラは少女を見ても最初はわからなかった。
しかしよく見れば見覚えがあるにはある。以前、城に招いた3人の内の1人に。
だが、彼女は20歳ぐらいであったが、今目の前にいるのはどう見ても9歳ぐらい。明らかに違う。違うのだが……先程、テオドラの事を愛称で呼んでいたし声もほぼ同じだった。
テオドラは半信半疑で聞いてみた。

「も…もしや……フェイ…ト……かの?」

途切れながら言った言葉にフェイトと呼ばれた少女は微笑み

「覚えててくれたんだ。久しぶり、テオ。」

肯定した。
直後、テオドラの悲鳴がオリンポス山に響いた。

なんとか落ち着いたテオドラ。
そこでナギが聞いてきた。

「おい。あんた何者だ?」

「あ、ごめんなさい。余計な警戒をさせちゃって。私はテオの友達のフェイト・T・陽神です。「なんじゃと!?」…そちらにも私の事を知ってる人がいますね。」

フェイトの名前に驚いた人物、ゼクトに視線が集まる。

「なんでぇ、お師匠も知ってんのか?」

ナギの疑問にゼクトは

「う、うむ。知っておる……んじゃが……。」

珍しく要領を得ないゼクトに紅き翼のメンバー（アル以外）は?顔となる。

そこに更なる闖入者がフェイトの側に転移してきた。

「フェイト～、バレたんだって～。」

「にゃはは、まあいいじゃん霞くん。どうせ協力するんでしょ。」

その2人を見てナギ・ラカン・詠春・ガトウ・アリカ・タカミチは一瞬警戒したがフェイトの知り合いということで、ひとまず解いた。
アルは膝を着き鼻血を流している。
ゼクトとテオドラはさらに驚愕していた。

霞となのははひとまず自己紹介をした。

「陽神　霞です。テオとゼクトは知ってるけど、他は知らない人ばかりだな。まあ、よろしくお願いします。」

「陽神　なのはです。よろしくお願いします。」

なのはがお辞儀をしたときにアルが吐血したのはスルーしておく。

そこで詠春がふと気になったみたいで尋ねた。

「君達3人は兄弟なのか?名字が同じだが?」

そこでテオドラとゼクト以外が驚く発言をする。

「「「夫婦だ（（です））」」」

その答えに

……

沈黙。そして

ハアァァァ！？

驚愕の叫び。

オリンポス山に第２の叫びが響いた。

その時のアルは

「グフッ、美少女が……３人…ここが幻想郷（アヴァロン）……我が生涯に……一片の…悔い……なし（ガクッ。」

変態化していた。

紅き翼のメンバーも落ち着いて隠れ家の中に皆（アル以外）が入り、霞達は何故テオドラに隠れて付いていたのか説明した。

ナギが頭をガシガシと掻きながら簡単に噛み砕き纏めた事を改めて聞いてみた。

「え～と、とにかくお前らはテオドラとダチで、テオドラが捕まったと聞いたから心配になってテオドラを助けにきた。そしたら丁度

俺達が姫さんらを救出した。それを見てテオドラがどうなるかわからなかったから、ついて来た。こんな所か？」

そのナギの言葉を霞は訂正していく。

「というか先にテオドラ達の所に着いたのはフェイトだけどな。俺達が正面で陽動して敵が少なくなったら側に待機していたフェイトに救出してもらうってな寸法だったんだよ。まあ、救出したのはそっちには違いないけど。ただ、フェイトをそのまま付かせたのは…無いとは思ったんだけど一応な、あんたらがテオに危害を加えるもしくは見捨てようとした時の保険だったんだよ。」

シレッと言う霞の言い分にナギ達は一応納得する。確かに、救出した者とはいえ見知らぬ相手に任すのは不安が残るのは確かだから。ただナギは疑問に思ったので聞いてみた。

「救出した時にいたっていうけど……どこにいたんだ？姫さん達以外の気配はなかったけど？」

「テオの隣にいたよ。」

ナギの疑問にフェイトが答えたが、ナギは目が点になった。まさか、隣にいたとは思わなかった。

ナギがどんな穏行だと聞こうとしたら先にゼクトが聞いてきた。

「それよりお主らは本当に霞達なのか？」

その問いにナギ達は何でそんな事を聞くんだ？と思った。

テオドラはコクコクと頷きゼクトと同じような疑問を抱いていた。

ナギが代表して聞いてきた。

「お師匠、なんでそんな事を聞くんだ？」

「いやのぅ……ナギとラカンと詠春とアルに教えたじゃろ？４０年前の３人組を。」

アリカ達の居場所の情報待ちの時に聞いた話だ。
流石に覚えていたので頷くナギ、ラカン。
詠春はそれで気づいたのか聞いてきた。

「ゼクト殿、まさか……」

「うむ。そやつらと同性同名なのじゃよ。しかも容姿はそっくり。じゃが……儂が会ったのは２０歳ぐらいの成人している姿での。しかも４０年前。普通なら６０歳ぐらいに見えねばおかしいのじゃけど、この者らはどう見ても９歳程度。最初は幻術かとおもったがその気配もない。故にの……この者らに疑問を抱くのじゃ。」

そのゼクトの言葉に
視線が３人に集まる。
なのはとフェイトは苦笑い。
霞は目元は隠れてわからないが口がニヤニヤして悪戯が成功したように笑ってる。

そこでテオドラも付け加える。

「妾と会った霞達もそれぐらいの年齢じゃのぅ。その時も幻術等の気配はなかったぞ。」

ますます混乱する紅き翼のメンバー。
整理すると
４０年前にゼクトが会った霞達は２０歳程度
テオドラが少し前に会った霞達は２０歳程度
現在、霞達は９歳程度

そこでアリカが自分の推測を言ってみた。

「もしやそなたらは不老長寿の種で肉体年齢の変化ができる……のではないか？」

その言葉に詠春が

「しかし、アリカ様。霞殿となのは殿は少なくとも日本人と本人達も肯定しています。日本人で不老長寿なんて存在しませんよ。吸血鬼なら不老という点であり得そうですが、この３人から魔の気配はしません。」

ナギが続いて言う。

「そーだぜ、姫さん。よしんば不老長寿だとしても肉体年齢が変化できるなんて、そんな魔法聞いたことねーよ。」

２人の言葉にまた考えこもうとしたアリカだが

「アリカ姫、正解。」

霞が答えた。

ナギと詠春はポカンとした。
アリカはまさか本当に当たるとは思わなかったので驚いた。

「じゃあ先にゼクトから信じてもらうかな……もう無銭飲食はしてないよな？」

その発言に慌てて答える。

「なっ！？それは黙っておくのじゃ！！……って、それを知ってるということは。」

「それに一応魔法使いの事は黙っててって約束したのに～。」

それを言うとゼクトは唸りながら謝る。
霞はなのはとフェイトに少し怒られたのでフォローした。

「い、いや別に謝る事じゃないからいいよ。ゼクトもこのメンバーなら大丈夫だと思ったんだろ？そこまで深刻になる必要もないよ。」

それを聞いたゼクトは胸のつかえが取れたかのように溜め息を出した。

「じゃあ次にテオね。……もう手っ取り早く戻るか。」

霞の言葉になのはとフェイトは、初めからそうしたら良かったのにと思いジト目を向ける。
その2人の視線に苦笑いする霞。
そして3人が急に光に包まれると……人の輪郭を形取った光が段々大きくなっていく……
そして光が散ると

ゼクトとテオドラの記憶にある霞達がそこにいた。

3人を見たそれぞれの反応は

「すげー！！」ナギ。

「確かにこれは、すごいな。」詠春

「ガハハ、すげぇな。」ラカン。

「興味深いですね。」アル（いつの間に…）

「ほぅ…。」アリカ。

「……ふむ。」ガトウ

「すごい…ですね。」タカミチ

「妾も覚えたいのぅ。」テオドラ

「確かに…霞達じゃのぅ。」ゼクト

「こっちが本当の姿だ。改めて、よろしく。」

霞に続き、なのはとフェイトも改めて挨拶をした。

こうして霞達一行と《紅き翼》が出会った時であった。

おまけ

「なあ、アルビレオ。」

「アルで構いませんよ、私も霞と呼ばせてもらいますので。」

「ああ……それでな。」

「はい、何でしょうか？」

「フェイトなんだが……9歳の時にな…市民プールへ行こうとなのはが誘った際……旧スクール水着（平仮名名前付き）を堂々と着ていこうとしたんだって……どう思う？」

「……マーベラス……（バタン。」

変態（アル）は恍惚とした笑みを浮かべ吐血しながら倒れた。

再会～ロリロリみたいな～（後書き）

以前、前書きにてハーレムの鉄板面子を書きましたが……

すいません。

少しというより変更します。

個人的にエヴァと真名は作者が大好きだから確実に入れるんですが……他メンバーをね…。

理由として原作時期の霞をドナルドの悪戯によりアホな展開にしたい、また今のまま普通に時を進めて原作キャラに会っていく普通な展開のどちらかにしようか悩んでいるからです。

なので……本当にどうしようかな？

《原作５０年～》の所にあった二つ名的なものを削除しました。

次は大戦の決戦に飛びます。

白い悪魔は自重しない（前書き）

かなりあっけない戦闘？ですけど、ご容赦をｍ（＿＿）ｍ

白い悪魔は自重しない

紅き翼のメンバーと邂逅を果たした霞達は、これから一緒に行動していいか?と聞くとナギ達は快く了承した。
その時に自分達が道士だということ等を説明した。

それからの紅き翼は《完全なる世界》に反撃を開始するため、交渉や敵味方の判別などの頭脳労働班と敵を殲滅する肉体労働班に分かれて行動を開始していった。

そして徐々に仲間を増やし敵を倒していくこと約半年……紅き翼は敵の本拠地、王都オスティア空中宮殿最奥部《墓守り人の宮殿》へと辿り着いた。

「不気味なくらい静かだな…奴ら。」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ。」

ナギの言葉にラカンが軽口で答える。

「まあさっさと終わらせてみんなで宴会しようぜ。……ちっちゃい姫さんも一緒にな。」

霞がそう言うとナギ達も「そうだな!」と笑いながら賛同した。
そこへアリアドネー部隊のセラスが報告にくる。

「ナギ殿!帝国・連合・アリアドネー混成部隊の準備が完了しまし

た。」

「おう。あんたらも自動人形や召喚魔の抑え、頼んだぜ。」

「はっ！！…それで、あの…ナギ殿……ササ、サインをお願いできないでしょうか？尊敬していましたので…／／／」

セラスは顔を赤くしながらナギに言う。

それを見ている霞達は笑い、決戦前ではあるが少し和んだ雰囲気になった。

そしてガトウからの報告で連合の正規軍と帝国の説得は間に合わないので決戦を遅らせることはできないか？と聞いてきたが

「無理ですね。私達でやるしかないでしょう。」

「既にタイムリミットだ。」

アルと詠春が答える。

アルは続けて《世界を無に帰す儀式》を始めていることを言う。

メンバーは頷き合いナギが

「よぉしっ、野郎共！いくｚ「はい、ちょい待った」って、なんだよ！？霞！」

突入の号令を掛けようとしたが、霞に止められ少し不機嫌になり霞に聞く。

霞は気にせず答える。

「ほれ、宮殿から召喚魔とかがうじゃうじゃ出てきてるだろ。道を作るのと開戦の狼煙は挙げてやるよ。それと俺と後から来るなのは

とフェイトは混成部隊の手助けをする。……流石にあの数はキツいだろうしな。」

霞が前方の視界一面に広がる敵を見て言った。
ナギ達は頷く。そして霞は前に出ながらかの最強と謡われる道士が持つ宝貝を右手に顕現させる。

「霞、そのソフトクリームみたいな形状のはなんだ？初めてみるけど……それも宝貝ってヤツなんか？俺はてっきりその鞭とあの棒？みたいなものの2つだけだと思ってたぜ。」

ナギは霞達が行動を共にする際、宝貝の事も聞いているが霞はいままで禁鞭と打神鞭（太極図付き）しか使用をしておらずナギ及び他メンバーもその2つしか持っていないと勘違いしていた。
なので霞は教える。

「いや、俺は宝貝なら8個持ってるぞ。……ちなみにナギ達は三つ目の宝貝は見ているけどな、ほら打神鞭に丸い玉が付いてただろう？あれは太極図だ。そしてこの四つ目は……雷公鞭。最強と言われる道士が持っていた宝貝。」

最強という言葉に興味津々なナギとラカン。
アルと詠春とゼクトは太極図という言葉に驚き、聞いてみたかったが状況が状況なので今は黙っておいた。
霞は浮遊術を使い空中に上がり、高らかと声を挙げる。

「さあ……最強の一つを受けてみろ、《完全なる世界》！！」

霞は雷公鞭を持った右手を掲げる。
雷公鞭がパリパリと音を立てはじめ鞭の部分が逆立つ。

霞は更に力を溜める。それに呼応し徐々に雷公鞭が放電を激しく放ち始める。

…………そして

「逝け。」

言葉と共に最強を放った。

瞬間

ガァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアァン！！

凄まじい轟音とともに宮殿から霞達の前方近くまでの空間に雷が迸る。暴れる。敵を喰らい焼き尽くす。

パリィッ！ピシィ！

残留放電が迸るなか、先程まで視界一面を埋め尽くした敵の姿が塵一つ残さず消えていた。殲滅し終えた霞はナギ達を促す。

「ほれ！今のうちに行け。また第2波がすぐに来る。」

あまりの威力に呆けていたナギ達がその声で我に返り

「ありがとよ、霞！行くぞ！！！」

ナギの声と共に宮殿へと向かった。

セラスｓｉｄｅ

（……すいません、霞殿。
正直な所、私はあなたを侮ってました。）

私は心の中で霞殿に謝罪しました。
けど、きっと私だけではなく他の部隊の人もそう思っていたと私は信じます。
陽神　霞。半年前に従者の2人を連れて《紅き翼》と共に行動を一緒にしている。戦闘において彼の従者2人と違い霞殿が戦果を挙げたとは聞いた事がなかったため、後方サポートタイプ……と思っていたんですけど……。

（……バグキャラだったんですねぇ）

先程の一撃で敵の第一波を殲滅したのを見て内心で呟いた。そして第2波が現れたため部隊の指揮をしている最中に

（ッ！！？？！？後方から魔力反応！！！）

部隊の後方に巨大な魔力反応を感知し振り向く。
振り向いた私の視界に映ったのは

白い衣装、黒い衣装を纏った霞殿の従者2人、味方から《白き戦姫》《黒き戦姫》といわれる陽神　なのはさん、フェイト・T・陽神さんが空中に浮かんでいた。

……桜色の巨大な魔力玉と金色の巨大な魔力玉を頭上に精製して……。

（……え？何ソレ？……まさか！？）

私が2人のやろうとしていることに気づいた瞬間、霞殿の叫ぶような声が聞こえた。

「全部隊急いで退がれ！！！！！無差別砲撃が来るぞ！！」

それを聞いた私達混成部隊は全速で退避する。

全部隊が退避した刹那

2人の魔力玉から無数の魔法の矢？が走り敵の第2波に襲いかかっていった。

……一番前線に出ていた霞殿が戻って来てない状況で。

（ちょっ！？あの2人、自分の主を巻き込んだ！？）

私は躊躇いなく魔法を撃った…否、撃ち続けるなのはさんとフェイ

トさんに驚いた。

（霞殿は生きているんでしょうか？それと……私達って…いります？）

魔法の矢？が流星群のように降り注ぎ敵を殲滅していくのを見て思った。

セラスｓｉｄｅ　ｅｎｄ

なのはｓｉｄｅ

テオ達の護衛で決戦に遅れちゃった私とフェイトちゃんは急いで《墓守り人の宮殿》へ向かった。

「なのは……始まってる。」

フェイトちゃんが前方に見えた戦場を見て言ってきた。

私は頷き、戦場にいる無数の敵がいるのを見て

「フェイトちゃん……拡散型の魔法を撃って数を減らそう。」

提案した。フェイトちゃんは少し考え

「……そうだね。霞に言って味方部隊を後ろに退がらせた直後に撃とう。」

そう言い賛同した。

なので私は霞くんに念話をすると同時にレイジングハートを起動し

頭上に魔力弾を精製し始める。

「レイジングハート、いくよ！！『霞くん。少し派手にやるから味方部隊を後方に退がらせて。……流石に敵だけを狙うのは無理そうだから。』」

「了解。マスター。」

『わかった。』

霞くんとレイジングハートから了解の返事を貰い魔力弾の精製に集中する。

……精製を終え隣を見るとフェイトちゃんもこちらを見てきて頷く。

精製が完了し戦場を見ると味方部隊の人達が後方に退がり終えたのを見て

「やるよ！フェイトちゃん！！」

フェイトちゃんに声を掛ける。

「なのは…霞がまだいるよ。」

フェイトちゃんが言った通り最前線で暴れていた霞くんが部隊の殿を務めていたため、まだ退がりきれてない……けど

「……戦いに犠牲はつきものだと思うの…。」

「えっ？…まさか、なのは……。」

「それに霞くんなら絶対大丈夫！だから、やるよフェイトちゃん！！『霞くん……頑張ってね！？』」

私はそう言い放ち発射準備に入った。

「ちょっ！？なのは！ってなんか瞳が暗いよ！？なんで！？……ああ！もう『霞！ごめん！？なのはを止めれないよ、なんとか避けてね！！』」

『えっ、２人とも本当にやるの？俺だってヤバい時はヤバいんだよ？』

『大丈夫…答えは聞いてないから！？』

『拒否権なし！？』

霞くんがなんか言ってきたけど、気にせず

「さあ、逝くよ！ディバイン…バスタァァァァァー！！！」

「プラズマランサー・ファランクスシフト！！！撃ち砕け！ファイアー！」

私とフェイトちゃんの魔法が敵群に降り注いだ。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

殿を務めていた霞は部隊の皆が退いたのを見て自分も急いで退がろうとしたら

『霞くん……頑張ってね!?』

なのはからの念話が届き霞は怪訝な顔をした後、すぐにその言葉の意味を理解し止めようとしたがフェイトから続けて

『霞!ごめん!?なのはを止めれないよ、なんとか避けてね!!』

そう言われた。

『えっ、2人とも本当にやるの?俺だってヤバい時はヤバいんだよ?』

流石にあの2人が放つ絨毯爆撃は恐ろしいと思い抗議をしたが

『大丈夫…答えは聞いてないから!?』

『拒否権なし!?』

もはや霞の言う事など気にしない白い悪魔。

「くっ!?囲め!傾世元ジョウ。…多重障壁全力展開!!」

霞は急ぎ傾世元ジョウを自分の周りに広げ防御をしつつ多重魔法障壁を急いで展開した。

自身の防御がなんとか完成した直後、霞の視界全てを桜色と金色の光が支配した。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
ドドドドドド！！！！！！

パリン！バリ！パリン！！

収まる気配がない砲撃に霞が張った障壁が１枚、２枚と壊されていく。

「うおぉぉ！！コエェェェーーーーーーーーー！？」

壊されていく障壁に魔力を注ぎ込み強固にするが、急ぎで張った多重障壁ではあの２人の魔法を同時に防ぐのはキツいというより無理があるのか次々と破られていく。

（っつーか、俺以外だとナギ達でもこれは死ぬ！？…………宮殿、大丈夫か、これ？）

残るは少ない障壁と傾世元ジョウの防御となる中、ナギ達が入っていった宮殿を心配する霞。

すると、ようやく終わったのか砲撃が止む。
霞の防御は罅が入り壊れ欠けた最後の障壁と傾世元ジョウのみであった。

「ヤバかった…（汗。もし傾世元ジョウだけだったら死ぬとはいか

なくても流石に重傷は負ってた……。」

冷や汗を掻きながらそう呟き、周囲の確認をする。

「部隊は……大丈夫か。宮殿も被害なし。敵は……あれ？意外に全滅してない？」

本当に少ないながらも残った敵に驚いたが、よく見れば両腕が吹き飛んでたり、体に穴が開いたりなど散々な状態であった。

それを見て霞は

「後は第3波がきても混成部隊で充分な時間が稼げるだろ。」

そう呟いた瞬間

ズン！ズドン！！
ズズンッ！！！
ドガァァァン！！！！

墓守り人の宮殿から爆音が聞こえ、崩れていく。

「……やったか、ナギ……。」

霞はナギが造物主を倒した事がわかり、なのはとフェイトの所に向かった。

「終わったぞ、2人とも。」

「だね。」

「うん。」

霞はなのはとフェイトに戦いが終わった事を伝え、2人も頷いた。

「さて、たぶんテオが終戦後の式典に出ろやら言ってきそうだけど…なのはとフェイトはどうする？」

「う～ん、私は目立つのはちょっと。アハハ。」

なのはが答え

「私もかな。友達を助けたかっただけだったから、国の為にやったわけじゃないし。」

フェイトも答えた。

霞もフェイトの言葉に同意して、2人に少し聞いてみた。

「あのさ、これからいってみたい所があるんだけど。」

なのはとフェイトはその言葉に少しだけワクワクして聞く態勢に入った。

「いや、あの、聞いてくれるのは嬉しいけど、そんな期待するような場所じゃないからね。」

霞がそう言うと2人は少し残念そうにする。

霞はそれを見て苦笑し2人に

「場所は……ケルベラス渓谷。」

墓守り人の宮殿を中心とした広域魔力減衰現象を各国の艦隊が封印するのを見ながら行く先を告げた。

白い悪魔は自重しない（後書き）

アリカを今さらながらハーレムに入れるのは無理があるんだろうか？

……やっぱりやめておいた方がいいですかね？

ドナルドはやっちゃったんだ～。～事後承諾～（前書き）

グダグダ感が満載
強引すぎた展開

しかし！！
俺はアリカが大好きだーーーー！

色々とご都合主義的やあれ～？ってな部分がありますが、独自で解釈及びスルーしてくれるとありがたいかもです。

では、どうぞ～

ドナルドはやっちゃったんだ～。～事後承諾～

『霞くん、執行は１０日後に決まったって。』

『ナギ達は今、シルチス亜大陸で救助活動をしてる。』

『あいあい、了解。こっちも今の所は問題ありません。』

なのはとフェイトの報告に霞は答える。

霞は今……アリカと共に牢屋に入っている。

「アリカ姫～、飯ぐらい食べなよ～。」

アリカに食事を促すが当の本人は食事を取らずに聞いてきた。

「のう霞よ。……姉上は無事なんじゃろうか？」

「大丈夫ですよ、だから食事ぐらい取って下さい。本当に死んじゃいますから。」

「……そうか。」

アリカはそう言いながら動こうとしない。
それを見る霞は溜め息を吐きながら小声で呟く。

「……ハァ……ほんと…どうしてこうなるかなぁ（ボソッ。」

発端は2年前に遡る

霞達は決戦後、式典には参加せず渓谷にてとある実験をして、それに成功した事に満足し2年後の処刑執行に備える準備をしようとしたとき、3人は不思議な感覚に襲われた。
それは世界の何かが捻れたようなもしくは決められた定めが何かに書き換えられたような奇妙な感覚であった。
霞達はそれを感じた直後から嫌な予感がした。

「霞くん、今なにか……。」

なのはに続いてフェイトも

「私も感じた。それに何か嫌な予感もしてきた。」

2人も感じたと言ってきたため霞は気のせいではないと確信した。
その時、霞達の目の前に一枚の紙が唐突にヒラヒラと落ちてきた。
それを目にした3人は既視感…どころか誰が送ってきたかすぐに理解できた。

「……なのは。……読む?」

「ア…ハハ……、フェイトちゃんどうぞ。」

「えっ!?……霞が読んでいいよ……私は遠慮しておくね。」

霞がなのはに振り、なのははフェイトにパスを回し、フェイトは霞に返した。
霞はホントに嫌々ながら紙を手に取り書かれていることを読んだ…

……。
霞が読み終わった瞬間
「ウガァァァ！！」
紙を放り投げ、頭を抱え叫んだ。
なのはとフェイトはその様子に驚き、放り出された紙を拾い読んでみたら……驚愕の内容が記されていた。

《やあ、久しぶり。皆のドナルドだよ～。っとそれよりも緊急事態だから手っ取り早く用件を伝えるよ～。
……このままだとアリカ姫は死ぬかもね。
理由は……ドナルドがやっちゃったんだ～。君達がいる世界の書類を整理してたらアリカ姫の書類を間違ってシュレッダーにかけちゃったんだ。それに気づいたドナルドは思わず星一徹ばりの卓袱台返しをしちゃったよ。
でね、急いで書類を書き直したから直ぐに死ぬことはなくなったんだけど……。せっかくだからね、少し改竄したんだ～。それはね、アリカ姫に逃亡生活は似合わない。隠れて過ごすなんて可哀想！！
……ならナギとくっつけずにキミとくっつけちゃえばいいんじゃね？って我ながらナイスな思いつきでドナルドは5回転半捻りを繰り出しちゃった！
あっ、ナギの方は大丈夫だよ。代わりに他のウェスペルタティア王家のお姫様を介入させておいたから。
ちなみに王家の王女はアリカ姫だけなんてことはないんだよ～。知ってた？
それは置いといて、アリカ姫が《紅き翼》と接触して協力していったりあの隠れ家での誓いとかは基本的に変わらないけど、そこにもう1人の王女を付けたんだよ。

要するに《紅き翼》は2人の王女に杖と翼を預けた感じになったんだ～。
で、ナギはアリカ姫ではない方とくっつく事になってる……というかしちゃった♪テヘッ☆
それでね……後はキミに丸投げするから助けてあげて～♪
お詫びとしてキミにある能力を付け足しもしたんだよ～。
それは、《キミと契約した人物は現界できる。》
詳しい事は省くね、キミなら理解できると思ってるから。
これぐらいかなぁ。
ドナルドは自分のミスから生まれた素敵な発想に感激、感謝、感動の雨あられだよ♪
じゃあ、この辺で
Ｉ'ｍ　ｌｏｖ'ｉｎ　ｉｔ！

あっ、もう1人の王女の名前はエスナだよ。彼女の存在は世界に植え付けたからみんなの記憶にあるからね～。キミ達には後で詳細を送るんだ～》

ドナルドの紙を読み終えた2人はいまだに呆然とし内容が理解……いや思考が追いついていかない。
その間も霞は頭を抱え唸っている。
しばらくこの状態が続いたのであった。

3人はひとまず冷静になりこれからの事を話し合い始めた。

「とにかく、あのクソのせいでアリカ姫がヤバいから助けるってことでいいよね？」

「うん、流石に放っておけないし。」

「同じく。でも、アリカ姫の死ぬ原因がわからないよね、コレ。」

フェイトが手紙をもう1度読み返し言ってきた。

「……恐らく処刑時に渓谷で死ぬと思う。ナギ達が助けにはくるんだろうけどな。」

「もう1人のエスナっていう王女様は？」

霞が自分の予想を言い、なのはがドナルドのせいで存在することになった王女の事を聞いてきた。

「……2人が同時に処刑されると考えたら、ナギがエスナ姫は助けれたがアリカ姫は間に合わなかった……それが妥当だと思う。」

さらに予想を立てた霞達。すると今の今まで名前しか知らなかったエスナの容姿や性格など諸々の事が頭に浮かんできた。

3人はドナルドの仕業だと確信する。

何故なら霞達3人は転生する時にドナルドが世界の修正力を受け付けないようにされた特異な存在だからである。

故に3人にこのような事ができるのはドナルドぐらいなのだ。

「……まあいいや、かなり不測の事態だから処刑前にアリカ姫が死

ぬ可能性もあるから俺は今から側に付くことにするよ。幸いに渓谷の方は問題なくなったしな。」

「わかった。私となのははどうすればいいかな？」

「予定通り元老院の調査をよろしく。」

霞の言葉に2人は頷き、3人は行動を開始した。

そして霞はアリカ達の側に転移すると、正に元老院が2人を拘束しようとしていたのを視界に捉えたので打神鞭で吹き飛ばした後、言い放った。

「汚い手で2人に触るなクソ共が。」

突然の登場にその場にいた全員は目を見開く。
いち早く我を取り戻した元老院の者が

「貴様は…《紅き翼》と共にいた陽神　霞か。丁度いい、貴様には王女2人と一緒で《完全なる世界》と関与した疑いがある。者共！？こやつも捕らえよ！」

元老院がそう叫ぶと重装兵が周りを取り囲む。
霞は一連の流れにイライラしたため、殺気を解放しつつ告げる。

「……てめぇら……死にたいか…。」

ギシィ！

「ヒッ！？」

余りの殺気に兵達は後退する。
そこへ王女2人が止めに入る。

「「霞！やめなさい（るのじゃ）。」」

それを聞いた霞は殺気を緩めた。

「フッ、ハッハッハッ。懸命ですな王女よ。さあ、この者達を牢に連れていけ！」

元老院の命に従い3人を連行しようと近付く兵。
霞は

「自分達で歩く。……エスナ姫とアリカ姫に手荒な真似をしてみろ。すれば……（ドガッ）……ああなるからな。」

先刻、命令をした元老院の足元に風玉をぶつけ床をえぐり取り告げた。
それを見た兵士達は一斉に首を縦に振りまくる。
エスナとアリカと霞は牢に向かい歩き始めた。

牢に着いた霞達は3人が別々に入れられるとわかった時

「おい、3人共一緒の場所にしろ。」

霞が言う。だが兵は

「無理です。御三方とも別々に（ドガッ！）ヒッ！？」

「もう一度言う。一緒の牢に「やめなさい、霞。」……ちっ。なら、どちらかと一緒にしろ。最低限の譲歩だ。」

エスナに止められた霞は苦々しい口調で言うと

「霞、私は問題ありません。アリカに付いてあげてくれませんか？」

「姉上！？妾こそ大丈夫じゃ！じゃから「アリカ」ッ！？」

エスナの言葉にアリカは反論しようとしたがエスナが制止し

「たまには姉らしく妹の心配をしたいの。だから、ここは譲って頂戴。」

そう言われアリカは唇を噛み締め我慢する。そんなアリカを見て微笑むエスナに霞は

「エスナ姫……わかりました。あんたの命を受けた。アリカと一緒にいるよ。だが……安心しな。時が来るまであんたにも傷１つ付けれないようにしてやるよ。」

そう言いアリカを連れ牢に入っていく。

それを見たエスナは呟く。

「アリカをよろしくね、霞。」

兵に連れられ別の牢に入っていくエスナ。

そして冒頭に戻る

霞が思い出しているとどこからか

ドガン！？

そんな音が聞こえた。
その音を聞いた霞は「ざまぁ」と呟き笑う。アリカも聞こえたが何の音かわからずに理解している霞に視線を向け問う。

「……今のは何じゃ？」

「ん？ああ。どっかの馬鹿がエスナ姫にちょっかいかけようとしてやられたんでしょ。姫の周りには俺の風が纏わりついてるから。」

霞が2年前に言った通りエスナも護っていることがわかったアリカは唐突に聞いてきた。

「何故……お主は妾と姉上を守るのじゃ？主は妾達の問題に巻き込まれただけ。主なら単独で逃げる事も可能じゃろ？それに大罪人の烙印を押された妾達を庇ってしまっては主に益がない。むしろ、不

利益しかないじゃろう。何故じゃ？」

霞はそれを聞き、もう一度溜め息を吐き教える。

「エスナ姫とあなたは大罪人なんかじゃない、むしろ大勢の民を助けた２人はナギ達と同じ敬われる人だ。２人の行動はあの時において間違いじゃないよ。全てを救うなんてできないしな…。それと２人は俺の友人だ。助けるのに小難しい理由なんて必要ない。後、メリットはちゃんとあるぞ。……エスナ姫とアリカ姫はなのは達に劣らない飛びっきりの美女、なら助ける価値は世界を敵に回してもあるだろう？」

最後の部分を無邪気に笑いながら言う霞。アリカはポカンとした顔をする。

アリカｓｉｄｅ

霞に妾と姉上を助ける理由を聞いた時に大罪人じゃなく敬われる人と言ったとき、不覚にも嬉しくなった。妾と姉上が行った事は間違いではないと言われた。

１人でも妾達の行動を認めてくれる者がいるということがどれだけ救われるような気持ちになるか初めて理解できた。

陽神　霞。

初めて会った時は子供の姿をして妾達をからかった男。

最初の印象は悪戯好きの変な男。

ただ、それだけ。

なのはとフェイトがどうして惹かれたのかよく理解できなかった。

2人に一度どこに惹かれたのか聞いてみた事があった。
2人はこう答えた。

「霞くんに一番惹かれた所？う～ん、そうだなぁ～……優しい所かな。」

「私もかな。それと心が強い所も私は好きかな。」

「あっ、そうだね。霞くんならこうと決めたら絶対に曲げることはないし、それを実現させちゃうよね。」

2人が更に霞の良い所を言い合うのを見て、そんな所があるのか半信半疑であった。
じゃが、先の言葉で少し理解できた。
この者が世界を敵に回してもいいと言った時の声は本物だったから。

トクン。

霞を見ていたら胸の内が少しだけ暖かくなる。

ジッと見ているとこちらに気づいた霞が顔を向け聞いてくる。

「どうかした？」

その問いに妾は慌てて

「いや……前髪が長いと思っただけじゃ。」

……何を言っているのじゃ、妾はｏｒｚ
霞は妾のそんな言葉に気にせず

「ん～、やっぱりそうだよな～。なのはとフェイトが止めるから切ってないんだけど。アリカ姫はどう思う？切った方が良い？」

姫とつけられた時、霞と距離があると感じ少し嫌な気持ちになった妾は

「アリカでよい。…それと切った方が見栄えは良くなるじゃろ。」

そう言った。
霞は笑いながら

「了解、アリカ。髪はやっぱり短めに切ったら似合うかね～、ガトウやタカミチみたいな感じで。」

そう言いながら髪を上げる霞。
それを見た妾は……

「……。」

「？どうしたアリカ？いきなり固まって？」

霞が聞いてくるがまだ思考が追いつかない。
……ボッ！？
やっと目にした光景を理解できたら顔が熱くなった。

（なのはとフェイトが切るなと言う理由がわかったのじゃ。）

妾が急に赤くなったのを見て霞が心配してくるが、大丈夫じゃと答え制する。

妾はもう霞の方を見ずに先程の言葉を訂正するように言葉を投げかける。

「先の言葉は撤回じゃ。主はそのままでいた方がよい。……絶対に前髪は切るな。これは命令じゃ。」

霞はえ～？といったような顔をして不満顔をするが知らん。

（あれは……他の者に見せたくないの。……霞は妾が美人だと言っていた……／／本当なら嬉しいの。）

そんな事を考えつつ目を瞑り意識を閉ざした。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

そして処刑当日

「魔獣蠢くケルベラス渓谷。魔法を一切使えぬその谷底は魔法使いにとって、まさに死の谷。古き残虐な処刑法ですが…この残酷さをもｔ「うるさい」ッへぶぉあ！？」

長々と講釈を垂れる元老院に霞は風玉をぶつけ黙らせる。
エスナとアリカはそれを見ながら処刑台へと歩みを進め、霞も続く。
そして
3人は谷へと身を投げ出す。

「クックッ、魔法の使えぬ谷底で幾百の肉片となって魔獣に喰われてしまえば、たとえ吸血鬼の真祖といえど復活は困難でしょう。」
谷底を眺めながら言い放つ。
「よろし…「よぉーっしこんなモンだろ♪」…なっ!?」

「録れたか?ちゃんと録れたか~?…よぉ~し、御苦労ッ♪
これ生中継とかねぇよな?それだと流石にマズいんだが…」
1人の兵士がいきなり陽気に喋りだす。

「無礼者!何者だ!?きさ「おっさん…録画はここで終わりだ。で、今からここで起こることは《なかった》ことになる。
わかるな?フン!!(ガシャァッ!」
元老院の言葉を遮り鎧を吹き飛ばした人物は
「きっ、貴様は!?千の刃のジャッ、ジャック・ラカンーーッ!?」

「他にも勿論いるぜぇ♪」

ラカンがそう言うと空から降り立つ者がいた。

「青山：詠春！
アルビオレ・イマ！！
ガ、ガトウ！
《紅き翼》！？
バカな！では谷底の
女王達は！？」

ラカン達の登場に驚き、声を張り上げる元老院。

「い、いかに千の呪文の男といえど、あの谷底から生きては…！」

対しラカンが不敵に笑いながら

「はっ、魔力も気も使えないくらいでヤツが死ぬかよ。それに、姫さん2人の側に誰が付いてやがったぁ？何でもアリの道士さまだぜぇ。」

ラカンが言った直後

ガァアアアア！
ドガァ！！キュドン！！ズグァン！

谷底の中では七匹の龍が暴れていた。それぞれが青・赤・黄・紫・藍・橙・緑と合わせれば虹色に見える。

それを見た元老院は阿呆のような顔をし、ラカン達もまさか言った通りの状況になるとは…と少し汗を流すが気を取り直した。
元老院は慌てて周りの兵に命令する。

「ぐっ！捕らえよ、反逆者だ！！谷底の奴らも逃がすな！！」

ラカン達は余裕の笑みを浮かべ戦闘態勢に入りながら

「おおっとやるのかい？いいのかよ？その程度の戦力で。」

告げる。

「フッ、このイベントの警備はここに見えるだけではない。
周囲数１０キロ二個艦隊と三千名の精鋭ぶ「スター！ライト！！ブレイカァァァー！！！」「雷光一閃！！プラズマザンバァァァー！」…なっ！！？」

ドドドドガァァァ！！！！！！！！

元老院の台詞の途中で何者かの呪文が上から聞こえ、見上げると桜色と金色の魔法が周囲を警備していた艦隊を撃ち貫き撃破していくのが見えた。

「だから言ったろうが。その程度の戦力でいいのか？ってな。」

《紅き翼》も力を溜め暴れ始める。

ここにバグキャラメンバーのワンサイドゲームが開始された。

谷底ｓｉｄｅ

エスナは己が身に襲いかかる死に目を閉じながら待つ。
……だが、いつまで経っても何も起こらない。
逆に何か暖かいものに抱かれているような感じであった。

（？？暖かい？何故？痛くもない？……痛みも感じず死んだのかしら？）

色々な思いが頭に浮かびながらゆっくりと目を開けると

「えっ？ナ…ギ…？えっ？なんであなたがここに？アレ？」

混乱するエスナ。
それを見ながらナギは教える。

「バーカ。あんたを助けに来たんだよ。エスナ。」

「えっ？なんで？」

「はっ！何故ってか？バーロー、それは…ッ！？アブねぇ！」

ナギが教えようとした時、空気なんて読めない魔獣達の一匹が襲いかかる。

「ったく。まずはここから脱出しねーとな。」

そう言うナギ。

そこでエスナは気づく。アリカがいないことに。

「！！？ナギ！アリカは！？アリカはどうなったの！！！」

ナギはほんの少しだけ顔を歪めながら告げる。

「すまねぇ。間に合わなかった。」

それに絶望するエスナ。だが

「けどよ、大丈夫だぜ。霞が側にいたからな。あいつは何でもアリだから、アリカはきっと無事だぜ。」

続けて言うナギの言葉に希望を見いだすエスナ。
するとナギ達の方を伺っていた魔獣達が後ろを向く。
いきなりこっちを無視し始めた魔獣達に不思議に思うナギとエスナ。

ガァアアアア！
ドガァ！！キュドン！！ズグァン！

ナギ達から少し離れた所、魔獣達が向いていた方向から七匹の龍が現れ魔獣達を駆逐し始めた。
そしてその方向から周りに布みたいな物を浮かべ、腰には大きな鋏型のような物を腰に差し、アリカを両手で抱え（いわゆるお姫様抱っこ）ながらこちらに歩いてくる人影…霞である。
その霞はナギ達に気づき声をかける。
それはナギにとっては最高のワイルドカード。

「ナギ。魔法を使えるようにしてある。好きに暴れな。」

ナギはその言葉を聞き、魔力を練ると普通に使用できた。

「おぉ！！すげぇ！？……霞！ありがとよ！！」

「気にすんな。やりたいようにやっただけだ。」

2人は笑いながら言う。

エスナはあまりの出来事にポカンとしたまま。

アリカは……顔が真っ赤になり俯いたままで何かブツブツと呟いている。……魔法が使えるなんて気づかないまま。

「暴れたいなら2人の防御は任せろ。かすり傷1つ負わせねーよ。」

その言葉にナギは嬉しそうに頷き今までの鬱憤を晴らすかのように魔獣へと躍り掛かる。

「魔力さえ使えりゃー、てめぇらなんざ雑魚だぜぇ！喰らえや、《千の雷》！！」

ガガガガァァン！！

七匹の龍と共に雷が暴れ狂う。

今さっきまでただの餌であった兎がいきなり己達を遥かに超える獅子に化けて攻撃してきたのだ。

魔獣達にとって散々な事態になった。

霞はエスナの側で待機し布…傾世元ジョウを周りに展開しナギの暴れっぷりを眺め感想を言う。

「お～、水を得た魚のようにはしゃぐな、あいつ。」

そんな霞を横目にエスナは聞く。

「何故、ここで魔力が使えるのです？」

その疑問は尤もであるが、霞は何でもないように答える。

「魔精陣…とでも名付けようかな。俺の宝貝である太極図でここら一体に陣を敷き魔力を精製し使えるようにしたの。もちろん、俺が味方だと認識しているものだけ。詳しい事は省くな。」

あまりの非常識っぷりに唖然とするエスナ。
しばらく両名の間に沈黙が支配したが、エスナが溜め息を吐きもう1つの気になる事を聞いてきたことにより沈黙は破られた。

「ふぅ、もういいです。あなたはバグキャラの中のバグキャラということで納得します。それより、アリカはなんでそんなに大人しいのですか？というより……何をしたらそんな風になるんですか？姉である私も初めて見ますよ、そんなアリカ。」

エスナが言うアリカは、顔をそれはもう茹で蛸状態でブツブツと呟き、時にはエヘヘッとにやつきながらトリップしている。
……端から見ると危ない人である。
その問いに霞も戸惑いながら答えた。

「いや、俺にもよくわからん。助けてやった時にギャーギャーと騒いでたんだけど、それに答えていってやると最終的にこうなった。としか答えようがない。」

その言葉と態度に霞は嘘は言ってないと感じたエスナは、もう少し

詳しい事を聞いてみた。

霞は空中で姿勢を整え

谷底に落ちていくアリカ。

「疾ッ疾ッ疾ッー。」

打神鞭を取り出すと振るい始める。

すると先端の宝玉部分から文字が出てきてケルベラス渓谷の岩壁にそれが張り付き消える。

その後、宝玉がボウっと光った後は何も起こらず。

霞は気にせずアリカの方へ虚空瞬動を使い、側に付き瞬時に傾世元ジョウを纏う。

この間わずか2秒足らず。

傾世元ジョウを纏った時、魔獣に飲み込まれた。

魔獣胎内

アリカは誰かに抱きかかえられているのに気づきゆっくりと眼を開けると真っ暗の中、自分の周りにキラキラと光る布が囲んでいるのを見た後、顔を少しあげると

「霞…か？……ここは地獄か？」

霞を認識し聞いてきた。
勘違いするのは無理もない。
眼が慣れていくにつれ生々しい肉が周りに映るのだから。

「ここは魔獣の胎内だな。なんとか防御は出来たけど喰われちまったねぇ。」

それを聞きアリカは自身の死は間近だと思い

「すまぬ。お主まで巻き込んで死地に連れてきてしまった。許せとは言わぬ。妾を恨んでくれてもよい。」

殊勝な事をいうアリカに霞は呆れ聞く。

「あのなぁ……アリカは死にたいのか？はっきり言って俺はまだ死にたくないぞ。まだまだなのは達とイチャイチャしたいんだ。こんな程度で死ねるか。」

「じゃが、魔法も気も使えず……あれ？ならこの布は何じゃ？」

アリカは自分の言葉の最中に気付く。
霞はお構いなしに

「ごちゃごちゃ小難しい理由はなし。シンプルにいこうか、アリカ。生きたいか死にたいか。どっちだ？まあ、死にたいなんて言っても却下だが。」

それを聞きアリカはムッとして

「妾とて……生きたいわ。死にたくない！！！じゃが！……生きても皆に恨まれながら生きるのは……辛い。怖い。グズッ。幼き頃より人の悪意を嫌となるぐらい見てきたから、それが恐ろしいのじゃ。それを次は無数の人から受けてしまう…。それなら妾は……グスッ、ウッ、アアアッ。」

希望を言うアリカ。
だが子供の頃から政治に携わり大人の悪意を浴び、それに敏感となってしまっているが故に、もし生きてここから出ても次は世界のほぼ全ての人間がそれを向けてくる。それに耐える事はもうできない。
それほどまでアリカの精神は削らていた。
泣くアリカを見て霞は静かに言う。

「ならよ、守ってやるよ。」

「……ふぇっ？」

アリカは霞の言ったことが理解できなかった。
霞は更に言う。

「だから守ってやるよ。」

不敵に笑う霞を見てアリカは聞く。

「世界中の人間が悪意を向け攻撃してくるのじゃぞ？」

「はっ！全部弾き返した上に熨斗をつけて返礼してやるよ。」

「魔王を召喚し狙うかもじゃぞ？」

「魔王程度にゃアリカに傷1つ付けさせねーよ。」

「……妾が死ぬのは神が決めた事やも知れぬぞ?」

「そんな腐った考えの神がいたらその幻想をぶち壊してやるよ。」

「……なのはとフェイトが狙ってくるかも?」

「はん!?……自分で頑張って(汗。」

最後は情けない返事をする霞。
アリカはジト目を向ける。……もう泣いてはいなかった。

「と、とにかく!アリカ……シンプルにいこうぜ。だからもっかい聞く。
生きたいか?」

霞がアリカに顔を向けながら問う。
霞の顔を見て、顔を赤らめながら

「……ほんとに守ってくれるのか?」

小声で聞く。
だが、霞はそれをしっかりと聞き返事をする。

「当たり前。女と約束した事はキッチリと守るぜ。アリカが満足するまで側にいて護ってやるよ。」

「……妾は意外に嫉妬深いぞ。」

「???へっ?ああ、いいんじゃないか?アリカみたいな美人に嫉妬されるなら男としては嬉しいだろ。」

いきなり方向性が違う問いが来て少し驚いた霞だが、律儀に答える。

……後にこの問答が修羅場を展開するともわからずに。

「……妾はり、料理とかあまり得意ではないぞ。」

「……?いいんじゃね、別に。男が作ってもいい時代だろうし、覚えて上手くなったらいいだけだろ。」

「……主はその、なんじゃ、……妾に側にいて欲しいのか?」

「はっ?……まあアリカは意外に天然っぽいから側にいたら楽しくなりそうだし、いて欲しいぞ。」

アリカの質問に次々と答えていく。

その度にアリカの顔が真っ赤になっていく。

今ではもう茹で蛸状態。そんなアリカはやっと希望を言う。

「……なら霞……妾は…生きたい。生きてお主の側にいさせてくれ。」

その返事を聞き霞は（実際はあまり深く考えていない霞である）ここから出る準備をする。

「なら!!出るぜ!しっかり掴まってろ!」

アリカはその言葉を聞き霞の胸に顔をうずめ……トリップし始め

る。

「さあ、久しぶりの出番だ、金コウセン！出でよ、虹色の龍（レインボードラゴン）！！！」

霞が金コウセンを顕現し解放する。
金コウセンから七匹の龍が現れ、魔獣の胎内を喰い破り、勢いを緩めず外の敵を駆逐し始める。
そして霞はアリカを抱きかかえ金コウセンを腰に差しナギ達の気配がする方へ歩き始めた。

エスナはそれを聞き充分すぎるほど納得しまだ気づいてない霞に教えてやる。

「霞……よく思い返してみなさい。女の子がそんな事を言われ、そして自分の性格等を聞いたけど、それを全て受け入れた返答。百人中百人が思うわ。……アリカが霞の嫁になるって事を。」

「……あっ。」

エスナに言われ、よく考えて気付く霞。
そんな霞にエスナは忠告する。

「今さら断ったりしたら駄目よ。アリカなら自殺しそうだし、それに姉としてもそんな事をしたら……ねぇ。」
黒いオーラを滲み出すエスナ。冷や汗を流す霞。
……霞は腹を括り

「アリカ！」

少し大きな声で呼びかける。

「（ビクッ。ひゃい！？」

妄想中のアリカは強制的に現実に戻ってこさされ変な声をあげながら返事をする。

構わず霞は

「……／／／結婚すんぞ！今日からアリカは陽神　アリカだ！！」

それを聞き目が点になるアリカ。だけど、霞の言葉の意図に気づき嬉しくなり花が咲いたような満面の笑顔で

「はい！！！」

返事をした。

ここに霞にとって世界で３つ目の大切な家族が誕生した瞬間であった。

霞とアリカを見ながら微笑んでいるエスナは心の中で呟く。

（アリカ、幸せにね。）

するといつの間にかナギが側に来ておりエスナに言った。

「お～！霞がプロポーズしやがった！！！やるじゃねぇかー。でも、なんであいつ姫さんのミドルネームを抜いたんだ？」

「ふふ、ナギはまだまだだね。あれはアナルキア・エンテオフュシアという名前の付いた王女アリカは先の処刑でもういない、ここにいるのはただのアリカという女の子しかもうこの世にいないんだという意味よ。優しいわね、彼は。」

エスナがナギに教える。ナギはまた「へぇ～」と言いながら、

「じゃあ、ここにいるのも王女エスナじゃなくただのエスナだな。」

いきなりの言葉にエスナは少し驚く。
ナギはお構いなしに

「んじゃ、結婚しねぇか？俺はあんたが好きだ。あんたが背負ってる罪も後悔も、まだ残ってる責任ってやつも全部一緒に背負ってやるぜ。
どうだ？」

それを聞いたエスナはクスクス笑い

「何か霞につられた感じがするわよ、ナギ。」

言われたナギは少し拗ねた表情をする。
それを見たエスナはますます笑う。

「フフフッ、……でも…ナギらしくていいわね。私は好きかな。」

続けてエスナはナギに笑顔で返事をする。

「ナギ、こんな私でよければ。喜んで受けるわ。」

ナギも笑い

「ああ、よろしくな!?」

ナギはエスナを引っ張り

「ッ!?……ン。」

キスをした。

ここにも一つの幸せが生まれた。

《紅き翼》ｓｉｄｅ

「おーおー、あの2人。見せつけるね~。」

「うむ、めでたい事だ。」

「ふふ、ナギだけでなく霞の恥ずかしい記録も録れたので私としても充分に満足できましたよ。」

「アル、相変わらず趣味が悪いな。」

ラカン、詠春、アル、ガトウが口々に言う。

そこでタカミチが４人に聞いてくる。

「あの……あれは放っておいてはマズいのでは？（汗。」

タカミチの言うアレとは

「霞くんのバカァーーーー！！！！」

ズドドドォォォン！？

「霞……戻ってきたらお仕置きだからね。」

ドガァァァン！？

壊滅している部隊に追い討ち兼八つ当たりをしているなのはとフェイトがいた。

※もうやめてあげて！部隊の人達のライフはもう０だよ！

「「「「……」」」」

それを見た４人は無言になり、クルッと振り返り

「じゃあ帰るかー。酒飲みに行こうぜ～。」

「そうだな。めでたい事もあるのだからたまには良かろう。」

「私もご相伴に預かりますよ。」

「俺もだな。おっと、タバコが切れちまったな。」

4人は帰る。暴れる2名を残して
タカミチは肩を落とす。

「えっ？あれ？……僕があの2人を抑えなきゃダメ……なのかな？
……ッ！？そうだ、クルトがまだいた！」

タカミチはクルトを探す。
周りを見ると……いた。
重装兵の下敷きになって気絶しているクルトが。

「クルトーーー！！」

急いでクルトを発掘するタカミチであった。

余談だが、その後タカミチとクルトが単行本30巻でみられたやり取りをしていた。
……暴れる2人を背に。

「「霞（くん）のバカァァァーーーーーー」」

大戦編終わり

ドナルドはやっちゃったんだ～。～事後承諾～（後書き）

やっちまったな。
反省はしてる。
だが後悔はしていない！！

とりあえずオリ主はアリカをｇｅｔしました。
アリカのアーティファクトは……霧露乾坤網ドナルド作を考えてます。（姫イメージという安直な考え）

他にアリカのイメージに合う宝貝があれば教えてください。

如意羽衣はエヴァに決定してます。

後、霞が太極図を使用した陣はオリジナルです。
書き忘れていましたがスーパー宝貝もドナルド作になっているため、ある程度？の魔改造はされてます。
そちらはいずれお目にかかる……日があるといいな。

こんなもんですか。

次は原作開始までサクサク行かせてもらいます。
途中でもしかしたらドナルドが無茶をやらかす場合があるかも？ですが、それも含め楽しんでもらえたらと思ってます。

では、サラダバー

チュッチュッと契約～♪契約～♪（前書き）

……こんな内容でいいのか？
と思いつつ投稿する自分。

まあ、いいか。

それとアンケートでの皆さんの感想を見て、２の方ではっちゃけたいと思います。
１を希望してくれた方々には誠に申し訳ありませんｍ（＿＿）ｍ

なるべく笑える（今までも笑えたかは謎ですが…）作品を作っていきますので、できればお読み下されればと思います。

では、どうぞ～。

チュッチュッと契約～♪契約～♪

アリカとエスナを助けた霞達とナギ達は一時避難場所にとヘラス帝国のテオの元へ身を寄せた。
道中アリカが霞にべったり引っ付き、それに妬いたなのはとフェイトも引っ付き、３人の感触に嬉しい思いと男共の嫉妬の視線がキツかったのは言うまでもない。
ナギはエスナと桃色空間を作って気にしなかったのは余談である。

そして現在はテオの私室の内の一室にて

「あはは、アリカさん。そろそろ霞くんから離れた方がいいんじゃないかな～？ねぇ、霞くん？」

「そうだね。だけど、なのはも引っ付き過ぎだと思う。ねぇ霞？」

「主らは妾より年上じゃろ？なら下の者に寛容な心を持つがよい。のぅ、霞？」

３人が霞に聞いてくる。
当の霞は

「……（選択肢が全てＢＡＤＥＮＤにしか見えない（泣。））」

苦笑いをして無言を貫く。
周りに視線を向け助けを求めるが

「ガハハハッ、羨ましいね～（グビグビ。」↑酒の肴にして助ける気が皆無なラカン。

「そろそろ近衛殿に会いにいかねばな（グイ。」↑あらぬ方向を見ながら酒を煽る詠春。

「ふぅ。今の私の癒やしはテオドラ殿下だけですね（クイ。」↑ロリ大好き発言をしながら酒を飲む変態（アル）

「タカミチの修行をどうするかな？（フゥー。」↑こっちを見ずにタバコを吹かすガトウ。

「おお、これが噂に聞く修羅場かのぅ。（アレに参戦するのはなかなかの度胸がいるのじゃ。スタイルも欲しい所じゃな。待っておれよ、霞。）（クピクピ。」↑ジュース片手に何やら決意を秘めた顔をするテオドラ。

「エスナ……愛してるぜ。マイスイートハニー。」「ありがとうナギ。私も愛してるわね…ダッ、ダーリン／／…恥ずかしい！？」↑最初っから期待してないバカップル

駄目だ、こいつら！？
と思い最後の常識人だと思う人物に視線を向ける。

「（ビクッ！！？。……（ブンブン。（泣。」↑震えて無言で首を横に振りながら涙目になるタカミチ。

……オワタｏｒｚ

霞が内心で絶望していると3人はその間も口論を熱くさせていた。

「だから霞くんは私の身体は最高だっていっつも言ってくれてるの！！」

「そんなことないよ！！霞は私の胸をいっつも最高だって言ってくれてるんだから！！だから私が最高なんだよ！！」

「ふん、主らの身体よりまだ手付かずの妾の身体の方が霞は嬉しいに決まっている！！大人しく退がればよいじゃろ！！」

3人の舌戦によりナギとアル以外の男性陣がおお！？と色めき立った。

流石にこれ以上はマズいと思った霞は

「それ以上はらめ～！？」

3人に強制転移を施しあてがわれた寝室に飛ばす。

「ハァ、疲れた。」

「しかし、霞。強制転移をしても直ぐにこちらへと戻ってくるのではないですか？」

「いや、飛ばしたのは俺らの寝室。案内された時に、魔法禁止と防音と施錠をしたから俺の許可がないと開錠も開封もできない仕様にしてるし大丈夫。」

アルの質問に答える。

「そうですか、それは残念ですね。もう少しあの修羅場を見ていたかったのですが…。」

「勘弁してくれ。」

「ガハハハッ、いいじゃねぇか。あんな美女3人が嫁さんだ。それぐらいの苦労はつき物だぜ、霞。」

ラカンが笑いながらバンバンと霞の背中を叩きながら言ってくる。
霞もそれもそうだなぁと思っていると

「か～すみ～♪こっちを向くのじゃ～。」

やたらとテンションが高い声に訝しながら顔を向けると

「ッ！？ン～！？」

「ン～♪」

パァァッ！！

テオドラがキスをしてきた。そして光が2人を包む。

「おほっ♪」

「おや。」

「なんと……。」

「フゥー。難儀だな、霞。」

「うわー…。」

「あん？なんだぁ？」

「あら？あらあら。」

ラカン、アル、詠春、ガトウ、タカミチ、ナギ、エスナがそれぞれ声をあげる。

なぜならそれは仮契約の光。

霞は慌ててテオドラを離し

「テオ！何て事を！？」

「にゃ～、わりゃわもカシュミとイチャイチャすりゅのにゃ～。」

「って、酒臭っ！！？誰だよ、テオに酒飲ませたのは！」

テオドラが霞に顔を近付けると口から酒の匂いが立ち込め、霞は叫ぶ。

それについて全員が知らないと首を振る。

テオドラは好奇心で酒を飲み、飲みやすいものであったためグビグビ飲み始め、タガが外れこうなったのだ。

霞は酒の事より仮契約の方が問題で頭を抱えた。

そんな霞を見て疑問に思ったアルが聞こうとしたが、テオドラに異変が起きる。

「うぅ～、体が熱いのじゃ～。」

そう言うテオドラの体が光り始める。

その光は徐々に大きくなる。

「これは!?霞、これは大丈夫なのか!!」

「ああ～、大丈夫だと思う。すぐにわかるよ。」

詠春の慌てた声に、どこか投げやり気味に答える霞。
そして光が一際強く光り部屋にいる全員が眼を閉じる。
……光りが収まり全員が眼を開けテオドラの様子を確認してみたら、そこには

「そっ、そんな!!」
アルがショックを受ける。

「これはまた面妖な。」驚く詠春。

「おぉ～、あのジャリがねぇ～。」感嘆するラカン。

「霞に関する事はもう驚かんよ。」諦めているガトウ。

「わぁ～、綺麗ですね。師匠。」感動するタカミチ。

「へぇ～、なかなか美人じゃねぇか。まっ、エスナの方がもっと美人だな。」さり気なくノロケるナギ。

「／／／もうナギったら♪」ナギの言葉に嬉しがるエスナ。

当のテオドラは

「んん、うむぅ、何じゃ～?体が急に熱くなったと思えば……はれ?」

意識を取り戻し起き上がると自分の体に違和感を感じ声をあげる。
テオドラは
周りを見る
霞を見る
下を見る
胸を見る
立ち上がる
腕を伸ばす
信じられないような顔をして、もう一度周りを見る
全員が首を縦に振る
そして

「妾も霞の嫁じゃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜♪」

霞の嫁宣言の鬨の声を上げる。

「「「いや、違うだろ（ビシッ。」」」

全員がそれに突っ込んだ。
すると
バァァァン

「「「霞（くん）どういうこと（なの）（なのじゃ）！！！」」」
来れない筈の3人がドアを蹴破り現れた。
それに霞は驚いたがガトウが冷静に告げる。

「………ドアを壊すことは出来たんじゃないか？」

「……あっ。」

「ということは、貴方と仮契約ないしは本契約すると不老長寿になると？」

「まあ簡単に言えばな。……ちなみにアルは理解してるから言うけど今のテオなら旧世界に行ける（ボソッ。」

その言葉にアルは心底驚愕した。

「そんなバカな！？」

「俺も恐らくとしか言えんよ。俺となのはとフェイトは向こう出身だからな。……黙っててな、これ。」

霞の言葉にアルは考え、結局は頷くしかなかった。
なのはとフェイトは理解しているから先のアルとの会話を察する。
他の面子はあまり聞こえなかったので気にしないようにした。

「それならテオドラ殿下の身体が成長したのは？」

アルが他の質問に切り替えた。
が、霞はこればかりはわからなかったようで首を傾げ言う。

「いや、ホントにこれはわからん。俺となのはとフェイトは肉体年齢操作が出来るが、これは俺達3人だけの希少能力だからな。テオも戻ろうとイメージしても戻れんだろう？」

「うむ、言われた通りにやってみたが何も変化が起こる兆しはないの。」

テオドラは言う。

霞はう～んと考え、閃いた。

「あった。元に戻る方法が。」

霞の言葉に全員が視線を向ける。

「仮契約を反古にしたら「嫌じゃ」……えぇ～。」

ナイスな提案を浮かべ告げた瞬間、テオドラ本人が却下してきた。

不満を垂れる霞だが聞く耳を持たないテオドラ。

そこでナギが

「そういやよ、テオドラのアーティファクトって何なんだ？」

と聞く。他の面子も興味を示す。

カードはテオドラの成長した姿が記されていたので、主は霞なのである。

テオドラも初めてのアーティファクトに興味を示したのでカードを見て

「これは……布…？時折、霞が使う奴に似ているのぅ。」

その言葉に霞は思い当たった。
テオドラはアーティファクトを出す。

「アデアット。」

するとテオドラの腕に掛かるように羽衣が顕現した。
アルは初めて見るアーティファクトに興味を覚え

「霞、これは？羽衣のようですが……。何か分かりますか？」

聞いてくるので霞は頷きながら答える。

「それは俺が持ってる傾世元ジョウの姉妹宝具《紫綬羽衣》だな。効果は……なんだけど……。」

霞は基本的な特性を教えるが最後に何か言いたげな雰囲気を出す。
それにどうしたのか？と疑問を持つ面々。なのはとフェイトは分かっているので、苦笑い。
迷いながら霞は告げる。

「たぶん、それは強化されて変な特殊能力が絶対ある。なのはとフェイトのアーティファクトもそうだったし。」

それを聞いたテオドラはそうなのか？となのはとフェイトに聞く。

「うん。私の場合は広域殲滅が簡単に出来るようになってたよ。言葉じゃ説明しにくいから、今度別荘に行って見せてあげるね。」

なのはに続いてフェイトも

「私のはこんな感じに《アデアット》……ただの柄が…（ブゥン）…レーザーみたいな剣が出るんだ。それにこれは反対側からも出るし剣の形状を変化できたりするよ。後はこれに雷や風とかの属性付加も出来る。もう一つはこの剣状の部分を魔法の射手みたいに飛ばせるね。」

2人の答えにテオドラは目を輝かす。
他のメンバーも珍しいのか感嘆する。
そこでラカンが

「霞のアーティファクトは何なんだ?嬢ちゃん達みたいにどうせ何か特殊なんだろ?」

と聞いてみたが霞はふてくされる。なのはとフェイトはあぁ～、聞いちゃった～みたいな顔をした。

「俺は……ない。」

その答えが意外だったのか全員が驚く。
エスナが更に聞く。

「無いということはアーティファクトが出なかった……ということなんですか?」

「いや……なんでか従者になれない。だから、テオとのカードもテオが従者になっただろ?これは体質みたいなもんらしい。」

実際はドナルドが悪戯したためなのだ。
霞の契約の質を弄くり回したせいで変質し霞と契約するものは絶対

に従者となってしまう仕様になったのだ。これをドナルドが気づいた時には下手に治せないようになっていたので、諦めて放置。ただ、これは治せないだけで後付けの何かはできるという何ともまあドナルド的には都合の良い状態であるのだ。
これが真相で霞はこれを知らない。

ナギ達は少し不憫そうに見る。
そこでテオドラは思い出したように言ってきた……爆弾発言を

「それはそうと霞！どうじゃ？今の妾は！？そこの3人に負けず劣らずのボディじゃろ？これで約束通り、妾も霞の嫁になれるじゃろ～。」

それを聞き霞は「はっ？」という訳が分からない表情。
なのはとフェイトとアリカは瞳のハイライトが消え始め霞を見る。
他メンバーは面白い事になってきたと再び酒を飲み始め肴として騒ぎ始める。

「いや、待て。テオ。それはいつ言った？俺が約束したのか？」

霞は慌てて聞くと、テオドラは頬を膨らませ

「むっ、確かに約束したのじゃ。なのはとフェイトも証人じゃぞ？」

テオドラの言葉に2人は

「「……あっ！？」」

少し考え気付いたような声をあげる。
霞は「マジで？」というような表情、アリカは「説明せよ」という

表情、テオドラはどや顔。
なのはが答える。
「霞くん、テオが言ってるのって…たぶん、お城でお世話になって2日目の時の……。」
続いてフェイトが
「うん。テオが夫婦の事について聞いてきた時に教えてあげたら……。」
霞はそれで思い出した。
「もしかして、あの「じゃあ、成長したら霞の嫁にしてもらうのじゃ!?」っていうやつか?」
「「たぶん…。」」
そして3人はテオドラに顔を向けると
「それじゃ。あの時の霞は笑いながらいいぞ~と答え、なのはとフェイトも笑いながら許可したのじゃ。じゃから妾は全く問題ないのじゃ。……フフン、どうじゃアリカ?」
どや顔を続けながらアリカに宣戦布告をするテオドラ。
アリカはプルプル震え……
「霞!」

「へぇ！？ッン～～～！！！」

「ッン…チュルッ。」

「「「ああああ～～」」」

パァァッ！！

アリカは我慢がならなかったのか霞に飛びつきキスをする……ディープな方を。

そうしたらテオドラが酔った時に張った仮契約の魔法陣がまだ生きていたため、契約が執行された。

「ふふ、アリカも乙女ね～、可愛いわ。」

「姫さんっぽいな。」

「ふぅ、私の癒やしがなくなってしまいましたね～。」

「羨ましいね～、あの野郎。」

「霞は日本国籍だろ？一夫多妻はマズいんじゃないか？」

「霞ならなんとかするだろ？なんでもアリだし。……タバコが切れた、タカミチ買ってきてくれないか？」

「師匠吸いすぎですよ。霞さん、大変だろうな～。」

紅き翼の面子は酒を飲みながら楽しく騒いだ。

おまけ

アリカのアーティファクト

霧露乾坤網ドナルド作

アリカの意志により水を氷に変えたり出来る。０度～ほぼ絶対零度までの温度変化も可能。

オート防御有り。

防御は特一級。特に水属性は無効化、火属性はナギクラスの《燃える天空》までは無効化できる

飛翔能力有り。

アリカのカードにはまだ……

テオドラのアーティファクト

紫綬羽衣ドナルド作

鱗粉を発生させる。

テオドラの意志により鱗粉の性質は自在に変化可能。無味無臭にも出来る。また味方、敵と識別も出来る

飛翔能力有り。

防御も特一級、ナギの《千の雷》やラカンインパクトを受けても無傷で済む。弱点の熱も克服済み

羽衣から糸が出せる、これにより糸使いの知識がアーティファクト展開時に浮かび上がる。後は術者の技量次第。

テオドラのカードにも実はまだ……。

チュッチュッと契約〜♪契約〜♪（後書き）

霞と仮契約ないしは本契約するとバグ候補になり、なのはとフェイトもしくは霞の教導によりバグに変貌する。
それが、霞ハーレムクオリティー

……やり過ぎ？
はんっ！？他の小説のオリ主様に比べれば霞達なんて弱い方なんですよ！

……他のオリ主も星一つぐらいは楽に壊せますよね？

テオが不憫なの～（前書き）

サクサク逝くよ～

テオが不憫なの～

「ふぅ～、着いたな。」

「久しぶりの日本だね。」

「うん。なんだか帰ってきたって感じがする。」

「ほぅ。ここが霞達の故郷、日本か。」

霞、なのは、フェイト、アリカがそれぞれの思いを口にする。
霞達は今、京都に来ていた。
何故ここに来たかというと

2日前

「霞～、ナギ達から連絡があったぞ～！」
テオドラが扉を開けながら大声でいう。
霞はあてがわれた寝室でゴロゴロとニートを満喫していた。

「お～、何かあったのか？」

ナギ達はあの騒ぎから1日経って城を出た。封印されているアスナを助けに行くと言い…。霞達も一緒に行こうかと考えたが、ナギ達

に任せることにして、困った事があれば連絡をくれと言っておいたのだ。
テオドラは扉を閉め、霞が寝転がっているベッドへと向かいうつ伏せに寝ていた霞の上に寝転がり、霞の顔に自分の顔をすり寄せ満足気に微笑む。

「テオ、早く内容を教えてくれ。後、背中に当たってる胸を更に押し付けない。理性が飛ぶから。」

自制心を働かせながらテオドラに自分の要求を言うが

「当てておるのじゃ。どうじゃ？襲いたくなったか？……妾は別に構わんぞ／／むしろ、襲って欲しいのじゃ！」

霞限定での痴女発言。しかし、なんとか霞は耐え再度聞く。
テオドラは残念そうな表情を浮かべ体を起こし……馬乗りのまま伝える。

「『今から俺達は旧世界の京都に行くけど、霞達もどうだ？』じゃと。じゃから霞早く用意をするぞ！？」

伝え終えたテオドラが霞を急かす。

「ん～、そうだな。……行ってみるか。なのは達もＯＫするだろうけど、一応聞かなきゃな。」

「そういえばなのはとフェイトとアリカの姿が見えぬが、出掛けておるのか？」

周りを見渡しながら聞くテオドラに、苦笑しながら答える。

「いや、別荘に籠もってる。アリカが自分の身を守るぐらいには強くなりたいって言ってな、なのはとフェイトに修行をつけてくれって頼んだら2人も了解して今朝から早速やってるよ。」

その言葉にテオドラも考えだしブツブツ呟き出した。

「妾もやはり強くなったほうがいいのじゃろかの？しかし、あんまりやりすぎると霞に……いや、妻としてはやはり……。」

そんなテオドラを見て霞は

「なんなら俺が修行に付き合ってもいいぞ？まあ、甘くしたりはしないけど…。むしろ厳しくするぞ～。どうする？」

最初の方で輝いた顔をしたが厳しいと聞くと嫌そうな顔をするテオドラ。

どれくらい厳しいか霞に聞いてみる。

「そうだな～。……まずは大自然地域でサバイバルを5年して気配察知と気配遮断を会得してもらって……（略）、ってな感じの計１００年の訓練かな。どうよ？」

聞いただけで涙目になりながら無理と首を振るテオドラ。

そんなテオドラを見て激しく萌えた霞は……

「テオーーー！！」

「ひゃあああ～。」

我慢できずに押し倒した。

「か、か、霞!?いきなり過ぎじゃ!!」

「……いただきます!」

「は、初めてじゃから優しく…ッン～～!?」

何かを言うテオドラの口を自分の口で塞ぐ霞。
その間も右手はテオドラの胸を揉み左手は服を脱がしていく。

「ッン、ハァ、かすみ～……。」

「テオ……いいか?」

2人は見つめ合い、テオドラは潤んだ目をしつつコクンと頷き……
……

「……何がいいのかな～?」

なのはの低い声で石化した。

「で、言い訳ぐらいは聞くよ霞くん?」

額に青筋を浮かべ笑顔で告げるなのは。

後ろには同じ状態のフェイトとアリカ。
霞は現在、正座しながらうなだれてます。
テオドラは衣服を整え、ベッドでちょこんと座り待機。
3人は霞だけをロックオン。
霞は思考を加速しどうすればお仕置きを回避すればいいか考えた。
……そして至った解答は

「なのは達が悪い！？」

これだった。
続けて

「考えてもみなさい。俺はもう随分前からご無沙汰だった。それなのに、なのはとフェイトとアリカとテオという魅力溢れまくった女性に囲まれ毎日溜まる一方！さらに体を密着させ、誘ってるのか？と思わせるような行動をする！そしてトドメにさっきのテオの襲って発言と萌える表情！！……漢なら……ヤってしまっても仕方ないじゃないかぁぁーーー！？」

この男は要するに開き直って逆ギレするという行動に出た。
なのは達とテオドラはあまりの発言に白け「そんな／／魅力溢れるなんて～／／／♪」「霞／／妾はいつでも良いのじゃぞ／／」「私も／／いつでもいいよ、霞／／」「済まぬな、霞／／そうとわかってれいればあのような行動はしなかったのじゃ／／じゃが、襲ってくれてもいいというのは……ほんとじゃぞ／／」……ておらず、むしろ照れながら嬉しがっていた。霞は表情には「わかってくれたか！」という感じを醸し出しているが、内心では「勝った！」と思った。
そしてその勢いで

「みんな～～（嬉泣。」

「「「「霞(くん)！！」」」」

霞はなのは達の方へダイビング。

なのは達はそれを受け入れ……

「「「「言いたい事はそれだけ（かな）（か）？」」」」

「……霞、流石に逆ギレはどうかと思うぞ。」

なかった。

ダイビングをしてきた霞の頭をなのはは片手で鷲掴みながら

「少し……頭…冷やそうか（ニヤリ。」

魔王な台詞を言う。

霞は冷や汗をダラダラ流しながら

「あの……優しくしてください。」

懇願する。

勿論、３人は

「「「む☆り☆♪」」」

飛びっきりの笑顔で返答した。

「やれやれじゃのぅ。」

それを見つつ部屋を出て侍女に声を掛け、お茶の準備をするように言うテオドラ。

直後

「ギャァーーーーーーーーー！？」

霞の叫びが防音越しでもはっきりと聞こえてきた。

次の日の朝

霞は昨日のナギ達の伝言をなのは達に伝え旅行の準備をした。

艶やかな肌をしながらも何やら疲れ果てている女性陣は今も準備に勤しむ。

霞は……ボロボロながらもご機嫌だった。何故なら、基本的に霞に甘い女性陣がお仕置きの後にちゃんと霞の性欲を発散させて上げたのだ。

……もちろん初めてのアリカとテオドラを霞は堪能しました。……

2人が気絶するまで。

……もう何年も体を重ね合ったなのはとフェイトもが気絶するまで。
まあ、それは置いといて

「霞く～ん、準備できたよ～……うぅ、腰が痛いよぅ。」

「霞、私も終わったよ。……なのはも痛いんだ…私も同じ。」

「か、霞。妾も……終わった……のじゃ。……まだ違和感が…。」

なのはとフェイトとアリカが準備完了と伝えにきた。……昨日の疲れと共に。
霞はやりすぎたか?と頬を掻きながら乾いた笑いをするが、気にしないようにして

「よし、行くか～……と言いたいけど、テオは?」

まだ1人残っているので、3人に聞いてみたが3人共が首を横に振る。
霞ははて?と首を傾げて不思議に思っていると

「父上の!!バカーーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!!」

テオドラの叫びが城内に響き渡った。

あの叫びの後、テオドラが戻ってきて、涙ながらに説明してきた。
霞達と旅行に行くため一応父に言っておこうと思い執務室に行き、

その旨を伝えると却下された。
そして霞達の事は信用できるし護衛としては申し分ないが、テオドラには王女としての仕事があるから駄目、という至極真っ当な正論をぶつけてきた。
そこからはもう普通の家庭でも見られる親娘喧嘩に発展。
結局、テオドラが言い負かされ先刻の叫びを上げた。というわけだ。
それを聞いた霞達は国王の言い分も尤もだなぁと思いながら、「そういやテオって王女様だった」という当たり前の事実も思い出した。
どうしようもないので慰め落ち着かせ、霞が今度2人っきりで旅行に行く約束をして、やっと納得してくれたのであった。
なのは達3人も流石に気の毒だったため異論は挟まなかった。
そうしてテオドラを置いて霞達4人は旧世界の京都に向かい出発し、現在にまで至ったのである。

おまけ

「父上、妾は霞の嫁になるので城を出ていくのじゃ！」

「ならぬ！……おまえが出ていけば……儂は誰を愛でればよいのだ！？」

「知らぬのじゃ！姉様方にでもすればいいではないか。」

「あやつらは儂の親愛を拒むのだぞ！後はおまえしかいないのだ！？」

「妾もいらんわ！！ぐぬぬぬぬっ。」

「諦めろとは言わん。霞にこの城で暮らして「そうじゃ！」…うん？」

「霞に相談してどうにかしてもらうのじゃ！？待っとれよ、父上！」

「……行きおったか。……あやつももう子供ではないのか。……というか何故いきなり成長しているんだ？……考えるまでもなく原因は霞だろうな…一発殴るか？」

テオが不憫なの～（後書き）

昨日の４時頃まで執筆していた時はマジで焦った。
執筆保存ができなくなり、さらに自動ログインができなかったためログイン入力画面に勝手にいったんですが、パスワードを忘れたので再発行のＵＲＬを貰ったけど、接続できず。

まさか管理サイトさんから強制削除でも食らったかと勘違いしちゃいました。

テオの父親の口調とか性格は完全に作者の捏造になりますので、ご容赦を～

それではまた～

バグキャラによるバグが発生しました（前書き）

まだまだ～

京都駅ビルに着いた霞達は迎えがくるまで駅ビルの中にある喫茶店で休んでいた。
京都駅に着いてから喫茶店に入るまで、周りの視線は凄かった。男は見惚れ、女は羨望の視線を向ける。
そして唯一の男に目を向けると殺意の視線と落胆の気配がする。
女性陣は気にしていなかったが、霞は内心で
（あ～……やっぱり3人に見合った格好をした方がいいかな～）
と考えていた。
それに嫁達が綺麗で自分が冴えないとナンパをする奴らが絶えないしウザいので少しでも見栄えをよくすればナンパが減るかな?とも以前から常々思っていたのだ。
そこで霞は一代決心をし

『ナギ～、聞こえる～?』

念話をし始めた。

『ん?霞か、何だ～?』

『迎えはもうすぐ来るのか?』

『いや、意外にお前らの到着が早かったから、さっき詠春が急いで使いを出してたぞ。どうした?』

ナギの返事を聞き、う～んと考え

『……アルとガトウに今すぐ転移させるから準備するように言って。』

『お？おお、ちょっと待てよ……いいってよ。何かあったのか？』

『いや、俺が1時間ぐらいかな？離れるから、その間のなのは達の虫除けをな。』

『はあ？まあいいけどよ。なるべく早くしろよ～。』

『りょ～か～い。』

念話を切り、周囲に認識-妨害-の結界を瞬時に張る。

なのは達はいきなりの霞の行動に少し驚き聞いてくる。

「霞くん、どうしたの？」

「何かあったの？」

「いきなり結界を張るとは、何か問題でも起きたか？」

「いやちょっとな…《転移》。」

霞がアルとガトウの気配を掴み、転移させる。

陣が2つ浮かび上がり、アルとガトウが現れる。

2人に霞は

「ナギから少しだけ聞いてるだろ？頼んだぞ～。」

告げ席を立ち、店を出る。
アルとガトウはそれに了解の返事をして席に座る。
女性陣は急な展開に混乱したまま。
アリカがいち早く我に返りアルとガトウに聞いてくる。

「霞はいきなりどうしたのじゃ？」

それに合わせなのはとフェイトも視線を向け問うてくる。
アルはいつも通りに

「霞にも思う事があったということですよ。」

はぐらかす感じで言う。ガトウも

「まあ3人は大事に想われているって事だ。」

煙草を加えながらクックッと笑う。
3人はその答えに？となるが、霞に大事に想われていると教えられ嬉しくなった。

とあるｓｉｄｅ

（今日は暇ね～。）

美容院を経営する若き女店主は来客が少なく今は客も捌け、見習い

や他の店員をお昼休憩にいかせ店内で1人となっていた。
そこへ
ガチャッ、チリ～ン

「すいませ～ん。」

前髪が長く目元が隠れ、しかも丸い眼鏡を掛けた地味な青年、霞が入ってきた。
女店主は
（うわぁ、初めて見たわね。……こんな格好をした人。）
霞の姿を見て思ったが、表情にはおくびにも出さず営業スマイルで歓迎する。

「いらっしゃいませ。本日はカットでよろしいですか?」

「はい。少しでも見栄えがよく出来たらなと思いまして。……あの、あまり髪型とかわからないんでお任せしたいんですが、大丈夫ですか?」

「大丈夫ですよ。では、こちらに…。」

霞を席まで案内しながら

（好きな子にアピールしたいのかもね。ふふ、青春ね～。）

そう思いながら霞が席に座るのを見て髪を濡らしていく。

……ほんの少しだけ時間が進み

（……／／／こ、これは…／／）

女店主は霞の意外にサラサラした髪に驚きながら、どうカットしようか考え前髪を掻き分けると……。

そこには中世的な顔立ちの美青年がいた。女店主が今まで相手をした男達など比較にならないぐらいの。

その顔に見惚れ一瞬思考が飛ぶ。

霞はちょっとだけ首を傾げ尋ねてくる。

その仕草が女店主の胸にキュンとくるが今は仕事中だとプロ根性を捻り出し、過去に例をみないほど仕事に集中する。

この青年にあった髪型を思いつく限りリストアップしイメージする。

（イメージするのは最高の髪型。

理想の顔に理想の髪型。

常に最高を想像する。

両手には長年愛用してきた信頼できる相棒がいる。

ならば！？

自分にできない筈がない！！！

自分は今、最高に至る事ができる！

否！！既に至っている！

感じなさい！！我が美容の極致を！

奥義！《女神の指先（ゴッデス・フィンガー）》）

女店主の指先は軽やかにそして滑らかに、時には大胆に霞の髪をカットしていく。

みるみるうちに霞の髪は短くなるが、それは決して短すぎず長すぎず、霞に似合った髪型になっていく。

はっきり言ってただのカットなんだが。

カットを終えシャンプーも終え、ドライヤーで髪を乾かしセットはどうするか？聞いてきたが、ワックス等をつけるのが嫌いな霞はやんわりと断り、これでいいですと答える。
女店主は自分のカットに満足しドライヤーを掛け終えた霞を見て……真っ赤になった。
そこらのモデルの男性なぞ適わない美青年…いや髪を切り少し幼く見え美少年と言っても差し支えない霞がここに爆誕したのだ。
霞は終わった事がわかり、

「ありがとうございました。おかげでサッパリとした感じで気持ちいいです。」

「い、いえ／／こちらも言われた通りにしただけですので！お気に召されたなら幸いです！」

霞は微笑み再度お礼を言う。

「これで少しは見栄えがよくなったかな。」

と呟く霞。
女店主は思う。
（もうさいっっっこうです！！）
と。
霞はお金を払おうとしたが

「お代は結構です！！いい仕事をさせて貰いましたので！？」

と女店主が遮る。
霞は戸惑う。
続けて女店主は

「あっ、あの／／できればけ、けい、／／携帯ばｎ「時間がヤバい！？あの！妻を待たせているので、これで。お釣りは入りませんので、ありがとうございました！？」……へっ？」

霞は慌てて言い、一万円札を置き店を出て行った。
女店主は一万円札を見ながら

（……妻？妻帯者？……そうよねｏｒｚ。あんな良い男に彼女がいないわけがない……さようなら私の一目惚れ（泣）……いや、まだ奥さんが釣り合っていなかったらチャンスがあるかも！？）

最初の印象なぞ彼方に捨て霞の事を諦めきれない独身、女店主。
余談だが、この後に店の見習いの子が凄い美男美女がいたと教えてくれ携帯写メを見せてきた時に崩れ落ちた女店主がしばらくの間、仕事に没頭した。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

霞は美容院を出た後、直ぐに喫茶店へと戻りなのは達の元へ戻った。
霞が店内に入った時に視線が集まりどよめいたのは言うまでもない。
なのは達は霞の声が聞こえ、そちらへと視線を向け霞を視界に入れた瞬間

「「「なっ！？」」」

驚愕。アルとガトウは

「おや、見違えましたね。」

「似合うじゃないか、霞。」

普通の反応。

だが、なのは達はそれどころではない。

自分達だけの秘密にしておいて必死に周りに隠していた霞の素顔が、白日の下に晒されたのだ。

慌ててなのは達は聞く。

すると霞は理由を教えてくれた。

その理由を聞いた3人は怒るに怒れない。

なぜなら、自分達を思っての行動だったから。

しかし、胸にもやもやとしたものが溜まってしまうのは乙女の複雑な心だ。

（うぅ～、周りの女の人の視線が霞くんに～。絶対に女の人が寄りついちゃうよ～。……よし、決めた！）

（霞のバカァ。もっと自分の事を自覚してよ。周りの女の人が見惚れてるよ、あれは。……霞、格好いいし…えへへ、そんな人が私の旦那様……／／。…絶対に女の人なんか寄せつけない！）

（えぇい、霞め。あの時、しっかりと厳命しておいたのに！周りの女の視線が不快じゃ。しかし……（ポッ／／。相変わらず綺麗じゃの／／流石じゃ。……霞には絶対に近寄らせん！）

なのは、フェイト、アリカはそれぞれ思う。
アルは
（これは愉しくなってきましたね♪）
楽しんでいた。
ガトウは
（霞が無事でいられるのは……無理だろうな。）
霞の冥福を祈った。
当の本人は店員にブレンドを頼み
「はぁ～、コーヒーうめぇ～。」
呑気に寛いでいた。

詠春の迎えがきて店を出ようとした時、女性3人組が霞の周りを囲んで周囲を威嚇しながら歩くのは当たり前の事であった。

詠春の迎えに案内された霞達一行はナギ達と合流し観光を楽しんだ。
ナギ達が最初に霞を見た時、誰かわからなかったのは言うまでもない。

霞となのはとフェイトはアスナと初めて会ったのでお互いに自己紹介をした。
アスナはジ～ッと3人を見た後、ピタッとくっついてきた。
……霞に。
いきなりの行動に少し驚いた霞だが、すぐに気にしなくなりアスナの頭をワシャワシャと撫でてあげ手を繋いであげて一緒に観光をした。
流石に嫁の3人組は子供には嫉妬しなかったようです。そうして観光を楽しんだ霞達は夜になると詠春の屋敷でどんちゃん騒ぎの宴会を繰り広げる。
宴会を始めた1時間と少しぐらいに1人の巫女が詠春の元へ小走りで近寄り、耳打ちで何かを報告すると詠春が

「何だと!?」

驚き叫ぶ。
騒いでいた面々は何事だ?と思いそっちを向く。
詠春が深刻な面持ちで

「済まないが、皆の力を貸してくれないか。近くにある封印の祭壇でふうiヤロー共!!出陣じゃーー!?」「よっしゃぁー」」「突撃ーー!」「「ウオォォーー!!!」……はっ?」

告げた後、事情を説明しようとしたら酔ってハイテンションな霞とナギとラカンが障子を突き破って出て行った。……全く反対の方向へ向かって…。
それを見ていた比較的理性の残っていた面々はやれやれと溜め息を吐きながら外へ出て行った。
詠春は思った。

（大丈夫なのか？あれで……。）

そう思いながら封印の祭壇へ急ごうと外へ出ようとするとなのはとエスナが残っているのに気づき聞く。

「御二人は残るので？」

「はい。私はあまり戦闘では役に立たないので残ります。」

「私は万一に備えて屋敷の方で結界を張り待機してます。」

と言うので頷き、急いで出て行った。

詠春が祭壇に着くと飛騨の大鬼神リョウメンスクナノカミが解放されつつあった。

仲間の元へたどり着いた詠春は

「……あの3バカは……どこに？（ブルブル。」

怒りを抑えながら問う。

全員がそれを聞き答える。

「「「来てない」」」

詠春は頭を抱え叫ぶ。

「あいつらを信じた私が馬鹿だったーー！！！あのバグキャラ共はいつもいつも人の言うことを……（略）！！」

怒り狂う詠春を周りの皆が宥めていた時、少し離れた所からいきなり

ガガァァン！

爆音が聞こえた。

次いでリョウメンスクナノカミにも劣らない邪気が漂い始める。

それを感じた面々は思った。

（（（ああ、あいつらの仕業だ））））

と。

詠春は……

「アハハハッハハハハハハハ……（バタンッ。」

倒れた。

バグキャラによるバグが発生しました（後書き）

作中に出てきた美容師さんの件は飛ばしても良かったんですが、書いてみました。

駄文ですいません
m（＿＿）m

というか何がしかの技名って考えるのが難しいですね～。

鵺なんですが、いい感じの強い妖怪などがあまり思いつかずやむなく鵺を出しました。
流石に大獄丸や酒呑童子、九尾、大天狗などは無理があるかなぁと思ったので。
……鵺の代わりに『うしおととら』のとらをバグ共によるバグ発生で登場を考えましたが自重しました。

とりあえず次は……無双します。

それではまた～。

アリカ無双!?レディーゴォォーー!!!（前書き）

倍プッシュだ！
アカギー!?

アリカ無双!?レディーゴォォーー!!!

場面が変わり、3バカは酔った勢いのまま山を爆走しているとき、ナギが何かに気づき2人に声を掛ける。

「ウィ～、ヒック。おい、えーしゅんが言ってたのってアレじゃねぇかぁ？ヒック。」

ナギの言葉にそちらを向くと

小さな祠があり扉にお札が張ってあった。それを見た2人も

「きっとアレだ。ヒック。えーしゅんが言っていたふーいんってのは。ヒック。」

「おう、おれサマがいっちょ吹き飛ばししてやるぜ。ウィ～、ヒック。」

勘違いをしている3バカを止める者はこの場にはいない。

正気の者がいたなら慌てて止めただろう。何故なら、そのお札からはかなり強い力を感じたのだから。だが……

「うっしゃ、イクゼ。ラカァァン……ウゲェェェ。」

「「ギャハハハハ」」

ラカンは自身の最強の技を周囲などお構いなしに放とうとしたが、

走り回ったせいで酔いが急激に回り吐いた。
……祠に。
すると祠から強い力が迸り始めたが

「ゲロゲロゲロゲロ。」

「「アハハハハハハッ」」

酔っ払い共は自重しない。

そして……

ズガガァァン！！

封印は解かれた。
ラカンのゲロにより……。
解かれた際の力の余波により3人は吹き飛んでいった。丁度、本来の祭壇の方へと。
吹き飛んでいく3人は

「「「ゲェ～～」」」

クルクルと回ったせいで更に酔いが回りゲロを撒き散らしながら飛んでいた。

「おや？……あれは。」

詠春がストレスにより倒れた時、アルが何かが飛んでくるのに気づき見上げる。
それは言わずもがな……

「……あれは勘弁してほしいですね。」

そう言いながら飛んでくる3バカの少し前に重力魔法を展開する。
そうなるともちろん

「「「うげっ」」」

落ちるのは当たり前。
下は湖。

バシャーーン!!

当然、湖に落ちた。
それを見ていた周りはアルを少し非難するが

「吐瀉物を撒き散らしていたので。」

というと打って変わり褒め称えた。
当の3バカはプカプカと仲良く気絶しながら浮いていた。
すると3バカと同じ方向から強大な気配が近付いてくる。
倒れていた詠春もその気配に気づき瞬時に警戒態勢に入り構える。
そして

「ギュァアアア!」

現れた。
詠春はそれを見て驚愕し叫ぶ
「あれは……まさか鵺か！？」
封印されしものは千年前の平安京にて猛威を奮い人々を恐怖に陥れた伝説の妖怪、鵺であった。
それを聞き詠春、アル、ガトウは考える。
リョウメンスクナノカミ、鵺……先にどちらを始末すればいいかを。
頼みのバグキャラ達はフェイトが救出をしたが目を回している。何故かついて来たアスナとアリカはも3バカの介抱をしている。
はっきり言ってピンチであった。
3人はどちらかを1人が抑える一方でもう片方を残った面々で片付けるという選択を選んだ。
「詠春、あの鵺を少しの間抑えれますか?その間に私とガトウ、フェイトがリョウメンスクナノカミを片付けますので。」
その言葉に詠春は頷こうとすると予想外な人物が待ったの声を掛けた。
「アルビレオよ。少し待て。妾がリョウメンスクナノカミをやろう。」
アリカであった。
アリカの言葉に詠春とガトウ、そしてアルも驚く。
「アリカ様、流石にそれは無理なのでは。」

「そうです。あれは大鬼神と呼ばれる格の違う鬼です。危険どころか命がなくなります！」

「それにアリカ様はまだ戦闘はキツいでしょう、お下がり下さい。」

アル、詠春、ガトウが口々に言う。

アリカはそれを聞き、口を開く。

「主らの心配はありがたい。だがの、妾の師匠の内の1人がアレを倒してこいと言うのでな。」

そのアリカの言葉を聞き師匠の1人を考え、直ぐに理解する。霞は現在気絶中。なのはは屋敷で待機中。なら最後に残るは……

「フェイト…ですか。」

アルの呟きにアリカは首を縦に振る。

詠春とガトウは驚く。霞メンバーの中で尤も常識的な人物がそんな無茶を言うとは流石に信じられなかったようだ。

アリカは続けて言う。

「フェイトが言うにはアレぐらいなら今の妾でも大丈夫らしいので、ここで実戦経験を積んでこいとのお達しじゃ。できるならもう一方も同時に相手をしてみろ、ともな。」

3人は更に唖然とする。

あの2体をできるなら同時に相手をしろという無茶ぶりに。

アリカはそれに構わず

「じゃから下がっておれ。流石に危険だと感じたなら助けてくれるらしいしの。《アデアット》。」

そう言いながらアーティファクトを顕現しプカプカと浮かび始める。
周りには6つ程の水球を浮かべ。

「さて、陽神　アリカとしての初陣じゃ。……それに勝てば霞を1日独占できる権利が貰えるのでな。悪いのじゃが……逝ってもらう。」

自分の欲望だだ漏れの口上を挙げ2体と対峙する。

「フェイト殿！どういうつもりか！？」
「俺も聞きたいね。本当に大丈夫なのか？」

「……。」

詠春とガトウがフェイトに詰め寄る。
アルは戦いを見つめ続ける。
当のフェイトは霞に膝枕をしつつアスナを隣に座らせ頭を撫でてご満悦状態であった。
その状態でフェイトは答える。

「詠春、ガトウ。アリカは大丈夫だよ。あれぐらいなら意外に簡単に勝てるはずだよ。場所もいいしね。それぐらいアリカは頑張ったから。」

「……フェイト。アリカ様はどれぐらい強くなったのですか？」

戦闘を見ながらアルが聞く。
フェイトは考え……驚きの発言をする。

「ん～……ナギといい勝負するんじゃないかな。たぶん、ほぼ互角だよ。」

「なるほど……それで……。」

アルは納得した。
詠春とガトウは目が点状態。
ナギとほぼ互角ということはアリカもバグキャラ認定してもおかしくないからだ。
2人はそこでアルが何故納得したか疑問に思い、アルを見ると目線で「見てみなさい」と言ってきたので戦闘を見てみると

「「なっ!!?」」

驚愕した。

アリカは鵺の雷を意に介さず自動防御で防ぎ、リョウメンスクナノカミに向かい手を振る。

「水よ。」

呟く。

すると湖の水がいきなりスクナに襲いかかりスクナを水浸しにする。
次いで

「凍れ。」

ピキィッ！

スクナにかかっていた水が瞬時に凍る。
スクナはいきなりの氷結に動きを止める。それを見たアリカは鵺の方に向いたアリカは

「魔法の射手光の３矢」

魔法の射手を３つだけ放った……鵺の周りに。
そして３矢は鵺の周りに着くと爆発する。それぞれの爆発の衝撃が鵺に向かうように。
普通ならその程度の衝撃なぞ鵺には効かない……普通なら。
ではアリカがしたこととは

ビキィィィン！！！

甲高い音がなりいきなり鵺が凍り漬けになった。
そしてアリカはそのまま

「砕けよ。《水槍》。」

高密度に圧縮した水の柱を昇らせ凍り漬けの鵺に向かって叩きつけた。

バリィィィン！！

破砕音を鳴らし砕けた鵺。

「グォオオオ！？」

先程まで動きを止められていたスクナが氷結を力任せに割り、アリカに向かって巨大な拳を奮う。

「ッ！？」

バシャァァァ！！

叩きつけた拳はアリカを巻き込みながら湖面に当たり巨大な水柱を上げる。

「「アリカ様！！」」

詠春とガトウは叫ぶ。
アルは静観する。
何故なら危険なら助けに入る筈のフェイトがニコニコしながら戦闘を眺めているから。

（彼女があれならアリカ姫は……。）

そう考えていたら

ビキビキビキ！！
パァァァン。

上がっていた水柱が瞬時に凍り、砕けた。

砕けた氷はみるみる結合していき幾十の氷槍と化す。
そして湖面から円形の水膜を張ったアリカが浮かび上がってきた。
そして舞台の幕を降ろすため終焉の声を上げ始める。

「逝け。」

ドドドドドッ！？

氷槍がスクナを襲い貫き始める。

「グガァアアアアア！？」

叫ぶスクナ。
アリカは容赦なく告げる。

「極彩と散るがよい。《千断氷河》」

湖から極細の水糸のような物が幾千とスクナに巻きつき

斬！斬！！斬！！！！斬！！！！
ビキィ！パリィン。
切断された箇所は瞬時に凍り砕けていく。
砕けた氷は周りに降り注ぎ、月の光を浴び輝く。
その中心に浮かぶ水を纏いしアリカはさながら水を司る美しき精霊のように見えた。

「……アリカ、綺麗。」

フェイトの横で観戦していたアスナがそんなアリカを見て呟いた。

「終わったぞ。……どうじゃ？フェイト？合格かの？」

息切れすらしてないアリカがフェイトに問う。
フェイトは少し考えながら

「う～ん、鵺の時に過冷却の応用を使い動きを鈍らして凍らしたのはいいけど、あれは奇襲用にして出来るならあの速さには対応できるようになるのがいいかな。後は……。」

と問題点をつらつら言っていく。
アリカはそれを「ふむふむ」と頷き了解していきフェイトが言い終わると

「うむ、了解した。だが、2体相手に勝ったのは事実じゃから、霞の1日独占は貰うぞ。」

と嬉しげに言う。
フェイトも約束だからと微笑みながら頷く。
アルとガトウはそれを聞き

（（ああ、アリカ様もバグキャラに））

と思ったそうな。
詠春はスクナがやられた直後に封印を施す様に待機していた術者に指示を出していた。
余談だが、最後のアリカの幻想的な姿を見て詠春の部下の間にアリカファンクラブができたそうな。

戦闘を終えた一行は屋敷に戻った。
バカ3人は目が覚めた直後に詠春からの説教を食らったのは当然の事であった。
アリカは戦闘の疲れがやはりあったのか早々に寝ようとしたらアスナがテクテクと一緒に付いて来て

「……一緒に寝る。」

と言ってきたのに驚いた。が、同時に嬉しくなりアスナを抱いて共に寝た。

アリカ無双!?レディーゴォォーー!!!（後書き）

戦闘描写が相変わらず難しい（T_T）
アリカの戦闘はこれで良かったか不安です。
というか作者の力量限界です。
底が知れたな、俺。

まあ楽しんで貰えたら嬉しいです。

さらばです（；∇；）／~~

おまけ

「なあ、アル。」

「何ですか？」

「……ラカンは何で旧世界に来れたんだ？」

「……本人曰わく気合いだそうです。」

「……え？ナニソレ？コワい？」

「私も信じたくありませんでした。」

アルと霞は

（バグは行動までバグるのか）

と思ったそうな。

後で霞がラカンにコッソリとある陣を仕込んだのはまだ誰も知らない。

満を侍してエターナルロリータ見参！！（前書き）

まず最初に
霞のバ具合を知っているのは
紅き翼のメンバー
テオドラの父親と信頼できる側近達
最終決戦に出て間近で見ていたセラスと混成部隊の一部
元老院の馬鹿達

それぐらいです。
これと今回の本文を読み自己解釈して下さって結構です、というか
なるべくスルーしてくれると有り難いです

そして霞は有名になるのは嫌いみたいです。

なのはとフェイトは霞が活躍すると有名になってライバルが増えそうだから自分達が頑張って霞をあまり表に出さなかったのだ！？

と後付け設定してみたり

それではどうぞ～

満を侍してエターナルロリータ見参！！

京都でナギ達と騒いだ翌日にみんなで写真を撮り、そのまま現地解散をした。

霞達は一度、テオドラの元へ京都の八つ橋とアリカの初陣話を土産を持って戻った。
その話を聞いたテオドラは「妾も強くなって霞の1日独占を獲得するのじゃ！！」と言いなのはとフェイトに修行のお願いをした。
もちろんなのはとフェイトは快く了承し、その間にアリカは霞の独占権を行使し丸1日デートを満喫した。
夜に霞がハッスルしたため次の日のアリカは起き上がれない状態になり、なのはとフェイトとテオドラに介抱されていたのは余談である。

それから約10年の間はテオドラの城を拠点にノンビリと修行したり旅行したり霞がテオドラの父親に殴られたりしながら過ごす霞達。

とある日
霞が珍しく1人で旧世界のある地域をさまよい歩いていると

「ん？……幼女がムサイ奴らに絡まれてる。……ロリコンって怖い。」

そんな事を呟いた。
霞が見ている方向に綺麗な金髪のどこぞのお姫様のような女の子がムサイ集団に囲まれていた。

エヴァｓｉｄｅ

「ちっ、油断した。」

私は人払いの結界を張り忘れて休んでいた所に賞金首稼ぎの男共に襲撃されたのを舌打ちしながら警戒に入る。

「ケケケ、ゴシュジンヨ。アイツラノブキヲミテミロヨ。」

チャチャゼロが言ってきたのでそれを見てみると

ゾクッ！？

背筋に悪寒が走る。
この感じには覚えがある。
幾度となく味わったことのある感覚。

「不死殺し…か。ご丁寧な事だ。」

私は呟く。
あれはその中でもなかなかに強力な部類に入るのは感じでわかる。
しかも連中を伺うとなかなかの手練れであることも。

「少し……派手に殺るか。チャチャゼロ。」

あまり人目につきたくなかったがそうも言っていられない状況なの

でチャチャゼを促す。

「アイサー、ゴシュジン。」

チャチャゼロが了承をし戦闘に入ろうとした時

「お～い、いたいけな少女を複数で囲むのはどうかと思うぞ～。≪重力５０倍≫。」

そんな声が聞こえると同時に賞金首稼ぎ共が何かに押し潰されるように地面に叩きつけられた。
私はその声のした方向へ向くと
右手に剣のようなものを持った前髪がやたらと長い男がこちらへと歩み寄ってきた。

エヴァｓｉｄｅ　ｅｎｄ

霞が盤古幡を使い男共を潰した後、少女の元へ歩いていく。
少女は霞を見ながら警戒を緩めず殺気を飛ばしてくる。
霞はそれを意に介さず少女に

「よう、怪我はないな？」

聞く。
少女はいまだに警戒を緩めずに答える。

「ああ、ありがたいことにな。……だが、貴様も私を狩りに来たのだろう？白々しい言葉を吐くな。」

それを聞いた霞は不思議に思う。
そして気付いたように慌てて弁解する。

「ご、誤解だ！俺はロリコンじゃない！！確かにキミは可愛らしいが俺にはその手の趣味はない！？」

それを聞いた少女は

「何を言っているのだ、貴様！？というか私に魅力がないとでも言うのか！！」

ガァーッと怒り狂う。
霞はマズいと思い

「いやいや流石に幼女に欲情したらどこぞの変態（アル）と同類になる上、人としてアウトだろう！？」

それを聞いた少女は更に激昂する。

「誰が美幼女だ！！私はこう見えて貴様より遥かに年上だ！」

「さりげなく自分の事を綺麗だと自画自賛か！？……やるな少女よ。まあ確かに綺麗で可愛いがな。後、俺より年上って何百歳だよ！？ババァかよ！！騙された！？詐欺だ！！年齢詐称もここまでくれば清々しい！そこに痺れる、憧れるぅ。」

「ババァとは何だ!?仕方ないだろ!!不老なんだから成長しないんだ!貴様に分かるかどこにいっても子供扱いをされる気持ちが!?虚しさを通り越してもう堂々とするしかないだろ!?……ん?待て。」

今までギャイギャイと騒いでいた2人だが、少女が何かに気付き待ったをかけた。
霞もそれを聞き、何だ?と思い止まる。

「自分より年上と聞き、何百歳だ?と聞いてきたな?……どういうことだ?まるで貴様が百年以上生きているような言い分だ。」

少女は霞の姿を見ながら訝しげに聞いてきた。
霞の外見は二十歳ぐらい。
少女の疑問は当たり前だ。
霞は平然としながら告げる。

「え?だって俺、不老だもん。ちなみに妻帯者で嫁は4人いるけどその4人も不老だぞ。」

「なっ!!?」

絶句する少女。

これがバグキャラ道士の霞と真祖の吸血鬼エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルとの出会いであった。

その頃チャチャゼロは

「オッ、コイツサケモッテヤガル。イタダキ。」

霞に潰された名も無き賞金稼ぎ共の荷物を漁っていた。

エヴァと霞はひとまず落ち着き焚き火をしながら食事を取る。

霞はエヴァの名前を聞いた時に、

（あ～、この子がエヴァなんか。実物を見ると予想以上に可愛らしくてわからんかった。……フェイト辺りが溺愛するな、コレは。）

と思った。

エヴァの方は自分の名前を言った時にどうせ恐れるだろうと思っていたのが、霞が「ふ～ん、あっ肉焼けた。食べる？」と平然とした為、呆気に取られた。

霞に貰った肉を食べながら聞いてみる。

「おい、私が怖くないのか？これでも巷では悪の魔法使い「闇の福音」と恐れられている真祖の吸血鬼だぞ？」

霞は

「全然。それに襲われても返り討ちにはできるし。殺しはしないけど。」

その言葉にカチンときたエヴァは

「ふん、少し腕が立つからと調子に乗るな。貴様程度、私が「チャチャゼロ、酒いる？」「オッ、イタダクゼ。ワルイナ」…聞けーー！？」

自分が喋っているのに無視をする霞と自分の従者に怒る。

「食事中ぐらい落ち着けよ。全く困った主で大変だな、チャチャゼロ。」

「ケケケ、ワカッテクレルナラモットサケクレ。」

妙に合う1人と1体。

「うがぁーー！？」

頭を抱え叫ぶエヴァ。そんなエヴァを肴に酒を飲み始める。

落ち着いたエヴァは改めて霞に質問してくる。

「貴様は正義の魔法使いではないのか？」

「違うよ～。どっちかっていうと道士だよ。魔法も使えるけど。…
…わかりやすく言えば仙人見習い。仙人なんてなるつもりはないけど。」

エヴァは霞に段々と興味が湧いてきて次々と質問してくる。霞はそれに淀みなく答える。

ここで1つ表記しておこう。
霞は実はあまり有名ではない。どちらかというとなのはとフェイトの方が有名なのだ。
霞は大戦時に最後のみ派手に暴れただけでそれを知っているのは《紅き翼》と混成部隊だったもののみ（混成部隊の人達には霞があまり言い触らさないでくれとセラスに頼んでいた）。
後は霞の身近な人達。
元老院は霞に処刑時にしてやられた事は闇に葬っていた。
なので、一般の人達などは基本的に霞の噂を聞かない。
だからエヴァも霞の事は聞いた事がないのだ。
閑話。

エヴァがそういえばと思い出したように言ってきた。

「霞、おまえが仙人？いや道士？…だったか。なら《白き仙姫》《黒き仙姫》とは知り合いか？」

《戦姫》という名だったが仙女のような美しさで闘う姿から《仙姫》と言われ出したなのはとフェイト。エヴァは2人が仙人の姫だとか噂で聞いた事があるので、同じ仙人見習いだと言った霞はもしかしたら知り合いかと思ったのだ。
霞はもちろん知っている…どころか

「ああ、なのはとフェイトの事か。さっき言っていた嫁さん4人の内の2人だぞ～。」

エヴァにとって驚きの発言。
仙女と言われる程の美しさを持っているだろう2人と目の前にいる霞がどう見ても釣り合っているように見えないから。
エヴァが真実を知るのはもう少し先。
エヴァは少し考え

「霞、私のものに「ヤダ。」ーーッ!?もう少し考えてみてもいいだろうが!即答とは何だ!?」

「というか、いきなり何だよ?今までの質問の流れから考えてもいきなりだぞ?」

霞の言い分も尤も。
チャチャゼロはわかっているのか笑って事の成り行きを静観。
エヴァは

「いいではないか!?おまえとて自分の嫁が有名すぎて肩見の狭い思いをしているんじゃないか?だから、1人でこんな所をさまよっているんだろう?それに私なら、その、なんだ//自分で言うのはなんだが、尽くすタイプだ!?夜のお世話もバッチリだ!亭主関白でも構わないぞ!?だから私のものになれ!?私はおまえが気に入った!」

と言う。
いきなりまさかの展開に霞は目が点。(髪で見えないが)
チャチャゼロの方へ向く。
チャチャゼロは意図を解し

「アリャ、ホンキダゼ。ガンバレヨ。」

それを聞き、うなだれる。
どうしようかと考えていると

（ん？この気配は……）

ふと懐かしい気配を感じ……思いついた。

「エヴァ……実は俺には追っ手がかかっているんだ。そんな危険付きまとう俺に綺麗で愛らしく魅力溢れるエヴァを連れていくなんてできない。だから、ごめんよエヴァ。クッ、追っ手の気配が！？……俺といると危ないからこれでお別れだ！じゃあな、元気で過ごせよ。お姫様！？（ダッ！！」

芝居がかった口調でまくし立て駆け出す霞。
エヴァは霞の「綺麗で愛らしく魅力溢れる」の所で照れまくり霞の行動に気づくのが遅れ見失った。
チャチャゼロは

「ケケケ、ゴウインニニゲタカ。」

霞の嘘っぱちを見抜きながらも動かず。
エヴァはこう考えた。

「……霞に追っ手がかかっているなら、それを駆逐すれば私のものになる。そうしたら晴れて霞と……チャチャゼロ！！行くぞ！」

エヴァは自身の欲望を混ぜ歪めまくった理由を元に霞が言っていた追っ手の気配を感知しそこへ向かった。

「ヤレヤレダゼ。」

自分の主人に呆れながらもそれについて行く殺人人形。

こうして霞の行いにより原作とは全く違った邂逅を果たす《千の呪文の男》ナギ・スプリングフィールドと《闇の福音》エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルであった。

おまけ？

「貴様が霞の言っていた追っ手か？」

「あん？霞の事を知ってるのか？」

「とぼけるな！！貴様のせいで霞が私のものにならなかったんだぞ！？覚悟しろ！！」

「……あの野郎。あいつの気配がしたから向かってみりゃー、面倒事押し付けやがったな～。」

「何をグダグダ言っている！？」

「チッ、逃げるか。じゃあな。」

「待て！！」

ナギとエヴァの鬼ごっこが始まった。

おまけ？

「霞くん……どこに……行ってたのかな？みんなに黙って……。」

「霞……まさかとは思うけど…浮気なんてしてないよね？」

「どうなのじゃ？霞よ？」

「こんなに美人な妻達を放って置くほどの用事じゃ。それなりの理由なんじゃろぅな、霞。」

４人に詰め寄られる霞。

「……あははは……すんませんでしたーーー！！」

「「「「ダ☆メ☆」」」」

「ギニャァーーー！！」

エヴァといたほうがマシだったと思った霞であった。

満を侍してエターナルロリータ見参！！（後書き）

以前……エヴァのアーティファクトが如意羽衣だと言いましたよね……なら、どうなるか…

それは原作時期になればわかる、というか分かりすぎていますね、皆さん。

作者はチッパイも好きだが我が侭ボデーはもっと大好きです！？

千鶴や真名や楓なんてもはや１４歳じゃねぇよ！？

霞と3人がもし出会ったとき……

逃げるんだ！？みんな！！

それでは次回に～

霞のフラグは止まらない！？（前書き）

相変わらずの駄文ですたい
すいませんｍ（＿＿）ｍ

あれ？と思う所もありますが、いつもと同じくスルーしていただけたらと…。
不甲斐ない作者ですいません（Ｔ＿Ｔ）

そして何気なく見たら
ＰＶ１０万８０００越え
ユニークが１万２０００強……だと

……なにが……起きた（驚）

こんなアホな作品にここまでとは……。
天変地異の前触れか？と疑いました。

実はこの作品って投稿が何話か続けて出してますよね。
あれってその日の内に書いて出してるからストックとかじゃないんですよ。
なので、内容なんかも薄いのです。

……ならジックリ仕上げろよと思った方……仕上げても同じ感じになっちゃうんですよ！？（ＴｏＴ）

作者の技量不足なんです！！

すいませーーん！

うぅ、というわけで恐らく本日のラスト投稿です。

どうぞ

「フェイトー、詠春の所へ行ってくる～。」

「どうしたの？急に？」

霞が部屋に入りフェイトを見て言ってきた。
フェイトは部屋で読書をしていたが、霞がいきなり言ってきたので一旦読むのを止めて尋ねる。

「いや、大分前に詠春に子供が出来たって言うからお祝いにな。…他の3人は別荘？」

「そうなんだ。……私も行こうかな。なのは達は別荘じゃなくて少し出てるよ。近くの村に魔獣の群れが出たから討伐しにいくって言ってた。私はお留守番。」

「そっか。……ならフェイトだけで行くか。みんなで行くのはまた今度にして。」

2人はそう言い詠春の住む京都に向かった。

「霞！？フェイト殿も！？来てくれたのか！」

「お～う、なのは達が不在だったから2人だけだけどな～。」

「ごめんね、詠春。みんなで来たかったけど、なのは達はちょっと討伐に出てて数日は帰ってこれなかったから。はい、これお祝いだよ。」

霞とフェイトがそう言いながらお祝いの品を渡す。
詠春はそれを聞き

「いや、来てくれただけで嬉しいよ。……アリカ様とテオドラ様は強くなられたみたいだな。」

「うん、2人共ナギに勝てるぐらいに強くなったよ。私となのはも教えがいがあるんだ。」

詠春の呟きにフェイトが嬉しそうに言う。
詠春は思った。

（バグキャラが更に……霞、自重させてくれ。）

視線を霞に向けたが霞は首を横に振りながら視線で答える。

（無理。そもそも俺となのはとフェイトがバグだから。）

詠春はその言い分を聞き……もう諦めた。
フェイトは2人のやり取りを首を傾げ不思議な顔をした。
自覚はない。

気を取り直した詠春は2人を客間へと通し、巫女さんに何かを言付けて霞達の前に座り会話に花を咲かせた。

２０分程経ったころ、襖の向こうから

「とうさま～、きたえ～」

と可愛らしい声がした。霞はその瞬間

『フェイト！！』

『あんまり気が進まないんだけど……。』

何かを要求する。

フェイトは渋りながらもそれを実行する。

詠春は声の主の元へ向いているため気づいていない。

「木乃香。紹介したい人が来たので挨拶をしなさい。入っておいで。」

「は～い。」

呼ばれた木乃香は襖を開け入ってくると霞達を見て目を輝かせた。

そしてはしゃぎながら言う。……詠春が驚く事を

「同い年の子や～！？とうさま～、この子達と友達になってええの！？」

「……はっ？」

詠春は間抜けな声を出す。

そして木乃香の視線の先に目を向けると

「こんにちは～」

「あはは……こんにちは。（詠春、ごめん！）」

木乃香と同じぐらいの年齢の霞達がいた。
霞はにこやかに、フェイトは詠春の方へ申し訳ない態度をしている。
詠春には理解できた。
どうせ霞が自分を驚かそうと思いついた悪戯でフェイトがつきあわされたんだろうと。
目論見通り、驚いてしまったが…。
詠春がヒクヒクと口元をひきつらせながら木乃香に言う。

「あ、ああ。木乃香にはあまり同い年……の…子と……会う機会がないだろうと思ってね。」

年齢と子供という所で詰まる詠春はなんとか言い切った。
木乃香はそれに気づかず嬉しそうに言う。

「やった～！なあなあウチと友達になってくれへん？」

それに

「いいよ。このちゃんみたいに可愛い女の子と友達になれるんだから、喜んで。」

「ややわ～／／可愛いなんて照れるやん／／」

「……（ピキッ＃。……私もいいよ。木乃香と友達になりたいな。
『霞……帰ったら…Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩ…だよ？』」

詠春も霞のナチュラルな口説き文句と木乃香の反応に親バカモードになりかけたが、フェイトの怒りの波動を諸に感じ落ち着きを取り戻した。
当の霞は表情には出さないが

（あれ？……なんかマズッた？）

背中に冷や汗をダラダラと流しながらどうやって説教フラグを回避しようか考えた。

霞とフェイトは木乃香とお互いに自己紹介をしてお話をしていたら、木乃香がいきなり

「そうや！？ちょっと待っててな～。」

と言い部屋を出て行った。
2人は？となりまあその内戻ってくるかと思い、こちらを微笑ましげに見ていた詠春に向き直る。
フェイトが詠春に改まって謝ろうと思ったとき、詠春がいきなりお礼を言ってきた。

「2人とも…ありがとう。」

それに霞は平然としフェイトはいきなりのお礼に戸惑う。
詠春はその理由を話す。

「2人も気づいただろうけど、木乃香から莫大な魔力を感じただろう？あれのせいで余り外に出すことはできなくてね。木乃香には寂しい思いをさせていた所に2人が友人になってくれたのは、あの子にとってどれだけの励みになったか……親の私としては感謝してもしきれない。……動機がどうであれね。」

詠春は少し辛そうに言う。続けて

「木乃香にはできれば普通の人生を歩んで欲しい。だが……長の娘、莫大な魔力を持ってしまった。……きっといつかは自分の事や立場に気づいてしまうだろう。せめて、それまでは普通の女の子としての道を歩んで欲しいと思うのは間違いなんだろうか？」

詠春は懺悔するかのように言ってきた。
フェイトはどう言葉を掛けようかオロオロしたが、霞は

「いいんじゃね、それで。」

何でもないように言う。
詠春はそれを聞き呆然とした。
霞は続ける。

「ぶっちゃけ俺は詠春みたいに親になってないから無責任に聞こえるだろうけど、おまえの考えも別に間違っちゃいないんじゃね？娘を一時でもいいから平穏に過ごさせてやりたい。親のエゴ？はっ、子供を思う親っつーのはそんなもんだろ。それに娘の事を思いやる親の行動を貶すやつなんざ、程度が知れてる。無視しろ。まあ、狙われるってんなら陰から護衛するなり護身術でも教えてやればいいし。もし手に負えねー状態なら俺らが出張ったらいい。……木乃香は友達だ。それに詠春もな。友達が困ってんなら助けるのが俺の基

本的な考えだし。」

それを聞いた詠春はフェイトを見る。

「私も木乃香とは友達になったからね。もちろん、助けるよ。だから、安心して。」

2人の申し出に改めてお礼をいい頭を下げる。

それを受け取る霞とフェイト。

そこでタイミング良く木乃香が戻ってきた。

「かーくん、ふぇーちゃん、ウチの友達つれてきたえ～。」

そう言いながら黒髪をサイドに結んだ可愛らしい女の子を引っ張ってきた。

その子は木乃香に背中を押されながら前に出されモジモジと照れながら上目遣いで言ってくる。

「あ、あの。せつなって言います。……よろしくお願いします／／／」

ペコリとお辞儀をする。

そのあまりの可愛らしい行動に萌えた霞だが、隣のフェイトが……

「か……かわいい！？」

「ひゃぁ！？」

刹那に飛びつき頭を撫でまくり頬をすり寄せ愛でまくる。

木乃香は「ウチも～」と言いながら混ざる。

詠春は初めて見るフェイトの暴走に驚き霞に視線を向けた。
霞はその視線に気づき教える。

「フェイトは可愛いものを見てスイッチが入るとああいう風に暴走して愛でまくるよ。テオの子供姿の時は流石に王女だから我慢してたらしいけど。なのはが9歳児姿になった時は……鼻から愛を流してなのはを離さなかったぐらい。」

詠春の中で常識人だと思っていたフェイトの印象が崩れた瞬間だった。

その後、木乃香達と遊び帰ろうとしたら木乃香が「泊まって～」といい、娘に激甘な詠春が頼んできたので2日程滞在する事になった。
1日目も4人で遊んだが、その時木乃香と刹那は霞の素顔を偶然見て「女の子やったんや」と勘違いしたのは霞の名誉のため書かない。
夜になりみんなで一緒にお風呂に入ろうと言ってきた時は詠春が霞の背中に夕凪を押し付けてきたのでなんとか断った。
そして2日目
霞とフェイトが詠春に帰ることになるので色々と世話になった事などの挨拶をしていたら、

「長！？お嬢様達が見当たりません！」

侍女の人が慌てて駆け込んできた。
詠春はそれを聞き急いで立ち上がり霞達を見るとそこには誰もいなかった。
詠春はすぐに理解したが、自分も急いで外に飛び出た。

刹那ｓｉｄｅ

「このちゃーん！？」

ウチとこのちゃんはかーくんとふぇーちゃんが今日帰るからって聞いたから、何かプレゼントしようと思い河原にある綺麗な石をあげたら喜んでくれると思って探してた。
すると

ドボーン！！

何かが川に落ちた音がした。
まさかと思い振り向くとこのちゃんが川に落ちて溺れてた。

（どうしよう！？誰か呼びにいっても、その間にこのちゃんが！）

必死に考えるが混乱して戸惑うウチ。
そこに聞き慣れた声がした。

「刹那！！任せろ！」

ウチの横を一瞬で通り過ぎこのちゃんの元へ向かう人影。
その背中はこの２日の間で見慣れた人。

かーくんだった。

刹那ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

木乃香ｓｉｄｅ

「あぶっ！！？ぷはっ！？」

ウチは必死になって水を掻くんやけど流れがはようて全然あかん。

「このちゃーん！？」

せっちゃんの声が聞こえる。

ウチは

（ああ、せっちゃんは無事なんや。よかった～）

と思った。

きっとこの時、自分は死ぬんやなぁと漠然と思うた。

（かーくんとふぇーちゃんと友達になってもろうて楽しかったなぁ）

この２日で友達になって一緒に遊んでくれた２人を思い出す。

（ごめんな、２人共。ごめんな、とうさま。ごめんな、せっちゃん。）

心の中で友達ととうさまに謝り目をつむった。

すると何かに引っ張られるような感じがした後、暖かく誰かに抱きしめられている感じがした。

まるで優しいとうさまや記憶にないけどきっと優しかったかあさま

に抱かれているような感覚。
次に聞き慣れた声がした。

「大丈夫か、お嬢さん？」

ウチを気遣う様な優しい声。
目を開けると

「かー…くん？」

ウチを抱きしめ心配そうな、それでいて優しい目をしたかーくんがいた。

これがウチの初恋の始まりやった。

木乃香ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

霞はフェイトと共に川へと向かっていた。
そして川に着き木乃香と刹那を視界に入れた瞬間、フェイトに指示を出す。

「フェイト！！俺が木乃香の側に着いたら俺の周りの水を吹き飛ばせ！多少、地形が変わっても構わん。後は刹那を守れ！！」

「了解！」

霞は更にスピードを出し傾世元ジョウを出しながら刹那の横を通り

「刹那！！任せろ！」

安心させるように声を掛ける。

そして木乃香の元に着き保護した瞬間、まさに阿吽の呼吸で放たれたフェイトの魔法に周りにあった激流の河川は有無をいわさず吹き飛ばされる。

霞は木乃香を抱きかかえ傾世元ジョウで完璧に防御した後、すぐに河原へ移動した。

木乃香はいまだに目を瞑った状態だったので

「大丈夫か、お嬢さん？」

声を掛けた。

それに反応した木乃香はゆっくりと目を開け、霞を見て

「かー…くん？」

と聞いてきたので

「お～、無事でよかった。あんまり心配さすなよ？」

笑いながら答えてあげた。

そこに

「このちゃん！？」

叫びながら駆け寄る刹那。

そして

「木乃香ーー！？」

詠春がすごい勢いで走ってくる。
霞は刹那と詠春に木乃香を預けフェイトに乾いた木を持ってきてもらい焚き火の準備をした。

夕刻
霞とフェイトが屋敷の門前に立ち、詠春の見送りを受けていた。

「霞、フェイト殿。木乃香を助けてくれて本当にありがとう。」

かしこまった様子で礼を言うのに対し、苦笑しながら答える。

「言ったろうが。助けるってな。だから気にすんな。」

「そうだよ。あんまり気にしないで。」

2人の言葉に顔を上げて笑いながら

「それでもだ。礼としてはなんだが、何か困った事があれば相談してくれ。微力ながら力を貸すよ。」

詠春の生真面目な態度に2人は諦め、了解しておく。
そして帰ろうかと思ったとき

「まってー！！」

「このちゃん！？まだ走ったら！」

木乃香の叫びと諫める刹那の声が聞こえた。
霞とフェイトはそれを見て2人を待つ。
木乃香が走り寄ってくる。……勢いを緩めず霞の元へ。
そのまま

「グフゥッ！？」

霞にダイビング。
なんとか受け止めた霞は木乃香を離し、注意しようとすると

チュッ！

頬に柔らかい感触。

「へっ？」

「「なっ！！？」」

「わぁ～／／」

霞は呆ける。
フェイトと詠春は驚愕。
刹那は顔を赤くしながら感嘆を上げる。
そしてその原因の元の木乃香は

「かーくん、助けてくれてありがとな。今のはお礼やよ。後な、大きくなったらウチ、かーくんのお嫁さんになるから待っててな～♪」

ニパ～ッと笑いながら言う木乃香。
霞はそれを聞き
（まあまだ子供だからな）
と思いながら、ある事を思い出した。

「そうだ、木乃香にこれをやるよ。」

木乃香に言葉をかけながらポケットから出したモノを渡す。
それは

「わあ～、キレイな指輪や～」

だった。

「それをなるべく肌身離さずつけときな。」

霞は言う。
詠春はフェイトと何か黒い雰囲気で話していたが、見覚えのある指輪を見て

「霞、それは!?」

「いいよ、まだ在庫はあるから。これならちょっとはマシになるだろ。」

当の木乃香は嬉しそうにはしゃぎ刹那に見せていた。
刹那もそれを見て羨ましそうにしていたので

「刹那もいるか？木乃香とは少し違う指輪だけど。」

聞いてみると躊躇いがちに頷く。

頷くのを見て、言った通り木乃香とは違う形をした指輪を渡す。

「刹那のはな～、常時付けていなくてもいいけど、なるべく持ってた方がいいぞ～。」

と言ったが

「絶対にずっと付けてる。」

何故か付けることを強調した。

霞はその勢いに少し押されたが、それも気にせず詠春と木乃香と刹那に別れを告げる。

「じゃあ、帰るな。また会おうな～。」

「またね、木乃香、刹那。詠春も。」

3人に手を振り帰路につく2人。

詠春達は姿が見えなくなるまで見送り、屋敷に戻った。

その途中で

「なあなあ、とうさま。ウチとせっちゃんがかーくんのお嫁さんにいくのいいやろ～？」

「このちゃん！？」

見上げながら無邪気に聞いてくる木乃香と顔を真っ赤にして叫ぶ刹那。
詠春はもちろん

「木乃香、霞にはフェイトがお嫁さんになるから無理なんだ。」

拒否した。
しかし引き下がる木乃香ではない。

「ならな～、ふぇーちゃんも一緒になったらいいんや。」

詠春はさらに無理な理由を並べるが、悉く木乃香が言い返し、最後に木乃香が

「も～、意地悪なことばっかり言うとーさまは嫌いや！いこ、せっちゃん。」

「えっ!?あっ、待ってぇ！このちゃん。」

先に走っていく木乃香に慌て、詠春の方を向きペコリとお辞儀をして追いかける刹那。
詠春はうつむきながら

「……かすみ……次に会ったら……斬る！！！！」

目を反転させながら殺害宣言をした。
霞が次に詠春と会う時は……どうなるかわからない。

一方

「……良かったね、霞。可愛いお嫁さんが出来て（ブスッ。」

大人に戻ったフェイトが霞の腕に引っ付きながら拗ねていた。
霞は苦笑しながら

「まあまあ、子供の言ってた事だし。大きくなったら忘れてるって。」

「はぁ～。霞はわかってないよ。木乃香のあの目は真剣だったのを（ボソッ。」

溜め息を吐き小声で呟く。
霞は聞き取れず首を傾げたがフェイトは顔を背け答えそうになかった。どうしようかと考えた霞は

「……フェイト。このまま真っ直ぐ帰らず1日ぐらいこっちに滞在しようか？」

と尋ねた。
その言葉にフェイトは揺れる。
思わぬ霞の1日独占に揺れる。
霞がトドメに

「拗ねてるフェイトは可愛いな～、もう。（チュッ」

フェイトの頬にキスをする。

ボンッと赤くなるフェイト。
こうなっては霞に甘いフェイトは駄目であった。

「…もう／／なら、許してあげる。なのは達にも内緒にしておいてあげるね、旦那様／／（チュッ」

赤くなりながらも微笑み返答し霞にキスを返す。
霞も愛おしいフェイトをさらに抱き寄せる。
こうして2人は黄昏時の京都の街へ繰り出しその日を楽しんだ。

おまけ

「なのは!?こっちにはいなかったのじゃ!!」

「別荘にもおらぬぞ!?」

テオドラとアリカがなのはに報告する。

「フェイトちゃん……まさかの抜け駆けなんて……許せないよ、これは。」

「うむ、フェイトはあまりそういうことはしなさそうじゃから油断していたのじゃ。」

「どうする？このまま無闇に探索しても埒が明かぬと思うが。」

「……仕方ないから、２人が帰ってきてからお話……ううん、言い訳を聞こうか。」

「賛成じゃ。ぐぬぅ！妾なぞ以前に約束した２人きりの旅行がまだなのにぃ！！」

「妾はまあ堪能したが……流石に１人で夜の相手はキツかったの／／／」

「……／／／霞くん、激しいからね／／」

「うむ／／確かに／／」

そんな会話をしながら霞とフェイトの帰りを待つ……鬼、否！魔王が３柱。

霞とフェイトがＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩを受けるのは当然のことであった。

その頃の２人はホテルの一室で行為が終え安らいでいた時に悪寒が走り抜けたそうな……。

終わり

霞のフラグは止まらない！？（後書き）

このちゃんが嫁候補になりました。
せっちゃんが嫁候補になりました。
テーテッテー♪

木乃香に上げた指輪と刹那に上げた指輪についてはまた魔法ばれの時に判明させます。

それと前話と今回と恐らくの次回は霞達が１０年の間に起こった出来事をバラバラに書いてますので

それでは
（；∇；）／～～

○○○!?ボーナス継続!!そして、原作突入1年前（前書き）

皆さん、不甲斐なさすぎな作者をお許し下さいｍ（＿＿）ｍ

真名の幼少時の出会いをどう想像しても良い構想が思い浮かばずに書けませんでした（Ｔ＿Ｔ）

（一個使おうかと考えたのはなのは、フェイト、アリカ、テオドラによる洗脳子育て。戦闘は火力!!霞大好きー!!!的な感じの没ネタ）

……あれ?意外に良かったのかな?

あれ?

よくわかんなくなってきました。

とりあえず原作開始1年前に飛びます。

どうぞ。

○○○!?ボーナス継続!!そして、原作突入1年前

「ガフッ、どう……や…ら、ここまで…のようだな。」

男は血を吐きながら言葉を紡ぐ。
震える手を動かし服の内ポケットからなんとか煙草を取り出し口に加える。

カチンッ、シュボッ

「ふぅ〜……グフッ、ゴブッ。……ったく、血の味しかしないな、全く……。」

吸おうとしても咽せて吐血してしまう。
男は諦めて、目を瞑る。
まもなく訪れる死を待ち……。

（嬢ちゃん……あんたは幸せになるべきだ。俺の事なんて忘れて平穏な人生送んな。……後は頼んだぞ、愛弟子。）

男の呼吸は弱まり、意識が薄れる。
その時、男に影が差す。だが、もう目を開けても視界がぼやけてわからない。

（ふん、トドメを刺しにきたか。……まあ、いい。どうせ抵抗もできないんだ。ひと思いにやりな。）

男はそう毒づき動かない。
……。
……。
……。
少しの間があき、男の意識がなくなる瞬間
「まだ死ぬにははえーよ。ーーー。」
その声を聞き
（この声は……。）
ここにいるはずのない戦友を思い出し、意識を閉じた。

そして月日が経ち、かの英雄の息子が8歳になる頃

麻帆良学園学園長室

「で、タカミチ君や。どうだったかのぅ?」

麻帆良学園の学園長、近衛近右衛門が目の前に立っている男、タカミチ・T・高畑に尋ねる。

「いえ、やはり連絡が取れずじまいでした。……あの2人に連絡が取れる事自体が奇跡に近いですからね。」

どうやらタカミチは学園長に誰かに連絡を取るように頼まれたみたいだ。

「う～む、噂に名高い《白き仙姫》と《黒き仙姫》に来てもらえば頼もしいんじゃが……。」

学園長が言う《白き仙姫》は陽神　なのは、《黒き仙姫》はフェイト・T・陽神。

大戦時に紅き翼と共に行動をし、たった2人で紅き翼に匹敵する活躍をしたと言われ、またその美しい容姿から魔法世界の住人から絶大な人気を誇っているのだ。

タカミチはこの2人ともちろん知り合いなのだが、2人…いや厳密に言えば4人なのだが…と連絡など取った事はない。

唯一、予想を立てた場所は魔法世界にあるヘラス帝国なのだが、返ってきた返事はいないとのことだった。

だが、タカミチは内心で思う。

（学園長が知らないのは無理もないけど……、もしあの2人に変な頼み事をすると……あの人が黙っちゃいないだろうな。……いや、下手をするとこの学園都市がなくなる可能性も…。）

タカミチが言う人物はなのは、フェイト両名の夫である陽神　霞。

彼はあまりというか一部を除き知られていない。それなりのパイプを持っている学園長でさえも知らないという徹底ぶり。タカミチは霞が自分の事は黙っておけという昔にした約束を思い出し、他にもそのような事を言い口止めもしくは脅迫という名のお願いをしたの

だろうと推測した。
当たりである。
それはひとまず置いておき
タカミチは学園長に言う。

「学園長、仕方ないので諦めましょう。無い物ねだりをしてもしょうがありません。それより僕が受け持つクラスの名簿をもらえませんか？」

来週から新学期である学園。
タカミチは去年から担任を任されている。ただ出張が多くて未だに今年度の新しいクラス名簿をもらっていなかった。

「おお！？そうじゃったな。ほれ、これじゃ。受け持つクラスは変わらずA組じゃが、今年は去年より2名ほど多いのじゃよ。」

「2名多い？何か理由はあるのですか？」

「いやなに、タカミチ君も知っておる儂の娘の婿殿がの、知り合いの家族が関東に引っ越す事になったのじゃが今年から2年生に上がる女の子がいるらしくてのぅ。向こうの父親が婿殿に良い学園がないか相談したらしい。
そこで婿殿がこの麻帆良を紹介して儂に連絡を取ってきたのじゃ。儂としても生徒が増えるのは歓迎じゃから了承したのじゃが、その時にはクラス編成をやり終わってしまっていたからのぅ。タカミチ君には事後承諾になってしまう事になって悪いとは思ったのじゃが、キミが受け持つクラスに入れさせてもらったというわけじゃ。」

「はあ、僕は別に構いません。ただ、1人を別のクラスに入れる事も可能だったのでは？他の先生方も良い人ばかりなので快く了承し

てくれるでしょうに。」

「うむ、そうなんじゃが……。どうもその女の子2人は元々孤児だったのを今の両親が引き取って育てたらしいんじゃよ。まあ、婿殿曰わくそんなものは微塵も感じさせないぐらい家族仲が良く娘さん2人も明るくできた子らしいが、流石に親御さんの方は心配したのじゃろう。いきなり見知らぬ土地で知り合いもいない状態で1人でクラスに入る事を。なので親御さんからできれば2人一緒に編入させてやって欲しいとも言われたらしいわい。」

「……そうなんですか。少し心配しすぎかと思いますが、親御さんの気持ちは理解しました。先程も言った通り、僕は問題ありません。」

タカミチがそう言うと学園長は笑いながら

「フォッフォッ、流石はタカミチ君じゃ。よろしく頼んだぞ。……ほれ、これがクラス名簿じゃよ。」

タカミチに名簿を渡す。受け取り頭を下げ中を見出す。
タカミチがザッと簡単に見渡し改めて思う。

（アスナ君に学園長のお孫さん、雪広財閥の娘さんに明石教授の娘さん。更に神鳴流剣士、狙撃手の龍宮くん、それにエヴァ……他にも。……やはりこのクラスは。）

タカミチは学園長を見やる。学園長はその視線の意図を理解しながらも黙っている。

（……ハァ、来年に予定している彼にこのクラスを…。なら、この

子達は……。）

苦虫を噛み潰したような顔になるもすぐに元の表情になる。
だが内心は複雑であった。

（……師匠、すいません。アスナ君はもしかしたら……。いやまだ決まったわけじゃない。）

タカミチはその思いを隅に置き、気を取り直す。
改めて名簿を見る。
そうしたらふと気づいた。
再度、確認する。
が、間違っていなかった。
タカミチは学園長に尋ねる。

「学園長、この名簿には31人しか載っていないようですが……。」
その質問に学園長は本当に忘れていたように答えた。

「む？……おぉ！？すまんすまん。さっき言った編入する2人の写真がまだ届いていないので載せていないのじゃよ。忘れておったわい。」

「学園長……。流石に僕も顔と名前がわからなければどうしようもないですよ。」

呆れた顔で学園長に抗議する。
学園長は応えた様子もなく告げる。

「フォッフォッ、大丈夫じゃよ。そろそろ（コンコン。……ふむ、来たようじゃの。入りなさい。」

学園長室にノックの音が響き、学園長が応えた。
タカミチは件の編入生が今訪ねてきたのだろうと予想しながら、一言教えておいてくれても……と思い学園長を恨む。
だが、入ってきた編入生2人を見た瞬間、そんな事は宇宙の果てへと飛んで塵となった。
何故なら……

「失礼しま～す。新学期からこちらでお世話になる高町　なのはです。」

「失礼します。同じく新学期からお世話になるフェイト・テスタロッサです。」

「「よろしくお願いします。」」

「うむ、よろしくの。ん？タカミチ君、どうしたんじゃ？そんな鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして。」

学園長の問いにも反応しないタカミチ。
自己紹介した2人はタカミチの方へ向き、なのはは悪戯が成功したような笑顔。フェイトは申し訳ないような顔をした。
タカミチがなんとか我を取り戻し喋ろうとした時

『内緒ね、タカミチくん。』

なのはから念話が届き、黙る。
そして学園長の視線に気づき

「ゴホン……すいません。少し……あ～、彼女達に見惚れてしまい

ました。僕は……な……君達の担任になるタカミチ・T・高畑です。……よろしく？」

誤魔化しながら自己紹介する、危うく昔の呼び方をしそうになりながら。

それを聞いたなのはとフェイトは嬉しそうに

「ありがとうございます。お世辞が上手いですね、高畑先生『後で霞くんに報告しておくね、タカミチくんに口説かれそうになったって』。」

「ありがとうございます／／『ごめんね、タカミチ。私は…その…霞のお嫁さんだから……』。」

お礼を言いながら念話もしてくる。

2人の念話を聞き、タカミチは血の気が下がる。

自分の奥さんをこよなく愛しまくる霞がこれを聞いたら……。

そしてタカミチは内心で

（ははは…（泣）。僕の人生終わった。そんなつもりで言ったんじゃないのに……ｏｒｚ）

自分の人生の幕が閉じる事を確信した。

そんな放心しているタカミチを放っておきながら学園長となのはとフェイトは編入手続きを済ましていった。

なのはとフェイトが学園長室で編入手続きをしている時、霞はというと

「いいよ!?とてもいいよ!!マーベラス!!!さあ!次は挨拶!!イってみよー!!」

「か、霞よ／／／ほんとにやらねばならぬのか?やはり抵抗があるのじゃが……。」

「確かに。まさかこのような格好をするとは思ってなかったのじゃ。のぅ?本当にやらねばならぬか、霞?」

アリカとテオドラは霞に何やら教えられそれをやろうとしているらしいのだが、2人は抵抗があるのか渋っている。
だが霞は受け付けない。

「駄目ダメ。これは今後、絶対必要になるんだから。だからハリー!ハリー!!ハリー!!!」

2人は

「わかった。(今度なのはに聞いてみるか)」

「妾もじゃ。(フェイトに聞いてみるかのぅ)」

了承しながら内心でそう呟く。
そして

「「いらっしゃいませ、御主人様。注文は何になさいますか？それとも…わ・た・し？」」

言った。

言ってしまった。

それを聞いてしまった霞の反応は推して知るべしであろう。

後日、これを聞いたなのはとフェイトは霞を別荘に連れて行きダブルブレイカーを喰らわしたとか。

○○○!?ボーナス継続!!そして、原作突入1年前（後書き）

まだ続きます

タカミチくんは再会するようです（笑）（前書き）

短いですよ。

携帯だと間隔をいっぱい空けても改行が省略されてしまい作者は不満です。

かといってパソコンはないし。（パソでもできるかは知らないけど）

タカミチくんは再会するようです（笑）

なのはとフェイトは学園長室で編入手続きを終え退室した後、学校から少し離れた場所で誰かを待っていた。

「意外に遅いね。すぐに追いかけてきて問い詰めてくると思ったのに。」

「私達を見て反応したタカミチに学園長が何か言ってるんじゃないかな。」

「それは有り得そうだね～。まあタカミチ君は私達の認識阻害の対象外だからね～。いきなりの登場に凄い顔してたし。」

「あれは…確かに。気の毒だったね、霞となのはの悪戯に付き合わされたタカミチは。」

「なによ～、フェイトちゃんも実は乗り気だったでしょ～。」

「そんな事……ない…よ。（サッ」

なのはの言葉に視線を逸らしながら答えたフェイト。
なのはが猫口のようににんまりと歪め追求しようとしたら

「なのはさん、フェイトさん！」

フェイトにしたらナイスタイミング、なのはからしたらバッドタイミングな状況でタカミチが駆けてきた。
それに気づかずタカミチは息を切らせながら走り2人の側についた。

「お疲れ～、タカミチくん。それと久しぶり～♪」

「はい、コレ。久しぶりタカミチ。」

なのはとフェイトは挨拶し、急いでくるであろうタカミチを予想し買っておいたスポーツ飲料を渡した。

「ありがとう御座います。それとお久しぶりです、お二人共。」

渡された飲み物を礼を言いながら貰い、挨拶をするタカミチ。
そんなタカミチを見て成長したな～と思い微笑む2人。
タカミチは息を整えて2人に言ってきた。

「なのはさんとフェイトさんも人が悪いですね。来るなら連絡ぐらい入れてくれても良かったじゃないですか。あっ！？立ち話も何ですからどこかに入りますか？色々話したい事や聞きたい事もありますし？」

矢継ぎ早に言ってくるタカミチを見て更に微笑ましい気持ちになった2人はタカミチに提案する。

「うん、いいよ。それとお茶を飲むならいいとこを見つけておいたよ。」

「お茶もだけど、ご飯もおいしいし。そこでいい？」

タカミチは「はい」と了承しながら2人について行った。

タカミチが連れていかれた場所は女子学園エリアから少し離れた所にある結構大きい一軒家だが一階部分が喫茶店になっている。
だがタカミチはつい一週間程前にここを通ったとき、空き家が二軒程並んで建っていたのを覚えていた。
7日でこんな立派な家兼喫茶店が建つか訝しげに感じていたら、2人がこっちを見てクスクス笑っているのを見てまさかと思った。

「……まさか2人が住むのはここなんですか？」

聞いてみると正解と言わんばかりに頷いた。
寮ではなく一軒家、しかもかなり大きい。2人が住むには。
タカミチはそこから予測した事を2人に尋ねてみた。というか確信を持っていた。よく考えれば当たり前の事だ。この2人を溺愛するやつがついてこない筈がない。

「来ているんですね？」

その言葉に嬉しさが滲む。
それを感じとった2人は視線で開けてみてと言う。
タカミチは喫茶店の扉に手を掛ける。
その胸中には憧れの人達の1人。最強の中の最強。バグと言われていた紅き翼のメンバーからもバグと言われた人物。
陽神　霞に再会できる嬉しさ、成長した自分を見て欲しいという気持ち、相変わらずのバグっぷりなのかという怖いもの見たさ、様々な思いが渦巻きながら……今、扉を開く。
開いた瞬間、タカミチの視界には……

「はい！？そこ！もっとスカートをフンワリと広げるのが出来てない！？やり直し！！」

「霞～、もう疲れたのじゃ～。休憩にせぬか～？」

「妾も流石に疲れた。……主に精神的に。」

霞が教鞭（よく見れば打神鞭）片手にメイド服クラシックｖｅｒを着たテオドラとアリカに熱い指導をしていた。

タカミチは一度扉を閉めた。

頭を下に向け目を閉じ考える。

（いやいや、まさかの再会であんな光景は色々と台無しだろ。それにアリカ様とテオドラ様がメイド服って……。ないない。っていうかアリカ様はともかく何故皇女のテオドラ様がここに？あれ？ここヘラス領になったのか？知らない間に占拠された？……あの人ならやりそうで怖い。ああそうか、きっと僕は幻を見たんだな。霞さんやなのはさん、フェイトさんに会えた嬉しさできっと白昼夢を見たんだよ。うん、間違いない。気をしっかり持て僕。さあ、起きろ僕。もう一度扉を開けてみろ。次は大丈夫。さあ！現実に戻ろう！！）

なのはとフェイトはタカミチが扉を開けたはいいがいきなり扉を閉めた事で不思議に思い首を傾げる。
どうやら先程の光景を見ていなかった模様。
そしてタカミチが気を取り直し再度扉を開く。

「そうそうそんな感じだ……おっと!?手が滑った!」

「ひゃっ／／霞いきなり胸を触るでない!!」

「妾はお尻を撫でられたのじゃ／／これが俗に言うセクハラか?」

「フハハハ!!良きかな、良きかな。ん?」

「……。」↑タカミチ

「……。」↑霞

「……（ガクッ、ポロポロｏｒｚ。」↑現実を見たが故に心が折れ涙を流すタカミチ

「……（汗」↑気まずい霞。

「「霞くん／霞」」↑タカミチがいきなり崩れ落ち泣き出したのを

見て慌てて駆け寄ったら、店内を目撃し状況を理解したなのはとフェイト。

「……（冷汗。」↑命の危険を感じ始めた霞。

「さあ着替えるかの」↑逃げるアリカ。

「あ、アリカ。妾も着替えるぞ。」↑アリカと同じく逃げる。

そして

「「……さあ、逝ってみようか」」

2人によるお仕置き、否！処刑が執行された。

「ッッッッッ！！！！？！！！？！！！？！！！！」

タカミチくんは再会するようです（笑）（後書き）

次こそは真名を出す！！
例え1話が長くなっても出す！！

というわけでサヨ～ナラ～

狙撃手は魅せられる（前書き）

相も変わらず上手く描けてる様子もなく、あまり良くないですが

どうぞ。

狙撃手は魅せられる

あれからなのはとフェイトの処刑を受けた霞、色々と台無しな再会に泣き崩れたタカミチ、逃げたアリカとテオドラ。
もはや収集がつかなくなったので、なのはとフェイトはタカミチに明後日に来るよう促した。
その晩、霞は晩御飯にありつけなかった。

深夜、復活した霞は小腹が空いたため冷蔵庫を漁ったが何もなく我慢しようかと考えたが近くにコンビニがあったのを思い出し外に出た。

「ありがとうございました～」

店員の挨拶を受けコンビニを出る霞。
手にある袋の中身は豚まん、唐揚げ、おにぎり、缶コーヒーが二本に赤マル一箱。

「まさか、まだ豚まんがあったとは（嬉）。とりあえず食べよ……。」

買った物を店の前で食べながらゴミをゴミ箱に捨てていく。
缶コーヒーは二本、一本は影の中に入れておきもう一本を飲みながらタバコを吸い始める。

「フゥー、五臓六腑に染み渡るわ～。……「パンッ！」……んあ？」

煙草を満喫しているといきなり甲高い音がした。
平和な日本では基本的に有り得ない音。
……それは銃声。
だが、霞にはもちろん心当たりがある。
ここは麻帆良学園。
夜には相応の出来事がある。
暇つぶしがてら見に行こうと思い認識阻害と自身のオリジナルの結界を張りながら音源へと歩み始める。

真名ｓｉｄｅ

（これは少々不味いかな）

私は現在、学園から依頼されている夜の警護をしていたら多数の侵入者を感知し寮の同室である相棒の刹那と一緒に現場へと向かった。
するとそこには約５０体の鬼がいた。
ただの鬼ならよかったが、なかなかの格を有した鬼達のようで最初は刹那を前衛、後衛を私でなんとか撃破していった。
しかし、いくら倒しても減らず疑問に思った私は視る。
するとどうもここら一帯に妙な陣が敷かれていたのが分かった。
どうやらこの陣のせいで召喚した鬼を倒しても片っ端から復活させていくようで、術者を倒さないことにはこの陣は消えないと私は推測した。
だが肝心の術者はどこかに隠れている。探そうとしても鬼が邪魔をしてくるが故に探せない。

（チッ、厄介だな。）

内心で舌打ちしながら鬼を撃ち抜いていく。
他の所にも時間差で襲撃してきたようで、学園側の救援は期待できそうにない。
手持ちの装備では殲滅は出来ない。
その時、前にいた刹那が体力が切れたのか足を滑らせ鬼の一撃を喰らい吹き飛ばされた。

（クッ！？）

刹那に追撃する鬼を狙い撃つ。

（ッ！？しまった！！）

刹那の援護をした瞬間、他の鬼が好機とばかりにこちらに急接近し攻撃してくる。

（回避…間に合わない！？）

鬼の攻撃を見ながらそう考え、吹き飛ばされるのを覚悟で鬼に銃口を向ける。
相討ち狙いでいった私はそのとき……風を感じた。

ザシュッ！？……ゴトン。

（……？何が？…視界が横向き？……ッ！？）

何が起こったか理解できなかった。

風を感じた直後に視界の向きが変わり、先程襲ってきていた鬼が少し離れた…いや、私が離れていてさらに鬼の首が落ちた。
そして今の私は誰かに抱きかかえられていた。
いわゆるお姫様抱っこと言われるやつで。

（誰が……）

顔を見上げると
前髪が長く目が隠れている男性がいた。
その男性は私に顔を向け

「ん、怪我はないみたいだな。刹那も……気を失ってるけど大丈夫か。あいつちゃんと指輪持ってたんだな。対物障壁が働いてるし。」

そんな事を言う。
どうやら刹那の知り合いのようだ。

「礼を言うよ。流石に危なかったしね。それと降ろしてもらっていいかい？」

礼を言い、降ろしてもらう。
顔が若干赤くなっていたのを悟られないように。

「別にいいさ。嬢ちゃんみたいな可愛い女の子に怪我がなくて重畳。それに役得だったしな。」

男性は笑いながら私に言う。
私は子供扱いされたのに不快な気持ちになったがその反面、年相応のような扱いをされたのに……少しだけ嬉しい。私はそれらが内心でせめぎ合い気恥ずかしかったためそっぽを向く。……可愛いと

言われたのもかなり久しぶりだった。
そんな私を見て苦笑した男性が歩き出す。鬼の群れへと。

「！！？危ないよ、あの鬼達は「問題ない、そこで見てな。」なっ……。」

私の忠告を遮り、手を振りながら歩くのを止めない。
しかも1人でやるつもりだ。

（……お手並み拝見といこうか。もし危険なら援護すればいいだろう。）

私はそう考える。
結果から言うと、私の考えは無駄に終わった。
そこに現れたのは天災に等しい人災。
それが行うのは一方的な虐殺。
彼を中心にして巻き起こる現象は破壊という言葉すら生温い。
もし私が全開放して挑んでも傷一つ付けられるかわからない程の圧倒的な力の片鱗を感じた。

（この人は一体……。）

視界に映る鮮烈な光景を見た私はこの男性に興味が湧いてきた。

後から考えてみるとこの時から魅せられ始めていたのだろう。

……陽神　霞に

真名ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

霞が敵の掃討を終えた後、真名が刹那の介抱をしているとこちらに向かってくる複数の気配がしたので霞は逃げようとした。
それを見た真名が

「待った。助けて貰ったのには感謝しているけど、こっちも仕事なんでね。悪いんだけど事情を聞かせて「無理だな」…むっ。」

止めてきたが拒否する霞。
真名は顔をしかめた。
霞が抵抗するないしは逃げようとしたら止めなければいけないのだが、先程の力を見た後ではそれも出来そうにない。
そう思い、どうすればいいか考えていると霞が真名を見て軽く溜め息をついた後、提案してきた。

「他の魔法使いに自分の事を知られるのはあんまり好ましくなくてね。黙っててくれないか？ただとは言わんよ。何かおごらし「いいよ。」……決断、はやっ！？」

あまりの即答に驚く霞だが、気を取り直し

「まあいいや。他にも聞きたい事があるだろうし……そうだな…あっちに一軒家の一階部分に喫茶店があるんだ。そこに明後日の午前中、来るといい。好きなものをおごるよ。出来れば１人で頼む。」

真名はそれを聞き了承する。

霞はそれを確認したあと、他の魔法使いが来る前にさっさと退散した。
見送った真名は
「あっ……名前聞くのを忘れた。」
と呟き失敗したような顔をしたが、すぐに気を取り直す。
「まあいいか。明後日にまた会うんだ。その時、まとめて聞こう。」
そう考え事後処理に移った。

霞が家に戻ると
「おかえり、霞くん。……夜遊びは楽しかった?」
なのはが待っていた。
……怖い笑顔で。
霞は慌てて事情を説明する。
それを聞いたなのはは納得はしたが
(龍宮　真名ちゃん……か。……嫌な予感がするなぁ。)
内心で思った。

その感が的中するのはもう少し後のお話。

狙撃手は魅せられる（後書き）

真名は直ぐに惚れるタイプではないと思ったので、ひとまずフラグが建っただけ。
後は霞が自然と歩めばフラグは自動回収されます。
なんという便利設定！？

サーセンｍ（＿＿）ｍ

実際ヒモだったよね（前書き）

前回の話しから2日後です。

実際ヒモだったよね

タカミチは歩いていた。
その向かう先はある喫茶店。
先日、もう色々と台無しになった再会のやり直しをする為に。

（……次は大丈夫だよな？いくら霞さんでも2度目は……ありそうでイヤだな～、ハハハ（泣）。）

もうあの虚しい気持ちは味わいたくないのだろう。
なんせ憧れの1人と感動の再会を果たそうとした場面で……アレだったのだ。
その心中は推して知るべし。
しかしタカミチは今度は大丈夫と自分を励ます。
何故なら今回は霞の暴走を止める役のなのはがいるのだから。
そう思い、喫茶店へ着いた。
扉に手をかけ開け……ようとしたが停まる。

（大丈夫……大丈夫だ。今度こそ！）

気をしっかりと引き締める。
……大分、堪えたようである。
数秒、その状態でいて目を見開きいざ扉を開け「あれ？高畑先生かい？」……ようとしたら背後から声が掛けられた。
タカミチは振り向き声の主を確認する。
そこには夜の警備に参加し、来週からは自分の受け持つ生徒である龍宮　真名がいた。

「龍宮くんか。どうしたんだい？」

まさかこの場所で会うとは思っていなかったのか、少し驚いた様子で尋ねる。

真名は

「いえ。この店で人と待ち合わせをしていて。高畑先生も？」

そう答え、タカミチに聞き返す。

タカミチはまあ営業しているんだから人が入るのは当然かと思い

「ああ、僕もね。というよりこの店の店主と少し知り合いでね。最近になって店を開いたから来て欲しいと言われてたから。今日は空いた時間ができたから、それで来たんだ。」

霞の事は他言無用と約束していたので、誤魔化し答える。

真名はそうかいと言い、タカミチの横を通り店に入ろうとした。

それをタカミチは慌てて止める。

「ッ！？待つんだ、龍宮くん！！」

いきなり止めてきたタカミチに驚いた真名は止まりタカミチにどうしたのかと尋ねた。

タカミチは苦虫を潰したような顔をして言う。

「いや、ここの店主はその……悪戯好きでね。もしかしたら僕が入ってくると思って何かを仕掛けていると思ったから。だから、僕が先に入ってもいいかな？」

真名は理由を聞き、別に問題なかったし、もしその悪戯が本当にあ

るなら引っかかりたくない気持ちもあったので了承した。
タカミチは自分の生徒にあんな光景は見せてはいけないという教師魂を発揮した。
そしてタカミチは意を決して扉を開けた　……

「ぬ？すまんがまだ営業は……なんじゃタカミチか。霞はまだ寝ておるから、待っておれ。」

テオドラがいた。
……Yシャツ一枚で

バタンッ！？

速攻で扉を閉めるタカミチ。
中では

「テオ！？そんな格好で店内をうろついちゃダメだよ！」

「むぅ、良いではないか。フェイトとて時折寝ぼけながら下着姿でうろつくではないか。その点妾はちゃんと寝間着を着ておるからマシじゃろう。」

「ッ／／／！？それはそうだけど……って、違うよ！！そうじゃなくて……！」

「……。」

中の会話を聞かないようにタカミチは真名の方へ向き、告げる。

「……ちょっと待ってようか。」

真名も中の騒ぎが少し聞こえたのだろう。

「そうした方がいいね。」

賛同した。

だが、そこに2人にとって救いの手が降りた。

「タカミチか。……それと…誰じゃ？」

その声に2人は顔を横に向ける。

そこには買い物袋を持ったアリカが立っていた。

事情を聞いたアリカは店に入り、タカミチともう1人客が来ている事を告げ騒ぎを鎮め2人を招き入れた。

タカミチと真名が別々に座ろうとすると

「こんにちは。タカミチくん、それとあなたが龍宮　真名さんだよね。」

なのはが奥から現れ2人に声を掛けた。

タカミチはなのはが真名の事を知っているのに驚き、真名は自分の事を何故知っているのかという疑問を抱いた。

「ごめんなさい、事情は聞いてるの。ちょっと待っててね、もうすぐ彼も降りてくるから。その間、何か食べたい物か飲みたい物があれば教えて。用意するし。タカミチくんは珈琲でいいかな？」

そのなのはの答えに真名は聞きたい事があるが抑え、言われた通り餡蜜があればと言う。タカミチもなんとか頷く。

「じゃあ、そこのテーブルに座って待ってて。すぐに持ってくる。アリカさ～ん、珈琲と餡蜜をお願い。」

なのはは奥に入っていき厨房にいるであろうアリカに声を掛けた。

それを見送った2人は

「……どうやら龍宮くんの待ち合わせ相手と僕の相手は同じみたいのようだね。」

「そうみたいですね。高畑先生は彼が何者か知っているんですか？」

「うん、よく知っているよ。僕の憧れの人達の中の1人だから。というか龍宮くんが彼と面識があるのに驚いたよ。」

「そうですか。私は先日の警備の時に助けてもらったんですよ。その時に口止め料として奢ってもらう約束と事情を話す約束をね。」

「そうか。相変わらず他の人に知られるのは嫌いのようだな、彼は。」

「みたいですね。他の魔法先生の気配がしたらサッサと帰ろうしていましたし。」

「ハハハッ。」

タカミチと真名が霞の事を知っている経緯を話し、少し和んでいると

「珈琲と餡蜜じゃ。上手く出来ているか、わからんがの。」

アリカが2人の頼んだ物を持ってきて2人の前に置きながら言う。

「ありがとうございます、アリカさ…さん。」

「うむ。そちらも。良ければ忌憚ない意見を聞かせて欲しい。他人に出すのは初めてでな。それと試食みたいな真似をさせて申し訳ない。」

そう言われた真名は出された餡蜜を視るが見た目は全く問題ない…というより他の店より断然いい。

スプーンを取り、掬い口に運ぶ。

「……美味しい。」

自然と口に出した。

それを聞いたアリカはホッとして

「それは良かった。」

と言う。

「これはアリカさんが？」

「そうじゃ。テオも一応出来るぞ。霞の教えでな。店をやるなら全員がメニュー全てを作れるようにと言って教えられたわ。」

「そうなんですか。やるなら徹底的、相変わらずですね。」

「霞じゃから仕方がない。」
アリカとタカミチが言葉を交わしている間に真名は食べ終わってしまった。
それに気づいたアリカが

「お代わりはいるか？」

「いいんですか？」

「霞からの言伝でお主が来たら好きなだけ注文して良いと言われておるゆえ。遠慮はしなくていいぞ。」

「では、お願いします。」

アリカは器を下げ厨房に戻っていく。
真名はほぅっと息を吐く。
それを見たタカミチは微笑みながら

「気に入ったようだね。どうだったんだい？」

「本当に美味しいですよ。正直言って、他と比べようがないです。もう、他の店のはあまり食べれそうにないぐらい。」

タカミチが問いそれに答える。
それを聞いたタカミチは

「そうなんだ。……まああの人の事だから何か特別な調理法でも考えついたのかな？」

そう言う。
真名はそれを聞き質問する。

「何故そんな事が言えるんですか？」

「彼の性格からしてね。やるなら徹底的にやる。それがどんな事でも。やる事なす事の殆どが規格外。だから、彼がやる事に一々驚いていたら身が持たないよ。」

嬉しそうに言うタカミチ。

「嬉しそうですね？」

「うん？ああ、ごめん。少し浮かれてるようだ。彼と会い話せる事に…ね。」
真名は思う。
このタカミチ・Ｔ・高畑、本国ランクＡＡＡクラス、あの紅き翼に所属していて現在では知らない人が少ない程の有名人、戦闘においては現在の魔法世界において最強クラスと言ってもいい人にここまで言わせる人物。
更なる興味が湧く。
すると

「ふぁ～、ねむ。……タカミチ～……死ね、バカ。こんな早く

に来やがって。そこの嬢ちゃんはゆっくりしていっていいよ。俺が呼んだんだから。」

噂の人物が店にきた。

「霞さん、ひどいで……何してんですか（呆）。」

「……私はどうやらまだ寝ぼけているようだ。」

「龍宮くん。ちゃんと起きてるから。」

「しかし高畑先生。私と会った彼は二十歳ぐらいの男性だ。……こんな9歳の子供じゃなかったんだ。」

タカミチと真名が見た霞は9歳児姿だった。

「おお!?すまん。昨日、なのはと「霞くん!?」……まあ、気にするな。ごめん、もう少し待ってて。」

言いかけた霞はなのはの叫びに止められまた奥に戻る。入れ違いになのはとフェイトが入ってきた、麻帆良女子中の制服を着て。

真名は先程の大人のなのはを見ていたので、今のなのはの姿に驚く。やはり自分は寝ぼけているのかと疑心暗鬼になっているとなのはが

「あはは、ごめんね。事情を説明するなら最終的にこの姿を見せていた方が早いかなと思って。じゃあ改めて、私は陽神　なのはって言います。来週から同じクラスに編入するからよろしくね。」

「私は初めましてだね。フェイト・T・陽神、よろしく。私もクラスメイトになるよ。」

2人が自己紹介する。
真名は更に驚く。
同じクラスに編入はさほど驚くことではない。それよりも2人が名乗った名前に聞き覚えがありすぎたのだ。
その名前は有名だから。あの紅き翼と共に行動し大戦時に紅き翼と同じぐらい活躍した《白き仙姫》《黒き仙姫》と同じだから。
真名はタカミチに顔を向けると

「龍宮くんの想像している通りであってるよ。彼女達は本人だ。」

紅き翼に所属していたタカミチがそう言うなら本物だろうと信じる。
そうすると次々と疑問が湧いてくる。
何故、彼女達がここに?
何故、中学生姿に?
この姿は幻術じゃない、ならどうやってこの姿に?
じゃあこの2人の側にいる彼は何者?
……等々。
すると、真名の疑問が増える要因である人物がさらに出てきた。

「なんじゃ、まだ霞は来ておらんのか。妾も相席して構わんかの?」

ヘラス帝国第三皇女テオドラである。
彼女は魔法世界の外交でメディアにも出ているので顔を知っているものは多い。
真名も職業柄、もちろん知っている。

「なっ!?何故ここに帝国の第三皇女が!!」

「おっ?妾を知っておるか。いや~、妾もなかなか有名人なのじゃ

な。」

「いえ、テオドラ様。かなり有名ですから。というか僕も疑問なんですが、何故ここにいるんです？帝国は大丈夫なんですか？皇女がいなくなれば問題が起きるはずですが、向こうではそんな騒ぎは起きてないですし。」

「ふむ、そうじゃの。なら、タカミチに最も分かりやすい言葉を送ろう。納得もするじゃろぅし。……霞のおかげじゃ。」

「……あ～、分かりました。充分すぎます。ありがとうございます。……そうですよね、あの人がいるんですから当然ですよね。むしろ、その考えに行き着かなかった僕が馬鹿でした。まだまだだなぁ。」

タカミチは納得した。
真名は霞の事を知らないのでいまだに理解できない。
タカミチに聞く。

「高畑先生はそれで理解できたのかい？はっきり言って私には全然わからないんだけど。」

「ごめんごめん、龍宮くんはまだわからないか。まあ、それは当人が戻ってきたら教えてくれるよ。とりあえず言えることは、霞さんだから仕方ない。としか。」

「まあ霞じゃしのぅ。」

「おいおい。非道い言いようだな、２人共。タカミチは後で雷公鞭

地獄をプレゼントしてやる。テオは……帝国に戻すぞ。」

元の姿に戻った霞が入ってきた。

「それは……ちょっと勘弁して欲しいですね、ハハッ。」

「ふふん、霞よ。妾が戻っていいなら戻るぞ。愛しの嫁が戻っていいなら……の。」

タカミチは苦笑い。
テオは余裕。
霞はテオの言い分に

「……最近、テオに可愛げがなく俺的に不満です。」

当然の如く負ける。
真名は霞とテオドラの会話の中に会った単語が気になった。

「……嫁？帝国の第三皇女が？そんな情報は聞いた事がないんだけど。」

「それはそうじゃろ。一応、最高機密じゃからの。妾としては公式に発表しても構わんのじゃが。」

「勘弁してくれ。そうなると俺も名が知れることになるから。絶対にウザい。そうなると思わず魔法世界を潰すかもしんない。……メガロを潰すならそれもアリかな……。」

「霞さん、それは本当にやめて下さい。あなたが言うと洒落になりません。」

「そうじゃの。わかっておるからやめるのじゃぞ、霞。」

「そうだよ、霞くん。……せめて帝国は残さないと。テオの故郷なんだから。」

「なのは、セラスがいるアリアドネーも残しておいた方がいいよ。」

「なのはさんとフェイトさんまで……orz」

「……タカミチ、すまんの。妾では止められん。」

「「アハハ、冗談だ（よ）」」

「……心臓に悪いですよ（泣）」

「全くじゃ。」

「えっ？冗談なの？」

「「「「えっ？」」」」

「ほれ、お代わりじゃ。すまんの、騒がしくて。妾はアリカじゃ。よろしくの。」

「ありがとうございます。龍宮　真名です。」

ついていけない真名はアリカが出した餡蜜を食べることにした。

「さて、仕切り直してっと。まずは……タカミチ…はほっといて、嬢ちゃんの方からいくかな。色々、聞きたい顔もしているようだし。」

霞が全員テーブルについた事を確認しながら言う。

真名は少し憮然として抗議する。

「嬢ちゃんはやめて欲しいね。」

「ああ、悪い。名前は知ってるけど、本人の自己紹介なしで呼ぶのもなんだと思ってな～。先に名乗るな、俺は陽神　霞。よろしくな。」

「私は龍宮　真名。真名でいいよ。後、先日は危ない所をありがとう。霞さん……でいいかい？」

「いいよ。……そういや刹那は大丈夫だったか？」

「ああ、全く怪我はなかったよ。本人も驚いていたけどね。……あれは霞さんが？」

真名と霞の会話に出てきた刹那の名前にフェイトが少しだけ反応し

たが、今は聞かないでおいた。

「ああ、あいつが小さい頃に会ってな。その時、御守り代わりに渡した指輪に少々細工をな。」

「そうか。まあそれは事情がありそうだから聞かないでおくよ。」

「ん。まあ刹那に聞けば案外教えてくれるかもな。次は？」

「そうだね……じゃあまずは先に、そこにいる……」

真名がなのは達をなんて呼べばいいか迷っていると

「なのはでいいよ。私も真名ちゃんって呼ばせて貰うから。」

「私もフェイトでいいよ。真名でいいかな？」

なのはとフェイトが答える。

「……構いません。改めて、なのはさんとフェイトさんの関係についてかな。名字が一緒だけど？兄弟なのかな？」

「いんや、２人は俺の嫁。ちなみにそこにいるアリカも。」

霞の答えに思わず

「……はっ？」

真名は呆ける。

霞は気にせず

「ちなみに俺が主で2人は本契約者。アリカとテオは仮契約者。」

と言う。

その答えに真名は若干思考停止。

しかし、霞の言葉に反応する意外な2人がいた。

「「どういうことじゃ！？」」

アリカとテオドラである。

タカミチも驚いたが、アリカとテオドラの反応にも驚いた。

「アリカさんとテオドラ様も知らなかったのですか？」

「うむ、てっきり仮契約者だとばかり…。」

「妾もじゃ。それに本契約を2人行えるなぞ聞いたことがなかったので、4人全員は仮契約者だと思い込んでおったわ。」

「まあそうですよね。」

そんな3人を見て霞は首を傾げ

「あれ？前にテオの城で俺の契約体質を話した時に言わなかったっけ？」

「言っておらぬ。契約をすればどうなるかということだけじゃ。」

「妾もそう記憶しておるの。まあ、あの時は自分の身体が成長した

嬉しさで曖昧じゃが。」

「僕もですよ。」

霞はなのはとフェイトを見る。

2人は頷く。

「あはは、まあそれはいい「「良くはない！」」……はい、すいません。どうすれば許してくれますか？（泣）」

「「妾達も本契約がしたい！！」」

アリカとテオドラが揃って言う。

タカミチが聞く。

「しかし、霞さん本契約ってまだ出来るんですか？」

その疑問は尤もだがアリカとテオドラがお決まりの台詞を言う。

「「霞じゃから大丈夫！」」

「……そうでしたね。」

納得したタカミチ。

アリカが詰め寄る。

「で、霞どうなのじゃ？するのか？させて欲しいのか？答えよ。」

「あれ？その選択肢ってＮＯがないんですけど（汗。」

「大丈夫じゃ。必要ないのでな。」

「……さいですか（泣）。まあ、いけると思うし、また後で。真名をほったらかしにしてるし。」

霞の言葉にアリカとテオドラは満足し席に座る。
なのはとフェイトはアリカとテオドラならいいと思ってるので静観したまま。
真名は霞に言われ、戻ってきた。
そして我に返った真名と霞は質疑応答を交わしていく。
途中で霞が星を破壊する事ができると聞いたとき信じなかったのだが、霞が別荘に連れて行き実際にやったら乾いた笑いしか洩らさなかった。

真名の質問が終わった霞は自分の事は内緒にしておいてくれ、なのはとフェイトが来週から同じクラスに通うからよろしく、等を頼んだ。
真名はそれに了承し霞はお礼に

「ありがとな真名。代わりにといっちゃなんだけどコレをやるよ～。」

真名に渡す。
真名は受け取り手の中の物を見ると

「指輪……霞さん、これは？」

「それは刹那と同じ…ではないけど似たような物でな。効果は……

…だ。御守りに持ってな。」

真名は快く貰っておいた。
指輪をどうしようかと考えた時に少しだけ悪戯心が働き

「じゃあ付けさして貰うよ。」

と言いながら霞達に見える様に嵌めた。
左の薬指に。
まあ当然の如く反応する４人組。
流石にそこまで鈍くない霞も意味は分かるが、真名の悪戯だとはわかっているので程々にしてくれと言った。
真名は少し笑い了解と返事をし指輪を……外さずに紅茶を飲んだ。
４人組は「まさかね～」と思いながらも不安に思ったのか真名を別テーブルに連れて行き話し始めた。
霞はあまり苛めるなよ～と言葉を掛けた後、今度はタカミチと話し始める。
タカミチは自分の事、ガトウの事、アスナの事、等の報告をし霞はそれを聞きながらタカミチに一言
「頑張ってんな～」とそれだけを言った。タカミチは初め霞が何故そんなに他人事なんだと思ったが霞が以前言っていた言葉を思い出した。

「俺はな、そいつ自身の行動にあれこれとあんまり口を挟まない事にしてんだ。そいつにはそいつなりの理由があるんだろうしそれを理解するなんて俺にはできないし、しようとも思わない。そいつ自身じゃないからな。余程の事じゃない限り…な。だから、あんまり俺に期待すんなよ？俺は俺のやりたいようにするし、時には迷惑すらかけるからな、ハハハッ。」

それを思い出したタカミチは頭を落ち着かせた。
霞は気にせずタカミチに次を促す。

「はい。じゃあ霞さん達はいつ麻帆良に？それとなんでなのはさんとフェイトさんが中学生に……。少し前にヘラスに連絡をしてみたらいないと返ってきたんですが…。」

「あ～、それはな～。半年ぐらい前から、京都のナギの別荘に黙って居座ってた。ヘラスを出たのは……

半年程前

「のう、霞よ」

霞達が部屋で寛いでいた時にアリカがふと聞いてきた。

「何？」

「いやの、少し前に思ったのじゃが……今の妾達は、俗に言うヒモと言われる状況なのかの？」

その言葉を聞き固まる霞となのはとフェイト。テオは別にいいではないかと気にしていなかった。
霞は考える。

（確かに……。一応、テオの護衛という名目だけど実際は遊んで暮らしてるだけ……なのはとフェイトはまだ何かを手伝ってるけど、俺は。……これは由々しき事態だ！あまりの快適な暮らしに今の俺はニートと言われてしまっても間違いではない。……クッ！？何か負けた気がする。これはすぐにここを出るべきか？）

霞はなのはとフェイトに視線を移すと同じような事を考えていたのか2人も霞に視線を向けてきた。
3人は頷く。

「「「今すぐ出よう」」」

……というわけだ。で、適当に何をするか？と考えた結果が。」

「喫茶店……ですか。それでは何故麻帆良に？メガロのお膝元なんてあなたは嫌がりそうですけど……。」

「いや、黙って居座ってた時にミスって詠春にバレてな。散々、説教を喰らった後に事情を話したらここの土地を紹介して貰ったんだよ。メガロの膝元だけど皆も別にいいって言ったし、見つからないように各人が認識阻害を常時張っときゃいいだろっていう結論も出たし。バレたらバレたで……アレだ、雷公鞭片手にお願いしたら黙ってくれるだろ。
で引っ越してきた。来たのは一週間ぐらい前で家はちょっとした裏技で建てた。ちなみにこの店にも特殊な術がかかってるから5人の

内の誰かの許可がないと見つかんないようにしてる。もう一つ言うなら、俺達の認識阻害も同じで自身がＯＫだと判断した人物以外は気づかない。わかったか？」

霞の説明に何故自分がなのはとフェイトに気づいたのかも理解できたタカミチは了解の返事をした。

「なのはとフェイトが中学生になったのは……聞いとく？後悔するかもよ？本当に聞いちゃう？」

霞の言い方にタカミチは何か重大な事でもあるのかと不安な気持ちになった。

だが、知らずに事件が起こるよりも知っていた方が対処しやすいと考えたタカミチは聞きますと答えた。それを聞いた霞は重々しい口調になり告げる。

「これはな機密事項なんだが、タカミチだから話すぜ。……実はな……。」

「（ゴクッ。」

溜める霞。

タカミチは霞がここまで深刻になる程の事かと唾を飲み込む。

「……」

「……実はな、なのはとフェイトの麻帆良制服姿が見たかったからなんだ。絶対に似合うと思ってな。」

「……はっ？」

「だ～か～ら～、なのはとフェイトの制服姿が見たかったんだよ！！本当はアリカとテオの制服姿も見たかったんだけど肉体年齢操作が出来るのはなのはとフェイトだけだから2人で妥協したんだよ！これでも迷ったんだぜ？2人の愛しい制服姿を他の野郎に見せるのは嫌だけど見たい願望もあってな。我慢した。わかるだろタカミチ？」

「何言ってんですか、あんたは！？理解出来ないですよ！！そんだけのために中学に編入って！アホですか？アホなんですか！？って霞さんだからと納得する自分が嫌だ！というかどこが機密なんだ！！機密の意味を百回ぐらい辞書で調べてきて下さいよ！」

「なっ！？タカミチてめえ！なのはとフェイトの可愛らしさは機密並みだろうが！！それとも何か？あの2人に魅力がないっていうんか！？」

「違いますよ！？別に2人に魅力がないとは「あっ、霞くん。この前学園長室に行った時に、タカミチ君に口説かれたよ～。ね？フェイトちゃん。」「え？あ、うん。……なのは、今言ったら……。」……霞さん、僕はこれで失礼します。また今度「まあ待て（ガシッ」……はい（泣）」

「タカミチ……成長したな。人の嫁さんを口説こうなんて。しかも中学生姿の時に……。おまえは変態（アル）と同じだな、このロリコンが！（ペッ」

「……ロリコンｏｒｚ。……変態（アル）と同じ……。死んだ方がマシだ（泣）」

死のうと言うタカミチ、それを見て笑いながらはやし立てる霞、慌てて止めに入るなのはとフェイト、呆れて静観するアリカ、真名とデザートについて討論するテオドラ。
こうした騒ぎの中、今日という日が過ぎていった。

その頃の変態（アル）

ピキーン。

「む。何やら不快な気配と同志（ロリコン）が増えた感じが……。まあ、いいです。しかし、霞から贈り物が届くとは珍しいですね。今はどこにいるのやら。というか私の居場所を何故知っているんでしょうかね？……相変わらずのバグ何でしょうが。」

何かを感じとりながら呟き手に持っている箱、霞の贈り物とやらを開けてみる。
その中には
９歳姿のなのはとフェイトとアリカとテオドラ（２人は年齢詐称薬を使用）に囲まれキスをされている写真。
手紙も入っており、それには一文

{フハハッ、羨ましいか？この変態（ロリコン）が！？}

グシャッ！？

アルは手紙を握り潰す。

「フフフッ……霞……次に会ったら……殺します＃」

笑顔で、しかし殺気を漲らせ黒いオーラを醸し出し物騒な事を呟くアルがそこにはいた。

実際ヒモだったよね（後書き）

真名の霞に対する認識が人間じゃないに変化されました。
四宝剣で仮地球を吹っ飛ばしたんで。

後、霞は作中においては本契約者を7人と予定しています。
既に4人、後はエヴァ、真名、茶々丸。
後は仮契約。
本契約が何故7人かは……わかる人はわかるでしょう。
もしかした8人になるかもですが。

まあこれはメンバーは別として当初考えていた事（本契約人数）なので変えるつもりもありません。

後、ハーレムメンバーを真剣にしっかりと決めて固定しようかなと思います。
あんまり多すぎると話数が増えすぎて物語が進まないし。

基本予定（4人は略します）
エヴァ、真名、茶々丸ぅ～、木乃香、刹那、＋1人～3人ぐらいです。

タグに書いてなかったんですがこの作品はアンチになる時もあればならない時もある。
この話で霞の言葉通り「あまり口出しはしない。余程の事がない限り」というスタンスですので。
じゃあ、タイトルの破壊って何だ！と思いますよね。
霞が色々と破壊していくことだとしか。その過程で原作も破壊される所がある。

現在
ナギとアリカのカップル壊す（ドナルドのせいだが）
テオの魔法世界の住人が旧世界に来れないという根幹を壊す
大戦時に混成部隊の活躍を壊す（主になのはとフェイトが）
ケルベラス渓谷の理を壊す
とある死亡フラグを壊す
アルとタカミチのキャラを少し壊す

などなど

まあそういうわけなんで。

こんな作品でも構わないというのなら今後ともよろしくお願いします。

最後にハーレム候補

超（太極符印もしくは開天珠）
千鶴（空間タイプの宝貝）
千雨（思考中）
悠奈（遠距離タイプの宝貝）
古（土竜爪辺りの近接宝貝）
水のアーウェルンクス、６（混元珠辺りもしくは意表をつく宝貝）

そしてこの面子はデフォでミステリアスヴェールを装備

と考えてます。この面子で「いやこの面子ならこの宝貝が！！」という意見があれば言ってください。バグに相応しい感じにしたいので

なかなかイメージに合う宝貝が……。

ではまた次回に～

美幼女の涙目って最強だよね。（前書き）

心して見よ！！！
これが！！
エターナルロリータの！！
最終兵器だ！！！！！！

特に意味はありません。
キャラがかなり崩れてます。
ご注意を

美幼女の涙目って最強だよね。

タカミチと真名が店に訪れてから少し時が経ち、5月のある日
その日、霞とアリカとテオドラが店番…といっても客は今の所、タカミチと真名だけ。
商売としては全く微塵もダメな展開だが霞達はここに移る前にとある長期依頼一件と討伐依頼を受諾しまくり稼いだためしばらくは安泰な生活を送れるぐらいの金はある。
ぶっちゃけ店は趣味であった。
それでも出すものは最高を。
それが霞クオリティー。
閑話

「はぁ～、暇だね～。まあそれがわかっててやってるからいいけど。何か面白い事起きないかな？」

「ダラケておるの、霞は。それならお主もなのは達みたいに学校に行けばよかったではないか？」

「それは嫌だ。学校にはあんまり良い思い出がない。」

アリカの提案に顔を歪め答える霞。
興味を示したアリカが霞に聞こうとしたら

カラ～ン

店の扉が開いた。

霞はカウンター席から振り返らずに言う。

「タカミチ～、真っ昼間から教師がサボっていいのか～？もしくは真名か～？ちゃんと授業に出ろ～。」

だが返事が返ってこない。疑問に思っていると

「霞。新規の客じゃぞ。」

「貴様、何者だ？タカミチを知っていて、尚且つ龍宮まで知っているとは。裏の者か？……チッ、なら失敗したか。」

「マスター、落ち着いて下さい。申し訳ありません。すぐに出て行きますので。」

アリカと聞き覚えのある声と初めて聞く声がした。

霞はあるぇ～？と首を傾げ……思い出した。

「ああっ！？エヴァには認識阻害の対象外にしてたんだ。」

それを聞いた3人はそれぞれ反応する。

「エヴァ……それにあの顔……ああ、《闇の福音》か。どうりで見たことがある感じがしたの。」

「……本当に何者だ？こっちを向け貴様。それと馴れ馴れしく呼ぶな。」

「？？？」

霞がエヴァの要求通りに振り向き、挨拶をする。

「エヴァと呼んでいいって許可したのはそっちじゃん。ならキティちゃんと呼ぼうか？それと隣の可愛いお嬢さんは初めまして、俺はこの店の店主で陽神　霞。よろしくな。アリカ、２人に紅茶でも淹れたげて～。」

「うむ、了解した。」

「／／ありがとうございます。私は絡繰茶々丸と申します。よろしくお願いします。」

霞に言われた通り厨房に行くアリカ。
可愛いと言われほんの少しだけ顔を赤らめながら自己紹介をしてお辞儀をする茶々丸。
だが、エヴァからは何も反応がない。
霞は不思議に思い、エヴァを見ると

「うぉっ！？何で！！」

思わず声が出る程、驚いた。
何故なら、エヴァは目の端に涙を溜め、口を噛み締めプルプル震えながら霞を見ていたから。

「マスター…（オロオロ、ジィー。」

茶々丸は見たことのないエヴァに困惑する。……しっかりと可愛らしいエヴァを録画しながら。
そしてエヴァの癇癪が爆発した。

「霞ィーーー!!?貴様今まで何処で何をしていたのだ!!一体、何年待たせるつもりだ!?もう15年は経ったのだぞ!約束は3年だったろうが!!待てども待てども全く来ず!あの鳥頭も来ず!!何回、中学生を繰り返したとおもっているのだ!!!責任を取れ!?早くこの呪いを解け、そして私のものになれ!後、キティと呼ぶな!!ちゃんを付けるな!!そして、そこのボケロボ!何を録っている、巻くぞ!?」

怒涛の勢いで霞に詰め寄り捲くし立てる。霞は「何を言ってんだ、この幼女は?」と疑問に思いながら

「怒りながらもちゃんとツッコミを忘れない所に芸人魂を感じるぜ。エヴァ…やるな!?……茶々丸、キミのマスターはM一〇グランプリで優勝できる可能性があるぞ、良かったな。」

「芸人ではない!!茶々丸におかしな事を吹き込むな!?」

「私はレッドカー〇ットの方が…。」

「「何故、知ってる（いる）!!?」」

茶々丸の返答に霞とエヴァは思わずハモった。

「ぬ?アリカ、誰か来ておるのか?随分と騒がしいのぅ。」

「テオか。あまり夜更かしはするなよ。どこで霞と知り合ったかは知らぬが、新規の客じゃ。《闇の福音》じゃな。」

「はぁ、またか。しかも今度はダーク・エヴァンジェルとは……。霞も手が広いのぅ。」

「霞じゃしの。まあそんな霞に惚れてしまったんじゃ、仕方なかろう。」

「そうじゃな～。一応、なのはとフェイトにも念話で報告しておくかのぅ。」

「よろしく頼む。妾は紅茶を持っていく。テオも2人に連絡を終えたら席に来るがよい。」

「了解じゃ。」

厨房の中で騒ぎを聞きながらそんな会話をする2人。

アリカが持ってきた紅茶でひとまず落ち着き一息入れた所で、テオドラも店内に入ってきたため5人はテーブルにつく。

霞はとりあえずエヴァに問う。

「そういえばさっき言ってた呪いを解きにくるとか言ってたけど、何のことだそれ？……まさかとは思うけど、ナギをくだらない何かの理由で追いかけ回した挙げ句、油断した所をナギの姑息な罠…そうだなぁ…落とし穴とかに嵌った後、その中にはエヴァの苦手なニンニクとかか？…そんなものを混ぜ合わせた水があり力が抜けた所をナギが適当にしかも強引にかけたバグった呪いのせいで麻帆良に縛り付けられた。ナギは適当に約束をした後に去ったが、その

約束は守られずいざ解除しようとしてもバグった呪いは誰にも解けなくてどうにも出来なくなり、中学生をずっと繰り返すという苦渋を舐めつつナギか俺を１５年間も待つ羽目になった所でようやく俺に会えた……な～んて事はないよな？ちなみに俺はなにも聞いてないがな。いやいや、しかしそんな事はないと思ってるよ、俺は。だってエヴァはあの天下の吸血鬼！真祖にして最強と謳う吸血鬼！賞金首６００万ドルの《闇の福音》ダーク・エヴァンジェル！魔法世界のナマハゲと言われ恐れられているエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルさんともあろう方が！……まさかねぇ～。で、どうなの？（ニヤニヤ」

そして霞は茶々丸に視線を送る。
茶々丸がそれに気づいた。

『茶々丸ぅ～、録画準備を！』

『既に完了しております。後、茶々丸です。』

『流石、茶々丸ぅ～。できた従者だ、嫁に欲しいぜ！』

『恐悦至極。後、茶々丸です。それと嫁は無理です。』

すごく息のあったアイコンタクトを交わす２人。
アリカとテオドラはそれを呆れてみる。
そして４人は沈黙しているエヴァを見てみると

「ぅう、グスッ。……なまはげじゃ…ない…グズッ。」

泣いてた。
めっちゃ泣いてた。

霞とアリカとテオドラの心は一つになった。

（（（何だ（じゃ）！？この可愛い生き物は！お持ち帰りィー（じゃぁー）！！）））

茶々丸はフルフルと震えながら

「ああ！マスター、なんて可愛らしい！？（ジィー。」

感動していた。

そこへ更なる闖入者が現れる。

「「「霞くん（さん）！！」」」

テオドラの報告を聞いたなのはとフェイト、そして2人の報告を受けたタカミチが心配（エヴァの）になり駆けつけた。

店内を見た3人は

「……霞くん……エヴァンジェリンさんを泣かせて何をしているのかな？」

「（ポタポタ。マクダウェルさん……可愛い！？……霞…こんな可愛いマクダウェルさんに何をしたの#？」

「ちょっ、フェイトさん！？鼻から血が！というか、霞さん！エヴァに何をしたんですか！？エヴァが泣くなんて余程の事ですよ？」

なのはは霞に対し静かに怒り、フェイトは鼻から愛を溢れさせながら霞に怒り、タカミチはどうせ霞が悪いと思い糾弾する。

霞がなんで自分だけ！！と思って抗議しようとするが

「「霞じゃぞ」」

アリカとテオドラが揃って告発する。
間違ってはいない。
それをしっかりと聞いたなのはとフェイトは

「「じゃあ霞(くん)、ちょっと裏へ逝こうか。」」

ズルズルッ。
もちろん霞を連行する。
霞は絶望したかのようにうなだれ諦めた……自業自得なのに。
タカミチはエヴァを慰め、茶々丸は愛らしいエヴァをずっと録画している。
エヴァは呟く。

「グズッ、ガズミのバガァ…ヒック。ようやぐ……会えだよぅ…グスッ。」

霞と再会した喜び、積年の想い、それなのに意地の悪い事を言ってきて反論できない悔しさ、色々な想いが自身の内で混ざり、溢れ、涙が止まらない。
ここにエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの停滞していた恋の歯車が再び動き出した。

美幼女の涙目って最強だよね。（後書き）

※ＣＶは各自で妄想して下さい

次回予告

想い人と再会したエヴァは再び動き出す。
そして彼女は懇願する。
その気持ちに理解を示す女達……。
神（笑）は願いを受け入れた。
だが、それは思いもよらぬ形で現れる。
麻帆良都市の壊滅。
霞パーティーの全滅。
世界消滅の危機。
全てが彼女の小さい肩にのし掛かる。

彼女は決断する。

「やる。やってやる！私は…私は！？エヴァンジェリオン初号機、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・陽神だ！！」

次回！？

ファーストキスはテリヤキ味？

次も、契約♪契約～♪

茶々丸
「この作品は作者の嘘5割、ドナルド4割、ノリ1割の提供でお送りします。実在の人物・団体名とは一切関係ありません。あしからず。」

チャチャゼロ
「イモウト、イキナリナニイッテルンダ？コワレタカ？」

茶々丸
「ねぇさん……いえ、何故か言わなければいけないと思いまして。」

チャチャゼロ
「オイ、ゴシュジン。イモウトガホンカクテキニヤバイゾ。」

エヴァ
「来た！！遂に私の時代が来たぞーー！？アーーハッハッハッ！」

チャチャゼロ
「……ダメダ、コリャ。」

嫁達
「「「「また見てね～」」」」

大丈夫かな、この作品……。

変態（アル）を敵に回すようです（前書き）

読み専になっていたのと仕事で疲れたため更新がかなり遅れてしまいました。
サーセンｍ（＿＿）ｍ

そしてエヴァとの契約をどうやって持っていこうかと考えた末の……駄文ｏｒｚ

絶望した（泣）。

そんな内容ですが、よろしければどうぞ
（Ｔ＿Ｔ）

変態（アル）を敵に回すようです

エヴァがなんとか泣き止み落ち着きを取り戻した後、そこにはズタボロの霞とニコニコ微笑むなのはとフェイト、ようやくかと待ちくたびれたアリカとテオドラ、最近心労が溜まりやすくなったタカミチが溜め息を、茶々丸はボーッとしているが内では先程の愛らしいエヴァの動画及び映像をフォルダに保存し厳重にロックを掛け誰にも覗けないようにする作業を行っていた。
エヴァがようやく口を開く。

「約束通り呪いを解け、そして私のものになれ。」

だが霞は約束の事は知らないのでこう答える。

「だから約束って何だよ?俺は何も聞いてないから。そして、なのは達はその視線で人を殺せるような目つきをしないで。……エヴァ、とりあえず説明を早くお願い。割と危ない、俺の命が（泣）」

霞がエヴァに嘆願するような感じで説明を要求したがエヴァは訝しげな顔をして返事をしない。
その視線の先にはなのはとフェイト。
霞はそんなエヴァを見て、どうしたんだろうと、なのはとフェイトは何?みたいな表情を浮かべる。
そこでようやくエヴァが口を開く。

「おい、霞。何故ここに高町とテスタロッサがいる?おまえの関係者か?というかどういう関係だ?」

その質問を聞いた霞はなのはとフェイトの方へ首を向け

「あれ？もしかして２人ってまだ認識阻害を解いてない？」

と聞く。

２人は首を縦に振る。

２人の返事を聞いた霞はエヴァに向き直りなのはとフェイトの事を教え、なのはとフェイトはエヴァに掛けている認識阻害を解く。

なのはとフェイトの事を教えてもらった時のエヴァの反応は

「なっ！？霞！おまえもあの変態（アル）と同じ性癖だったのか！？」

だった。

霞は憤慨しながら反論する。

「違うわ！！あの変態（アル）と同じにするな！？なのはとフェイトは肉体年齢操作ができるだけだから！元は１９歳のナイスな我が侭ボディだから！エヴァみたいな絶壁じゃないから！！」

「ッ！？絶壁じゃない！！！少しはある！！！私だってＡぐらいは「マスターはＡＡです。」…茶々丸！？おまえ！「エヴァ……見栄を張るなよ」やめろ！！そんな憐れんだ目で見るな！！「ちなみに半年程前に寄せて上げるブラを…」言うなァァーー！！…はっ！？何だ、おまえら！その目は！？何だその生温い目は！？」

「……あ…はは……頑張って」

「何を！？」

「その、何じゃ……これからじゃ。」

「不老だぞ！私は！！」

「あれじゃ、エヴァンジェリン。寄せて上げればあったんじゃろ？……（じっ、サッ。」

「……Aぐｒ「いえ、テオドラ様。それ以前の問題でして、着ける事が出来ませんでした。」茶々丸ゥゥーーーー！！」

「エヴァ…その……ッ！？、そうだ！！昔、同じクラスメイトだった小林くんはエヴァが魅力的だって言ってたぞ！？」

「誰だ！？そいつは！！よしんば知っていたとしてもそいつは変態（アル）と同類だ！！」

「マクダウェルさん、落ち着いて。大丈夫だよ、マクダウェルさんは可愛らしく魅力的だから。ね？」

「……テスタロッサ……貴様に言われると余計に腹が立つ。」

「えっ？えっ？」

「エヴァ……しょうがない。フェイトは天然なんだ。許してやってくれ。」

「天然は時に残酷だな……ｏｒｚ」

「違うよ！私は天然じゃないよ！そうだよね、みんな！！」

「「「……（サッ」」」

「タカミチ！」

「え！？いや、その……あっ！？すいません！学園長に呼ばれてましたんで、僕はこれで（ダッ。」

「逃げた。」

「逃げたね。」

「逃げたのぅ。」

「逃げおったの。」

「逃げたか。」

「逃げましたね。」

「タカミチのバカ！って、みんな！話を戻そうよ！？」

「ああ、そうだな。えーと……確かフェイトの胸が１３歳の時点でＤの中間だという話だったか？」

「ッ／／／！？まだＣだよぅ！！……え？何、なのは？なんでそんな目を？」

「……フェイトちゃん……昔、Ｂだって言ってた。……嘘吐いてたんだ。」

「……なのはに聞かれた時は……B…だった…よ……たぶん。」

「苦しいな。」

「苦しいぞ、フェイト。」

「苦しいの、フェイト。」

「苦しいな、テスタロッサ。」

「テスタロッサ様のサイズは明らかにCだと思われます。更に補足するなら、もうすぐDになるかと。」

「フェイトちゃんの天然巨乳ーーー！！（ダッ」

「なのは!?待って!!私は天然じゃないよーーー！（ダッ」

なのはが店を出て行きフェイトが追い掛けていった後、店内はしばらく沈黙が支配した。
そこでようやくエヴァが口を開く。

「いや、突っ込む所が違うだろ。」

そのツッコミに霞、アリカ、テオドラは一言
「フェイトだから」
と。

なのはとフェイトが戻ってくるまでもう一度お茶でも飲んで仕切り直そうとした時

ヒラリヒラリ

エヴァの前に紙が降ってきた。
アリカとテオドラはお茶を淹れに厨房に行き、茶々丸はその2人を手伝いに席を立っている。
霞は目を閉じながら「‥んど……レイなんて……ないか」とブツブツ呟いている。
その為、エヴァ本人以外はその紙が降ってきたのに気づいていない。

「ん?何だコレは?何か書いてあるな……
……ッッ!?!!?」

書いてある内容に驚くエヴァ。
内容は

《やあ。はじめまして。僕はドナルドって言うんだ~♪
霞くんの知り合いだよ~♪
それよりも単刀直入にキッパリズッパリサッパリと言うね~。
エヴァンジェリンさんの“成人した姿になりたい”と云う件ね、霞くんと本契約ないしは仮契約するとなれるから~。
じゃあね~♪
ランランル~♪

ＢＹ　幸せを運ぶドナルドより

追伸

霞くんには契約するまでこの手紙の事を黙っててね☆≫

であった。

エヴァは頭の中でグルグル考える。

（こいつは何者だ？何故……いや、それよりも霞と契約すると大人になれるだと？そんな馬鹿な……いや、むしろこれは絶好の機会なのでは？例え大人の姿になれなくても霞と契約するというメリットはある。大人になれたら万々歳。デメリットは特に思いつかん。……しかし問題は霞が素直に契約に頷くかどうか……まず無理そうだ。なら、不意打ちか。今なら霞1人、契約陣は幸いにいつでもできるように携帯型を持ってきている。……いけるか。……霞には悪いが私の従者になってもらおうか。クックックッ。）

エヴァはそう考え、どんな風に不意を打つか思考する。

その前に少し説明しておこう。

霞の契約体質はドナルド（神）により大分、変質している。

それは契約を行う場合でもそうなのである。

霞と本契約をする場合には“霞と共に歩み、共に支え合う事を誓う”という宣誓をしお互いを愛し合いながら接吻をする、が基本なのだ。

が！！！実はこれはもう一つ方法（バグ）が存在する。

それは女性の方が霞に対して熱烈なしかも純粋な想いを寄せ、唇を交わす事。この必須条件をクリアしておけば本契約になるのである。

テオドラの場合は確かに霞の事が大好きであったが酔った状態で少し勢いでやったため仮契約となった。

アリカの場合は霞の嫁になって確かに愛してはいたが契約を行った際には嫉妬心やらテオドラの対抗心やらが剥き出しになっていたから仮契約となった。

さて、ここでエヴァの想いはどうか。

熱烈な想い↓15年も想い続けている半分ストーカーと化している。
純粋↓根っこは霞めっちゃラブ。他にお嫁さんがいてもいいから、
私を捨てないで!!ぐらい。
そしてドナルド（神）がほんの少し介入している。
これだけの条件が揃うと

「おい、霞。高町とテスタロッサが百合な感じになっているぞ。」

「なっ!!?ズルい!!俺も混ぜろ!……って、いねーじゃッンン!!」

「ンム、チュル。」

パアァァァァ!?

「ぷはっ!?ッッエヴァ!!いきなり何を!?って契約陣!!まさか!?」

「フハハハ!油断したな、霞。これで私の従者だ!!私のものだぞ!やったぞー!……あれ?私の絵?あれ?……私が従者……?」

「そりゃそうだわ。俺は誰かの従者になる事は出来ない体質なんだから。ハァ、ったくエヴァは従者がイヤなんだろ?反古にして……?あれ?」

「おい!?誰もイヤとは……って、どうした?」

「……反古出来ない。あれ?何で?本契約になってる?

……なんで！？」

「なっ！！なんだと！？ということはつまりあれか！その……なんだ／／私と霞は…。」

「……俺の契約体質上、エヴァは俺が生きてる限り繋がったままだな……なんか、すまん。」

「そ、そうか（ニヤニヤ。それは仕方ないな、フフフ。それなら…その、霞と一緒にいてやるか。」

「いや別に一緒にいろとは「駄目だ！！」……さいですか。まあ、俺はエヴァの事は大好きだし別に問題ないから……いいか。」

「／／／（ポンッ！。そうか／／大好きか……エヘヘ、大好きって言われた／／」

エヴァは嬉しがり、霞はそれを見て溜め息を吐きながらまあいいかと思った。

と、いう感じでエヴァと本契約をしてしまった霞。

エヴァの１５年の想いがあればこその方法（バグ）であった。

「ンン！それよりもアレだな。あの手紙はやはり嘘だったか。……少しは期待したんだがな。」

少ししてエヴァが照れ隠しの為に咳払いをし呟く。

その呟きに反応する霞。

「？なんだ、それ？誰かに教えて貰ったのか？確かにテオは俺と契約した瞬間、幼児姿から今の容姿になったけど、エヴァは変化しないな～。」

「む？そうなのか？お前の知り合いのドナルドとかいう奴の手紙に……どうした！？いきなり頭を抱えて？」

エヴァの口からドナルドという言葉が出た瞬間、霞は理解した。せざるを得なかった。

「エヴァ……その手紙とやらは……？」

疲れたような、おこっているような、諦めているような、そんな色々な感情を込めた口調で話す霞。

ほんの少し引いたエヴァは戸惑いながら先程の手紙を渡す。

手紙に目を通した霞だが、エヴァを唆している以外は別に普通だったので拍子抜けした。

「あいつにしては意外に普通過ぎる。……まあいい。けど、あいつが言うからには何か方法があるんだろうけど……。」

そしてエヴァに肉体の操作方法を教えてみるが何も起こらない。

あれ～？と首を捻る霞。エヴァもカードに映った自分の姿をみて

「カードの方も普通に今の姿だな。アーティファクトは……羽衣か？これは。名は如意羽衣…「それだ！？」うお！？いきなりなんだ？」

エヴァの言ったアーティファクトの名前で霞はピン！と来た。

その叫びにケーキとお茶を手に戻ってきた厨房組がどうしたんだと

聞いてきた。
霞はドナルドの書いていた大人版エヴァになれる理由を先程の契約の件も含めて説明するため皆にテーブルにつくように促した。

「ということは、アーティファクトを展開したエヴァンジェリンは大人に変身出来る……ということかの、霞。」

説明を受けたアリカが聞いてきた。

「だろうな。エヴァが具体的にイメージできるものに変身できる。更に強化されている筈の如意羽衣だから、恐らく……変身の限度はあまりないと思う。」

と言う霞だが、そこで霞の脳にある念話が届く。

『ヤッホー、ドナルドだよ♪
上手い事、契約までイったね～♪けど本契約になるとは思ってなかったよ～。
ビックリして思わずドナルドはスピニングバードキックを披露しちゃったんだ～♪
それよりあのね、さっきのキミの疑問に対して教えておくよ。
エヴァ嬢の如意羽衣は一点特化だけ。
大人版エヴァ嬢になれるだけなんだ。
しかし、その場合……全スペックが本来の２０倍ぐらいになった上でキミの支援魔力を受け取るバグ仕様になってるんだ～。しかも、アーティファクト顕現はいつまでも使用可能。要するに大人版エヴァ嬢に魔力とか気にせずにずっとなれると思っていいよ。やっ

たね！これで夜のプロレスごっこも世間の目を気にせずに過ごせちゃう！！

ドナルドは自分の気遣いに感無量しちゃって、思わずストレートパーマをあてちゃうんだ～♪わぁお！？サラサラ～。

ついでだけど、羽衣がないから防御が出来な～いなんて事は心・配・無・用さ☆

大人版エヴァ嬢には強力な多重防御障壁が自動的に展開されているからね♪

そこらへんは適当に確認しておいて。

ロリーに戻りたければ普通にアーティファクトをしまえばいいさ～。

そんな所だね～♪

あっ、キミの倉庫にキミとなのは嬢とフェイト嬢仕様の指輪を5つ入れておいたから他の奥さん方にプレゼントしてあげるといいよ。

ドナルドからの結婚祝いなんだ。』

『（5つ？まあいい）おい、あんた。

もう干渉はしてこなかったんじゃないのか？っていうか色々言いたい事や聞きたいがあるんだが、ひとまず先に聞く。なんでエヴァと契約したら仮じゃなく本契約になった？まず、これを説明しろ。あんたの仕業か？』

『違うんだな～♪まあ……エヴァ嬢が乙女だったって事だよ～。

大丈夫。滅多に起きない現象だから～。

おっと！？時間が危ない、ごめんね。

これからカーネル君とハッスルしにいくからここでサヨナラするよ♪

ドナルドはいつでもキミ（のお尻）を見守ってるんだ♪

じゃあ、またね☆

ランランル～♪』

「ちょっ！？待てゴラァ！！」

ドナルドらしいあまりの一方的展開に思わず怒声を上げる霞。
他の面々は当たり前の様に驚く。
それに気づいた霞は周りに謝り、エヴァの如意羽衣の特性について説明した。

霞から説明を受けたエヴァはアーティファクトを展開し使ってみた。
如意羽衣を纏い、自身の成長した姿を思い浮かべる。

（霞が言うにはイメージが重要……大丈夫、幻術の時の自分を想像しろ。強く、強く……！？）

エヴァの想いに応え如意羽衣が光を放ちエヴァを包む。

カァアアア！！

店内に光が溢れ、視界が白に染まる。

光が収まるとそこには
大人に成長したエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル（幻術使用時と全く同じ）が立っていた。
アリカとテオドラはほぉ～と感心し、茶々丸はエヴァを祝福していた。
エヴァは自分の姿を確認して

「やった!?やったぞ!!本当に大人になれた!?霞!どうだ!?これでもう幼女とは言わせんぞ!」

はしゃぐ。
問われた霞は苦笑しながら

「ああ、そうだな～。１０歳児の時は綺麗で可愛らしいけど、大人のエヴァは綺麗で美人だな。」

と答える。
それを聞いたエヴァは更に嬉しくなり

「そうだろう、そうだろう!?ハーハッハッハッ、私の時代が来たぞォーー!!」

腰に手を当て仁王立ちし高らかに叫んだ。
霞は生温かい目で見守りながら

「中身はあんまり成長してない感じだなぁ～（ズズッ。」

お茶を飲み落ち着く。そこに茶々丸が

「それがマスターですので…。霞様、これからよろしくお願いします。お茶をどうぞ。」

霞に改めて挨拶をしてお茶を注いでくる。

「ありがと茶々丸。こっちもよろしくな。後、嫁になってくれ（キリッ。」

茶々丸にお礼を言いながら、茶々丸に求婚する霞。
当然、茶々丸の反応は

「はい、わかりました／／／」

まさかのＯＫ発言。
そこで２人のやり取りが聞こえたエヴァは流れるようなツッコミを入れる。

「おい、霞!?茶々丸を誑かすな!茶々丸は渡さんぞ!!そして、茶々丸!!主の私を差し置いて何をしているのだ!?」

「エヴァは心が狭いなぁ～。どこぞの親バカ（詠春）並みに厳しいぞ。」

「マスター、女の戦いは弱肉強食なのです。」

「狭くない!!そして私は親バカじゃない!茶々丸、おまえそんな事どこで覚えてきた!?即刻、消去しろ!それとそこの傍観している２人!!おまえ達は霞の嫁だろうが!?霞が他の女にちょっかい出しているんだから何か言ってやったらどうなんだ!!」

「うむ?妾達か?そうじゃのぅ……霞よ、家族が増えるなら家を改築して部屋を増やさねばならぬぞ。」

「妾は風呂を大きくした方がいいと思うのじゃ。流石に今のままでは少し狭いと思うからの。」

「了解～。」

「これからよろしくお願いします。アリカ様、テオドラ様。」

アリカとテオドラの返しに霞と茶々丸が呑気に答える。

「違うだろうが！！何を平然と受け入れてるんだ！？おまえらは私をおちょくっているのかーーーー！？」

「「「「え？今更？」」」」

「うがぁーーーー！！」

こうした騒ぎの中、霞達は新たな家族を迎え入れ、エヴァは６００年の歳月の果てにようやく自分の居場所を得られた時であった。

「納得いかーーーーーーーーん！！！！！」

……それが安息できるかどうかはわからないが。

おまけ？

「またですか……以前の件があるからあまり開けたくないですね。」

アルの手元にまたもや霞からの贈り物が届く。

その贈り物には“祝”と書かれている。

アルは溜め息を吐きながら

「何が“祝”なのやら（カパッ。うん？意外ですね。普通にケーキ

……ですか？ふむ、他意はなさそうですね。なら“祝”とは一体……？」

アルが開けた箱には普通にホールケーキが入っていただけ。
それを見たアルはあまりの普通さに少し拍子抜けしていた。
だが、霞はアルに対する悪戯には命を懸けるほどの猛者である。よって

パァン！！
グチャッ、ベチャッ。

箱を開けると時間差によりケーキが破裂する仕掛けをしていた。
無論、アルの体に破裂したケーキはぶっかかる。
普段なら避けれていただろうが、油断していた直後の上に手に持っていたケーキが近かった故に直撃してしまった。
無言で固まり震えるアル。
そこに何やらヒラヒラと降ってきた。
どうやらケーキの中に入っていたようで、破裂した際に出てくる仕様になっていた。
それには

〝裏を見てみ。アルの希望が……〟

と書かれていた。
裏を見ると

「馬鹿な！？こんな事が！？」

驚愕するアル。
何故ならそれには大人に成長したエヴァが満面の笑みでケーキを食

べている写真があった。
下にはマジックで

｛大人になったエヴァちん。幻術じゃないよ。本当だから。後、嫁になった｝

と。
アルは先程とうって変わり真っ白になる。

「……あの愛らしい私のキティが（泣）。……このまま消えてしまいましょうかｏｒｚ」

この世に絶望したアル（変態）が消え去ろうとしていたそうな。

変態（アル）を敵に回すようです（後書き）

……強引な展開でしたね

本当にすいません。
もう煮詰まり過ぎてこれでいいやと諦めちゃいました。

今回、エヴァと契約しちゃった方法ですけどドナルドが言っていた通り滅多に起きませんので。

茶々丸とはまだ契約していませんし、当分はしないかと。

この作品のエヴァは基本的に霞達が絡むとキャラ崩壊しますのでＳなエヴァを楽しみにしている方は申し訳ないですが諦めて下さい。

さて次回は……霞の奥様方が激突します。
バトります。
ただ、戦闘描写は上手く書けませんがねｏｒｚ

なるべく早く更新しますので
できれば今後ともよろしくお願いします。

天才と馬鹿は紙一重……みたいな（前書き）

ようやく投稿出来ました。
もう仕事がしんどくて文章を打つ体力もなく、サイトにアクセスする体力もなく、ひたすら仕事→帰宅→飯→寝るのサイクルだった。
そしてなんとか書き上げたものの前話の後書きに書いてあったガチバトルがなくなった……もとい忘れてた……。

ハッハー、ごめんなさいｍ（＿＿）ｍ

戦闘描写も上手く書けてない上にご都合主義とか矛盾があったりとか……
出来るだけないように努力したのですが、おかしいぞと思った所は相変わらずスルーしていってくれると助かります。

そんな相も変わらずな作品ですが
どうぞ
お読み下さい。

あっ、嫁が増えますよ。

天才と馬鹿は紙一重……みたいな

「いくよ！！《雷の暴風》！！」

「ちっ！？リク・ラク・ララック・ライラック…」

フェイトが放った無詠唱による《雷の暴風》をエヴァは舌打ちをし迎え撃つ為、詠唱を開始する。

「《闇の吹雪》！」

ズガガガガガ！！

フェイトの魔法とエヴァの魔法がぶつかり合う。
それを見ている霞ととテオドラは感心する。

「エヴァやるな～。ちゃんとフェイトについていってるよ。」

「じゃのぅ。流石は《闇の福音》と言った所じゃな。それより霞。フェイトは今、何割ぐらいで戦っておるのじゃ？」

テオドラの質問に霞は何でもないように答える。

「ん～……大体…６割…いや、５割ぐらいだな。今のエヴァは修行を始めた時のフェイトより少し下ぐらいに位置づけできるな。」

その答えにテオドラはもはや呆れる。
エヴァは現在アーティファクトを使用して大人ｖｅｒとなっており

能力が格段に跳ね上がっているのだ。
そのエヴァを持ってしてもフェイトの5割程、感心や驚愕等を通り越し呆れるのも当たり前である。

「改めて思ったが、ほんとに霞達はバグじゃのぅ～。……ちなみに妾とアリカはどれぐらいなのじゃ？」

「アリカは大人のエヴァを10とすると6ぐらい。テオは5ぐらいって所。あくまで魔力量とかの基準だから実戦とはまた別だよ。実際、水が沢山ある所ならアリカがエヴァに勝つ事もあるし、室内や森の中とかの遮蔽物がある場所ならテオは有利だろうし。」

霞の言葉にテオドラは、ほぅっと相づちを打つ。その後に後ろを見てまた聞いてみる。

「……水があるところではのぅ……。なら霞よ。アレはどうなんじゃ？」

「ん？……あ～、アレはしょうがない。相手が悪い。」

2人が見た方向には

「ほら、アリカさん！！まだいくよ！《魔法の射手・連弾101矢》！！」

なのはが唱えた魔法にアリカは苦々しい顔をしながら自身のアーティファクトを使い防御をする。

「クッ！？水よ！！」

空中のアリカの真下に広がる海から巨大な水柱がアリカの前に立ち昇り、なのはの魔法を防ぐ。
その水盾はアリカの意志により圧縮されておりラカンの本気の一撃でも耐えうるぐらいの強度を誇るが

ドガァァァ！！
バシャァァァン！

なのはの練られた《魔法の射手》の前に崩される。
だが、アリカも崩されるのを予測していたのだろう。
口元に笑みを浮かべ

「行け！！！」

告げる。
崩された水は数多の水槍となりなのはに襲いかかる。
なのはは

「う～ん、この場合だと圧縮した水を氷に瞬時に変えて攻撃した方が良かったかなぁ。」

と呟きながら

「《火の矢・連弾３０矢》」

相対する属性の火である魔法の射手を構築し襲いかかる水槍に放つ。

ズガァアアアン！

火の矢と水槍がぶつかり合う。

火により水が蒸発したため蒸気が発生したが、なのはが風を起こし蒸気を晴らす。
そこには悠然としているなのはと息を少し荒げているアリカがいた。

霞はそれを見て

「……なのはは魔法の構築や練度が凄まじく早いからな。魔法の射手一矢に瞬時に込める魔力は《雷の暴風》並だ。それをあれだけ展開させられたら、普通なら誰でもああなる。……フェイトでもあそこまで早くしかも威力の高い矢は無理だそうだ。」

「世間一般の魔法使いが見れば泣いて退職してしまうのぅ。」

霞の説明を聞きながらテオドラは思った事を口に出す。
そして今更ながらに思い出したのか霞はテオドラに聞く。

「そういえばタカミチと真名はどうしたんだ?」

「ん? 2人なら……あそこで休んでおるぞ。」

テオドラが指差した方に顔を向けるとそこには

「「……。」」

うつ伏せになっている屍・タカミチと用意していた休憩用の机に突っ伏している真名がいた。
この2人は先程までテオドラが相手をしていたのだが、テオドラが圧勝して休んでいる所であった。

「真名はあんまり傷ついてないけど……タカミチは酷いな。何をやったんだ？」

「そんなに酷くはないぞ。２人を痺れさせ動けなくした後に真名には近づいて手刀で気絶させて、タカミチには糸で縛り付け四肢を引っ張って降参を促しただけじゃ。」

何でもないように言うテオドラだが、霞はタカミチの身に起きた拷問ばりの仕打ちに冷や汗を流した。

「哀れ、タカミチ。まあ気を取り直して、そろそろあっちも終わるな。」

霞が言いながら見た方向には

「エヴァ……楽しかったよ。そろそろ終わりにしよう。」

フェイトがエヴァに宣言をする。
エヴァはそれを聞き

「ふん、望むところだ。私は絶対に勝つ！！！いくぞ！」

受けて立ちながら詠唱を開始する。
それはエヴァが得意とする魔法。氷系広範囲殲滅魔法。それを迎え撃つフェイトは

「アルカス・クルタス・エイギアス。契約に従い、来たれ高殿の王……」

雷系広範囲殲滅魔法。
その2人が練り込む魔力に霞は少しマズいかなと思い

「テオ。タカミチと真名の所に行き障壁を張ってやってくれ。このままだとあの2人の余波に巻き込まれる。」

「了解じゃ。」

テオドラは直ぐに向かい多重障壁を展開後、万が一の為に自分のアーティファクトで更に防御する。
その直後

「《凍る世界》!!!」

「《千の雷》!」

フェイトとエヴァの魔法が衝突する。

ズギャァアアアン!!!!!

凄まじい音と光が辺り一帯を襲う。
霞は目を細めながら視線を逸らさず。タカミチと真名はいきなりの爆音に驚き、起きる。
テオドラは耳を塞ぎながら防御に少し集中している。

光が収まり視界が晴れた先には

息を乱し膝をついているエヴァ。
いまだに余力を残していて空中に浮かんでいるフェイト。

「……私の負け…か。」

「そうだね。お疲れエヴァ。」

悔しそうに、だけど己の全力を出せて爽快感が滲み出た言葉を吐くエヴァと微笑みながらエヴァに声を掛けるフェイト。
勝者はフェイト。

「あっちも終わったようだね。アリカさん、こっちもそろそろ。」

「ハァハァ……そうじゃの。」

なのはとアリカは示し合い

「行くぞ!!?なのは!!」

「全力で来てね!!」

アリカとなのはの戦いも終幕へと向かう。
アリカは周囲数キロに及ぶ程の水を下からかき集め圧縮、氷結、王家の魔力を込め始め頭上に巨大な氷龍を形成する。
なのははそれを見て相応の魔法を構築する。

「あっちが龍ならこっちは……。」

と呟きながら自身の前に炎の塊を生み出しそこに形を構成する陣を組み合わせる。
それは陸の覇者と思わせる尊大な虎。
炎で形成された虎の表面に雷も帯電している。

「オリジナル魔法《炎雷の覇者》。即興にしてはなかなか…かな。」

なのははそう言いながら更に魔力を込める。

霞達はそれを見て先程と同じ様に防御の準備をする。
エヴァはそれを見ながらフェイトに問う。

「おい、フェイト。なのはのアレはオリジナルか？見たことがないんだが。」

「私もないよ。あれは多分即興で作ったんだと思う。なのはは魔法に関しては凄いからね。」

フェイトの答えにエヴァは呆れる。
即興でしかも見た限り山をも軽く吹き飛ばすぐらいの魔法を構築したのだ。
呆れるのも仕方がない。
エヴァの胸中は

（流石は《白き仙姫》と言った所か。あれを見て平然としているフェイトもな。……バグの塊だな、もはや。）

と2人の噂を超える無茶苦茶ぶりに溜め息を吐く。

そしてなのはとアリカの魔法が放たれた。

ドガァァァァァァァァァァァァ！！！！！

龍と虎がぶつかり合い、拮抗する。

「ハァァァァ！！！」

アリカは裂帛の声を上げる。
なのはは少し笑みを浮かべながら無言で魔力を強める。

「グゥゥゥ！！！！！」

なのはが魔力を強めた時、拮抗状態であったのが徐々に崩れアリカが押される。

「アリカさん。成長したね。でも……まだまだだよ。」

なのはが自身の教え子を褒めるが、慢心させないために思い知らせる。
その瞬間、虎が龍を食い破りアリカに襲いかかり爆発した。
なのはは「あっ……やっちゃった（汗。」みたいな顔をして焦る、他の面々は更に焦りアリカの安否を心配する。

爆煙が晴れ出す。
人影がうっすらと浮かび始め、一応は生きていそうなアリカにホッと息を吐くなのは達。そして、煙が晴れた其処には

「なのは。少し危なかったぞ～。」

アリカを抱え傾世元ジョウを纏った霞がいた。
なのはは霞の言葉に申し訳なさそうにしながらアリカに謝る。

「うぅ、アリカさん。ごめんなさい。少しやり過ぎました。」

「気にするな。こうして無事じゃからの。……それに／／霞にこのように守られたのじゃから妾としては嬉しい限りじゃしな。」

と言いながら霞の胸に顔を埋めるアリカ。
なのはは自分のやり過ぎでこうなったのだから文句も言えない。
フェイトとテオドラは羨ましそうな顔をする。
エヴァは先程まで近くにいた霞が一瞬でアリカの側に行き更にはあの魔法を簡単に防いだ事に驚く。
驚愕しているエヴァに気づいた真名が声をかける。

「どうしたんだい、エヴァンジェリン？もしかして霞さんの実力を知らなかったとか？」

「龍宮か。……そうだな。霞がある程度強いとはなんとなく理解していたのだが、先の移動となのはの魔法を簡単に防いだのを見て私の見立てが甘かったという事を思い知ったのでな。」

そのエヴァの答えに真名は苦笑しながら聞いてみた。

「どれぐらい再認識したか聞いてみてもいいかい？」

「そうだな。……おおよそだが魔法に関してはなのはより劣るがフェイトよりは上。近接戦ではフェイトより劣るがなのはより上。丁度、２人の中間に位置する所…だな。」

エヴァの答えに真名はやはり勘違いしているなと思った。

「エヴァンジェリンは霞さんの全力を見たことは？」

「ん？……いや、ない…な。それがどうしたのだ？」

エヴァはどうして真名がそんな事を聞いてきたのかわからなかったため問い返す。

真名はあの時の事を思い出し、エヴァがアレを見たらどんな顔をするか想像がつき笑う。

いきなり笑い出した真名に訝しげな顔をするエヴァ。

真名はそれに気づき謝りながらエヴァに教える。

「ククッ。霞さんの全力はなエヴァンジェリン。星…地球を砕いてしまう程、凄まじいんだ。なのはさん達ですらあれは出来ないと言っていたよ。」

真名が放った言葉にエヴァは理解できない。

そこへタカミチが近寄りさっきの真名の言葉を肯定するように被せてくる。

「ほんとだよ、エヴァ。正しくは霞さんが持っている武器が、だけど。まあそれを扱える霞さんも規格外なんだけどね。」

エヴァはこの2人が嘘をついてるように見えなかった。

エヴァは

（本当か？だが、星を破壊するなど如何に魔力が多くてもそんなものはできないぞ。出来るとしたらそれはもはや神の領域……。）

悩みこむ。
そんなエヴァを見て真名とタカミチは苦笑し仕方がないと思う。
実際に見せられなければ自分達も信じる事は出来なかったであろうから。
そんな規格外の霞はアリカを降ろしながら羨ましそうにしていたフェイトとテオドラを宥め、片方の手はなのはの頭を撫で、少し落ち込んでいたなのはを慰めていた。

先程のアリカとなのはの戦闘による余韻もなんとか落ち着き、次の対戦をどうしようか考える霞。
勝者はフェイト、テオドラ、なのはの3人。
フェイトとなのはには先程と同じように制限を設けてテオドラは全力でいいかと考え、3人の総当たり戦でいこうかと思ったが、そこに何やら考え込んでいたエヴァが声をかける。

「霞、おまえの全力が見てみたい。」

それを聞いた霞は面倒だと思い断ろうとしたが

「もし見せてくれるなら……／／／その、……私をやろうではないか！？」

と大胆な発言をしたエヴァ。
それを聞いた霞は停止し、平坦な声で聞く。

「……エヴァ……それは大人版……でだよな？」

「／／あ、ああ、もちろんだ。別にこのままがいいならそれで「それは遠慮する。」……わかった。しかしな！全力を見せて尚且つ勝負に勝ってだぞ！！負けたらダメだからな！！！」

エヴァは先程の真名とタカミチの言葉に霞の本気が見たくなりこんな提案をしたのだ。

「よっしゃー！！？やったろうじゃないか！エヴァ！その言葉はもう取り消せんからな！！ここにいる皆が証人だぞ。後で冗談だと言っても遅いかんな！！」

凄まじいやる気を見せ始めた霞。
呆れた目でみるアリカとテオドラ。
なのはとフェイトはエヴァに慌てて声を掛ける。

「エヴァちゃん！何を言ってるの！？そんな約束しちゃ駄目だよ！？」

「そうだよ、エヴァ！？霞の（夜の）相手を1人でするのは無茶だよ！！壊れちゃうよ！」

「「いや、フェイトは心配する所が違うじゃろ（のじゃ）。」」

フェイトの間違った（あながち間違いではないが）心配にアリカとテオドラは同時にツッコミをいれる。
真名はそれを聞き顔を赤らめながら明後日の方を向く。
タカミチも我関せずの姿勢を貫く。
当のエヴァはなのはの小言を受け流し、フェイトの言葉に反応した。

「……もしかして霞は……すごいのか／／？」

聞いてきたエヴァにそれぞれが答える。

「……以前1日中相手をさせられた時は……死んじゃうかと思った…かな。」

「私も……その後2日ぐらいまともに歩けなかったよ……／／」

「／／フェイトと同じく……じゃな。」

「／／妾なぞ4日ぐらいはまともに動けなかったのじゃ。」

聞いたエヴァは失敗したかと青褪める。
まさか霞がそこまでとは思ってもいなかったのだ。
しかも自身はいまだに経験がない。そんな自分が霞の相手を1人でするなぞ……。
霞をチラリと見ると先程までのダルそうないつもの雰囲気なんてどこにいったかと思う程、覇気に満ち溢れ「エヴァのあられもない姿……無理矢理……縛り……後ろから…。クックックッ。」という風にいい感じに壊れ始めている。
今更、撤回は無理だろうと思ったエヴァは道連れを増やそうと4人を見たが

「頑張ってね、エヴァちゃん。……最近ご無沙汰だったからきっと…凄いよ。（サッ」

「霞の相手は羨ましいけど……今回は遠慮しておくね。（サッ」

「大丈夫じゃ。主は不死じゃろ?死ぬ事はない……たぶん。（サ

ッ」

「《闇の福音》と言われるエヴァの魅せ所じゃな。尤も……今の霞の相手は妾でも遠慮じゃがの。（サッ」

視線を逸らしエヴァを見捨てる。
愕然とするエヴァ。
どうにかしようと思考を巡らし出した結論は

「そ、そうだ！？霞！龍宮も相手を努めてくれるぞ！！！それに茶々丸もだ！！」

全く関係ない真名とメンテナンスでここにいない自分の従者を巻き添えにすることだった。
なのは達は

（（（（（ひどっ！？））））

と思いながらも庇ってしまったら巻き添えをくらうので口に出さない。
いきなり指名された真名はもちろん抗議の声を上げる。

「お、おい！？エヴァンジェリン！何を言っている！？私がなんでそんな事を／／！！！」

だが、その時

ゴォゥ！！！

衝撃波にも等しい凄まじい突風が吹き荒れる。

出所はもちろん

「マナーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！茶々丸ぅーーーーーーーーーーーーーーーーー！！ゲットだぜーーーーーーーーーーーーーー！！」

変態（霞）からだった。

真名はバカ（霞）を見て口を開けながらポカンとした。

仕方がない事である。まさか自分に被害がくる上に１３歳の自分に霞が欲情するなぞ思っていなかったのだ。

だが、真名の考えは間違っていた。

霞は自分の好きな者には躊躇いもなく好きと言うし、相手が我が侭ボディで霞の合格ラインを越えているなら例え１３歳だろうが無問題なのである。

端から見れば節操なしの変態だ。そんな霞を見ていた真名の肩にポンと誰かが手を置く。

それはタカミチ。

真名は自分の担任であるタカミチはきっと庇ってくれるだろうと少し期待した。

が！？

「龍宮君。僕に出来ることは……子供を授かった時の長期休暇の言い訳を考えてあげるぐらいだよ。」

役に立たない担任であった。

真名は期待した自分がバカだったと思い、霞の嫁である４人に助けを求める。

「なのはさん達も何か言ってやってくれないか！？エヴァンジェリンはともかく私は関係ないのだから！」

それを聞いた４人は不思議そうに首を傾げながら

「真名ちゃんって……。」

「てっきり、霞のお嫁さんに……。」

「なるものと思っておったのじゃが……。」

「違ったのかの？現に真名は……。」

「「「「指輪を外してないから（のぅ）。」」」」

息の合った会話で４人が言ってきた。

その言葉に息を呑む真名。

実は霞から貰った指輪をあの日から常に付けている。外そうと思ってはいたのだが何故か外す気にはなれずに今まで過ごしてきたのだ。

なのは達はそんな真名を見て「ああ、墜ちたな」と思い普通にスルーしてきたのだ。

そして指摘された真名は困惑するが、彼女は精神的には立派な女として確立している為、すぐに気づく。

自分が霞に惚れだしている事に。

真名ｓｉｄｅ

私は何故指輪を外さないのか理由がわかった。

惹かれているのだろう。
彼に。
コウキの時より強く。
霞さんに助けられた時、鬼を蹴散らしていた雄大な背中に目が離せなかった。
後日、店に訪れ事情を聞き霞さんの事を色々知った日の夜はいつもより寝つけなく夜遅くまで起きていた。
それから暇を見つけては喫茶店へと足を運んだ。
霞さんは無邪気に笑いながらいつも歓迎してくれた。
ある時、私は何を思ったのか霞さんに自分の事を話してしまったっけ。

「霞さん、実はね。私は悪魔の血を引いているんだ。」

言った時は後悔したものだ。
きっと嫌悪の反応が返ってくると思ったのだが、予想に反して

「そうなんか。だから真名はそんなに美人でスタイルもいいんだな〜。ほら悪魔って美形が多そうじゃんか？」

普通？だった。
言われた内容は嬉しかったけどね。
怖くはないのか？気持ち悪くはないのか？と反射的に聞いてしまったが霞さんは不思議な顔をして

「怖い？気持ち悪い？何で？逆に餡蜜食べてる真名を見てたら癒やされるぞ。気づいてるか？普段のクールな真名が幸せそうに笑って食べる姿は狂喜乱舞もんなんだぞ？もう頭を撫で回したいぐらいに可愛いんだぞ。その点に関しては恐ろしい娘だぜと言っておこう。」

そう言ってくれた。
私は内心で安堵した。
その時点で引き返せなくなった自分がいたのだと今なら分かった。

（なんだ……惚れだしている所か、完璧に惚れているじゃないか。）

気づいた自分の心に苦笑する。
なら私はどうするか？
惚れた男とはいえ景品扱いで体を許すのは嫌だ。
ならこの場で言うべき事は決まった。

「……わかった。エヴァンジェリン。私もキミの提案に乗るよ。しかし……霞さん！！そんなに私が欲しいなら全力の私と勝負してもらおうか！！」

私……龍宮真名もといマナ・アルカナを屈服させてみてくれ、霞さん。

真名ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

エヴァｓｉｄｅ

焦った私が思わず道連れにした龍宮がまさかあんな事を言うとは。
あの目は本気だ。
私は無駄とはわかっているが龍宮に聞く。

「おい、龍宮。私の言った事に無理につき合わなくてもいいんだぞ？霞も落ち着いたら冗談だと流してくれる。今なら「エヴァンジェリン。」…む？」

私の言葉を遮り龍宮がこちらを見て不敵に笑い言ってきた。

「私は本気だよ。なのはさん達にも悪いけど、うかうかしていると私が霞さんを骨抜きにして独占してしまうぞ？」

そう言いながら前に出始める。
それを聞いた私は自然と嗤う。
何故ならあいつは、龍宮は…いやマナは私に宣戦布告してきたのだ。
真祖にして吸血姫たる私に。
たかだか１３歳の小娘が６００もの歳月を生きた私に。

（クックックッ、まさか私から奪うというか。面白い。ここ１５年は退屈の毎日であったのにあいつが来てから退屈などという言葉が遠ざかっていく。
先程まで怖じ気づいてしまっていた自分を八つ裂きにしてやりたい。
霞が激しい？
フン！？なら私はそれを受けきってやるさ。
前妻共に負けるつもりはない。もちろん当たり前だがマナにもな。）

私は気を持ち直し霞に告げる。

「霞！？先も言った通り全力で来い！！勝てば私の全てをおまえにやる！！」

そう宣言し霞の元へ歩き始める。

エヴァｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「あの……皆さん。いいんですか、アレ？」

タカミチが４人に聞く。

なのはが最初に答える。

「いいんだよ、タカミチくん。エヴァちゃんと真名ちゃんの顔を見るともう止めても無理だと思ってるから。」

「そうだね。エヴァと真名の想いは本気だし。本気なら私達はあまり文句はないかな。」

「そうじゃな。まあ霞がこのまま嫁を増やしていきそうなのが目下の悩みというところか。」

「アリカの言う通りじゃな。霞は受け入れ過ぎじゃと思うの～。このまま行けば一つの村が出来る程、嫁を取りそうじゃからな。」

アリカとテオドラの言葉にタカミチは苦笑いしながら有り得ると胸中で思う。

しかしなのはとフェイトは忍び笑いをする。

３人は２人のその様子に首を傾げ何故笑うのか聞いてみた。

なのはとフェイトは答える。

「ごめんね。霞くんはそんなに取らないと思うよ。もし増えすぎても……そうだね～…ほんとに多くても１５人ぐらいじゃないかな？まあ普通に考えたら私達だけでも多いんだけどね。」

「私もなのはと同じ意見かな。霞はお嫁さんが多くなると他のお嫁さんに構う時間がなくなるからだって。まあ不老長寿だから家族を増やしたいとは言ってたけど。……本当は私達に子供が出来ればいいんだけどね。」

３人はなのはの言葉に少し驚いたが、何よりもフェイトの言葉に引っかかった。
アリカは聞く。

「フェイトよ。先の発言は何故じゃ？主らに子供が出来ぬような物言いじゃが……まさか…。」

「えっ……ああ!?ごめん!違うよアリカ。問題なのは霞の方だから。」

「どういうことなのじゃ？」

フェイトは慌てて言い直した。
が、霞自身に問題があるのも捨て置けないのでテオドラが聞く。
フェイトはなのはの方に向き確認を取る。なのはは別にいいんじゃないといった感じで軽く頷いたので、フェイトは渋々口を開く。

「あのね……まずこれを聞いて霞を怒らないであげて欲しいんだけど……。」

それを聞いたアリカとテオドラは頷き、タカミチは元よりそんな気

はない。
続けてフェイトは言う。

「霞は……その…子供を作りにくい体質になってるの……
……呪いで。」

3人は驚愕する。
あのバグで構成されているような霞に呪いが掛かっているなぞ誰が思ったか。
フェイトはさらに慌てて訂正する。

「あっ!?勘違いしたら駄目だよ。掛けたのは霞自身だよ。」

「「「はっ?」」」

3人は呆ける。
フェイトは仕方ないよねという顔をして続ける。

(説明略)

聞き終えたアリカとテオドラは頭を抱える。タカミチは目が虚ろになり「僕はこんな人を尊敬していたのか……(泣)」と呟いていた。
なのはとフェイトは乾いた笑いしか出ない。
アリカは口を重々しく開く。

「要するに霞はまだお主らが3人であった頃に

【・なのはとフェイトに子供が出来たら子育てに夢中になり自分の相手をしてくれない
・なら子供が出来にくい体質にしちゃえばいいんじゃね?

・よし、やろう！？
・あれ？予想より強い呪いになっちゃったよ。解けないな……テヘ☆
・あはは、解く条件として好きな人と千万回はやらなくちゃ駄目だって♪それと副作用で絶倫になっちゃったんだ
・ヒーハー！……ごめんなさいｏｒｚ】

ということか。……あやつは真の馬鹿じゃったんじゃのぅ（呆）」

「どうりで何故あれだけやっても子供が出来ぬと不思議に思っとったのじゃが……。霞はアホか。」

なのはとフェイトは言えない。自分達との時間を過ごしたいと願った霞を可愛いと思い許してしまった事を。

充分にバカップルぶりを発揮していた事を2人は言える訳がない。

だが次のアリカとテオドラの発言に救われる。

「それでは／／仕方ないから……／／妾が愛する夫の…呪いとやらを解くため…頑張るとするかの／／」

「…そうじゃの。その……／／そのように夫を助けるのも……妻として当然じゃからの／／」

バカップルぶりでは2人に劣っていないアリカとテオドラであった。

なのはとフェイトは自分達だけじゃなかったと胸中で安堵する。

タカミチだけは思った。

（いや……普通は怒るとこなのに……。この人達も霞さんの馬鹿が移っちゃったのか……可哀想に。）

至極真っ当な反応である。

噂の霞は真名とエヴァの本気の声を聞き、おかしなテンションを引っ込め真剣な表情をし2人に問いかける。

「……さっきの発言は本気か？エヴァは本契約したと言っても必ずしも一緒にいろというわけじゃないんだぞ？」

「ふん。私はな、霞。そんな契約がなくともおまえから離れるつもりはない。前にも言ったが私はおまえを気に入った。それに今の私はおまえに完全に惚れているんだ。例えおまえが嫌がろうともどこまででも……地獄の果てまででもついていくさ。光栄に思えよ、霞。私みたいな尽くす女は滅多にいないんだぞ。」

一歩間違えればストーカーとヤンデレに変化しそうな発言をするエヴァ。

しかし霞はそんなエヴァを愛おしく思いながら真名の方へ向き問いかける。

「真名。おまえは完全に巻き込まれただけだ。例え今回の勝負に負けても「霞さん」……？」

霞の言葉を遮り真名は言う。

「私は私自身の意思で今ここにいる。それに流されたなんて思わないでくれないか。こう見えて私は霞さんに惚れているんだ。霞さんにならいい…ともね。だからもし霞さんが私を欲しいと思うなら……私を……倒してみてくれ。」

真名の告白に少しキョトンとする霞。
真名は決して力量を読み違える愚者ではない。
例え真名が全力で自分にむかってきても3割の力を出すだけで勝つことはできる。
それがわからない真名ではない。
故に霞は真名の想いを汲み取る。
先程の発言の続きを言わずに別の言葉を2人に向ける。

「ふぅ。俺はな自分に向けられる好意は全て受け入れる。さらに性の悪いことに自分の元にきてくれた相手には独占欲が強くてな。逃がさないし逃がすつもりもない。ついでに言うと俺と共についてきてもらうため不老長寿にもなってもらうしな。……最後の確認だ。これを聞いて返事をした後は……俺は遠慮もせずにエヴァと真名を貰う。2人の髪一本から魂まで全て貰う。例え神や魔王が2人を奪おうとしても…世界が2人を庇おうとしようが…それらを悉く破壊しつくし2人を自分のものにする。……どうする？」

霞は覇気を出しながら2人に最後通告をする。
しかし2人の想いは本物であった。
一片も揺るがず

「望むところだ。」

エヴァは答える。

「そこまで想われるのは女冥利に尽きるね。返事はＹＥＳだよ。」

真名は答える。

霞は目を瞑り……開く。
エヴァは如意羽衣を顕現し瞬時に変化し全力を解放する。
真名も同じく全解放する。己が身を魔族の身へと変化させ魔眼をも解放する。
そして霞はそれを見て約定どうりに全力を出すため、なのは達に念話を一言送る。

『皆で密集体系をとりそれぞれの最大防御を展開。』

『『『『了解』』』』

4人とタカミチの返事を聞いた霞はポツリと呟く。

「全解放。」

途端、霞の周りの景色が歪み始める。
他にもダイオラマ空間の空気が重くなる。
密集体系で防御を全力展開している5人は無事だが、霞と相対している2人は

「ーーーッッ!?これほどか!?」

「グッウウ!!全解放してもこれだけの……!?」

圧倒的すぎる力を浴び膝をつきそうになる。
だが霞は停まらない。

「宝貝は使わないから。……まあ、次で終わるがな。」

そう言い2人の視界から消えた。

そして……エヴァと真名の視界は黒に染まった。

「ぅん……ここは……？」

真名が目を開けるといつも自分が見ている天井とは違う天井が映った。
体を起こし周りを見渡すとそこは部屋であった。
真名は混乱しているのか何故自分がここで寝ているか理解できなかった。
そこへ

ガチャ。

「真名ちゃん、起きてる～？」

扉を開け顔だけ部屋の中へ入れ小声で様子を伺うなのはが現れた。
なのはは真名を見て表情を明るくし

「良かった。気がついたんだね～。」

と言ってきた。
その言葉を聞き真名はようやく思い出した。

（ああ、そうか。私は霞さんの全力を受けて……。）

その時を思い出し、真名は笑う。
なのはは少し心配した感じで声を掛ける。

「ごめんね。霞くんが。一応、彼が言うには傷とかもつけないようにしたって言ってたけど…。どこか痛い所はあるかな？」

「いえ。全く問題ないですね。……参考までに聞いておきたいんですが私はどうやって倒されたんですか？」

真名の魔眼を解放しても捉えることすら出来なかった霞の攻撃。気づいたら部屋の天井であったのだ。
せめてどのように倒されたかは知っておきたかったのだ。
だが

「えっと……背後に回って脊髄に気絶するぐらいの微量の電気を流した……みたいだよ……たぶん。」

なのはが曖昧に答える。
真名は首を傾げ疑問に思う。
それに気づいたなのはは乾いた笑いを出し白状する。
「あはは、実はね…私も微かにぐらいにしか見えなかったんだ。フェイトちゃんはなんとか見えたらしいんだけどね。それに霞くんの全力って最初の頃の修行以来見ていなかったから……ここまでとは私も思っていなかったんだよ。」

真名は唖然とする。
霞と長年というか最初から共にいたなのはですら予想を超えた霞の全力。
清々しい程のバグっぷりに笑うしかない。

急に笑い出した真名の気持ちがわかるなのははは苦笑する。

その頃、別室のエヴァも起き様子を見にきたフェイトに同じような事を聞き、真名と同じく笑う。
フェイトもしょうがないと思い苦笑する。

ひとしきり笑ったエヴァはフェイトに言う。

「これで私とマナは霞のものとなったな。これからはよろしく頼むぞ、先輩（前妻的な意味で）。」

「よろしくね、エヴァ。だけどモノじゃなく家族…だよ。」

「……ククッ、そうか。家族か。」

エヴァはフェイトの言葉に嬉しそうに笑う。
フェイトはエヴァを見て微笑む。

真名の方もなのはに似たような事を言いながらなのはに訂正され笑う。
ここ陽神　霞に新たなパートナー兼家族が誕生した時であった。

「「あっ、真名ちゃん（エヴァ）。霞（くん）が色んな衣装を揃えて待ってるから……頑張って（ね）。」」

「「……。」」

示し合わせておらず、部屋も違うのに同じタイミングでなのはとフェイトが同じ台詞をエヴァと真名に送り、それを聞いた2人が青褪めたのは余談である。

その頃の霞

「エヴァはこの黒い喪服衣装で……。真名はこっちのチャイナ服ロングｖｅｒ。茶々丸はこっちのパーティー用のドレス…いやここはオーソドックスにメイド服で！！後は……（ブツブツ。」

「のぅタカミチよ。あの暴走している変態を止めてくれんかの？」

「無理です。テオドラ様こそ奥さんでしょ？止めるならそちらが適役です。」

「無理じゃ。アレに近づいたら妾も巻き添えをくらうのでな。」

「僕の場合は殺される恐れがあるからもっと無理なんです。」

タカミチとテオドラは改めて暴走変態（霞）を見て

「「ハァ。」」

溜め息を吐いた。

一方

「あの……アリカ様。一体何が…？」

「……茶々丸か。」

メンテナンスから戻った茶々丸が状況を理解できずアリカに聞くが、アリカはそんな茶々丸に同情するような視線を向け、説明した。
説明を聞いた茶々丸は

「……私が霞様のお嫁に……？」

「まあ……結果的にはそうなっていたの。エヴァが何気に茶々丸も加えておったから。」

「お嫁……霞様の……夫婦……（ボシュゥゥゥ／／／／／」

「うぉ！？茶々丸！大丈夫か！？って熱っ！！誰か！？誰か手伝うのじゃ！茶々丸が！？」

アリカのＳＯＳを聞いたテオドラとタカミチが駆け付け茶々丸は再びメンテナンスへと戻っていった。

ちなみに今更であるが、何故霞達がダイオラマで戦闘していたかを簡単に纏めると

エヴァがなのはとフェイトの実力が見たい→なら模擬戦しよう→つ

いでにアリカとテオドラもしようよ→あっ、タカミチと真名が来たよ！？２人もやろうぜ→茶々丸はメンテナンスで抜けて他のメンバーはダイオラマへＩＮ→フェイトＶＳエヴァ、なのはＶＳアリカ、テオドラＶＳ巻き込まれ２人組でＬｅｔ'ｓ　ｐｌａｙ！→冒頭へ

であった。

天才と馬鹿は紙一重……みたいな（後書き）

真名！！！
茶々丸！！！
正式に嫁になりまっす！！！！！！

次回の話で2人のアーティファクトを登場させます。（戦闘はないよ…多分）

そして！！
皆様方が待っていた？ハーレムメンバーを決め・ま・し・た！！
これ以降の追加や要望や申し訳ありませんが！！受け付けないです！？
……だって、あんまりに多かったら話数が増えて物語が進まないから。

皆様が気になるハーレムメンバーは！？

まずは
京都弁を扱いほんわか癒し系大和撫子である！？

近衛ーー木乃ー香ーーー！！

「あはは、みんなよろしゅうな～」

あなたは元から安牌だったね

次に！！

天使の如き白き翼を持つ百合剣士！？

桜咲ーーー刹ーー那ーーー！！

「私は百合じゃありません！！」

はいはい乙

次に！！

麻帆良の最高頭脳！！

未来から来た火星人！！作者の依怙贔屓で強引にメンバーに加入した！？

超ーーー鈴ーー音ーーーーー！！

「紹介に恥じぬように活躍させてもらうネ」

乙女チックな展開をな……（ニヤリ

次に！！

その胸は正に凶器！！

フェイトの地位を脅かす最強の我が侭ボディーになるか！！その母性は霞をどう狂わすのか！？

那波ーーー千鶴ーーーーーー！！

「あらあら、どうしましょうか。ふふふ」

その笑みも霞の前では……（ニヤリ。

とりあえず先に４名を紹介して一旦区切ります。
次回の後書きにてまた紹介します。
ちなみに既に決めておりますので、あしからず。

さて次回は今回の話の後日談というかなんというか……。
まあ短い話になります。
描写はしませんが、エヴァと真名は今頃霞とニャンニャンしてますよ。
そして茶々丸がえらい事になってます。
霞の欲望の前には道理や物理法則やその他諸々は紙屑と一緒でポイッなんです。

ではまた次回に。
（；∇；）／～～

茶々丸さんは過剰装備みたいです（前書き）

皆様のスルースキルに期待します。

作者は……諦めました。

サーセン

m（＿＿）m

あの模擬戦から一夜開けた次の日

「も……らめ。」

「……水。」

「％☆＊※」

エヴァ、真名、茶々丸がそれぞれ屍と化していた。
なのはとフェイトは甲斐甲斐しく介抱をして、アリカとテオドラはご満悦状態の霞に呆れながら釘を刺す。

「霞よ。程々にしておけ。」

「そうじゃぞ。ただでさえ霞は激しいのじゃから。」

「いや～、すまんね。久しぶりでしかも萌えるコスプレプレイをしたから歯止めが利かなくて。」

「それでもダイオラマを使い４日も籠もるとは思わなかったわ。」

アリカが言った通り、霞はエヴァと真名と茶々丸を連れダイオラマの中で４日も頑張った。
正直、絶倫とかいう問題ではない気がする。
だが、テオドラがふと思った事を霞に聞いてきた。

「しかし、霞よ。茶々丸はどうしたのじゃ？言うては悪いが茶々丸はロボットじゃろ？しかもそういう機能はついてなかったとエヴァから聞いておったが…。」

テオドラの言っている通り茶々丸には元はそんな機能はついていない。

なら茶々丸の屍具合は何なのか？

霞はあぁ～と言いながら頬を掻き口を開く。

「いや、茶々丸ともな契約できるだろと思って普通に契約のキスをしたら失敗してな……。」

４人はそれを聞き少し意外そうに霞を見る。

霞はその視線を受けて、少し憮然としながら続ける。

「俺でも失敗はあるからね。……まあ続けるな。その後、失敗した時に茶々丸が悲しい表情で

「やはりロボットの私では無理なんですね」

なんて事を言うから……。

力業で契約しちゃいました。」

「「力業？」」

アリカとテオドラが声を揃えて口に出す。

なのはとフェイトは原作知識があるため、霞の言っていることが理解できた。
霞は理解できていない2人に教える。
それを聞いた2人は「確かに力業だ」と納得した。
だがアリカは契約をしただけなら茶々丸のあの様子はどうした?と霞に聞いてくる。

「あれは一種の魔力による酔いみたいなもの。酒で酔うのと似たようなもの。茶々丸の反応があまりに可愛かったから俺の魔力を大量に供給しちゃった♪」

アリカはほぅっと言い一応理解した。
なのはとフェイトは茶々丸が魔力を供給された時の反応を知っているため、霞の言葉を聞き茶々丸に少し同情した。

エヴァ達はなのはとフェイトの介抱により何とか動けるようになった所で簡単な家族?会議を始め、自分達の現状、今後3人はどうするかなどを相談しだした。
結果、3人はしばらく今まで通りの生活を送ることに決めた。もちろん、いつでも遊びに来たり泊まったりするのはOKと出した霞達。
修行もするならなのはとフェイトが付き合うと。
陽神の名は通常生活等ではまだ使わない事。特に真名は年齢的にまだダメであった。
話し終えた後に霞はアリカ、テオドラ、エヴァ、真名、茶々丸に指輪(ドナルド作)を上げ、効力を説明した。
5人がそれぞれ嬉しそうな表情をしたのは言うまでもない。

会議?終了後
真名と茶々丸が本契約をしたと聞いた面々は2人のアーティファクトに興味を示した。
真名がカードを出し全員に見せた。
そこには
陰陽印の付いた卒塔婆のような剣を持ったドレス姿の真名。
霞は少し意外に思った。まさか狙撃手の真名が接近戦用のこの宝貝を持った事に。

「霞さん。このアーティファクトは何なのかわかるのかい?」

真名が聞いてきたが、霞は後でダイオラマの中で性能も調べる時に説明すると言って先に茶々丸のアーティファクトを見ることにした。
茶々丸の方を向くと……他の面々がカードを見ながら不思議な顔をしていた。
霞と真名が顔を見合わせ?となっていると茶々丸が聞いてきた。

「あの、霞様。このアーティファクトは何かわかりますか?」

そう言われ茶々丸のカードを見た霞は……

「???」

首を傾げた。
何故ならカードには茶々丸がいて、その茶々丸が愛おしそうに胸元に両手を添えている姿。
他には何もない。
流石の霞もわからない。

「……ごめん。カードだけじゃ流石にわかんないわ。丁度、真名のアーティファクトの性能も調べる為にダイオラマに入ろうと思ったから今から行こうか。」

「はい。お願いします。」

「他に来る人いる？」

霞がそう聞くと

「私は待ってるよ。後のお楽しみって感じで。」

「私もなのはと同じかな。」

「ふむ。なら妾もそうするか。それとついでじゃから何か食べる物でも作っておくぞ。」

「それでは妾も待っておるのじゃ。アリカの手伝いでもするかのぅ。」

「私は行くぞ。霞と契約した時のアーティファクトには興味が「エヴァはダメ」何でだ！？」

「だってそろそろ……（チリーン。来たな。」

「ああ、やっぱりここだったね。エヴァ、学園長が呼んでるよ。」

「タカミチ？……ジジイが何の用だ？私は今いｓ「連れていっていいぞ～、タカミチ」っ！？霞！！何でだ！」

「いや…エヴァ気づいてないのか？もしかして？」

「？何をだ？」

エヴァは首を傾げた。

なのはとフェイトはとっくに気がついていたのでエヴァの様子に苦笑する。

タカミチは霞から聞かされていて対応の方も指示されていたのでわかっていたが、エヴァ自身が気づいてないとは思っていなかった。

（ちなみにエヴァと真名と茶々丸、アリカとテオドラもだが霞から指輪（ドナルド作）を貰い、指輪の説明を受けた後、それをつけて魔力を契約前と同じぐらいに封じている。）

「……呪い解けてるんだが……。」

「はっ？」

「……マジで気づいてなかったのか。」

「ちょっと待て！……ホントに解けてる。……いつの間に？」

呆然とするエヴァ。

霞はこの後の反応を予想し駄々をこねられない内にタカミチにサッサと連れていけと視線で促す。

タカミチもその意図を読み取り呆然としているエヴァを引っ張り店を出ていった。

「霞。エヴァの封印が解けているのならタカミチといえど押さえられんのではないか？」

テオドラが引っ張られていったエヴァを見て考えたのか心配するように言う。
それは霞も考えていた事なので

「ああ、タカミチにはエヴァの暴走を止めるような手段を幾つか教えといたから、大丈夫だろ。それにフェイトがこっそりついて行ったし。」

霞の言葉を聞いたテオドラや他の者は先程までフェイトがいた場所を見た。
霞となのは以外はいつの間にと驚いた表情をする。
霞は苦笑しながら真名と茶々丸に声を掛けアーティファクトを確かめる為、別荘へと移動した。

1時間程経った時、不機嫌な表情のエヴァと少し疲れた表情のタカミチ、苦笑しているフェイトが店に入ってきた。
なのははある程度予想できていたのか3人に労いの言葉をかけアイスティーを出す。
エヴァは黙ったまま受け取り、タカミチとフェイトはお礼を言い飲み始める。
そこにアリカとテオドラも厨房から顔を出し手にサンドウィッチを持ちながら4人の所へ。

「霞達はまだ帰ってきてないの？」

フェイトが集まったメンバーを見て聞いてくる。

「うん。けどそろそろ帰ってくるかと「戻った～」…帰ってきたね。」

なのはの言葉通り、霞達3人が帰ってきた。
霞は少し疲れた顔をして、真名はそれを見て苦笑し、茶々丸はいつも通りの表情。
6人はなぜ霞がそんな状態なのか疑問を覚えた。
どうしたのか?と聞く前に椅子に座った
霞が口を開く。

「とりあえず真名と茶々丸のアーティファクトを説明する。2人のアーティファクトは……(後書きにて説明します)。

と、こんな所。」

説明を聞き終えたなのはとフェイトは霞が何故疲れた表情をしているか理解し、アリカとテオドラとエヴァは若干羨ましそうな顔をして……茶々丸を見る。
タカミチは既に諦めているのかタバコを吸いながら明後日の方を向き、「明日の予定は……」など逃避気味であった。
霞は気を取り直し、エヴァとタカミチの方を向き経過を尋ねた。
エヴァがそれを思い出し不機嫌になりながら説明する。

「……ジジイ達の方は何とか納得した。他の魔法使い達も五月蠅かったが何かあった時の責任は全て《仙姫》の2人が取るといったら黙ったがな。」

それを聞いた霞はフェイトに視線を移すと

「エヴァの言った通りだよ。ただ学園長は私となのはの居場所を聞いてきたけどね。」

「霞さん。学園長は表面上は納得してましたけど、裏ではかなり疑ってましたから恐らく調べると思いますけど。」

フェイトの言葉の続きにタカミチが言ってきた。

霞は少し考え

「……うん。なのはとフェイトに丸投げします！！というわけで頑張れ２人。」

と陽気に言う霞。

なかば予想していた付き合いの長い２人は溜め息を吐き、タカミチは……もう何も言わなかった。

霞はその反応に心外だと思い

「２人を信頼してるから任せられるんじゃないか。これがエヴァ辺りなら俺も何か対策を「おい！？何故私限定なんだ！！」……え？」

言ったが途中でエヴァが憤慨しながら遮ってきた。

霞は何故エヴァが憤慨してきたのかわからないといった表情をする。

「なんだ！？その表情は！他の奴らもなんで納得している！？頷いているんじゃない！そしてそこのボケロボは仮にも私の従者だろ！？主を庇うぐらいをしろ！！」

ガァーッと吼えまくるエヴァ。
今のエヴァは幼女姿なので怒っていても迫力はあまりない。
フェイトなぞ少し危ない目つきでエヴァを見て「可愛い」と呟いている。
そして霞と茶々丸が

「だってエヴァってウッカリ属性持ってるから、何かの拍子でポロッと……言いそうだもん。な、茶々丸。『録画は？』」

「はい。マスターはウッカリしているのでそれは否定できません。『抜かりありません。』」

エヴァをからかい始める。

「私はそんなもの持って「いや、落とし穴にかかる時点でウッカリだから」ーーッ！それは「マスターは封印時にはよく空を飛ぼうとして転んでおりました。飛べない事に気がつかず。」茶々丸！おま「ほらウッカリしてるじゃん。」ちがっ「他にも」言うなァーー！！」

からかわれ吼えるエヴァ。
それでもお構いなしにからかう霞、エヴァの愛らしい姿を録画しながら霞の言葉に相づちを打つ茶々丸、同時に可愛いエヴァを見て悶えるフェイト。真名は初めての光景にキョトンとして、他の者は「また始まった」と言い、いつものように放置する。

「うぅぅ～、私はウッカリなんて「我慢できない！！」ぬわぁ！？フェイト！いきなり何をする！？」

「駄目だよ！！エヴァが可愛いすぎるから駄目なんだよ！」

「やめろ！！頭を撫でるな！抱きつくな！！……待て！何故顔を近づける！？それだけは……ァアーーー！？」

「あぁ！？マスター！可愛すぎです（ジィー。」

「茶々丸、後でコピーお願いな。」

まあいつもの如く騒がしい時を過ごし1日を終える陽神家であった。

少し時は遡り

タカミチがエヴァを引っ張り霞の家を出た後、ようやくエヴァが正気に戻り今の状況に気づく。

「タカミチ離せ。」

言われたタカミチは笑いながらエヴァの要求通りに手を離す。
するとエヴァはくるりと反転し店に戻ろうとする。

「エヴァ。どこにいくんだ？」

「ふん。何故わざわざジジイの所に行かねばならん。封印が解けた今、あいつの言うことを聞く必要はない。」

エヴァの予想通りの反応にタカミチは苦笑する。
そしてタカミチは霞から教えてもらっていた対策を取る。

「もしここで店に戻ったら霞さんがまた“登校地獄”を掛けるって言ってたよ。しかも次は小学校に編入させるんだってさ。」

ピタッ。

タカミチの言葉に停止するエヴァ。
振り向いたエヴァは

「……本当か、それは？」

聞いてくる。
頷くタカミチ。
エヴァはタカミチの眼を見る。
……

……

少しの静寂の後、エヴァが答えた。

「……わかった。行ってやる。」

了承したエヴァにタカミチは安堵した。
何故ならタカミチが言った事は本当だから。
霞が小学校の編入手続き等を直ぐに手配していたのはタカミチの記憶に新しい。
エヴァからしてもタカミチの真剣な表情と己の何かが警報を鳴らしていたので了承したのであった。

こっそり待機していたフェイトは小学生姿のエヴァを想像し、エヴァが素直に従った事に少し残念がっていたのは余談としておく。

バァン！！

学園長室の扉を蹴破りエヴァは中に入る。呆れながらそれに続くタカミチ。

「……ジジイ。何のようだ？」

エヴァはほんの少し殺気を滲ませ学園長に問う。
室内には学園長の他に魔法先生達が集まっていた。

「ふむ。あまり殺気を当てんでくれんか。年寄りにはキツいわぃ。」

呑気な声で言う学園長にエヴァは失笑する。

「エヴァよ。今日呼んだのはお主の呪いの事なんじゃが……。」

「ああ、（いつの間にか）解けているぞ。」

学園長の問いに答えるエヴァ。いつ解けたかはまだ本人も知らないが。

その言葉を聞いた学園長とタカミチ以外はざわめく。
エヴァはそれを無視する。

「やはりのぅ。どうやって解いたのじゃ？」

「それは……。」

学園長の問いにエヴァは口ごもる。
いつどうやって解けたかなぞ自分はわかっていない。
霞が関係しているのは間違いないが、霞は隠れている身だと思い出し喋る事はできない。
考えるエヴァ。
そこにタカミチが助け舟を出す。

「学園長、エヴァの呪いを解いたのは《仙姫》の御二人ですよ。」

「ふぉっ！？」

「「「なっ！！？」」」

「おい！？タカミチ！！」

学園長と魔法先生は《仙姫》と聞いて驚く。
エヴァはタカミチが2人の事を喋った事に焦る。
だがタカミチはエヴァに視線で「任せろ」と送る。
その意図を読み取ったエヴァは渋々黙る。
学園長はタカミチに説明を求めた。

「タカミチ君や。説明してくれるかの？」

その問いかけはどちらかと言えば暗に命令しているようなもの。
だがそれぐらいは予想していたのでタカミチは飄々と説明する。

「以前に僕が連絡を取ろうとしていたのは学園長も知っていますよね。それをほんの少し前に御二人が受け取り、いきなり僕に連絡してきたんですよ。まあ本当ならする気はなかったみたいですが、どうやら御二人は麻帆良に丁度用事があったみたいでしてきてくれたんですがね。」

「ふぅーむ。その用事がまさかエヴァの呪いを解く事なのかのぅ？」

「みたいですね。ナギと約束していて、まだ解けていなければ代わりに。と」

学園長はナギがエヴァにしていた約束を思い出す。

《三年経っても俺が解きに来なけりゃ、代わりに俺のダチが来て解きにくっからよ。》

それを思い出した学園長はそのダチが《仙姫》なのかと一応は納得した。
実はこの時、ナギは念話で霞が解きに、とエヴァに伝えていた。
学園長はエヴァに視線を向ける。
それに気づいたエヴァは憮然としながら頷く。

「ふむ、わかったぞぃ。まあエヴァの件は元から3年じゃったしのぅ。」

学園長の言葉を聞いた魔法先生達の一部が声を荒げる。

「学園長!?そんな簡単に済ませる問題じゃないでしょう!彼女は吸血鬼です。呪いが解けた今のエヴァンジェリンは危険過ぎます!即刻、封印すべきでしょう!!」

学園長は溜め息を吐く。
エヴァがその気ならこの場の人間を即殲滅できるというのに。
それに学園長自身はエヴァに対しては友人だと思っているし、エヴァが無闇な殺生はしないと理解している。
それがわかっていない魔法先生達に頭を悩ます学園長。
エヴァは既に我関せずの姿勢。
タカミチは……冷や汗を掻いている。
この発言がもし霞の耳に入ったら…と。
まあ霞もこういう反応は半ば予想していたからタカミチに伝えていたのだろう。
学園長と抗議している魔法先生達にそれを伝える。

「今のエヴァが大きな問題を起こしたら《仙姫》の御二人が責任を全て取る、だそうですよ。ついでにエヴァは今回の卒業までは麻帆良で基本的に大人しく過ごす事を了承しています。」

抗議している魔法先生達はそれを聞き驚愕する。
学園長も少し驚いた後、髭をさすりながら聞いてくる。

「それは儂としても助かるのじゃが、本当なのか、エヴァよ?」

「……ああ。卒業まではここに居る。それ以降は知らんがな。」

エヴァがソッポを向きながら答える。
自分の知らない所で色々決められていた事に拗ねているだけなのだが。

学園長はエヴァの態度を見て嘘ではないと信じ

「なら夜の警備はしてくれんかのぅ？今エヴァに抜けられると困るんじゃが……。」

「そんなものは知らんな。そもそも私が『エヴァ。警備はちゃんとやらなきゃダメだって霞が言ってたよ♪』ッッグッ！……。」

拒否しようとしていたエヴァにフェイトからの念話が届き、呻いた。
いきなりエヴァが黙った事に疑問を持つ学園長と他の魔法先生達。
タカミチにはフェイトからの念話が届きエヴァの状況を理解した。
エヴァは本当に嫌々ながら先程とは逆の返事をした、……小声で。

「……やる（ボソッ。」

「ふぉ？……良いのか？というかいきなりどうしたんじゃ？」

学園長の反応は真っ当。
拒否しようとしたエヴァが黙りこんだ後、表情を歪めながら了解したのだから。
しかしエヴァも学園長室まで来るときから色々我慢していたが限界であった。

「やるといったんだ！！悪いか！？悪いのか！？私が協力的だと悪いのか！！というか何だ！？この仕打ちは！あいつはそんなに私をイジメたいのか！！私をイジメて楽しんでいるんだろう！ァアアーー！！」

「ふぉっ！？いきなりどうしたんじゃ！！」

地団駄を踏み頭を掻き癇癪を起こすエヴァ。
それに驚く学園長。
子供のように怒り出すエヴァに呆然とする魔法先生達。
場にいなくてもエヴァを怒らす霞にタカミチは苦笑い。
隠れて見ているフェイトはそんなエヴァを見てご満悦。
エヴァは若干涙目になりながらドスドスと擬音が聞こえそうな足で部屋を退室した。

「エヴァは一体どうしたんじゃ？タカミチ君。」

「あぁ～……恐らく《仙姫》の方がエヴァを無理矢理説得させたのを思い出して腹が立ったのではないかと。」

タカミチが霞の言動を思い出しながら苦しい誤魔化しを言う。
学園長としてはそこらの関係が全く分からないため納得しておいた。

「そういえば以前に頼んでおいた件を伝えておいてくれたのかの？」

学園長の問いにタカミチは苦笑いしながら答える。

「そのまま伝えますね。《利用されるのは嫌なので断ります♪》だそうです。」

それを聞いた魔法先生は意味が分からないという顔。
学園長は意味を理解し表情を歪める。

「儂としてはそんなつもりではなかったのじゃが……。」

「学園長がどうであれ本国は違うでしょう。だからこその返答だと

思いますよ。」

タカミチの返しに学園長は「それもそうか」と頷く。

「……タカミチ君は2人の居場所を知っているのかの？」

「残念ながら。エヴァの用件を終えて少し話した後、すぐにどこかへと行きました。ご丁寧に追跡妨害もしていましたね。」

「……そうか。」

2人の会話について行けない魔法先生達。

タカミチはエヴァのフォローをすると言って退室する。

それを見た学園長は内心で考える。

（タカミチ君は大体の居場所を知っている……ぐらいじゃの。さて、どうするか……。）

そう考えつつ集まっていた先生達に解散を促す。

監視の目に気づかないまま。

帰り道でエヴァの機嫌を取るタカミチと可愛かったエヴァに抱きつくフェイトがいたのは割愛しておく。

茶々丸さんは過剰装備みたいです（後書き）

真名
アーティファクト
・青雲剣ドナルド作
真名が確実に狙撃できる範囲まで幾重もの斬撃を飛ばせる。
それ以上は威力が弱まる。
切れ味、斬撃数は真名の魔力の込め具合で変化する。
現在では最大６撃ぐらい。
・ミステリアスヴェールドナルド作（ドレスタイプ）
現在一般の《雷の暴風》クラスの魔法までなら弾く。
真名のヴェールは特殊で真名自身が成長していく度に強化される。
《隠しアーティファクト》
・天騒翼ドナルド作
これは真名が魔族としての力を解放すると展開される。
３対６枚の翼。
雷と風をかなりの威力で発生できる。
真名のカードにも……。

茶々丸
アーティファクト
・霊殊ドナルド作（ナタク）
ナタクフル装備ｖｅｒ
要は
・乾坤圏
・火尖槍
・九龍神カトウ２
・金セン

・混天稜
・風火輪
・？？？
全てドナルド作
茶々丸１人で簡単に広域殲滅可能♪
※どれぐらいかは作者にすら予想できません
防御は霊殊を体内に宿す際、エヴァと同じく強固な多重障壁を自動展開。
茶々丸の意志により展開できる宝貝を選択可能。
フル装備ということは……。

ついでに

エヴァ
・如意羽衣ドナルド作
大人ｖｅｒに一点特化している宝貝。
展開時はエヴァの全スペックが約２０倍まで跳ね上がる。
同時に強固な多重障壁を自動展開。
真祖として元々の能力が高いため、アーティファクトによる恩恵は他者より地味？である。
エヴァのカードにも……。

こんな感じです。
霞は茶々丸のアーティファクトをフル展開した時に「どこの最終兵器だｏｒｚ」と精神的ダメージを負いました。

今回の後書きを見て以前に本契約人数を7人と決めた理由が理解できた人も多いでしょう。（最初からわかっていたよ！？というのは言わないで！）

というか微妙に真名のアーティファクトが弱いと思うのは自分だけでしょうか？
強化した方がいいかな？
けど青雲剣って意外にエグいと思うのは作者だけ？

後、作中でエヴァの封印が解けたのはアーティファクトを展開した時です。
エヴァの内包魔力に呪いが耐えきれなくなり簡単に弾け飛びました。
エヴァはその時、大人に成長できた喜びの余り気づかなかった。
という感じでお願いします。

ではまた次回
（；∇；）／～～

誤解だ！？俺は悪くない！！（前書き）

短いですよ。
単なるフラグ建てです。

そして前回の後書きでハーレムメンバーの発表忘れてましたね。

セクストゥム
刀子さん
千雨たん
アキラ

以上です。

原作までサクサク逝きますよ～。

誤解だ!?俺は悪くない!!

「初めましてネ、陽神　霞さん♪」

「これはご丁寧にどうも。可愛らしいお嬢さん。」

「フフフ、ありがとネ。」

向かい合う2人は笑みを絶やさずに言葉を交わす。
霞と向かい合っているのは麻帆良の最高頭脳、茶々丸の生みの親である超　鈴音。
現在、2人がいる場所は麻帆良敷地内であるカフェテラス。
何故、この2人が相対しているのか。
それは……。

「あの霞様。少しよろしいでしょうか?」

エヴァ、真名、茶々丸が嫁になってから時が進み、季節は夏。
そして学生が夏休みを満喫している8月のある日
茶々丸が少し困った表情をしながら霞に声を掛ける。
ちなみに最近の茶々丸は感情の成長が著しく、もはや原作後半並みの感情を持っている。
ただ霞の影響を受けているのかやや間違った方に成長している面も

あるが……。
閑話

「ん？どうしたん？何か困り事か？」

茶々丸の表情を見て問いかける霞。
茶々丸は少しの間、思考した後

「……申し訳ございません。」

いきなり頭を下げ謝った。
霞は困惑しながら茶々丸に頭を上げるように言い理由を聞く。
茶々丸はポツポツと語り出す。
……
……
……

理由を聞いた霞は納得した。
というかすっかりと頭から抜けていた。
茶々丸の生みの親である彼女を。
そして何故茶々丸が謝ってきたのかも理解した。
霞達は一般人を装っているのに他者にバレてしまったからだ。
茶々丸が2日前にメンテナンスをしてもらった際、茶々丸が厳重にロックしていた箇所を彼女が覗いてしまったらしく、そこから霞の事がバレたらしい。
それを聞いた霞はどこまで見られたか聞いてみた。

「見られたのは……その／／……霞様に……してもらっている所です（ボソリ。」

顔を赤らめながら小声で喋る茶々丸。
それを見た霞が萌えたのは言うまでもない。
流石に自重した霞は更に聞く。

「んん！…それでバレたのは皆？俺だけ？」

「霞様だけです。見られた瞬間に大学部の電源を落としデータを削除した後、超の機械にウィルスを送りましたので。」

サラリと言う茶々丸に霞はどこかで教育を間違えたかな？と内心で思う。
まさか生みの親の超に反抗するとは思っていなかった。
ちなみに今の茶々丸の優先順位は
霞＞＞（超えられない壁）＞＞＞超・エヴァ・なのは達＞＞その他である。
哀れ超にエヴァ。
霞は思考を戻しながら茶々丸の話を聞く。
……

……
話を聞き終えた霞は考えを纏める。

（まあ要するに茶々丸に魔力供給をしてた俺の事が気になり、会わせろって事か。）

そう考えた霞は確かめたい事もあったので茶々丸に伝言を頼む。
それを聞いた茶々丸は了解し、店を出て行った。
そして次の日
霞は待ち合わせ場所のカフェテラスで超を待っていた。時刻は午前１１時。

待ち人である超が霞の元へ。
対面の椅子に座り

「初めましてネ、陽神　霞さん♪」

「これはどうもご丁寧に。可愛らしいお嬢さん。」

「フフフ、ありがとネ。」

冒頭に至る。

霞が先手を切る。

「で、俺に何用かな？」

「……単刀直入に聞くネ。…あなたは何者カ？」

超の質問に霞は理解した。
陽神の名に反応もせずにこの質問。
認識阻害は充分に効いている。
霞は表情に出さずに内心でほんの少し安堵する。

「いきなり何者と聞かれてもな。ほんの少しだけズレてる一般人と言った所だけど。それが何か？」

霞の返答に超の表情が少し動く。

「ズレてる……ネ。それは……魔法使いと思ていいのかナ？」

「……ご明察通り。ただ見ての通り、魔力もかなり低いし、昔にゴタゴタあって隠居してる身だよ。この学園にいる魔法使い達とは関係ない身だぞ。」

「ふム……なら、何故茶々丸の魔力供給をしてたネ?茶々丸の所有者は「エヴァンジェリンだろ」……知ってたカ。」

「そらな。エヴァはウチのお得意様だしな。」

「お得意様?」

「ああ、今の俺は細々と喫茶店を経営していてな。エヴァと茶々丸は常連なんだ。」

超は考える。
霞の態度に嘘は見えない。
しかしそれだけであのエヴァンジェリンがその程度の関係で自分の従者を任せるなぞ有り得ないと。
まだ何か隠していると思った直後

「その顔は俺が隠し事をしていると疑ってるだろ。当たってるけどな。」

「ッッ!?……よくわかたネ。」

図星を指された超は一瞬だけ硬直するが直ぐに立て直す。

「これでもそれなりに濃い人生を送りましたんで。まだ13、4歳の女の子に駆け引きであまり負けてらんないのです。」

肩を竦める霞。
超は内心で少し悔しがりながら

「……見た目と違って油断ならなさそうネ。……いや、その前髪で目を隠してるのも一種の擬態カ。」

呟く。
全くもって深読みしすぎた超に霞は笑う。
笑い出した霞に超は訝しむ。

「クックッ……いや……悪いな。これはそんな大したもんじゃないんだ。嫁さんから切るなと厳命されててな。ただそれだけだ。これは本当だぞ。」

「……わかた。それは信じてあげるヨ。」

霞の態度にこれは本当だと理解し、深読みした自分が恥ずかしく返事が無愛想になった超。
そんな超を見て

「拗ねるな拗ねるな。折角の可愛い顔が勿体無いぞ。まあ拗ねた顔も変わらず可愛いがな。」

そう言いながら超の頭に手を伸ばし撫でる霞。

「!?!?／／／／／／!!?」

いきなりの事に顔を赤くし硬直する超。
霞は超の様子を見て

「おっと、すまん。はは、悪い。俺はどうも撫で癖があるみたいでな。時々、無意識にやってしまうんだ。気を悪くしたら申し訳ない。」

少し頭を下げる霞だが、超の反応がない。
おや？と思い顔を上げると

「え〝っ！？」

左目から一滴の涙を流す超。
それを見た霞は焦る。
周りを見ると

ヒソヒソ……
泣いてるわよ……
別れ話？…

冷や汗ダラダラの霞。
まさかいきなり涙を流すとはあまりに予想外すぎた。
そこで超が我に返り

「ッッ！？すまないがこれで失礼するネ！」

ガタンと勢いよく立ち上がり走り去る。

……
……
……
静寂。

霞は走り去る超を眺めていたがすぐにハッとなり

「すんません！！お代置いときます！釣りはいりません！？」

テーブルに万札を置き足早にその場を去る。

こうして麻帆良の最高頭脳である超　鈴音と最強の道士・陽神　霞のファーストコンタクトは終わった。

色々な誤解を残して……

超ｓｉｄｅ

不覚だった。

彼に撫でられた時、心のタガが緩んだ。

初めてだった。

あんな風に優しくされたのは。

私が生まれた場所、そして物心ついた時、既に……。

私は決意した筈なのに。

何があろうと変えてみせると。

それを達成させる為には非情に達してもと。

それなのに……たったあれだけの行動に……

「陽神　霞……カ。」

私は自分で気づいていない。

無意識に呟いていた事に。

走っていた自分がいつの間にか止まっていて撫でられていた頭に手を置いていた事に。

超ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

自宅に戻った霞は頭を抱え悶え苦しんでいた。
まさか１３、４歳の女の子を泣かしてしまった事の罪悪感に。
何が悪かったのか等は考えても仕方がない。
泣かした…という事実がそこにあるだけなのだから。
霞は凹む。
男として最低だと。
そんな霞を何事だと見る、なのは、フェイト、アリカ、テオドラの４人。
そこに

チリ～ン

店内に入ってくる２人組。

「おい霞。超と会ったというのは……って！？おぉぉい！？」

「マスター、霞様はまだ帰って来てないかと……ッ！！？霞様！？。」

エヴァと茶々丸であった。
声を掛けながら店内に入って来たが、ある箇所を見て驚き声を上げる２人。
慌てた２人の様子にエヴァと茶々丸に視線を向けていた４人は振り

返り……仰天する。

「ちょっ！？霞くん！？」

「霞！？何やってるの！？」

「早まるでない！？霞！？」

「やめるのじゃ！？落ち着け！霞よ！！」

いつの間に用意したのか天井から引っさげた首吊り用の縄に今正に自分の首を入れようとしていた。

霞は“超”と言う名前を聞いた瞬間に行動を開始していた……もの凄い早業である。

６人は急いで霞に飛びつき押さえつける。

「離せェーーー！！俺は男として最低なんだーーー！」

暴れる霞を６人は必死に押さえつける。

この攻防は約３０分程続いた後、店に訪れた真名が状況を何となく理解し無言で麻酔弾を撃ち込んだ事により決着がついた。

終わり。

誤解だ!?俺は悪くない!!（後書き）

超はまだ惚れてませんし、学祭まではパーティーに入りません。あしからず。

後、多くて2話か3話ぐらいで原作突入させます。

時間を飛ばします。

それぐらいやらないと霞くんが暇つぶしに麻帆良を破壊しそうですから。

ついカッとなってやりました。（前書き）

原作ではわからないので捏造している部分が多々あります。

気にせずお読み下さい

ついカッとなってやりました。

徐々に気温が下がってきた季節
１１月中旬

ガチャリッ

とある部屋のドアが開き、人影が入り込む。
その者は１４歳程の少女。
ショートカットを無造作に伸ばした白髪、顔は小柄で整っており瞳は淡い水色、目は少し吊り目がちだが充分に美少女といえる。
服装は誰かに指示された訳ではなく、彼女自身が選んだ服……それはメイド服。
それからわかるようにその少女はある人物に忠誠を誓っていた。
その人物は今まさに少女が起こさんとしている人物。

「マスター、朝です。起きて下さい。」

その声に寝ていた人物がムクリと上半身を起こし、声がした方に顔を向けた。

「……ハァ～～。」

溜め息を吐く。
少女は首を傾げ、自分が何かマズい事でもしたかと内心で思った。
表情にはあまり出ていないが。
少女の反応を察した男は

「いや気にしなさんな、レイ。おまえは全く問題ないから。……後、

マスターはやめてくんないか？」

そう言う。

少女はショックを受けたように2、3歩後退し、

「そんな……私は……お払い箱なのですか？いらないのですか？あきたらポイッと捨てる程度だったんですか？1人寂しい独身男性が愛用するo「言わせねーよ！！」……チッ。」

「何言ってんの！？何で舌打ちすんの！？っていうか誰だ！？レイにそんな事を教えた奴は！！「第4奥方様ですが。」って！？テオかァーーー！」

男がウガァーーッと吼えていると部屋に新たな人物が

「何を騒いでおるのじゃ？レイ、霞を起こしたなら下に来て手伝ってくれぬか？」

それは麗しい金の髪に神秘的なオッドアイを持つ美女、アリカであった。

アリカの言葉にレイは了解の返事をして部屋を出て行く。

そう朝から少女に起こされた男は霞であった。

「霞も早く降りてくるのじゃぞ。」

アリカも霞に声を掛け部屋を出て行った。

霞は2人を見送り、また溜め息を吐く。

「ハァ……なんだかレイも段々と皆の影響を受けてきてるな。……喜んでいいのか悲しんだ方がいいのか……。」

と言いながらベッドから出て着替えを始める。

「しかし……まさか…なぁ。セクストゥムが家族になるとは流石に予想できなかった。……いやまあ、自分が悪いんだけども……ｏｒｚ」

霞が虚空に呟く。

言葉通り、先程の白髪の美少女は原作でいう水のアーウェルンクス・セクストゥムであった。

何故、彼女が霞をマスターと称え霞の家にいるのか？

それは

１０月下旬のとある日

霞は現在、魔法世界に存在する堕ちた都オスティアの地にいた。

霞は廃都と化し魔獣がひしめいている場所を軽い調子で歩いている。

「ったく。他に人材がいないからって俺に頼んでくんなよ、あいつは。怪我が癒えたなら大人しく隠居でもしときゃーいいのに……（ブツブツ。」

愚痴を吐きながら。
先の言葉からわかるように霞はある人物から廃都の調査を依頼されていたのだ。
そして今はその調査の途中である。

「ん？……これは。」

文句を言いながら歩いていると霞は何かに気づいた。
妙な気配を感じた方に顔を向け、目を細める。

「場所は……あそこか。」

気配がした場所の距離と方角を考え、当たりをつける。
霞は少しの間、考え……

「まっ、バレなきゃいいか。」

と言いながら移動を開始する。
霞が向かった場所、それは……

《墓守り人の宮殿》

（歩けど歩けど、誰にもすれ違わんな～。）

内心でそう思いながら、宮殿内部を探索する。

霞は妙な気配がしている場所へと歩いているのだが、全く誰にも遭遇しない。

霞が覚えている限り、ここは《完全なる世界》のアジトであるから誰かとバッタリ遭う事も予期していたので認識“妨害”をかけて歩いていたのだ。

（まあ楽なのはいいが、拍子抜けだわな。）

と思っていたら目的の場所へと着いた。

そこは扉。

霞が感知したのはこの扉の向こうにあるもしくはいる何か。

（さて……何が出てくるかな～）

少しだけワクワクしながら扉をゆっくりと開ける。

サッと素早く中に入り扉を閉める。

そして振り向き、室内を伺うと

全裸の筋肉マッチョな肌黒男が横たわっているのが霞の視界に入った。

ガシッ
グイッ（ブチブチッ

「そぉーーーーい！！」

ブォン
ドガァァン
ヒューーーーン……キラ☆

「汚物は消え去った（キリッ」

マッチョな男を掴み、振りかぶり、投げる。
その間1秒未満。
考える間もなく即実行。
それが霞クオリティー。

「ったく。気色悪いもんを見せやがって。帰ったら誰かに『コードが切断されました。ロード中のデータは破棄されます。コードを新たに接続しダウンロードを再会してください。』って、はい？」

霞が呟いていると機械的な音声が突如発声し霞の言葉を遮る。
霞はなんだ？と思い見渡すと

カプセルみたいなものが目に入り

中に白髪の美少女が裸でいた。
正しくは水の中で浮いていた。

「ｏｈ……眼が洗われちゃう☆っじゃねえよ！？どっかで見たと思ったらアーウェルンクスシリーズの水の娘じゃねぇか！」

霞が叫ぶ。
そうカプセルの中にいたのは水のアーウェルンクス・セクストゥムであった。

「ってか、まだ起動してなかったんか。《３番目》と同時期に起動されてると思ってたのに。」

そう言いながらセクストゥムをマジマジ見る霞。
端から見ると眠っている少女の裸体を視姦している変態である。

「……あれ？じゃあさっきの音声は……。」

とようやく視線を外した霞は改めて周囲を見ると……。
それなりの大きさの機械がありそれから何やらコードが数本散らばっていたのでそれを手に取る。

「さっき言ってたコードってこれか？」

それを手の平に置き見る。
コードの先端は注射器のようなモノになっていて微かに血のようなものがついていた。
少し不快な気分になった霞は先端を手近にあった布で拭き、指先に火を灯し消毒した後……

「えい♪（ブスッ」

刺した！？

脈絡もなく刺した！？

馬鹿だ馬鹿だと思ってたけど、ここまで馬鹿とは思わなかった！！？

（放送事故がありました、暫くお待ち下さい）

霞は自分の腕にコードの先端を刺した。

するとそこから血液と魔力が吸い取られていく。

その感覚に霞は少し考えた後、

「よぃしょっ」

魔力を大量に流し込み始めた。

そうしたら

『魔力量が限界に達しました。二種の魔力を確認……既存魔力を排出し流入魔力を選択します。……魔力量限界です。……新規マスターを登録します。……エラー、エラー……マスター登録ができません。……推奨します。マスター登録は本契約ないしは仮契約を提案します。』

「何で契約？っつーか勝手に進んでいってるからよくわからん。…

…やっぱり思いつきで『契約を開始します』ってなんでさ！！まだ何もしてないっつーのに！？」

勝手に進んでいく事態に霞は慌てる。
慌てた霞は思わず

ドグシャァァン！！

機械を壊した。

「ふぅ……これでなんとか『……ガが…契……じっ……』……へっ？」

パァァァァ！！

光が溢れる。
霞は呆然とする。
光が収まり

プシューー。

カプセルが開く。
少女が目を開け

「おはようございます、ダーリン。これからダーリンの身の回りのお世話をさせてもらいます。もちろん夜の「言わせねーよ！！」…
…残念です。」

無表情でそう言うセクストゥム。
そんな彼女に霞は怒涛のツッコミを入れる。

「それよりダーリンって何だ!?そこはせめてマスターだろ!?それと何でいきなりそんな事言うのさ!!もうキャラ違うじゃねーか!?」

「わかりました。ではマスターとお呼びします。誠心誠意マスターに尽くしていきますので、よろしくお願いします。」

「チッガーーウ!?だから「こっちから声が聞こえました!?」「何かの破壊音もしたぞ」ッッ!?マズッ、誰か来た!」

先刻に機械を破壊した音と霞の叫び声を聞きつけ構成員が駆けつけてきた。
霞は一瞬蹴散らすかと考えたが、そうすると霞の素性がバレていらぬ争いを麻帆良に持ち込みそうなので逃げる事にした。

「マスター、待って下さい。」

セクストゥムが逃げようとする霞の側にトテトテと近寄る。

「〜〜〜ッ。仕方ない。連れて帰るか……ハァ。」

ヘラス帝国城にある霞の部屋

「それで連れて帰ってきたのか。……ハァ～、これは本体の方も苦労してそうじゃのぅ。」

褐色の美女、ヘラス帝国第3皇女テオドラがいきなり現れた霞から事情を聞き、溜め息を吐き呆れる。
何故ここにテオドラがいるのか？
先程の発言通りここにいるテオドラはテオドラの分体である。詳細は省くがテオドラを旧世界に連れていく為に提案したのが、本人と変わらない分体を作る事であった。
まあそれは置いておき

テオドラの言葉に霞は申し訳ない顔をしながら

「いや今回は言い訳もしようがない。……どうしたらいいと思う？」

「もう霞が引き取るしかないじゃろ。先の答え通りなら。」

と言いながらテオドラは霞の横でチョコンと座っているセクストゥムに目を向け

「のぅ、お主も霞から離れたくはないんじゃろ？」

質問する。
セクストゥムは無表情のまま頷き

「はい。マスターから離れるなど有り得ません。」

と返答する。
テオドラはほらなという表情で霞を見る。

現在のセクストゥムの状況を大まかに纏めると

・アーウェルンクスシリーズはリンクが繋がっているがセクストゥムは現在それがない。
・戦闘知識、経験は保有している。
・マスターを霞としている。
・上記のマスター登録はもう何をしても変更不可能。
・ある程度の一般知識を保有。

であった。
霞はセクストゥムにコッソリと聞いてみたのだ……《造物主》の事を。
すると

「？記憶にありませんが……？」

だと。
霞はそれを聞き……色々諦めた。

「よし。腹を括ります。……今日からおまえはレイだ！」

セクストゥムの方を見ながら宣言した霞。

「……レイ…ですか？」

首を傾げ聞き返す。

「おう！レイだ。陽神　レイ。俺の家族だ。」

「レイ……家族……レイ……。」

繰り返し呟く。
そんなレイを見て苦笑しながら

「そうだな……身分は……俺の娘に「嫌です」……泣いてもいいよねｏｒｚ」

さっきまでブツブツ言っていたレイが霞の“娘”と聞いた瞬間に反応し拒否したのだ。
それを聞き霞は凹む。
レイはボソボソと小声で

「娘では嫌です。私は～～がいいです。」

呟く。
それは霞には聞こえないが、テオドラには聞こえていた。
それを聞いたテオドラは内心で思う。

（やれやれ。これは家に帰ったら荒れるんじゃろうなぁ。）

それは予想とかではなく確信。
そしてテオドラは退室し公務に戻る。

霞は

「……家に帰るか。あいつに調査報告すんのはまた今度にして。」

と言いながらレイを連れて旧世界にある我が家へと戻った。

「気になっていたんだが……なんでレイはメイド服を着てんの？」

「奉仕をするならこれが正装だとテオドラ様が教えてくれました。それにこれを着ていればマスターが襲いかかってきてくれると仰ってましたので。」

「……レイ。普通の服を買うから着替えなさい。」

「嫌です。」

「まさかの拒否！命令しま「拒否します」……。」

「マスター。」

「……何？」

「いつでも襲ってくれて「襲わねーよ！！」……残念です。」

「もうこの娘疲れる（泣）」

こうしてレイは他の霞の嫁に紹介され陽神家の家族となった。

おまけ

「ウホッ！何か地上から飛んできたと思ったらイイ男♪」

「むっ、ぅう、ここは……。」

「ドナルドは据え膳を美味しく頂く主義なんだ～♪」

「ッ！？何だ貴様は！って体が動かん！？
何故、うつ伏せに！
あっ、やめっ！？
はな！ァアアーーー……」

「～～♪ドナルドは気にせずやっちゃうんだ～♪（パコパコッ」

「……はっ！？ここは……自室か…。恐ろしい夢だった。赤いアフロの男に《ピー》れるなど…思い出すだけで……いかんいかん！思い出すな。……フゥ～、確か６番目の調整をしなければいけなかったな。行くか。……しかし尻がヒリヒリするのは何故だろう？」

男は首を傾げながら尻を押さえつつ歩き始める。
この後、男は調整室の有り様と6番目がいなくなっているのに悲鳴を上げることとなる。

今回の多大な被害者

《完全なる世界》幹部

露出狂のデュナミス

被害内容

・霞にセクストゥムを奪われ調整室を破壊される
・ドナルドに後ろの大切なモノを奪われる。

以上

ついカッとなってやりました。（後書き）

陽神　レイ
旧）水のアーウェルンクス・セクストゥム

アーティファクト
・混元殊ドナルド作
この宝貝は単体であり、レイの右手甲に顕現化する。
レイの魔力が続く限り水を生み出すことが出来る。またそれを操ることも出来る。
氷に変換したりは不可能。（作中で氷結する描写が出てくるが、それはレイの保有能力）

・ヘキ地殊ドナルド作
この宝貝はレイの左手甲に顕現化。
大地の力を借り傷を癒やす事が出来る。
死んでいなければ大抵は治せる。
複数治癒可。
複数の場合、治癒能力が少し落ちる。
（ドラクエで例えると、ベホマとベホマラー）
また呪い等も治癒可。
但しレイの力を上回る呪い等は進行を遅らせる程度である。

・ミステリアスヴェールドナルド作（メイドクラシックｖｅｒ）
通常展開の場合でもそれなりの防御を誇るが、霞の支援魔力具合で防御率ｕｐ。

レイは霞の契約と膨大な魔力を送られた事により核が変質し、《造

物主》の支配やアーウェルンクスシリーズのリンクなどが切れてしまった。
戦闘技術と知識及び、保有能力は持ったままである。
宝貝はレイの能力を増幅させるといった感じで顕現。
レイの優先順位は
霞＞＞（超えられない壁）＞＞なのは達＞＞＞＞＞その他
霞達と生活していく内に感情が育っていく。（茶々丸と同じ）
そして肉体年齢は原作フェイトみたいに操作？出来ます。

レイの目下の目標

「マスターにどうやって襲ってもらおう？」

ちなみにアリカだけお姉様と呼んでいる。他は様付け。

霞の休日？（前書き）

こんな内容でいいのかとかなり不安になりつつ……

お気に召さなかった方々が多かったら修正もしくは別の話に変更しようと思いながら……。

そしてとあるヒロインのキャラが激しく崩壊しています。

ご注意を

霞の休日？

１２月上旬

ある日曜日
ここしばらくはちょっと平穏な日々を過ごしていた霞は麻帆良の広大な敷地を気分転換で散歩していた。

「～～♪～♪……アッハハハ……フゥ、もちつけ俺。現状を把握しろ。」

そう言いながら右を見て……左を見て……頷く。

「……かんっぺきに迷ったな。……どうしようかｏｒｚ」

適当に歩き回っていた霞は自分の現在位置がわからなくっていた。
本来は店にいるアリカ達の気配を掴むなり、転移をしたり等をして帰れるが霞は今日は普通に過ごすと決めていたので、それは本当に最後の手段。
考える霞。

「……適当に歩いてけば知ってる道に出るか。」

……面倒くさくなり考えるのをやめた。

「～～～♪」

再び歩き始める霞。

そして穏やかな1日から騒がしい1日に変貌する幕が上がった。

千鶴ＰＡＲＴ

歩き始めた霞が少し進んだ時、何やら騒がしい声が聞こえた。
それは幼い子供達が遊びはしゃぐ声。
霞はそちらに顔を向け

「お～、ここは幼稚園か～。……子供は元気だね～。」

呟きながら微笑ましい目で見つめる。
その子供に囲まれて共に遊んでいる保母さんらしき人を見て

「……これまた美人さんだね。ってか麻帆良って美人や美少女が多いな……あの学園長は狙っているのか？」

と首を傾げながら歩き出す。
立ち止まってずっと眺めていると変質者に間違われるからだ。
そして霞が幼稚園を通り過ぎて少し進んだ時

キャーーーッ！
ウワーーン！

子供達の悲鳴と泣き声が聞こえた。
何だ？と踵を返し戻ってみると

「……これ、なんてテンプレ？」

と言いたくなる展開が繰り広げられていた。

そこには柄の悪そうなチンピラ3人が先程見ていた美人の保母さんに絡んでいた。

「……周りには誰もいない。幼稚園の先生は……女性ばかり…か。しゃーないか。」

と言いながら騒動の中心へ向かい始める。

千鶴ｓｉｄｅ

幼稚園で子供達のお世話をしていた時にいきなり現れた柄の悪そうな男性達。狙いは私。

「よー、ネェチャン。俺らと一緒に遊びに行かないか～。」

「そ～そ～。こんなガキの相手をするよか数万倍楽しいぜ。」

「そのまま朝まで付き合ってくれたら天国見せちゃうよ～」

「「「ギャハハッ」」」

怖気が走る物言いで私に詰め寄る3人。
気持ち悪い。
私が一番嫌いなタイプ。

「申し訳ないですが、お断りします。それと子供達が怖がっているので立ち去ってもらえませんか?これ以上の騒ぎを起こすと警察を

呼びますよ。」

「……アッハハハ、気丈だね～。なら、警察が来る前に行こうかな。……あんたを無理矢理連れてな。おい！！」

「了解～。へへ。」

「大丈夫だぜ。明日になったら良かったと思うようになるからよ。」

そう言いながら私を拘束する為、手を伸ばしてくる。

「やめろ！千鶴姉ちゃんから離れろ！？」

ッ！？猛くん！

「イテッ！？このガキィ！！」

「猛くん！逃げなさい！！」

私は叫ぶ。

男が拳を振り上げるのを見て、猛くんの前に出る。

（ッッ！？）

目を思わず瞑る。

……

……

……

？？

衝撃が来ない？
そう思った時

「おいおい。女・子供を殴ろうとするのは流石に見逃せんぞ～。」

声が聞こえた。
その声に釣られ目をゆっくりと開けると

男の人の背中。

この時私は何故かこう思った。

もう大丈夫だ。と

本当なら心配しなければいけないのにこの背中を見たら不思議とそう思った。

千鶴ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

霞は3人のチンピラをサッサと片付け、警察に連絡でもするかと考えた時

「霞さん！！」

聞き覚えのある声がした。

「ん、タカミチか。どうした？」

「いえ、ここで揉め事が起きていると聞いたので駆けつけたんですが……。霞さんがやってくれたようですね。ありがとう御座います。」

タカミチが礼を言ってくる。

「気にすんな。とりあえず後は任せていいか？」

霞がそう言うとタカミチは頷き了承する。
それを聞いた霞は再び散歩に戻ろうと歩き出すと

「あのっ！？」

声を掛けられた。
霞は声に釣られ振り向いた。
声の主は男の子を庇った保母さん。

「助けてもらいありがとう御座います。何かお礼をしたいのですが…。」

と言ってきた。
霞は少し考え

「なら俺の店の売り上げに少しでいいから貢献してくれたら嬉しいかな。あっ、無理に来なくていいから。今日は休みだけど、基本は

いつでも開いてる。場所はそこのヒゲメガネのオッサンに聞いといて。」

そう言いながら立ち去る。

ちなみにオッサンと言われた瞬間、タカミチが固まったのは余談である。

千雨ＰＡＲＴ

霞は幼稚園から出た後、大きな通りに出た。

「ここは……前に通った…か？似たような所が多すぎだろ。」

霞がそう言いながら歩いていると前を見ると

「……おいおい、あれはマズいぞ。」

そこには青信号を渡っている女の子がいるのだが、そこに停止しそうにないトラックが目に入った。

「まだ間に合う！？」

霞はそう言いながらその場から……消えた。

千雨ｓｉｄｅ

私はここの異常な毎日にイライラしていた。いつもなら休日は部屋に閉じこもりネットをしてるんだが、偶には外に出てみようと思ったんだが……。

「それでこれかよ。」

私の視界には今、トラックが映っている。
間違いなく轢かれる。
しかし、こんな時でも私は何故か冷静だった。
たぶん……異常なここから抜け出せるなら死んでもいいかなと思ったのだろう。

「はぁ……短い人生だったな。」

私が諦め呟いた時

「諦めたらそこで試合終了ですよ♪ってな！！」

某バスケット漫画の監督の台詞が聞こえ、同時に風を感じた。

千雨ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「ほれ。これでも飲め。少女よ。」
霞は缶コーヒーを女の子に渡した。
「ありがとう御座います。後、助けて貰った事も。」
「助けたのは俺の勝手だから気にすんな。正直、間に合うかわからなかったがな。それより……あ～名前聞いてもいいか?流石に少女やキミとかは失礼かなと。」
霞が聞くと
「あっ、はい。長谷川です。長谷川　千雨。「なら千雨でいいか?」構いません。」
「なら千雨はさ。なんで諦めてたん?別に自殺志願でも無さそうなのに。普通ならもう少し慌てるなりするだろ?やけにアッサリしてたから気になったんだが……。」
霞の言葉にピクリと反応する千雨。
ただ霞は予想…というか知っているのだが。
千雨は少し沈黙した後、ポツリポツリと語り出す。
ここ麻帆良の異常性を、そしてその異常を普通と認識している住人達がおかしいと思っていることを。
語り終えた千雨は、霞を恐る恐る見る。
霞はそれを見て考える。

（別に教えてもいいんだけど……そうなると千雨の性格からして魔法を学びそう……あれ？原作で危険に巻き込まれるなら今の内にコッソリ教えといた方がいいかな？けど、それだとネギの……少し小出しにして愚痴を聞くぐらいなら問題ないか。）

結論を出した霞は

「千雨。」

霞が声を掛けると少しだけ肩を強ばらせた。
それを見た霞は苦笑しながら

「そんなに緊張すんな。今の俺には千雨の愚痴を聞くぐらいしか出来ん。ただそれだけでも溜め込むよりかは多少はマシだ。だから話し相手にはなってやる。それじゃ駄目か？」

首を横に振る千雨。
霞は頭をポンポンと叩き

「なら偶に俺の店に来て溜まったもん出しに来い。場所は高畑先生に聞きゃ分かる。千雨なら歓迎してやっから。」

「はい。……ありがとう御座います。」

それを聞いた霞は思いついた様にワザと言う。

「ふと思ったんだけど……千雨が溜まったもの出しにくる……イヤらしくね？」

「……さっきまでの感動を返せ！？今ので台無しだよ！」

素のしゃべり方に戻る千雨。
霞はしてやったりな顔をした。

「ククク、それが素だろ？今度からそれでいいからな。じゃぁ、俺は行くな～。もう一回言うけど、場所は“高畑”に聞け。霞が言っていたっていうと通るから！」

霞はそれだけ言いながら立ち去った。
後に残った千雨は呆然とした後に少し晴れたような顔をして

「……変な人だったな。」

と呟き寮へと戻った。

木乃香ＰＡＲＴ

千雨の件が終わった後、霞は時間を見て

「腹が減った。」

そう言いながら何を食べようか考えながら歩き出す。

キョロキョロと視線を動かし店を物色していると

「あの～……これ落としましたえ。」

後ろから声がした。
その声に振り向いた霞は

「ん？……あ゛っ」

「へっ？」

見知った人物だった為、思わず声に出た。
その人物……近衛木乃香は霞のその声を聞きキョトンとした。
霞はすぐに立て直し

「いや、ごめん。まさか落としたとは思ってなくてな。本当にありがとう。」

と言いながら自分の落とし物であるタバコを受け取る。

「……？？」

木乃香は霞を見ていたと思ったら首を傾げ不思議な顔をする。
霞は表情では何だ？という感じだが内心では

（まさか……気づいた？いやいや、んな馬鹿な。……けど木乃香ってぽやっしてながら時折核心を点いたりするからな。）

結構焦っていた。
そして木乃香が

「ん～～……あの、失礼ですけど、どこかでウチと会ったことあり

ますか？」

と聞いてきた。

霞は少しホッとして口を滑らす。

「いや、ないな。キミみたいな可愛い女の子と会ったら絶対に忘れないからな。」

それを聞いた木乃香が

「や、可愛いなんて／／……あれ？なんや昔に……あれ？」

最初は照れていたが途端に不思議がり出した。

霞はこれ以上はマズいと思い

「あー、ごめん。ちょっと時間がないから俺は行くな。落とし物ありがとうな。」

急いで立ち去ろうとする。

「あっ、はい。すいません。時間を取らせた上に変な事を聞いたりして。」

「いやいいよ。それじゃあな、木乃香。」

「はい、お気になさらず。さよなら。」

走り去る霞。

慌てた為、思わず口走ってしまった事に気づかず。

霞が走り去った後、木乃香がそれに気づく。

「……なんであの人、ウチの名前知ってたんやろ?……それに呼ばれた時に……なんや温かくなったなぁ…。」

そんな疑問を持ちつつ木乃香も歩き出す。
期せずして再会してしまった2人。
2人が近い未来にまた再会する事なぞ夢にも思わず。

刹那ＰＡＲＴ

霞は木乃香と急いで別れた後、後ろを見てほぅっと溜め息を吐き

「……まさか、俺の方に来るとは。」

呟く。
木乃香と会話をしていた時から感じていた気配が別れた霞の方に付いてきたのだ。
霞は人気のない路地裏に入る。

「ここでいいか。……おーい、出てこーい。ついて来てるのは判ってるぞ~。」

霞がそう声を掛けると背後から人影が出てくる。
その人影もまた霞の知っている人物。

「貴様は何者だ？何故、お嬢様の名前を知っていた？」

凛とした声音と共に少量の殺気を霞に放つ女の子。
桜咲　刹那。
霞は苦笑しながら

「そう殺気を飛ばすなよ。」

刹那に声を掛ける。
刹那はそれを無視し再度問いかける。

「もう一度聞く。……何者だ？」

霞は溜め息を吐き、内心で「駄目だこりゃ」と思う。
そして少し考えた後、何かを思いついたような顔をして

「……（ニヤリ。……何者かと言われると……ある者の命で…近づいた……って！？ぅぉおい！」

霞の「近づいた」という言葉を聞いた瞬間、刹那が一足の内に霞に肉薄してきた。

ブンッ
パァン！

刹那の剣筋を見切り、霞は両の手の平にて剣を挟み込んだ。

「ッッ！？バカな！」

「見たか！これが漢なら一度は夢見るであろう神業！真・剣・白・

羽・取りダァーーー！（パキンッ。……へっ？」

「えっ？」

霞が何やら馬鹿な叫びを上げた時、何かが折れた様な甲高い音がした。

それを聞いた両者は間抜けな声を出す。

刹那ｓｉｄｅ

「ッッ！？バカな！？」

まさか自身の剣を受け止められるとは思っていなかった私は驚愕し声に出す。

そして何やら阿呆な叫びをあげているが私はその隙に男を蹴り飛ばそうと思った時だった。

パキン。

「ーー。へっ？」

「えっ？」

何かが割れる、いや折れるような音が空間に響いた時。

私は思わず声が出てしまった。

（何だ？……音がしたのは男の方から……しかも手から……まさか…。）

音の出所に見当をつけた私は……信じたくなかった。
何故ならそれがもし本当なら……。
私は頭を振りその考えを打ち消す。
だが、現実は無情だった。
男が引きつった笑みをしながら宣告してきたのだった。

「あの……いや…うん。……折れちゃった♪ごめんネ☆」

それを聞いた私は頭の中が真っ白になりながら胸中で反芻する。

(織れた?居れた?……はれ?へっ?お礼た?何を言ってるん?この人?オレタって地名?ウチにも解る言葉で喋って欲しいわ、ほんま。……あれ?折れた?)

「折れた?」

「……う、うん。折れた。」

「折れた…って……何が?」

「……えっと……キミの……」

「ウチの?」

「……」

「……刀が。」

「……」

言葉の意味を理解したくてもできなかった。
だけど、段々私の脳にジワジワ染み込んできて

「……（ジワ」

「……（・―・；）」

「……ゥ（ジワワッ」

「……（。□。；）」

「ウワァァァァァァァァン！！！！！！」

ウチは泣いた。鳴いた。
男の目も気にせず。
こんなにわき目もふらず泣いたのは……遠い昔、一緒に遊んでいた男の子に悪戯されて泣いた時以来だった。
……今でも想い続けている悪戯好きで……でも時折頭を撫でてくれるのが心地よく……そして鮮烈に焼き付いた強い背中……
強く優しい…かーくん。

刹那ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

霞は焦る！

霞は混乱する!!
霞は踊る!!!

「って!踊ってる場合じゃねェーー!?」

霞の前ではもうさっきまでの凛とした雰囲気なぞ冥王星辺りまでぶっ飛ばし、精神年齢は幼児です!と言わんばかりに泣き喚く刹那。

「ウワァァァ!何してくれるんやーー!!ウチのカタナ返セーーー!返してェーー!ァァァァァ!」

「えっ……と……はい、返します。」

霞は刹那に刀を渡す……折れた刀身を。もう一方は刹那が持っていた。

「ちゃうもん!!ウチのユウナギ一本やもん!ニホンちゃうモン!!ちゃんと返せェーー!ウワァァァァァン!!」

「うぇぇい!そんな無茶な!?刹那!とりあえず泣き止んでェーー!」

幼児気味な刹那はお気に召さなかったのか無茶振りを霞にする。
それを聞いた霞は、無理だと言う。
それを聞いた刹那は

「バガァァァ!!ユウナギないとこのちゃん守れんやんかァーーー!なんとかシローーーー!!」

更に泣く。鳴く。

霞は最後の手段だと言わんばかりに昔、刹那をあやしていた方法をとる。

ポンッ。
ナデナデ

「……ふぇ。」

効いたようだった。
霞が刹那の頭に手を載せ優しく撫でると刹那は泣き止みキョトンとした表情をし霞を見上げる。

「悪かった悪かった。ちょっとふざけ過ぎたな。俺が悪かったから。とりあえず泣き止め、刹那。（ナデナデ。」

撫でながら優しく刹那に声を掛ける霞。
刹那は撫でられたまま、ぼっーと霞を見上げる。
その時、良いのか悪いのか新たな闖入者が現れた。

「霞……何やってるの？」

「霞さん……これはちょっと言い訳できないと思うよ。」

それは

「あはは……話ぐらいは聞いて……欲しいか…な。フェイト、真名。」

金髪紅瞳の美少女、フェイトに褐色美人の真名。

「問答…。」

「無用だね。」

「……ですよね～（泣）」

女を泣かせる事は極刑に値する、と言わんばかりに処刑が執行された。

そして

「かー……くん……？」

刹那は遠い昔の事を思い出したのか先刻まで撫でられていた頭に手を置き、憧れであり…初恋であった男の子の名前を呟く。

フェイトと真名にフルボッコにされた霞はフェイトに引き摺られ家に連れ戻され、泣き止んだ刹那は真名と共に寮へと戻った。

別れる際、後日店に来たらいいと伝え。

こうして霞の穏やかになるはずであった休日はなんやかんやで騒がしい1日になったのであった。

おまけ

「……フェイト……もう許して（泣）」

「駄目だよ。あんな可愛い刹那を泣かした罪は重いんだから……。」

「……これでも？」

霞は震える手で懐から何かを取り出す。

「……可愛い♪（ポタポタッ）」

それは
先刻の泣き喚いていた刹那の写真。
フェイトに取っては最高の切り札。
いつの間に撮っていたと聞くのは禁則事項だ。

「……許してくれたら……ネガ毎あげるから……。」

「……わかった、許す。……ああ、刹那可愛いな～、もう♪」

フェイトは刹那の写真を持って霞から離れていった。

「助かっ「霞くん♪」……ひゃい（泣）」

安堵した霞になのはが声を掛ける。

「アハッ☆……桜咲さんを泣かしたんだって？……ちょっとそれは見逃せないかな～♪」

「……貝になりたい（泣）」

「……教育じゃ温いよね。恐育してあげる♪……さあ、逝こう。」

ズルズルと霞を引きずり家の奥へと入るなのは。

その後、打ち上げられた魚のようにピクピクしていた霞がいたとかいないとか……。

哀れ。

霞の休日？（後書き）

千鶴ｓｉｄｅの書き方に不安。

千雨がトラックに轢かれる時の感じに不安

木乃香は……いいや。

せっちゃんは……作者の中ではあんな感じになってるんだ～♪

……色々、ヤバい。

…本気で直そうか……

まあそれはひとまず置いておこう。

そして重大な事実に気が付いた。

……もうすぐ時系列的にネギっこの来訪じゃん！！

（。□。）

……アキラ、刀子さんのフラグが！！

……あはは～、どうすっか。

作者の考えの甘さが浮き彫りまくった感が盛り沢山！！

……最後の切り札！

ドナルド召喚！

カオスな展開にな～れ～！

やりませんけどね

何とかします。

成分不足……死活問題だ！！（前書き）

久々の投稿

……待っていてくれた人がいるかどうか疑問ですが待たせてすいません。
これからはまた頑張っていきます。

そして数々の感想をくれた方々。
申し訳ありません
m（＿＿）m

これからはしっかりと返事をしていきます。

では久々の霞くんです。
堪能して下されば幸いです、どうぞ。

車に跳ねられた時はマジで焦ったわ

成分不足……死活問題だ！！

霞が刹那を泣かせた次の日の夕方頃、霞の喫茶店には珍しく客が来店していた。
その客とは……

「で、どうだ？多少はスッキリしたか？」

「まあ……聞いてくれる相手がいるというのがここまで楽だとは思わなかったかな……。」

「だろ。これからも何かあれば遠慮せず店に来ていいからな。千雨ならいつでも歓迎するしな。」

「／／／……そりゃどうも。」

千雨であった。
千雨はタカミチに事情（助けて貰った事）を話して店の場所を教えてもらい来店したのであった。タカミチは千雨の事情を聞いた時に内心で
（あの人が出歩けば何かしらの事件が発生するような……）
と考えたのは余談である。

「それより千雨。少し頼みがあるんだが……。」

霞がそういうと千雨は訝しげな顔をして返事をした。

「まあ内容にもよるけど。」

「別に変な頼みじゃないし簡単な事だ。今から出すコーヒーの試飲をして欲しいだけ。千雨が来るまで1人で暇だったんでな。少しブレンドの配分を変えてみたりしてたんだよ。その内の一つがいけるかな～って感じに仕上がったから他の人の意見も聞いてみたいんだ。もちろん金は請求しないぞ。」

霞の言っている通り、店内には霞と千雨のみ。本来ならウェイトレスとしているアリカとテオとレイは買い物に出掛けると言い、外出していたのだ。
千雨は霞の頼みを聞き「それぐらいなら」と了承の返事をしたので霞は厨房へと入って用意をしようとしたら

チリ～ン

店内の扉が開けられた。
霞はおや？という顔をして入口の方を向くと、麻帆良女子中の制服を着たなのはとフェイト……それに千鶴が入ってきた。

「ただいま～。……あれ？お客さんがいる！？」

「ただいま。霞、お客さんを連れてきたよ。」

「あら？もしかして長谷川さん……かしら？」

「ん？……ッ！？高町にテスタロッサ、それに那波か！」

「あ～……おかえり、なのは、フェイト。それとそちらの女の子は

いらっしゃい。」

店に入ってきたなのははは店に客がいることに驚き、フェイトは普通に挨拶をした後に千鶴を連れてきた事を伝え、千鶴は店内にクラスメイトがいることに多少驚き、千雨は自分のクラスメイト3人が現れた事に驚き、霞は「まさか今日来るとはな～」と思いつつ挨拶を交わした。

なのはとフェイトは私服に着替える為に中に入っていった。
千雨と千鶴はカウンター席に座っている。

「……。」

「……。」

2人は沈黙している。
そこへ霞が千雨に先程言っていたブレンドを出しながら、千鶴に話しかけた。

「ほい、千雨。これだ。飲んでみて感想頼むわ。そちらの女の子はいらっしゃい。……改めてだけど、この喫茶店のマスターの霞だ。よろしくな。」

「私は那波　千鶴と申します。先日は危ない所をどうもありがとうございました。」

霞の言葉にお辞儀をしながら丁寧に返事をする千鶴。

千雨はそれをブレンドを飲みながらなんとはなしに聞いていた。

（？危ない所？……あ、美味い。）

「まあお互い怪我がなくて良かった。それより何か飲むか？もしくは食べる？」

それを聞いた千鶴はふと自分の周りに目を配らせ少しだけ困惑した表情をする。
それに気づいた霞は

「ああ、メニュー表は置いてないんだ。ここに来る客は限られている上に少なくてな。それに基本的に何でも出すようにしてる。何でもいいから遠慮なく注文していいよ。」

と言う霞。
千鶴は人差し指を頬に当て少し考えた後に、笑顔になり

「それでは満願全席をお願いします。」

と言った。

「ぶふぉっ。」

千雨が思わずコーヒーを吹き出し

「馬鹿か、お前は！なんで喫茶店で満願全席なんだよ！そもそもそんなものを頼むな！常識的に考えろよ！？」

ツッコミを入れる千雨。

千鶴は

「あら。もちろん冗談ですよ。店長さんが何でもと言ったから言ってみただけですわ。」

笑顔で千雨に返す。

千雨は顔を引きつらせながら顔を正面に向けた後……

「……あれ？霞さんは？」

と呟いた。

千鶴もいつの間にか霞が消えていた事にと少し驚き「あら？」と声を上げ首を傾げていた。

２人が疑問を覚えた時に奥の厨房から声が聞こえてきた。

「あれ？そんなに沢山食材出して何かあったの？」

「ん？ああ、なのはか。いや、注文でな満願全席が入ってな。それを今から作るんだ。少し手伝ってくれ。」

「あ、うん。いいよ～。けど、満願全席ってまた凄いのを注文してきたね。誰が頼んできたの？」

「ん、那波ちゃんだけど。」

「へえ～……えっ？」

「どした？」

あの後、なのはが急いで千鶴の元へ行き確認して千鶴の冗談だと霞に伝え作るのを止めさせた。
霞は少し残念そうな顔をして、千鶴は本当に作るとは思わなかった為に口元に手を当て少し驚き、千雨は溜め息をついていた。

「那波さん。霞くんに滅多な注文しない方がいいよ。本当に何でも作っちゃうから。アリカさんがいたら無理だって断っていたんだろうけど。」

なのはは千鶴にそう言う。
千鶴はそれを聞き謝りながら

「ところで少し気になったのですが、高町さんはここに住んでらっしゃるんですか?」

と聞く。
千雨も少し気になったのか横目で伺う。

「うんそうだよ。フェイトちゃんもここに住んでるよ。」

「それでこの店を知ってたんですね。じゃあ店長さんは……お兄さんになるんですか?」

「う~ん。まあ今の私とフェイトちゃんの保護者には変わりないかなぁ。ちょっと説明し辛いんだよね~。」

なのはがそう答えると千鶴は申し訳なさそうな顔をして謝る。
千雨は何か聞いてはいけない事を聞いたようで居づらそうにし始めた。
なのはは一瞬キョトンとした後、すぐにそれに気づき慌てて訂正した。

「いや、あの、違うよ！誤解してるからね！何もドラマみたいな展開があったとかそんなのじゃないんから。ただ説明し辛いだけだよ！」

千鶴は「はあ」と言いながらポカンとし、千雨は我関せずといった顔をしながらコーヒーを飲む。
なのはは内心で説明できない事にやきもきしていた。
霞はそんななのはを見て

「まあ説明できんわなぁ～。」

と呑気に呟きながら千鶴が注文した紅茶とケーキを用意していた。

霞が千鶴の注文を出してフェイトがその時に店内に入ってきた後、なのはとフェイトと千鶴は談笑し始めた。

「で、千雨は混ざらないのか？」

霞は1人で静かにコーヒーを飲んでる千雨に話しかけた。

「いや、別に混ざる必要もないし。後、そんなに仲良くありません

からね。」

と敬語を使い返答する千雨。
霞は苦笑いしながら

「まあ千雨の好きなようにしたらいいけど。それよりブレンドはどうだった？」

「美味しかったですよ。個人的には最初のより好きです。」

「ふむ。なら次からはこれも出してみるか……って、どうした？こっち見て。」
談笑していた3人が何故か霞と千雨を見ていた。
なのはが聞いてくる。

「いや霞くんと長谷川さん、仲が良いな～と思って。」

「うん。そういえば霞は長谷川さんとどうやって知り合ったの？」

続いてフェイトが質問してきた。
霞はチラリと千雨を見た後……ニヤリと口元を動かした。
千雨はそれを見逃さかなかった。

「千雨とは「昨日私が困っていた時に霞さんに助けてもらったんだ！！ただ、それだけだ！！？」……チッ。」

霞の言葉に被せるように千雨が言った。
なのはとフェイトはあははと笑いながら納得した。2人も霞が悪戯な発言をしようとしたのに気づいていたみたいだ。
千鶴は

「あら、長谷川さんもですか?私も昨日店長さんに助けて貰ったんです。今日はそのお礼を言いに来たんです。」

と言う。

なのはとフェイトは霞からこんな事があったと昨日の報告を聞いていたが、誰を助けたかまでは聞いていなかった……というより刹那を泣かしたという罪を償わせるのに夢中だったため忘れていただけだが。

「別に大した事はしてないんだけどな。那波ちゃん「千鶴でいいですよ」……了解、俺も霞でいいから。後、別に敬語もできるならやめてくれた方が嬉しい。」

「はい、霞さん。敬語は無理そうですが、なるべく努力しますね。」

「あっ、私もなのはでいいし敬語もなしでいいから。」

「私も。フェイトでいいから。千鶴って呼んでいいかな?」

「ええ。よろしくね。なのはさん、フェイトさん。」

3人の仲が少し深まったどさくさに紛れて霞が口を挟む。

「千雨も千雨でいいからなぁ~。」

その発言に慌てる千雨。

「ちょっ!霞さん、何言ってるんだ!私は了承してないだろ!?」

「……なんとなく流れ的に言った方がいいかなと。」

「なんの流れだよ！しかも流れ的に言えば私が言うのになんで霞さんが私の事を言うんだよ！？」

「……代弁かなぁ。」

ギャイギャイと騒ぐ霞と千雨を見かねてフェイトが仲裁に入る。

「霞。あんまり長谷川さんを困らせたらダメだよ。それと……あの、長谷川さん……出来れば私は仲良くしたいんだけど……ダメ…かな？」

少し上目遣いで千雨を見るフェイト。

「うっ。」

千雨は怯む。

霞はそれを見て思った。

（フェイトの勝ちだな。）

なのはも思った。

（フェイトちゃんのアレには勝てないよね～。）

千鶴も「あらあら」と笑顔で言いながら思った。

（フェイトさんが勝ったわね～。）

千雨は……負けた。

「……別にいい。それと千雨でいいから。」

千雨の返事を聞いたフェイトは嬉しそうな表情をして返した。

「よろしくね、千雨。私もフェイトでいいからね。」

こうして4人の仲が少し深まった後、また会話に華を咲かせ千鶴と千雨が帰るまで姦しい雰囲気が店内を包んだ。

深夜

霞は麻帆良都市にある雑木林の中を歩いていた。
何故歩いていたかというと

「おっ、いたいた。真名～～。」

霞の大切な嫁の1人でもある真名を探していたのだ。
真名は霞の呼びかけに気づき振り向く。

「やあ、霞さん。こんな時間にどうしたんだい？」

「ん、いやちょっと聞きたい事があってな。」

真名の問いに頭を掻きながら返事をする。

「いやな、刹那はどうしたのかな～？と思ってな。……今日はいないみたいだな。」

霞は周囲の気配を探りながらそう言う。

真名は溜め息を吐きながら答える。

「ふぅ。……刹那は部屋で寝込んでいるよ。刀が折られて大分ショックだったんだろう。今朝なんて寝言で「申し訳ありません～」とか「このちゃんが～」とかでうなされていたしね。あれはしばらく立ち直らないんじゃないかな？……で、原因の霞さんはどうしてくれるんだい？」

言い終えると同時にジト目を向ける真名。

霞は苦笑し謝り、その件で来た事を告げる。

「本当に悪かったって。で、刹那に《これ》を渡して欲しいな～と思って。」

霞は言いながら手に持っていてモノを真名に差し出す。

「これは……刀かい？」

「そっ。銘は《朝霧》。折った刀の代用品にしてくれたらいいと伝えてくれ。ついでに刹那にやるともな。」

真名は了解といいながら受け取った後に、ニコッと笑いながら刀を持っていない方の手を霞に差し出した。

霞はいきなり差し出された手を見て、真名の顔を見て、手を見て…

……舐めた。

「ひゃぁっ／／／！」

バン！バン！

真名は意外に可愛い声を上げながら後退しながら霞に向けて撃った。
それをヒョイヒョイとかわす霞。

「霞さん！いきなり何をするんだ！？変態か！……今更か。
それよりいきなり何で舐めてきたんだ！」

「何故って？それは真名がいきなり手を差し出してきたから……
…思わず舐めた。反省もしてないし、後悔もしてません！っていう
か今のは真名が悪い！！」

霞の言い分に真名ははっ？となる。
霞はお構いなしに続ける。

「いきなり愛しい真名の可愛い手を目の前に差し出されて見ろ。条
件反射で舐めてしまうのは当たり前だろうが！！！更には最近みん
なとの触れ合いが足りません！嫁成分が不足してます！！なのはや
フェイト、エヴァに茶々丸、それに真名は学校で忙しいのか相手に
してくれないし。アリカとテオはレイの教育でベッタリだし（以下
略。」

霞が矢継ぎ早に繰り出した口上が終えた後に真名はポツリと呟いた。

「要するに私達にあまり構ってもらえないから寂しいと？」

「……はい（T＿T）」
霞はうなだれた。
真名はそんな霞を見て苦笑した。
慰めようと霞に近づこうとした時……
「ん？……ああ、霞さん。すまない仕事の時間だ。」
真名は侵入者の気配に気づき霞に声を掛け仕事の表情に戻した。
もちろん霞は既に気づいていたのだが、霞は腕を組み考え事をして……真名に聞いてみた。
「なあ、真名。侵入者達を撃退したら仕事は終わりか？」
それを聞いた真名は
「うん？……たぶんね。学園長に報告してみないと分からないけど。もしかしたら他の苦戦している所に行ってくれと言われるかも知れないしね。」
と答えた。
だが真名は勘違いをしていた。
霞が言っている侵入者とは現在麻帆良全域にいる者及びモノ達なのであった。
霞も真名の答えを聞き勘違いしていると気づき訂正する。
「違う違う。現在麻帆良に侵入している全部を撃退したら、という意味なんだけど。」
「はっ？……それはまあ、終わりだと思うけど。」

「じゃあ仕事が終わった後は真名とイチャイチャできるんだな？」

「いや、それは「できるんだな？」……ハァ。できるよ。」

真名は諦めた。

そして真名の頭の中ではいくら霞といえど離れた所の侵入者を撃退しようにもある程度時間がかかるし、そんな自分がバレる様な派手な行為をする筈がないだろうと。

しかし真名の考えは浅かった。

今の霞は前の口上で述べていたように嫁成分が足りていない故に少し頭のネジが弛んでいたのだ。

だから……

「よっしゃー！なら真名とイチャイチャするために俺はやるぜ！」

と言いながら手にある物を顕現させる。

それは……

「久々の出番だ。張り切ってイこうか！？

《雷公鞭》！！」

最強と謡われた道士が持っていた最強と謡われた宝貝。

その威力は中国全土の空一面を雷で覆い尽くす程のもの。

ぶっちゃけ言ってそんなものを使ったら麻帆良大パニック。

更に不幸な事に真名は雷公鞭の威力は知らないし、聞いてない。

故に今から霞が行おうとしているのが今いち理解できない。

あんなモノでどうするんだ？
と疑問に思っていると

「……はっ？えっ？霞さん？ちょっ！？」

真名は慌て始めた。
何故なら霞が雷公鞭を空に掲げると鞭の部分がパリパリと音を立て放電し始め空に逆立った。
真名が魔眼でそれを見るが……見切れなかった。
洒落にならない威力がそれに宿っていた。
だからこそ慌てたが、時既に遅し。

「俺と真名のイチャイチャタイムを邪魔するアホ共が！死にさらせやーー！！！！！！！！！！！」

なんとも馬鹿馬鹿しい発言とは裏腹に、今、最強と言われた雷の力が解き放たれた。

ズガァアアアアアアアアアアアァァァァァ！！！！！

なのは・フェイト・アリカ・テオドラ・レイｓｉｄｅ

膨大な力を感知したなのは達は一斉に部屋を飛び出した。

「みんなも気づいたんだ。というかこれって……。」

なのはの疑問に

「うん。」

「間違いなく。」

「霞じゃの。」

フェイト、アリカ、テオドラがテンポ良く答える。
そこに

「あっ。」

とレイが窓を見た瞬間

ズガァアアアアアアアアアァァァァァ！！！！！

凄まじい轟音と光が外から発せられた。

エヴァ・茶々丸ｓｉｄｅ

エヴァと茶々丸は今日は警備担当の日から外れていたので家にいた。
エヴァはゴロゴロと転がりながらゲームをしていたら

「ッッ！？この力は！！茶々丸！」

外の気配にエヴァは気づき茶々丸を呼び寄せる。

「……マスター。外に測定不能な迄の雷を感知しました。というか霞様ですね。」

「何をやっているのだ!?あのバカは!!」

瞬間

ズガァアアアアアアアアアアアァァァァ!!!!!

凄まじい轟音と光が外から発せられた。

「ァァァアア!ゲームがぁ!?セーブをしてないのにぃ!」

「……マスター乙です。」

学園長・タカミチｓｉｄｅ

学園長は狼狽した。

いきなり麻帆良敷地内に有り得ない力の奔流が現れたのだから。

「これは一体何事じゃ!?」

タカミチはこの力を肌身で感じた事がある故に誰が原因かはすぐに

理解した。
そして思った。

（……なんで次から次へとトラブルを起こすんだろうな、あの人（Ｔ＿Ｔ））

そして

ズガァアアアアアアアアアアアァァァァァ！！！！！

轟音と共に２人の視界は白に染まった。

アルｓｉｄｅ

「……この力は。……来ているのですか。……というかこれは少し洒落になっていないですよ、霞。」

虚空を見上げながら呟くアル。
そして

ーーーーアアァァァァァ！！！！！

音が聞こえた。

「ここまで聞こえる程の威力ですか。相変わらず出鱈目ですね～。学園長やタカミチくんは今頃焦っているでしょうね。フフっ。」

アルは愉快な表情をして思った。

これからは退屈せずに済みそうだと。

成分不足……死活問題だ！！（後書き）

次はすぐに投稿しますので～

後、これからはもう一つの作品であるリリカルも同時に更新していく予定なので週に1、2回の更新になりまーす。

ではまた次に～

誰が悪いか……いや、おまえだろ。（前書き）

前回の後、霞くんはいきなり雷公鞭をぶっ放しちゃったので駆けつけたなのは達にしばかれ責任者である学園長に謝りにいくことにしました。

そこから始まります。

どうぞ～。

誰が悪いか……いや、おまえだろ。

「本当にすいません。これからはこんな事をしないように言って聞かせておきますので。」

頭を下げるなのは。

「うむ（汗。まあ、そうしてくれるとありがたいのじゃが……彼は大丈夫なのかの……。」

学園長はそう言いながらなのはの背後を見やる。

そこには

「霞！何寝てるの！？早く起きて学園長に謝るんだよ！」

「……。」

「全く。お主があんな力を発したおかげで皆が迷惑したのじゃ。早く謝罪をしろ。」

「……。」

「霞は本当に馬鹿じゃの。もっと考えてから動かぬか。」

「……。」

「霞……色々言いたいが……一つ言わなければ気が済まん。……

…私が苦労したゲームのデータを返せ。」

「……。」

「あの……皆さん。それぐらいで（オロオロ。」

「……。」

「霞さん、流石にフォローは出来ないからね。」

「……。」

「凹んでいるマスターも素敵です。具体的に言うと拉致監禁して飼いたいです。」

「……。」

フェイト、アリカ、テオドラ、エヴァ、真名から罵声を浴び凹んでいる霞。

茶々丸だけが霞の味方。

レイは……言うまい。

ちなみに霞は所々焦げて煙を上げている。

既になのは達からのお説教が炸裂した後に学園長室に引きずられて来たのであった。

「アレは気にしないで下さい。いつもの事ですので。それより他の一般の方々等はどうなっていますか？」

なのはが学園長に心配そうに聞く。

「いや、それがの。騒ぎにはなっておらんのじゃよ。それに他の魔法先生達も何故かあれに気づかなかったんじゃが……そちらが対処したのではないのかのぅ？」

学園長の言葉になのははフルフルと首を横に振る。
そしてエヴァの方に顔を向けるが

「ん？私は何もしてないぞ。勿論、茶々丸もだ。私達はこのバカが力を解き放つ時にようやく気がついたのだからな。」

否定するエヴァ。
真名に視線を向ける。

「私も知らないよ。というか霞さんがいきなりあんな事をするとは思っていなかったしね。」

真名も否定。
なのはは一応タカミチに視線を向けるが

「知りません。というか出来ません。」

である。
残るは

霞である。

「霞くん。何かした？」

「「「「……。」」」」

なのはの低い声音にビクッとした霞は

「……ここにいる人以外のアレを見た皆様は例外なく忘れている所存でございます。勿論、後遺症等はありません。」

掠れた声で言う霞。
それを聞いたなのはは学園長に振り向き

「みたいです。なので魔法秘匿は大丈夫みたいです。」

「そうか。ならよいわい。アレを見た後に儂もかなり焦ってしまったのじゃが、他の警備担当の者達は皆その事を覚えていないから訳が分からなかったんじゃよ。」

フゥッと溜め息を吐いた学園長。
そこでタカミチが口を開く。

「ところで霞さんは何故あんな力を発現したんですか?」

その疑問に学園長もそういえばと顔を上げる。

「というより、高町君達が魔法関係者というのが驚いたわい。それにどうやらエヴァ達とも知り合いみたいじゃし……そろそろその事も教えてくれんかのぅ。大体の予想はついておるのじゃが。後、後ろの方も魔法関係者なのじゃろ?」

その問いになのは達は顔を合わせ一様に溜め息をついた後なのはとフェイトが前に出て元の年齢に肉体を戻す。
それを見た学園長は「ヒョッ!」と言いながら驚愕した。
2人はそれに構わず

「では改めまして。陽神なのはです。学園長には《白き仙姫》と言えばわかりますよね。」

「同じく。フェイト・T・陽神です。《黒き仙姫》と言われてます。」

「……これは驚いたのぅ。今までのは幻術じゃっ「違いますよ。」…フォッ？幻術じゃないのかの？」

「まあそれは置いていて下さい。」

「うむぅ、まあよいか。」

学園長は引き下がった。
次にアリカとテオドラが前に出て紹介する。
ちなみに学園長に対してなのは達は認識阻害を解いているために…

「妾は陽神アリカじゃ。もしかしたら学園長は妾に覚えがあるかもな。」

「ふむ。妾も同じ意見じゃな。妾の名はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア・陽神。長ったらしいので今は陽神テオドラにしておる。よろしくな、翁よ。」

「……ヒョッ？……タカミチ君。儂……聞き間違えたのかの？というより儂の目がおかしくなったのかのぅ？王族の2人が儂の目の前にいる夢を見ておるんじゃが……。」

学園長の問いにタカミチは答えてあげた。

「学園長……現実ですよ。目の前にいるのは本物ですよ。」

それを聞いた学園長は呆然とする。

そこへ

「おいジジイ。癪だが私も名乗っておく。」

アリカのように長い金髪を靡かせた他の者に劣らない妖艶な美女が前に出る。

そのすぐ側に茶々丸も控え。

「我が名はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・陽神だ。ちなみに私も幻術ではなく本物の肉体だぞ。」

「私は絡繰　茶々丸改めまして陽神　茶々丸と申します。以後もよろしくお願いします。」

わざわざ大人ｖｅｒになったエヴァと茶々丸が挨拶を済ますと学園長は既に声も出さずに驚愕する。

「ふむ。なら私もしておこうかな。学園長。私は龍宮　真名改め陽神　真名だ。これからもよろしく。」

「最後になりましたが、私は元《完全なる世界》のアーウェルンクスシリーズＮｏ．６改め陽神　レイです。よろしくしなくても一向に構いませんので。」

真名とレイの紹介を聞いた学園長はもはや驚愕を通り越し虚ろと化した。

そして

「タカミチ君……儂……もうゴールしてもいいよね？もう疲れたのじゃ。木乃香の花嫁姿を見れなかったのが心残りじゃったよ。」

「学園長！気持ちはわかりますが！学園長？……学園長ォーーー！？」

あの後タカミチの必死の努力の末、学園長はなんとか意識を取り戻し何故なのは達がここにいるか等を説明された。
学園長は霞の存在にも驚かされたが、そこはもう割愛しておく。
で、仕切り直して霞が何故あのような馬鹿げた力を出したのかの疑問に戻した。
学園長とタカミチは普通に視線を霞に向けた。
真名・茶々丸・レイを除く嫁ｓ達は説明しろという殺気立った視線を向けた。
霞は冷や汗を流しながら助けを求めるかのように視線を泳がせ……
……一緒にいた真名を見た。
それに気づいた真名は

「……ハァ、仕方ないなぁ。」

と呟き、霞は助かるかもと少し安堵した。
だが、次の真名から出た説明で絶望に落とされる。

「簡単に説明すると私と蜜月な時間を過ごしたい霞さんがアレを引き起こし侵入者達を一掃した。以上だよ。」

「ちょっ、真名！簡単すぎ！？大元は合ってるけど、それだとみん
「霞くん。」ッッ！？……はい。」

真名に抗議の声を上げたがなのはに黙らせられた。
次いで

「霞くんは馬鹿なのかな？」

「それであんな大騒ぎを起こしたの？みんなの迷惑を省みずに。」

「どんな理由かと思えば……。」

「ほんに馬鹿じゃの～。霞は。」

「そんな理由で私の汗と涙の結晶を無に帰したのか。」

「……霞様。流石に弁護出来ません。」

「マスター……蜜月を過ごしたいなら私に言って下されば良かったのに……。私はいつでもどこでも２４時間３６５日マスターをお受けするのですよ？」

最後だけ何か違っていたが、真名・レイを除く他の嫁ｓ達は既に臨界点は突破。
いつもは滅茶苦茶優しい茶々丸も嫉妬で怒っている。
霞は狼狽し

「まっ！タカミチ！助けて！？このままじゃ殺されちゃう！せめて一緒に逝こう！？」

「なんでこっちに来るんですか！？来ないで下さい！自業自得じゃないですか！っていうかあなた馬鹿なのか？と思ってたけど本当のバカだったんですね！イチャつきたいなら普通にお願いしたら良かったじゃないですか！？なんでそこに思い至らない！？」

「ヒョッ！？２人共、何故暴れながらこっちに来るのじゃ！！こっちには来んでくれんか！儂は関係ないじゃろ！！」

「「１人だけ逃げるな（ないで下さい）」」

男の醜い争いが展開された。

そこへ

「もう」

「面倒だから」

「まとめて」

「ＯＳＨＩＯＫＩを」

「しようか」

「拘束開始します。」

鬼と化した６人のナニカが３人を断罪した。

「「「アッーーーーーーー！」」」

「レイ。よい子はあまり見るんじゃない。」

真名はそう言いながらレイの目を自身の手で覆う。

「真名様は参加しなくて良いのですか？」

レイの疑問に

「ん、まあ霞さんが私との時間を取ろうとしてくれたのは嬉しかったからね。それで帳消しにしておこうかとな。」

そう答えた。

レイは

「むぅ。真名様が羨ましいです。私も早くマスターの寵愛を受けたいですね。……もう襲ってしまっても構わないでしょうか？」

むくれながら言う。

真名は苦笑し

「レイが色々経験して成長した上で霞さんに言えば受け入れてくれるんじゃないか。まあ気長に待てばいいさ。」

そう宥めながら霞の方を見て

「……そろそろ止めようか。アレは流石に愛しの旦那様が可哀想だしね。」

「はい。」

そう言い2人は騒ぎの中心へと向かった。

誰が悪いか……いや、おまえだろ。（後書き）

今後の予定

ネギ達の原作話は所々飛ばしながら霞視点を主にします。
原作は大きなイベントや作者がここを絡めようかと思った所を出していくのでそういうのが嫌ならバックする事を薦めます。
大きなイベントは
・桜通り吸血鬼事件
・修学旅行
・悪魔襲撃
・学園祭
かな。
夏休みには少しオリ話の日常?編を入れた後で魔法世界編へと突入しますので。

ああ、勿論ほぼ全てのイベントに霞くんが絡むので内容は全てぶち壊しにされます。
ギャグ・バグ的な意味で

とりあえず今後ともよろしくＮＥ。キラッ☆

妾も狩りに行くのじゃ～（前書き）

あれから少し時間が経ち三学期前日。
霞はタカミチ経由で学園長に呼ばれたので学園長室に向かいました。
（師走という事で色々忙しかったため、今になって霞を呼んだ学園長です）

そこから始まります。

「で、爺さん。俺にどんな用事だって？」

霞は少し不機嫌そうに言う。

「フォッフォッ。そんなに冷たくせんでくれ。何、少し頼みたいことがあるんじゃよ。」

学園長は髭を撫でながら霞に言ってくる。

霞は大体予想はついているので先を促す。

「実はの、明日から新しい先生が来るんじゃがの。霞殿にはその先生の補佐を頼みたいんじゃ。後、できれば夜の警備にも参加してほしいのぅ。無論、報酬は出すぞい。どうじゃ？」

と言ってくる。

霞は即答する。

「嫌だ。」

「むっ。どう「まあ最後まで聞け。」……うむ。」

「どうせ明日から来る先生ってバカの息子だろ？いくら友人の息子だからって進んで節介をやく気は毛頭ない。それによしんば俺達がそいつの面倒を見ると……バグるぞ。それでもいいか？」

「うっ。それは勘弁じゃのぅ。（霞殿達みたいなのが量産……

麻帆良が滅ぶかも？）」

「それと先に言っておくな。俺達の実力なんだけど……（略）……なんだわ。だから下手に誰かの逆鱗に触れると都市１つが無くなるから、気をつけて。……特になのはは意外に沸点低いから。」

霞の説明に学園長は冷や汗ダラダラ流す。
霞はそんな学園長を見て苦笑し

「まあ普通に接してれば問題ないよ。ただ“正義”に凝り固まった考えの魔法使い達には俺達の事は黙っていた方がいいぞ。あんたも“今”の魔法使い達には頭を抱えてるんだろ？」

「……わかったわぃ。残念じゃが諦めておいた方が良いようじゃのぅ。」

霞達の知名度による騒ぎと霞達を放置しておく事を天秤にかけた学園長は考えた末に後者をとることにした。
だが次に霞が言った事は学園長にとって意外な言葉であった。

「ただ警備には参加してもいいぞ～。」

「フォッ？良いのか？」

「ああ。参加するのは俺とテオだけだがな～。」

「……すまん、霞殿。もう一度言ってくれんかのぅ。」

「ん？参加するのは俺とテオだけ。」

「……テオドラ様は……勘弁して欲しいんじゃが……（汗。」

学園長の言う事は尤もである。
テオドラはヘラス帝国の皇女であるから万が一怪我でもされて問題視されればかなり危険な事になる。
霞もそれはわかっているんだが

「……いやな、爺さんの心配も理解できるんだけど……テオがな……。」

言いにくそうにする霞。
学園長は聞きたくないとは思いながら先を促す。

「……狩り（侵入者を）に行きたいってゴネだした。」

「……。」

「……。」

「……（フルフル。」↑顔を横に振る学園長。

「……（フルフル。」↑無理と横に振る霞。

「……。」

「……。」

2人の無言はしばらく続いた。

あれから霞と学園長の攻防は続いたが、結局は学園長が折れテオが戦闘で負傷してもこちら側がなんとかするという条件で納得させた。その後、細やかな内容をサッサと決め夜に警備担当の者達に紹介することになった。

そして夜になった。

世界樹の下にある広場にて魔法先生・生徒が集まっている中、学園長が現れた。
全員が静まりだしたのを見て学園長は口を開く。

「皆のもの。わざわざ遅くに集まってもらいすまんのぅ。今日から深夜の警備に新たな者が加わる事になったから紹介しておこうと思い集まってもらったのじゃ。」

学園長がそう言うと1人の魔法先生が質問する。

「学園長。その者の素性等は大丈夫なのですか?」

「うむ。それは儂と高畑くんが保証するぞぃ。それと実力の方は……まあ皆の前で誰かと模擬戦でもしてもらうかのぅ。」

学園長は思った。
霞達の実力を見てもらうのはいいけど、ちゃんと手加減してくれるのか？と。
タカミチは横で聞いていて思った。
自重してくれるといいなぁ。と
２人の思いが叶うのかどうかは正に神のみぞ知る。
そして学園長が霞達を呼ぶ。

「ちは～。これからお世話になる陽神（ようしん）　霞で～す。初めての警備だからわからない所もありますけど、皆さんイジメないでね。キラッ☆」

「「「「「……」」」」」

「……。」

「……。」

霞の気持ち悪い挨拶に集まっていた者と学園長とタカミチは無言。
霞もやっておいてなんだが、キモッと思ってしまった。
そして視線を漂わせると１組のペアを見つけた。

（おっ、真名と刹那だ。というか刹那は何とか立ち直ったんだな～。店にも顔を出さないから心配してたんだけど大丈夫そうだな。刀もちゃんと持ってるし。よかよか。）

と思ってると学園長が咳払いをした後に

「ふむ。霞殿。もう１人参加してもらえる者はどうしたのじゃ？連

れてくると言っておったが？」

聞いてきた。

霞はそれを聞き虚空を見やり

「……もうすぐ来るよ。……手土産（侵入者）を持ってきた方が手っ取り早いとか言ってた。本音は狩りを早くしたいからだって……止めれませんでした。サーセン。」

と言った。

何も知らない魔法先生・生徒達は頭に？を浮かべ。

知っている学園長とタカミチはギョッとして。

身内である真名は苦笑していた。

そこへ

「お～い、霞～。大量にｇｅｔしたのじゃ～♪」

話題の人物であるテオドラが空から現れた。

……16人程の人間を纏めて縛り付け、ぶら下げながら。

それを見た魔法先生達は呆然。

学園長も呆然。

タカミチは慣れたのか遠い目をしてタバコを吹かす。

真名はそれを見て今日は仕事は無くなったなと思い。

霞は狩りすぎだろぅと思った。

刹那ｓｉｄｅ

学園長から今夜に警備担当の集会があると聞き顔を出すと新しい警備担当が増えるからその紹介だと言われた。
私はお嬢様さえ無事ならどうでもいいと思っていたが、現れた人物を見て驚いた。
その人物は少し前に私の大事な刀を折った青年。
まあその後日に龍宮が青年が謝罪という事で今持っている刀を渡されたのだが。
龍宮からの説明で彼が危険ではないと教えられたので、いきなり襲撃した事を謝りに行こうとしたが……行こうとすればあの時の自分の情けない状態を思い出してしまいなかなか行けずにいた。
今夜、もし機会があれば謝ろう。
そんな事を考えていたら何か声が聞こえたので視線を上げると……
……

（えっ？何あれ？……人が縛られてる？……えっ？）

ポカンとしていると縛り上げていると思われる女性が学園長達の元に降りて縛っていた人達（恐らく侵入者）を渡していた。
すると隣にいた龍宮が溜め息を吐き苦笑していた。

「……龍宮はあの人達を知っているのか？というかあの女性は何だ？何故、現れたと同時にあんなに侵入者？を縛り上げているんだ？」

聞いてみる。
すると

「まあ知り合いと言えば知り合いだな、２人共。それと何故侵入者を縛り上げているのかは……わからん。」

と言う。

そこへ

「……手土産だそうだぞ。模擬戦よりか侵入者達を狩れば警備に参加しても大丈夫というアピールも込めているそうだ。……ハァ。」

声がした。

その声は私と同じクラスメイトでありながら６００年もの歳月を生きた伝説の吸血鬼。

エヴァンジェリン・Ａ・ｋ・マクダウェル。

後ろには従者である絡繰さんもいた。

「もしかして……付き合わされたのかい？エヴァンジェリン？」

「ああ。狩り自体はあいつがしたんだが、周囲の警戒と被害を抑えておいてくれと頼まれた。……あのバカ、滅茶苦茶張り切ってやったものだから抑えるのに苦労したぞ、全く。」

「……マスターは途中から放棄して酒を飲んでいましたが。それと桜咲さん、真名さん、こんばんは。」

「余計な事は言うな、茶々丸。」

「ご苦労だったね、それは。」

3人が慣れたように会話をしているのに驚き固まる私。

「ん？なんだ桜咲。そんな阿呆みたいな顔をして。」

「ふふ。刹那は私達がこのように会話しているのに驚いているんだろぅ。」

「ああ。成る程。まあそれはいいか。それより……桜咲。貴様の持っている刀なんだが……。」

いきなりエヴァンジェリンさんが私の刀を見た後、剣呑な目で私を見てきた。

（へっ？何で？）

と思っていると

「何故、貴様の、刀から、霞の、魔力と、匂いが、するんだ？」

「……検出完了しました。かすかに霞様の指紋も認識しました。……桜咲さん、可及的速やかに説明を要求します。」

絡繰さんまで！？

（ふぇ？何で？ウチ何かした？）

2人がジリジリとにじりよってくる。

なんでぇーーー！？

ウチ何も悪いことしてないやん！

ただ夕凪の代わりに刀貰っただけやん！

イヤーーー！
このちゃーん、かーくーん！
助けてェーーー（泣）

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

エヴァと茶々丸が刹那に詰め寄り何かをしているのを傍目に霞達は話を進める。

「翁よ。とりあえずこれで妾の実力は計らんでもええじゃろ？」

テオドラは無邪気に笑いながら学園長に問う。

「う、うむ。そうじゃの。そちら「ちょっと待って下さい！学園長！！」、ぬっ？どうしたのじゃ？ガンドルフィーニ君。」

学園長がテオドラにＯＫを出そうとしたら声を張り上げた人物がいた。
褐色の男であるガンドルフィーニである。

「確かに侵入者を捕らえてきた、ということはそれなりの実力でしょう。しかし警備には基本２人１組であたります。なら彼女がどれぐらいの実力か私達も「必要ないぞ～。」、何？」

ガンドルフィーニの言葉を霞が遮る。

「テオは諸般の事情で俺としかペアを組まん。緊急の時は別だけど。だからテオの実力はある程度知っていれば問題ないし、残る問題は俺の力量だろ？
だから今は下がってくれ。
質問等は後日受け付けるから。頼むわ、ガンドルフィーニさん？」

霞がある程度下手に出るとガンドルフィーニは少し考え「わかった」と言い、退がる。
タカミチ・テオドラ・エヴァ・真名は驚いた顔をして霞を見る。
まさか霞がこんな態度をとるとは思わなかったのだろう。
４人は天変地異の前触れか？と思ったのは仕方ない事だ。
実はこれ、なのはとフェイトがキツく教育したお蔭である。
なるべく他の魔法先生と問題を起こさずに穏便に済ますようにと散々に言われたので霞はそれを守っただけである。
それがなければ今頃ガンドルフィーニはリアル犬神家を体験したであろう。
それはさておき
ガンドルフィーニが大人しく退がったので他の魔法先生も大人しくなり、それを見た学園長が仕切り直し

「ゴホン、ではテオドラ殿は合格として。霞殿は……儂は既に理解しておるからいいのじゃが、それでは他の者が納得せぬから模擬戦をしてもらおうと思うのじゃが良いかの？」

「いいよ。ってかさせる気満々だったろ。……そういえば相手って指名していいの？」

「ふむ、相手によるが……誰がよいのか？」

学園長が霞に聞くと、霞は集まっている者達を見やり

「じゃあ～……あの人とあの子……と、おいそこの馬鹿……何故、期待した目を向ける？」

「私ですか。」

「エヴァンジェリンさん！落ち着いて下さい！？本当に私は「刹那、ご指名だぞ」……えっ？助かった！」

スーツ姿のクール美女、葛葉　刀子。
エヴァに何やら襲われそうになっていた可哀想な子、刹那。
そして

「霞さん。久しぶりに手合わせをお願いします。」

「ハァ。まあいいけど。」

学園長を除けば麻帆良最強と言われるタカミチであった。

つづく。

おまけ

「ねぇ、なのは。」

「何？フェイトちゃん。」

「霞に先生達との間は穏便に済ますようにキツく言っておいたけど……模擬戦は自重するように言わなかったよね。」

「……あっ。」

「……。」

「……。」

どうなる！？模擬戦！！

妾も狩りに行くのじゃ～（後書き）

続いて模擬戦に移りま～す。

出来が悪いですが、気にしないで下さ～い

いや、ほんとマジで

せったーーーん！？（前書き）

補足

霞は学園長との取り決めの際に陽神（ひのかみ）という性を陽神（ようしん）にしておく事にしております。

念のためだそうです。

では刹那戦をどうぞ～

せったーーーん！？

霞が3人を指名したことで3連戦をすることに他の集まった者達は騒ぎ出し「無茶だろ」「舐めてるのか？」「刀子さんサイコォー！」等が聞こえてきた。
最後のセリフの奴は御本人がぶっ飛ばしお星様になった。
その騒ぎを学園長が無理だと思ったらストップをかけるという事でなんとか落ち着いた。
ただ……霞は3連戦と言われ首を傾げる。
何故なら霞は3人同時に相手をすると考えたから。
しかし場の空気が1対1の雰囲気になっていたので空気を読んで流されるままにした。
霞くんは場の空気が読めるよい子なのです。

「では霞くん。初めは……刹那くんからでよいかのぅ？」

「あいあい。良いです。」

「刹那くんもよいか？」

「はい。構いません。」

学園長の問いに両者は相対した。
刹那は戦闘態勢に入り《朝霧》を構える。
それを見た霞はふと思い出した事があり、刹那に話しかける。

「刹那。その着けてる指輪を渡せ。」

それを聞いた刹那は険しい顔をして

「……嫌です。何故あなたに渡さなければいけないのですか？」

拒絶する。

「いやあのな。その指輪はな「何と言われようが嫌です。」……ハァ、わかったよ。」

霞は諦めた。

そこで学園長がもういいか？と視線を向けてきたので両者は頷く。

「では……始め！」

掛け声と共に瞬動で間合いに入ろうとした刹那だが

「ッッッ！？」

止まった。

何故なら

（……飛び込んだら……やられる。）

隙がなかった。

否、隙が無くなったといった方が正しい。

試合開始前までは隙だらけであった霞が掛け声と同時にそれが無くなったのだ。

霞は普段生活している際には一般人の擬態をしている。

その擬態が凄まじい。

普通なら自然にしていても武人特有のクセが出るのだが、それが全

く出ない。
武を嗜んでいるものが普段の霞を見ていてもそこいらの一般大学生となんら変わりなくみえる。
それが一瞬で化ける。
初見の者は瞠目し、うろたえるであろう。
刹那は正にそれだ。
霞は刹那を見やり

「ふむ。来ない……か。ならこっちから行こうか。」

そう言いながらスタスタと歩く。
何でもないように。
ただ散歩気分で。
しかし刹那は動けない。
冷や汗を掻きながら必死に考える。
ただ前後左右上に動こうとすると霞が殺気を飛ばし動けないようにする。
刹那は動こうとした瞬間に自身がやられるイメージが明確に浮かんでしまう。
それほどまでの圧倒的な差。
刹那は霞が自分の間合いに入って来ても動けない。
焦る刹那。
霞はお構いなしに近づき……刹那の前に辿り着いた。

「……ふむ。なかなかのレベル。しっかりと修行している証拠だな。
下手に動くとヤっていたからな。それがイメージ出来るだけ大したもんだ。」

「……あなたは何者ですか？」

「…………いずれわかるさ。さてこのまま降参させてもいいが分かっていない観客の方々が納得いかないだろうし、何より俺も刹那の全力が見たいんでな。」

「？？何を…（パキン……えっ？」

霞の言っている事が分からず問い返そうとすると甲高い音が響いた。
音源に視線を向けると

自身の指から。
それは幼き時代、温かい夢のような時を過ごした際に大切な人から貰った…………大事な指輪。
きっとまた会える事を信じて、彼と繋がっている事を感じられていた、今まで肌身離さず持っていた指輪。
それが…………………………………………………………壊れていた。

「あ、ア、アァ、ァァァァアアアーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

エヴァ・真名・茶々丸ｓｉｄｅ

刹那が叫び声を上げた瞬間、刹那の周りに今までとは比べものにならない気の奔流が生まれた。
それを見たエヴァ・真名・茶々丸は

「ほう。これは……桜咲の奴。なかなかやるじゃないか。」

「というかアレは暴走しているんじゃないか？見てみろ、刹那の目が反転している。……全く。霞さんは何を考えているのやら。」

「先程の会話を聞いた限りではどうやら霞様は桜咲さんの本気が見たかったようです。そして指輪を破壊した直後に桜咲さんの戦闘力が格段に上がっております。」

「……成る程。桜咲のしていた指輪は一種の封印具か。それを破壊した為、本来の能力が戻った……というところか。……しかし霞はよく分かったな。」

「それはそうだろう。どうやらあの指輪は霞さんが刹那の子供の時に上げていたようだからね。」

「なぬ？」

テオドラ・学園長・タカミチ・刀子ｓｉｄｅ

「テオドラ殿、あれは止めた方がよいのかの？」

「ん？止めんでよいぞ。霞から念話で止めるなと来ておるからの。ちなみに翁が止めようとしたら張り倒せとも来たぞ。」

「ヒョッ！？」

「しかしテオドラさん。いくら霞さんといえどあれは少しやり過ぎだと思いますが。」

「う～む、しかしのぅ。あの指輪があってはあの少女の本来の力が出せんのは確かじゃし。霞じゃから代わりの指輪を用意しておると思うしのぅ。」

「テオドラさん。それはどういうことでしょうか？それではまるであの指輪のせいで刹那の力が封印されているように聞こえますが？」

「いや厳密には違うぞ、え～と「葛葉　刀子です。」では、刀子殿じゃな。話を戻すが、あの指輪の効果の一つを簡単に言うとな。“装着して修行をすると気の強化が通常よりｕｐする”じゃ。指輪に施した処理によって効果の程は変わるがの。更に強化されておる部分の気は指輪のせいで封印されてしまうから装着者自身は全く気づかないんじゃ。無論、他者にもな。で、指輪が破壊された事により強化された気が解かれた状態、これが本来装着者自身が得た力なのじゃよ。」

「……では、今のあの刹那が放っている気が……。」

「まああの少女の地力じゃな。」

「しかしテオドラ殿。何故、刹那君がそのような物を持っているんじゃ？それに刹那君自身はそれに気づいてなかったようじゃが……そうじゃろ？刀子君。」

「はい。以前、刹那に聞いてみた事がありますがそのような事は言っておりません。」

「まさかとは思いますが……テオドラさん、その指輪って……」
（汗。）

「正解じゃぞ、タカミチ。あの少女が子供の時にあげたみたいじゃな、霞が。」

「「えっ！？」」

「……やっぱり。」

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

刹那が我を忘れて繰り出す凄まじい剣戟を霞は避けながら考える。

（成る程ね。頑張って修行した事がよく分かる。木乃香の為に頑張った……か。）

自然と口元がにやける。
刹那があの時と同じ優しい、けど生真面目なままに育った事に。
そして自分の指輪を今まで大事にしてくれた事に。

「何を笑っている！貴様はッ！おまえはッ！ウチの大事な物を壊したんや！？絶対に許さへん！！！」

刹那の剣戟が苛烈になる。

（しかし……怒りすぎだろ（汗。うーん、どうしたら冷静になるかね～……前みたいに頭を撫でたら戻るかな。）

霞はあまりいい考えが浮かばなかった為、そうしようとしたら……

ポタッ。

雫が落ちた。

雨か？と霞は思い視線を向けると

「ッッ！！？（。□。；）」

刹那の目から涙が出ていた。

またやらかした霞である。

「あの指輪はなーー！ウチの大切な人から！大人になっても一目見てウチって分かってもらえる為の！！大事なもんやったんや！！！あれのお蔭でどんなに辛い修行にも耐えてこれたのに……グジュッ。」

泣きながらも手は緩めない刹那。

ちなみにテオドラ・エヴァ・茶々丸・真名・タカミチはジトッとした目で霞を見ている。

事情を全く知らない他の魔法先生達は刹那の言葉に少し浸りつつ霞に非難の目を向けている。

特に女性側からは凄いヤヴァイ視線が。

霞……完全に悪者。

霞は思った。

早く事態を収拾しないと自分の立場が危ない事に。
なので

ガキィッ！？

「「「「なっ！！？」」」」

知らない者達は驚く。
知っている者達はやれやれと溜め息を。
霞は気で強化した手で“今の”刹那の刀を受け止めたのだ。
受け止められた刹那は霞を睨む。
霞は刹那を見て苦笑し

「……ふぇ？」

「よしよし。頑張ったんだな刹那は。ちゃんと俺は分かったぞ。一目見て刹那って分かった。あの頃と同じ優しく可愛い刹那だってな。だから泣き止め。
刹那は泣いてるより笑った顔の方が可愛いって何度も言ったろう。だから笑った顔を見せて欲しいぞ、俺は。」

抱きしめ頭を撫でながらあやした。
昔、刹那が撫でるだけでは泣き止まない時にやっていた方法で。

刹那ｓｉｄｅ

「よしよし。頑張ったんだな刹那は。ちゃんと俺は分かったぞ。一目見て刹那って分かった。あの頃と同じ優しく可愛い刹那だってな。だから泣き止め。
刹那は泣いてるより笑った顔の方が可愛いって何度も言ったろう。だから笑った顔を見せて欲しいぞ、俺は。」

そう言われ抱きしめられ頭を撫でられた。
昔を思い出した。
かーくんがなかなか泣き止まない私を抱きしめてくれて頭を撫でて優しい声を掛けてくれた事を。
……同じだった。
かーくんと同じ感じがした。
だから思わず

「……かーくん？」

呟いた。
すると

「はいはい、かーくんです。だから泣き止みなさい。そして笑った顔を見せなさい。」

と言われた。
だから私は顔をあげ昔のように

「うん！！」

かーくんに笑顔を向けた。

side end

刹那がようやく泣き止み笑った顔を見せたので……
…そのままお持ち帰りをしようとした霞は何も悪くないと思う。
しかしこの場には大勢の者がいる。
更には霞の嫁ｓ達もいる。
のでかなりのイタい視線が2人に向けられる。
それに気付いた刹那が顔を一気に沸騰させ一瞬で霞から離れた。

「すすすすすいません!?模擬戦の途中でしたよね!!いきなり泣いたりして申し訳ありませんでした!!!」

「クッ、家に持ち帰る「「「「霞（様）」」」」……ナニモアリマセン。モギセンヲサイカイシマス。」

微妙な雰囲気を仕切り直し2人は相対する。
霞は刹那に話しかける。

「ゴホン、あ～刹那。今のおまえは本当の意味での本気が出せる。自分の気を感じてみろ。模擬戦を開始する前とは段違いだろ?」

刹那はそう言われ自身の気を感じる。
そして驚く。
確かに感じる気の量が違う。
明らかに多い。

「理解したな。時間も押してる事だしな。その状態で自身が放てる本気の一太刀で挑んでこい。遠慮はするな。殺す気で来い。受け止めてやる。」

その言葉を聞き霞の顔を見た刹那は

「……はい。」

構える。
集中する。
剣に気を纏わせ研ぎ澄ます。
両者の間にある空気が張り詰める。
数秒？数分？数時間？
時間が引き延ばされるような感覚。
そして
踏み込んだ！！！！

キィィィィィン

刹那は感じた。
この一太刀は今まで過ごした中で最高の一太刀だと。

だが

「良い一太刀だった。だが……俺に傷を入れるにはまだまだだな。」

受け止められていた。
先程と同じように。
しかし刹那の内心は悔しさ等よりも嬉しいという気持ちで一杯であった。
何故なら

「ふふ、また仕合ってくれますか？かーくん？」

追いつきたいと思っていた背中に。
会いたいと思っていた人に。
出会えたのだから。

おまけ

「なあ、真名。」

「……なんだいエヴァンジェリン？」

「……桜咲　刹那をどうする？」

「……そうだね。なのはさん的に言えば……OHANASHIでもさせてもらおうかな。」

「マスター、真名さん。」

「止めるなよ、茶々丸。人の旦那に手を出したやつには少し仕置きが必要だ。」

「いえ……私が一番最初にＯＨＡＮＡＳＨＩをさせてもらいます＃」

「「……怖っ！？」」

つづく

せったーーーん！？（後書き）

ウチ（当作品）の刹那は霞と関わると“せっちゃん”になりやすいです♪
そしてよく涙目にもしくは鳴かされます。
……何か問題ありますか？
反論は受け付けないＺＥ☆

というわけで次は刀子戦です。
どうぞ～

oh～、眼福で～す（前書き）

戦闘描写が下手過ぎなんで短いです。

では、どうぞ～。

oh～、眼福で～す

刹那との模擬戦が終わった霞は続いて刀子と向き合う。

「え～と「葛葉　刀子です」、了解。じゃあ、刀子さんで。んで、刀子さん。
あなた程のレベルなら刹那との戦いで理解していると思うけど……。」

霞がそう言うと

「ええ、承知しております。なので……最初からいかせてもらいます。」

刀子はそう返す。
霞は頷き笑い

「そっか。なら……刹那も見てる事だし、ちょっと奮発しようか。」

そう言いながら霞は自身の影からある物を取り出す。
それは

「……木刀。剣術も修めているのですか？」

「そこそこに。まっ、口上はここまでにして……。」

「……ええ。」

２人の会話が終わるのを見た学園長が

「それでは……始め！」

開始された。

刀子ｓｉｄｅ

先の模擬戦を見る限り彼の実力は計り知れない。
あの暴走していた刹那の攻撃を軽くいなしていた。
あれは私とて止められないとまでは言わないが苦戦はする。
それを考えると彼と私の実力は明らか。
正直、私個人としてはもう模擬戦をする必要性はないだろうと思っているが、納得していない魔法先生達もいる。
それに……１人の剣士として仕合ってみたいと思う私がいる。
なので

「始め！！」

本気でいかせてもらいます！

「奥義！斬岩剣！！」

開始と同時に飛び込み、奥義を出す。
避けるか、迎え撃つか、どうする？と考えていたら

ガギィィッ！

「「なっ！？」」

観戦していた刹那の驚いた声と私の驚愕に満ちた声が重なる。
彼は迎え撃った。
だが、その繰り出した攻撃が……神鳴流を使えるのですか？」

「なぜ……

私は咄嗟に後方に飛んだ後、呟いた。
それは……同じ神鳴流奥義「斬岩剣」であったから。

テオドラ・刹那・学園長・タカミチｓｉｄｅ

刹那は霞が出した技を見て驚く。
勿論、学園長も。
そこでテオドラが

「お～、久々に霞が神鳴流を使うの～。」

それを耳にした刹那はテオドラに視線を向け質問する。学園長も視線をテオドラに向ける。

「あの…かー…いえ陽神さんは神鳴流を使えるのですか？」

「ん？刹那といったな。妾はテオでよいからの。それと霞のことも好きに呼ぶがよい。で、先の質問の答えはｙｅｓじゃ。まあ、使ったのはー……どれぐらい前か忘れた。」

「差し支えなければ彼はどこで……？」

刹那は霞がどこで神鳴流を覚えたか聞こうとしたらタカミチが苦笑いしながらテオドラに聞いてきた。

「もしかしてテオドラ様。霞さんは……」

「まあタカミチの予想通りだと思うぞ。どうも詠春が使っていたのを見てパクってみたと言っておった。ちなみに見ただけであって師事はされておらぬ。」

「「……えっ？」」

「ハハ、流石……。」

刹那と学園長は驚きの声を。

タカミチは霞のバグっぷりを改めて思い知り、呟いた。

エヴァ・真名・茶々丸ｓｉｄｅ

「まさか神鳴流とはね（呆）」

「……本当にバグだな、あいつは。」

「マスター、ちなみに以前霞様が「エヴァの固有技も使えるぞ～」と仰っておりました。」

「はっ？……もしかしてマギア・エレベアか？」

「はい。」

「ああ……そういえば前に霞さんの別荘で魔法を取り込む技を見せてもらった時に「これってエヴァの固有技なんだよな～」って言ってたね。」

「……あれは普通の人間が使えば闇の浸食による危険があるんだが……。」

「エヴァンジェリン。霞さんだぞ。」

「霞様ですよ、マスター。」

「……私が悪かった。」

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

霞は刀子が呟いた疑問に

「禁則事項です。」

と答えた。

そして

「次手は俺から行こうかな。」

と言いながら軽い瞬動を使い後ろに回り

「百烈桜華斬」

「クッ!?」

ガ、ギン、ギャリリィイ!!

刀子はそれを防ぎながら瞬動で退がる。

だが、霞は止まらず

「斬空閃」

更に繰り出す。

「チッ、斬空閃!!」

同じ技で相殺しようとしたが……

「なっ!!?キャァッ!!」

霞の斬空閃は刀子の斬空閃をすり抜け刀子に襲いかかる。

まさかすり抜けると思わなかった刀子は思わず女性らしい悲鳴を上げ目を瞑ってしまったが……

「……へっ？」

斬空閃は刀子すらもすり抜け後方にあった壁に当たった。

「……弐の太刀。斬りたい物だけを斬る退魔を生業とした神鳴流の真骨頂。」

霞は刀子に告げる。

刀子はその言葉を聞き呆然とする。

観戦していた刹那も同じく。

神鳴流・弐の太刀。

それは魔に憑かれた人を傷つけずに魔のみを斬る為に編み出された秘伝中の秘伝。青山宗家のみに伝わり許されている技。

それを霞が使った。

神鳴流を修めている者としては驚くのも無理はない。

余談ではあるが、霞が詠春にこれを見せた時に詠春がｏｒｚ状態になったのは言うまでもない。

閑話。

刀子は立ち直った後に再度霞に聞く。

「……あなたは誰から神鳴流を…？」

「ん～……まあいいか。実は教えてもらってはいないんだよね～。ただ神鳴流を使っていた友人を見て覚えたとしか言い様がない。ちなみにそいつの名前は青山　詠春。今は近衛だったな。刀子さんは知ってるのかな？」

青山　詠春。
現在は関西呪術協会の長にして、かの魔法世界大戦時において《紅き翼》の一員として活躍したサムライマスター。
その名前が出たこともそうだが、それよりも驚いたのは……

「見た……だけですか？」

「うい。教えて貰った事はないな～。あっ、けど詠春に神鳴流の技を一通り見せてくれって頼んだから……これは教えてもらった事になるのかな？」

と呟く霞。
それは教えてもらうに入りませんと刀子は思った。
同時に

（……わかっていたことですが……これ程とは（汗。）

と。
底知れない霞の力量に刀子は畏怖を抱く。
霞はそんな刀子を見て

「どうしますか？続けます？」

と提案する。
刀子は一度目を瞑り軽く深呼吸をし、目を開く。

「……最後に一太刀……よろしいでしょうか？」

霞は刀子の目を見て

「了解です。お受けしましょう。」

快く返事をした。
それを聞いた刀子は極限にまで集中する。
研ぎ澄ます。
細く。
鋭く。
自身と刀を一体化させるように。

そして

渾身の太刀を

振るう！！！！！

筈だった。
だが、刀子が霞に駆け出す瞬間

ファサッ

と音が聞こえた。
同時に刀子の素肌に冷たい夜気が刺さる。

「??」

刀子はわからなかった。
だが

「（◎ｏ◎）」

霞は刀子をガン見していた。
魔法先生達はいきなりの事態に驚いた。
（一部の男は色めき立つ。）
テオドラ・エヴァ・真名・茶々丸は白い目で霞を見る。
そして

「……ーー！！？キャァーーー！！！！！！」

状況を把握した刀子が悲鳴を上げ、両腕で上半身を隠すようにしてしゃがみこんだ。
現在、刀子の格好は……上半身下着のみ。
着ていた上着は斬られた形で刀子の傍に落ちていた。

原因は言わずもがな霞である。
霞は神鳴流を長らく使っていなかったので少し加減を間違ってしまい刀子の服を斬ってしまっていた。
霞は刀子の悲鳴で我に戻り慌てて駆け寄り自分の上着を刀子にかけた後

「ヤロー共!!今のを忘れやがれ!!（バッサ、バッサ。」

傾世元ジョウを出し男共の記憶から消去するように努めた。

その後、顔を真っ赤にした刀子は刹那とテオドラの誘導に従い慰められ、かろうじて持ち直し、模擬戦は続行不可能となり無効試合となりましたとさ。

おまけ

「なあ、エヴァンジェリン。」

「……言いたい事は分かるが……一応、聞こう。」

「霞さんは……狙ってやっているとしか思えないんだが……。」

「……あそこまでいくと……な。」

「……（転送、保存、完了致しました。）」

「……茶々丸。何をやっている。」

「……別に先程の刀子氏の艶姿を鮮明に写し自宅にあるパソコンに転送して保存を完了させたなどは口が裂けても言えません。ええ、それが霞様の指示だという事も言えるはずがありません。」

「……。」

「……。」

「……。」

「……マスター、真名さん。ｔａｋｅ2をお願いします。」

「「いや、しないから。」」

oh～、眼福で～す（後書き）

ちなみに色は黒ですから。
何が？と思われた方は頑張って思い至って下さい。
刀子フラグが出来上がりました。
次はフラグが建つ話だな。
ん？刀子さんには彼氏がいるだって？
……大丈夫！
ＮＴＲなんて問題ない！！

次はタカミチ戦です。
どうぞ～。

バグは伊達じゃない（前書き）

今更ですが
霞は刹那に対し認識阻害を断ってます。
（あやした時に）
なので刹那は霞ということを認識していますので。

では最後の模擬戦に逝ってみよう。

ちなみに今話で
《雷公鞭》を使った際に霞がどうやって記憶を弄ったか…が多少解ります。

バグは伊達じゃない

刀子との模擬戦が終わった?後に霞は学園長に問いかける。

「なあ、爺さん。力試しならもういいんじゃね?
充分だろ。」

学園長もそれを聞き「確かにのぅ」と思い他の者を見渡した。
集まっていた魔法先生・生徒達もあまり異論はないのか反対の声が上がらない。
しかし

「それは非道いですよ、霞さん。せっかく霞さんと仕合えると思い楽しみにしてたんですから。」

タカミチから声が上がった。
霞は抗議の視線をタカミチに向けるがタカミチは譲らない。
この時、馬鹿な(…)魔法先生・生徒達は、いくらなんでもタカミチには適わないだろうと思った。
聡い者は、先の戦闘とタカミチの言動を見て思った。少なくともタカミチクラスの実力があるのでは?と。
気づいた者達は、明石教授・神多羅木・弐集院・ガンドルフィーニ・シャークティー。
それはさて置き

「また今度じゃダメなのか?」

「そう言いながら相手をしてくれないじゃないですか、霞さんは。」

2人のやり取り通り、タカミチは霞と再会してから一度も手合わせをしてもらっていない。
なのはとフェイトにはしてもらっていたが、霞だけは「めんどい」「気分がのらない」など毎回適当な理由で断っていた。
だからタカミチはこの機会を逃すといつ相手をしてくれるかわからないので退かない。
2人が言い合っている時にタカミチに助け舟を出す者が現れた。

「良いではないか、霞よ。お主、そう言いながらいつも相手をしてやらないではないか。」

テオドラである。
さらに

「そうだよ、霞さん。高畑先生がここまで言っているんだからやってあげたらどうだい？」

「霞。私はもう帰りたいんだ。サッサとやってサッサと終われ。」

「霞様、今のを訳しますと霞様の格好いいところを見たいので早くしろ、だそうです。」

真名・エヴァ・茶々丸が援軍として近づいてきた。
事情を知らない者達はエヴァが霞に親しく話し掛けた事に眉を潜める。
それに気づいた学園長は、冷や汗をかく。
（まずいのぅ。ここでエヴァに対して暴言を吐くものが現れれば…
……非常に不味い。儂、守りきれんよ。むしろ、死ぬんじゃね？）

そんな学園長の思いのなか
愛する嫁達の言葉にうぅ～と考え込み出す霞。
ここでテオドラがとどめとばかりに

「ほれ、刹那も霞の格好いい姿が見たいと言っておるんじゃ。男なら答えて見せぬか。」

「えっ！？私ですか！！」

いきなり振られた刹那は驚く。
霞は刹那に視線を向け

「刹那も見たいの？」

聞いてみた。
刹那はあたふたしながら

「ふぇ！えっと、その、……見てみたいと言われれば見たいです／／／」

そこで横合いから思わぬ声が上がった。

「私も出来れば拝見したいですね。陽神さんは私と刹那の時はどうも手加減されていたようですので。」

刀子であった。
それを聞いた霞は溜め息を吐いた後、いきなり傾世元ジョウを顕現しバッサ、バッサ、と振り出した。
突然の事に驚く一同。
そこへ

ドサッ、バタッ

成り行きを静観していた魔法先生・生徒達が倒れ出した。
それを見た学園長と刀子と刹那は驚く。
そして霞に問い詰めようとしたら先に霞が声をかけた。

「ここから先は倒れた人達はダメ～。
刹那と刀子さんは今から見る模擬戦はここだけの秘密にしておく事。
じゃないと眠ってもらいます。
後、倒れた人達の記憶は書き換えさせてもらい、俺の力量を「刹那に勝てる、刀子さんといい勝負をする、タカミチには粘ったが負けた」という風にさせてもらいました～。」

タカミチは苦笑。
学園長は霞の意図を理解し溜め息を吐き、了承。
刹那と刀子は驚く。
構わず2人に問いかける霞。
刹那は霞を見て頷き
刀子は学園長が了承したのをみて

「わかりました。ただ終わった後に陽神「霞でいいよ」…霞さんに質問をしたり等はよろしいのでしょうか?……後、切られたスーツ代の請求もしたいですね。」

「ハハハ……いいですよ。まあ終わった後は時間が遅いですから後日、俺の店に来てくれたら質問に答えますよ。スーツ代もその時渡します。その上着はあげますので着て帰ってもらった後は捨てるなりなんなりしてください。」

刀子の言葉に霞は苦笑いをしながら答える。
そして学園長が

「それではタカミチくん「パァン！！」ヒョッ！？」

開始の合図をしようとするといきなり甲高い音が響いたと同時に霞が飛んだ。

「「なっ！！？」」

「油断大敵じゃな～、霞。」

「全くだね。」

「ふん。」

「霞様、頑張って下さい。」

いきなりの事に学園長・刹那・刀子は驚く。
テオドラ達は笑いながら霞に言う。
タカミチは

「……完全に不意をついたとおもったんですがね…。」

呟いた。
吹っ飛んだ霞は空中で態勢を整え着地。

「俺の不意を突こうなんざ、なのは達の着替えを覗く事より難しいぜ、タカミチ。」

ダメージをくらった様子もなくタカミチに告げる霞。
ここに最後の模擬戦が開幕した。

観客ｓｉｄｅ

「いや～、タカミチも立派に成長したのぅ～。前に戦った時も思ったがアレを凌ぐのは少し面倒くさかったぞ。」

「確かに高畑先生のアレは少々厄介だね。」

「私なら余裕だがな。」

「……ジィー（霞の勇姿を録画中）。」

テオドラ達があまりに呑気に会話をするので学園長達は呆気にとられる。
何とか我に帰った学園長が

「あの…さっきの不意打ちは良かったのかのぅ？」

刹那と刀子も同じ思いなのか視線を４人に向ける。
代表してテオドラが答える。

「ああ、全く問題ないから気にしなくてよいぞ。霞とやる時には不意打ちなど全て有り有りのルールじゃからの。まあ、なのはとフェイトは例外じゃが。」

それを聞いた3人は呆然とする。
テオドラは告げる。

「刹那と刀子殿はしっかり見ておいた方がよいぞ。」

「えっ、あっ、はい。それはもちろんですが……。」

「……彼の本当の実力が見れる……と？」

「正しくは一端じゃ。霞のバグ……のな。」

ニマっと口元を歪めるテオドラ、真名とエヴァは笑いながら前を見る。（茶々丸は録画中。）

刹那と刀子はそう言われ、顔を前に向ける。
そこには

嬉しそうな表情をしながら戦闘態勢に入ったタカミチと

そんなタカミチを見てハァっと溜め息を吐く霞がいた。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

タカミチと霞の間の空気が張り詰める。
そして……

パァン！！

先手を取ったのはまたしてもタカミチ。
タカミチの攻撃を喰らい顔をのけぞる霞。
見ていた学園長と刹那と刀子はまさか霞がまともに喰らうとは思っていなかったのか驚愕。
テオドラ達は「ん？」という顔をした。
当のタカミチは

（ッッ！！？…今の手応えは…）

奇妙な感覚を感じた。
確かに当たりはしたが……手応えがありすぎたのだ。
そう思いながら手を緩めずに攻撃を繰り出す。

パァッパパパパァン！！！

霞は喰らう。喰らう。喰らう。
タカミチの攻撃を喰らい上半身をのけぞりながらタカミチの攻撃を喰らい続ける。
そこでタカミチは気づいた。
そして手を止め霞に話し掛ける。

「……流石ですね、霞さん。」

それを聞いていた学園長と刹那と刀子は訝しげな顔をする。
テオドラ達は途中から理解していたのか苦笑している。
そして喰らっていた本人が上半身を起こし顔を上げる。

平然とした表情をしながら、悪戯がバレたような顔をして

「気付かれたか、残念。もう少し踏み込んできたらカウンターをプレゼントしたのに。」

と何でもなかったように言う。

そんな霞を見て今日何度驚いたかわからない3人は信じられない表情をしていた。

「さっきのはどうやって凌いだか聞いても?」

「別に。ただヒットする瞬間に同程度の気を集約させて相殺しただけ。のけぞっていたのは……まあパフォーマンス的?みたいな。」

それを聞いたタカミチは感嘆の表情を浮かべながら一筋の汗を流す。

霞は簡単そうに言ったが、実際にやるとなると恐ろしい程の技量が必要。

向かってくる力の見極め。

それを行った後に相殺できる気の集約。

当たる瞬間の見極め。

それをコンマ秒で行わなければ次弾の対処に間に合わない。

それを霞は何でもないようにやってのけたのだ。

タカミチは畏怖と尊敬と同時にまだ憧れの人達に届いていないという悔しい気持ちが胸にうずまく。

霞はそんなタカミチを見て内心で溜め息を吐きながら

「出し惜しみすんな、タカミチ。サッサと本気を出せ。……でないと終わらせちまうぞ。」

挑発し刺すような殺気を飛ばした。

それを浴びたタカミチはすぐに動いた。

パン！
ゴォッ！！

それはタカミチの師匠、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグから教えられた究極技法。

《感卦法》

それを見た霞はニヤリと笑い

「それでいい。全力で来い。ガトウの代わりに見極めてやるよ……
…今のお前の力を。」

呟く。

そしてタカミチは繰り出した。

《七条大槍無音拳》

ドゴン！！！！
ガァァァン！！！！！！

直撃。

return side

ガァァァン！！！！！

「むぉ！」

「うぁっ！？」

「クッ！」

タカミチが繰り出した攻撃の余波により学園長・刹那・刀子は腕を覆い声を上げる。

だが

「安心せい。目を開けて良いぞ。」

テオドラの声がかかる。

それに従い目を開けた3人の前に布が目に入る。

それはテオドラ達を囲むように宙を漂っていた。

「これは……。」

「羽衣……ですか？」

「まあ妾のアーティファクトじゃ。」

呟かれた声に律儀に答えるテオドラ。
学園長は先程の余波を思い出し

「他の魔法先生達は！？」

と叫びそっちを見る……と

「あいつら、いらん事で手間をとらせよって。」

「後で迷惑料をもらうとしようか。」

「負傷者等は０人のようです。」

エヴァ・真名・茶々丸が寝ている魔法先生達の前にいて先の余波から守っていた。
それを見た学園長はホッと一息吐いた後、爆心地を見やり

「タカミチくん……やりすぎではないかのぅ、これは。いくら霞殿とはいえ無事とは思えんが……。」

「あ、かー……くん？」

「……（流石にこれを喰らったら…）」

３人は土煙が上がっている方を見て思いを馳せる。
それを見聞きしたテオドラは

「足りんよ。」

「「「はっ？」」」

「この程度で霞を傷つけられるなら妾達はとっくの昔に霞から一本を取っておる。」

「「「……。」」」

3人は絶句。

「面白い事を教えてやるぞ。
あっちにいるエヴァンジェリン・真名・茶々丸、そして妾がそれぞれ本気を出し共に霞に挑んだとしよう。それで霞に傷を一つか二つというぐらいじゃな。」

事前に霞達それぞれの実力を聞いていた学園長は
（えっ？なに？それ？コワすぎるんじゃけど）
刹那と刀子がいまいち理解が追いついていないようなので

「妾達4人はタカミチよりは強いぞ。大体の力量を言うならエヴァンジェリン＞＞＞＞タカミチ、妾・真名＞＞タカミチ、茶々丸≧タカミチじゃな。」

それを聞き刹那と刀子はようやく理解した上でさっきの言葉を思い返し

「……ということは」

「彼は……まさか」

「うむ。……ほれ、見えてきたぞ。」

ようやく土煙が晴れテオドラが爆心地を指すと
そこに

無傷のまま立った霞と
息を切らしているタカミチがいた。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「それにしてもまあ……清々しい程に遠慮がなかったな、おい。」

「ハァハァ……そんなものはありませんよ、あなたを相手にしているんですから。」

と霞の言葉に返すタカミチ。

「まっ、遠慮なんてしてたらぶっ飛ばしていたがな。」

そう言いながら埃を払う霞。
無傷の霞を見て

（解っていたことだけど……ここまでになると悔しいという感情なんてなくなるな、これはもう。）

思い、苦笑するタカミチ。
霞はタカミチに視線を向けタカミチにとって予想外な、かつ嬉しく

なってしまう言葉を投げかけた。

「うん、まあよく頑張ったなと表しようか。今のおまえは大戦時のガトウを越えてる。今のおまえなら《紅き翼》のメンバーと肩を並べて戦えるぞ。俺が保証してやろう。……ラカン2級でもバカ（筋肉達磨）に作らせて贈ろうか？」

と。

それを聞いたタカミチは言葉も発せず目を見開き驚き、霞を見る。

「どした？そんな阿呆みたいな顔して。今の言葉は嘘じゃないぞ。」

再度教える霞。

タカミチはそれがようやく脳に染み込み

「……ありがとうございます。」

礼を言い、頭を下げる。

霞はそれを見てフッと笑う。

それは教え子が一人前になるのを見届けた師のような風景。

見ていた者達はそれを見て暖かい視線を二人に向ける。

しかし忘れてもらっては困ります。

これが普通の師ならここで終わる。

だが、今いるのは普通じゃない霞。

故に

「っつーわけで、俺のターンな。とりあえず言っておく事は……死ぬなよ～。」

「「「「えっ？」」」」

「「「ハァ、やっぱり」」」

「霞様、流石です。そこに痺れますし、憧れます。（ジィー」

タカミチ・学園長・刹那・刀子は疑問の声を、テオドラ・エヴァ・真名は理解していたような声を、茶々丸のみ感動した声を。
そして霞は何でもないように驚く事をやり始めた。

パン！
ゴォッ！！

霞を中心に軽い衝撃波が吹き荒れた。
タカミチはそれを見て目を見張りながら引きつった声を絞り出した。

「……か、霞さん。……《感卦法》…使えたん…ですか？」

そう。霞はタカミチと同じ《感卦法》を使用したのだ。

「テオドラさんは知ってたのかい？あれ。」

「…いや、霞があれを使うのは初めて見るのぅ。」

「まさか……とは思うが……。」

「可能性は高いと思われます。（ジィー」

そしてタカミチの問いに霞は答えた。

「ん？いや、おまえの見て今試してみた。ちなみに今からやるのも初めての試みでっす♪」

と言いポケットに手を入れる霞。

タカミチはまさか！と思い狼狽しながら自身も態勢に入ろうとしたが

「遅いよん、タ・カ・ミ・チ・く・ん♪」

パァン！！

「ガッ！？」

顔面に衝撃を喰らいのけぞったタカミチ。

そして

「まだまだ俺のターン♪」

パァン、パァッパパパパパパパッァン！！！！！

先程、タカミチが繰り出した連撃を同じように繰り出す霞。

そして

「♪♪思い出した。確かガトウが……♪」

と言い、溜める霞。

タカミチは視界を歪ませながらソレを見た。

（ソレは……ハハ、あー、やっぱりスゴいなぁ…霞さんは。）

最強の中の最強、バグキャラであるナギ・ラカン達までもが皮切りにバグと言われていた霞の強さを改めて感じつつ

（でも……少しは自重して…下さい。……いや、ほんと、マジで（泣））

声が出せないので心中で懇願めいた悪態をつきながら

《豪殺・居合い拳！！！》

かつて師事したガトウよりも明らかに威力が高い居合い拳を喰らい……意識を手放した。

模擬戦の勝者、霞。

「「「……（ポカーン）」」」

「ふむ、まさか《感卦法》を使うとはのぅ。今度、教えてもらうか。」

「まあ順当な結果だったね。」

「私としてはもう少し自重しろと言いたいがな。見たか？最後のタカミチの顔を。感嘆等を通り越し呆れて文句を言いたそうな顔をしていたぞ。」

「パーフェクトです。流石、霞様。惚れ直しました／／／」

「はっ！？高畑先生！！」

「ふぉっ！？そうじゃった！タカミチくーーーん！！！」

「学園長！至急、医療班を！！」

「Ｉ'ｍ　ｗｉｎｎｅｒ！！！
フハハハハーーー。」

こうして霞とテオドラは夜の警備参加資格を手に入れた。

……タカミチの尊い犠牲により。

全員！！！敬礼！！

おまけ

後日
アルの元に一本のビデオテープが送られた。
送り主は……陽神　霞。

「……宅配便ではなく自分で持ってこればよいではないですか、全く。」

と言いながらビデオテープの再生準備に取りかかる。

「今度は何でしょうかね。」

中身は茶々丸が保存していた霞ｖｓタカミチ戦。

……鑑賞中……

見終わったアルは画面を消した後
遠い目をして虚空を見て

「……タカミチくん、あなたの事は……私達《紅き翼》の胸の中で永遠に生きてます。なので……迷わず成仏して下さいね。」

静かに手を合わせ呟いたアルであった。

終わり

ーーー勝手に殺さないで下さーい！！

ｂｙ　タカミチ・Ｔ・高畑

バグは伊達じゃない（後書き）

短い上に下手な戦闘描写だらけで
ごめんなさいでした。

さて次は桜通り吸血鬼事件までかっ飛ばしていきますか。
何話か日常というかフラグというか
そんな話が続きますので～。
超やアキラも出しますよ～……メイビー。

ネギ？知るか！こっちも大変なんだよ、馬鹿！！（前書き）

グダグダ感たっぷり
強引感たっぷり
故に

き・に・す・る・な！！

ではどうぞ。

ネギ？知るか！こっちも大変なんだよ、馬鹿！！

霞達が夜の警備参加資格を手に入れた夜から幾日か経った。
次の日にはどうやらネギが来て原作通りに２－Ａの担当になったのを聞いた霞。
夕方には千雨が来て今までに無いぐらい愚痴を吐き出しにきたのはご愛嬌。
千雨が帰った後に真名が刹那を連れてきて霞はようやく刹那と落ち着いて話ができた。
ただ刹那には自分の事（それも一部）しか教えなかった。
全部を説明するなら木乃香と一緒の方がいいと霞はなんとなく思ったから。
フェイトもそれを聞いて「その方がいいかな」と頷き自身の事はまだ隠す事にした。
ただ今の（…）なのはとフェイトと仲が良くなったとだけ記しておく。
次いで刀子がここしばらく休んでいる事を知った霞は
（ああ、だから次の日に店に来なかったんだ～）
と呑気に思った……この時は。
そう思った自分が懐かしいと遠目に黄昏ている霞。
だが黄昏ている暇などない、なぜなら

「聞いていますか！？霞さん！！元の原因はあなたが私の服を斬ったのが悪いんですよ！あれがなければ彼とだって……（略。」

店のカウンターに座り霞の前で半泣きになりながら喚いている刀子がいるから。
彼女は昼前にいきなり店に来たと思ったら凄い剣幕で霞にずかずか近寄った後

「あなたのせいです！！どうしてくれるんですか！？」

とズビシと擬音がつく勢いで霞を指差し叫んだ。

いきなり言われた霞はポカーン。

共に店番していたアリカ・テオドラ・レイは「また何かしたのか」という視線を霞に向ける。

慌てた霞は必死に刀子を宥めた後に事情を聞く。

それを簡単に纏めると

模擬戦の次の日の夕方、彼氏が部屋にサプライズと称して訪れていた。

（この時、刀子はまだ帰宅していない）

彼氏が霞の上着を見つける。

刀子が帰宅。

彼氏がこの上着の事を聞いた。

彼氏の急な来訪、霞の上着で彼が怒り気味な事とかで少しテンパる刀子。

そんな刀子を見た彼氏は浮気と勘違いし怒りながら出て行った。

刀子、呆然→崩れ落ちる→体調不良といい数日休む→霞に理不尽な怒りが湧いてきた→店に襲来→霞に文句を言う→現在に至る。

であった。

それを聞いた霞は

（あれ？俺のせい……なのか？）

アリカ・テオドラは理解したのか理不尽な怒りの対象である霞に憐れみの視線。

レイはどうでもいいといった感じ。

そんな霞達を余所に延々と愚痴る刀子。

霞は渋々話し掛ける。

「あの刀子さん。とりあえず落ち着いて。彼氏だって今頃は冷静になって話しぐらいは聞いてくれるって……たぶん（ボソッ。」

それを聞いた刀子はいきなり黙り込んだと思ったらボソッと一言

「……着信拒否されてますｏｒｚ」

「「「……」」」

失敗だった。

霞は助けを求めてアリカ・テオドラに視線を向けると

「「……（サッ」」

顔を背けられた。

内心で裏切りもの～と思いながら刀子を見やり

「えと…直接会いにいってちゃんと説明すれば解ってくれますよ、きっと。（恐らく）」

「……そうでしょうか？」

霞の言葉に少しだけ希望を見出す刀子。

それを見た霞が立ち直らせるには今だ！！と思い矢継ぎ早に繰り出す。

「そうですよ！それに彼氏だって刀子さんみたいな可愛くて美人で

綺麗な女性と別れたいなんて思ってないですって！いや～、刀子さんみたいな美女が彼女なんて彼氏が羨ましいです。男から見たら羨望の的……いや殺意の視線を送っちゃいますね。彼氏も本当は刀子さんに会いたいと考えてるに違いない。だから頑張って誤解を解きにいきましょう！」

「／／／……流石にそこまで褒められることは…。いえそれより…そうですよね。彼だってきっと解ってくれますよね。」

立ち直ってきた刀子。
霞は少しホッとしたあとに

「こういうのは思い立ったが吉日。すぐに会いに行くべきです。頑張って仲を修復して下さい。応援してますから。」

とエールを送る。
刀子もそれを聞き思案した後、頷き、霞にお礼を言って立ち上がり足早に店を出て行った。

「……ふはぁ、嵐は去ったか。しんど～。まさか刀子さんがプライベートではあんなに弱々しいとは想像できなかった。……あれがギャップ萌か？……アリだな。」

一息吐く霞。
だが

「「霞。」」

低い声音と刺々しい殺気が霞に突き刺さる。
呼ばれた瞬間、ビクッとする霞。

何故？と思いながら恐る恐る振り返ると

「刀子殿は可愛くて美人で……」

「綺麗で、羨ましいと……」

「いくら励ますためとはいえ……」

「もう少し言い様があったじゃろうに……」

「「……さあ、何か言いたいことはあるかのぅ」」

嫉妬に燃えた鬼がいた。
霞は脂汗をダラダラ流す。
必死に考える、この2人をやり過ごす手段を。

霞が考えた末

「アリカ、テオ……………………………………俺は！お前達（なのは達含む）を……宇宙一愛してる━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━！！！！！」

叫ぶことであった。
第三者から見ればもう少し上手いやり方があるだろうと思う。
しかし

「／／／その、妾も愛してるぞ霞。」

「／／／そんなに叫ばなくても解っておる。妾も同じ気持ちじゃ、霞。」

効果はあったようだ。

「アリカ！テオ！」

「「霞！！」」

霞は2人を抱擁しアリカとテオは顔を赤らめながら霞に抱き付く。

……安い三文芝居のようである。

ちなみにレイは

「（#。何故私は空気扱いなのでしょう。それにお姉様といいテオ様といい単純すぎます。いえ、それよりマスターは私に対する愛が薄いと思います。私はいつでもマスターの事を想っているというのに。こうなれば今夜にでもマスターの寝室に……（ブツブツ。」

黒いオーラを滲ませながら不穏な言葉を発していた。

気持ちはわかる。

「（ブツブツ……。ん？これは……。」

そんなレイがある物に気づき拾い上げ

「先程の方の…。？？？この男性は……。」

と呟く。

それは先程まで店にいた刀子と彼氏と思われる男が写っている写真。

レイが気になったのは男の方。

この写真を落としていった事により葛葉　刀子の運命が変わった。

ドナルドｓｉｄｅ

「おやおや〜♪またしても彼というファクターで1つの運命が変わっちゃったね〜♪本当に彼は面白いよ〜。面白すぎてドナルドは思わずパンツを被って変態仮面の真似をしちゃうよ〜♪
フォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！
な〜んてね〜♪
さてさて、彼は刀子嬢をどうするんだろうね〜♪……まあ簡単に予想できるけど〜。「ドナルド君、久しぶりだね〜。アッハッハッ〜」うん？……これはこれは久しぶりだね〜、ーーーー君。どうしたんだい、いきなり。」
「いやなに、1つ相談があってね〜。それより久々の再会なんだ。ひとまず

や・ら・な・い・か！！！」

「うわぁお！久しぶりの再会と久しぶりの《ピー》でドナルドはもう！もう！！」

「「きぃもぉちぃイイーー！！！！！！！！！！！！！！」」

ドナルドside end

ネギ？知るか！こっちも大変なんだよ、馬鹿！！（後書き）

最後のドナルドｓｉｄｅに出てきたドナルドの友人の相談事は本編には絡みません。

ただ霞（バグバカ）をどっか違う世界に放り込んでみたいなぁと思い、何となく書いてみただけです。

ちなみに放り込もうと考えた世界候補

・恋姫
・ハイスクールＤ×Ｄ
・カンピオーネ

ぐらい

無論のこと霞無双及びハーレム？、そしてギャグ風味・キャラ崩壊有り、ですが

あくまで構想（妄想？）段階

やってほしいなら書きますが……。

ただその場合ネギまを主として執筆しますので更新は亀ですがね。

……リリカル？

……執筆してたらボタン操作間違えて消えちゃったｏｒｚ

気分転換したいんだよ（泣）

じゃあサヨナラ～

超　鈴音、求婚されるの巻（笑）（前書き）

刀子のフラグ回収話を創ったんですが、イマイチだったので一旦区切ります。
ジワジワと刀子を堕とす事にした。
学祭らへんで刀子を……。

超　鈴音、求婚されるの巻（笑）

超ｓｉｄｅ

「ネギ坊主は無事に来たネ。これは予定通り。……問題は……。」

目の前にあるモニターに映るのは以前、陽神　霞という青年と接触していた場面。
そして現在のクラスメートでもあり私が知っている歴史にはいなかった…

高町　なのは
フェイト・テスタロッサ

「更に現時点でのエヴァンジェリンと茶々丸の在り方も私の予想を超え、龍宮さんにも依頼を断られる……カ。」

これでは計画に大幅な修正をする必要がある。
だが

「クッ、どう考えても練り直す時間と人手が足らないネ。このままでは……。」

そう思いながら思考に耽けていた時

Ｐｉｒｒｒｒｒｒ

「ん？誰カ？……茶々丸？珍しいネ、こんな時間に。」

そう思い携帯を取り

「ニーハオ♪どしたネ、こんな時間に？……はっ？……いや、わかたネ。ＯＫと向こうに伝えて欲しいヨ。場所は……。」

茶々丸と通話を終えた私は

「好機……と考えた方がいいカ。まさか向こうから来るとは……。今度は以前のような失態を犯さないようにしなければネ。」

そう言いながら

彼に頭を撫でられた時の事を思い出し

「陽神　霞……か。」

知らず知らず呟いていた。

ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

あの刀子襲来の２日後の昼

霞はとある喫茶店で席に座りながら考えていた。（う～ん、行動するときにタカミチでも連れていこうかね～）

と思いながら珈琲を飲む。
その時

「申し訳ないネ。待たせたか、陽神さん。」

2度目の邂逅を果たした超　鈴音と霞であった。

「いや、可愛い女を待つのは男の甲斐性だから気にするな。というよりこっちこそ悪いな、わざわざ授業まで休んで時間を取らせて。何か注文するならしたらいいぞ。こっちが持つから。」

「ふふ、嬉しいお世辞ありがとネ。授業は気にしないでいいヨ、あれくらいなら支障ないし。では遠慮なく注文させてもらうカ。」

超は近場にいた店員に紅茶とケーキを注文した後

「では、早速用件を聞こうか。陽神さん。」

泰然とした態度で霞に向き合う。
霞は苦笑いし

「霞でいいからな。名字はどうも慣れんから。それとそんなに堅苦しい態度はよしてくれ。今回は腹の探り合いみたいなのをしたくて呼んだんじゃないから。」

それを聞いた超は少しの間を置いた後

「わかたネ。しかし霞さんは私に何か用事があるのでは？……ハッ！？まさか私を口説くつもりなのカ！いや～、それは嬉しいけど確か霞さんは妻帯者だたような記憶があるから私としては不倫は

勘弁願いたいネ。」

と冗談めかした口調で喋る超。

霞は至極真面目な顔をして

「大丈夫。超が俺に嫁入りすれば問題ない。ちなみに超は可愛いから俺としては全然ＯＫです。じゃ、これにサインお願い。俺の方はしてあるから。」

なんて事を言いながら紙とペンを取り出す。

予想外な切り返しに超はポカンとした後、霞が取り出した紙に目を落とし

「ッッッッ!?何てモノを用意してるカ!!霞さん、あなた正気カ!?しかも記入済みテ!ああっ!?何で私の所の証人に高畑先生の名前が!?よく見れば筆跡が私と同じ!?」

「うん。後は…ハイ。超がこの判子押すだけ。大丈夫。気にするな。役所は問題なくスルーしてくれるから。」

「判子まで!!しかも何か高そうな判子だし!?ダメネ、どこからツッコんでいいか分からないヨ!!」

「フッ。ツッコむなんて。超はエッチィなぁ。しかし俺はどちらかというとｓ「待つネ!!それ以上はイケない!?」というのは冗談で。」

超が待ったをかけた所で霞は引き下がりテーブルに置いておいた紙と傍らに置いた判子をサッと懐にしまう。

「……うぅ、いきなり疲れたヨ。というか霞さん、さっきの紙を渡して欲しいんだガ……。あなたが持てると勝手に押して勝手に提出しそうでコワいネ。」

「しないしない。流石に本人の意思を無視してまでやらないよ。それに超が振ってきたからそれにノっただけだって。」

「……信じとくヨ。けど、一応聞いておきたいんだけど……何故

【婚姻届】

なんて準備してるネ？
しかもワタシの欄の筆跡はどうみてもワタシだたよ。」

超は恨めしげな視線をしながら聞いてきた。
霞は飄々としながら

「禁則事項だ♪」

有名な台詞を言ってのけた。
超は長い溜め息を吐き出し顔をテーブルに乗せ、諦めた。

そこで丁度良く超が注文したケーキと紅茶がきたので2人は一息ついた。

「で、話を戻すけど超に少し頼みたい事があるんだわ？」

「ん？何ネ？」

超がケーキを食べ終え紅茶を飲んで落ち着いた所で霞が切り出した。

「これなんだけど。」

と言いながらテーブルの上にある写真を出した。
それを見た超が

「これは……葛葉　刀子女史……。それとこの男は。この写真がどしたネ？」

それは刀子と彼氏が一緒に写っている写真。
レイが拾ったものであった。

「見て…というよりかこの男の方をな、少し調べて欲しいんだ。」

「ふむ。聞きたい事があるヨ。」

「はいよ。」

「何故私に頼むネ？霞さんは見た所、茶々丸と仲が良い。情報探索なら茶々丸の方が優れているのは理解してるはずヨ。故にわからない。
何故ネ？」

超の言う通り、この程度の事なら茶々丸に頼めば簡単である。何故それをせずに超に頼んだのか
それは。

「……それは何というか……。」

「？？？」

口を濁す霞に疑問を抱く超。
霞は言いにくそうに喋り出した。

「……まだわからないから勘としか言い様がないんだが……茶々丸の情操教育に悪くなりそうで……。」

「……はっ？」

超は思わず口に出した。

「いや、もう少し言うとな……。」

霞はレイが写真を拾って渡しにきた時に言った事を思い出しながら超に説明した。

◆回想◆

霞達3人が甘い空気を醸し出しているときにレイが声を掛けてきた。

「マスター。これを。」

「ん？なんだ？写真？……これは刀子さん……と彼氏？…か。さっき出て行く時に落としたんか。へぇ～、なんか爽やかなイケメンじゃないか。……無駄に爽やかな感じがムカつくな。こういうヤツはきっと裏で汚い事してるんだ。ケッ、リア充シネ。」

と吐き捨てた。

（霞がリア充とか言う資格はないがな）

アリカとテオドラも霞の肩越しからそれを見て

「確かに整った顔立ちじゃが……霞の方が格好いいな。」

「妾もアリカと同じ意見じゃの。霞の方がイイの。……ん？はれ？こやつ……。」

ノロケたアリカとテオドラだが、テオドラが何かに気づいた様な声を出す。

そこでレイが

「テオ様も覚えてますか。」

「レイもか。」

2人の示し合いに霞とアリカは?顔。
テオドラは

「霞はともかくアリカは覚えておいても良いではないか。ほれ、以前3人で買い物をしに街に繰り出した時じゃ。」

「ん?……ああ、そういえば何やら男が声を掛けてきていたの。忘れておった。」

「はい。私達にしつこく声を掛けてきて最終的にはアリカ様のビンタでノされた愚者です。」

3人の会話を聞き霞は眉を潜め

「それっていつの話し?」

「年末らへんじゃ。」

「ほれ霞が翁に謝罪しに行った日……じゃったか?レイ?」

「はい。合っています。」

「この写真は大体秋ぐらいだよな?ってことは刀子さんがいながらこいつはアリカ達をナンパしやがった……と。よし、全殺し確定で。」

と霞が言い立ち上がろうとした時

「いえマスター。それともう一つ気になる事が。」

レイが霞を呼び止めた。
霞はレイに続きを促した。

「あの時、隠れているつもりだったんでしょう。複数の男の気配がしておりました。邪推な視線をこちらに向け。」

「確かにのぅ。あの視線を感じた時は思わず八つ裂きにしてやろうかと思ったわ。」

「まあアリカがこの男にカマした後はそれも引き下がったんじゃがな～。」

と呑気に話す3人。
霞は沸々と湧く殺意を何とか押し込めた後

「……ちょいと調べる……か。」

そう言いながら3人にエヴァの家に行く事を告げ店を出る。
その後、茶々丸に頼み超に連絡を取り本日の顔合わせとなった。

◆回想終了◆

「……成る程ネ。霞さんの所のウェイトレスがそんな事を。」

「そっ。なんかきな臭い上に下手すると腐った野郎共の行いを茶々丸が知ったら
「世の男性達は最低ですね（霞様を除いて）。
金輪際、男性とは話しません（霞様を除いて）。
話し掛けられたら即殲滅します。」
なんて事になるかなぁと。……最近、茶々丸の性格が斜め上に育ってるし。」

超は過保護ではないかと思う反面、最後の霞の言葉を聞きあながち間違ってはいないかもとタラリと汗を流す。
超はコホンッと軽く間を取り

「まあ言いたい事はわかたネ。……いいヨ。引き受けるネ。」

と笑いながら了承を取る超。
それを聞いた霞は

「少し意外。何か対価を求められると思ったのに。」

その言葉に超は

「最初はそだたけどネ。あなたが茶々丸を大事にしてくれているのがさきのでわかたから。生みの親としては少し嬉しかたヨ。……それに個人的にこの男性を懲らしめたくなたしネ。フフフ。」

最後の方で黒いナニカを滲み出した超。
霞は少し引きながら
（え？ヤダ、何？超も魔王に変身できるの？コワいんですけど（泣））

と思った。同時に将来、超の旦那になる奴は尻に敷かれそうだとも。
さておき
霞は流石に超にタダで働いてもらうのもなぁと思ったので

「超にも苦労掛けちゃうし……。そうだな、今夜にでも報酬?になるのかな、それを渡すよ。」

超はそれを聞き

「……まあ、貰えるのなら貰っておきますか。では、早速調べてみるので早ければ今夜、遅くとも明日にでも教えるネ。連絡するにはどしたらイイか?」

「ん~、そだな。……この番号に連絡して。タカミチが出るから“霞に頼まれた”と言ったら通るようにしておくし。」

と言いながらタカミチの携帯番号を教える霞。
※良い子は無断で番号を教えちゃダメです。
渡された超は

「……わかたヨ。追求は止めておこう。……それより霞さんは携帯を持てないのカ?今の時代、不便だと思うガ。」

と。
対して霞は

「……携帯無くても不便してないし。」

視線を少し逸らしながら返答した。
無論、それを見逃さない超。

「本当は？」

「……嫁さん（達）が持たせてくんない。」

「……はい？」

「だから、嫁さん（達）が持たせてくんないの。黙って持ってても絶対にバレて解約させられるの。」

「……普通、持たせるのではないカ？」

超の疑問は尤も。

霞は少しむくれながら理由を言う。

「最近の携帯ってゲームやら小説とか一杯あるだろ？それやってると夢中になって徹夜とかしたり、嫁さん（達）の話しを聞かなかったりする時があったから……それのせいで携帯持たせてくんないようになった。」

何とも馬鹿らしい理由に超は呆れる。

「なら……通話だけの携帯とか持てばいいのでは？」

呆れながら一応聞いてみる。

それに霞はこう答えた。

「そんな携帯つまんないから持ちたくない。」

……何という我が儘。

※ちなみにこの時の霞を見て超は少しだけ可愛いと思ったらしい。
（後日談）
超は溜め息を吐き

「まあいいヨ。とりあえず今日の所は行くネ。」

帰る旨を伝える。
霞は気を取り直し

「おう。またな。近い内に超包子に家族と一緒に顔出すわ。」

「わかたネ。その時はお持て成しするヨ。では再見、霞さん。」

2人は別れた。
霞は超を見送りながらタカミチに念話を送る。

《タカミチ～。今夜か明日のどっちかに俺の頼みを引き受けたやつがおまえに連絡してくるから。ソレを聞くもしくは渡されたら俺んとこに来いよ～。以上》

《はっ？えっ？ちょっ、霞さん！！》

《追伸。
なのはとフェイトには黙っておけ。言ったら……麻帆良が壊滅しても責任持たんから。》

《ちょっ！？何をするつ（ブツッ。

念話を切る霞。（ついでに念話拒否も）
会計を済ました霞は空を見上げながら

「さて……報告次第ではゴミ掃除となるかな。」

呟き、帰宅する霞であった。

追話

霞の依頼を受けた超は早速調べ上げ、そのデータをｄｉｓｃに保存しタカミチに連絡を取り、超包子に来てもらい手渡した。
この時タカミチは何か言いたそうにしていたが超に言ってもしょうがないので黙って受け取っておいた。
そして店を畳んで研究室にて計画の再考をしようとした時にふと思い出した。

「そういえば霞さんの言ってた報酬とは一体……？」

その時

Ｐｉｒｒｒ

携帯が鳴った。
超は誰だ？と思い画面を見ると

「……龍宮サン？」

真名からであった。
訝しげな顔をしながら超はボタンを押し

「ニーハオ♪どしたヨ、龍宮サン。依頼を受けてくれる気になたカ？」

冗談混じりに言う超。
だが真名は

「その通りだよ、超。依頼を受けよう。この依頼……全力であたらせてもらう。契約や詳細は後日教えてくれ。じゃぁね。」

真名はそれだけ言うと通話を切る。
いきなりのＯＫに呆気に取られた。
次いで

Ｐｉｒｒｒ

再度鳴る。
携帯が。
超は画面を見て

「次は茶々丸……。ニ、ニーハオ。どしたネ……茶々丸？」

少しどもった超。
しかし携帯越しの茶々丸はお構いなしに言ってきた。

「超　鈴音。あの計画の事ですが……全力であたらせてもらいます。必ず達成しましょう。いいですね、いいですよね。返事は聞きませ

んので悪しからず。それでは後日、計画について話し合いましょう。
では、おやすみなさい。」

とやる気に満ちた茶々丸は一方的にまくし立て通話を切った。
最近の茶々丸は計画に渋々といった感じだった。
それが今さっきの茶々丸はやる気満々。
超は真名と茶々丸の手の平を返したような態度にポカーンと。
数分した後、我に返った超は霞の言葉がフラッシュバックする。

「今夜にでも報酬？みたいなのを渡す」

超は2人の事だと理解した。

「まさか彼は……ハ、ハハ、ハハハハッ。……面白いネ、霞さん。いいだろう。遠慮なくこの報酬を受け取って計画を達成してやるネ。後悔しても知らないヨ。」

同時に超は確信した。
最大の障害は霞だと。
間違いではない。
だが超は気づかない。
霞がどれだけ非常識な存在なのかを。
その事を超が知るのはもう少し後の話。

更に追話

この日の夜中
とある某所にて

「アーッハッハッハッ！！！」

「「「ギャーーーーッッッ！？！！！！！？！」」」

1人の男の高笑いと複数の男の悲鳴が聞こえた後、一つのビルが倒壊したらしい。

そして倒壊したビルから助け出された男達は病院に連れて行かれた後、事情聴取にて詐欺、婦女暴行等の罪が浮き彫りになり捕まったそうな。

超　鈴音、求婚されるの巻（笑）（後書き）

テレレ～ン♪

刀子、彼氏と別れたフラグを建てました。

次にアキラフラグを創らなければ……いっそのこと千雨もセットで魔法バレさせて早々に魔改造させようかなぁ……。

千鶴の魔改造もしたい……。

激しく迷う。

ああ、刹那は木乃香とセットで魔改造させるつもりです。

久々に嫁達のイチャラブシーンを間に挟むか……？

そろそろレイの逆レ……ゲフンゲフン

レイ～、アキラ～、そしてカオス盛り合わせ～（前書き）

刀子さんは彼氏の実情を知り
「男なんてーー（泣）」
状態で霞達の店で自暴自棄になってましたが、霞達の努力により落ち着きました。
ただ霞が慰めた時に少し……

続きは次回の刀子フラグにて

今回はレイ編、アキラ出会い編＋カオス?編です

少し寝ぼけながら執筆したのでおかしな所もあるでしょうが、気にせず読んで下さい（笑）

では、どうぞ。

レイ～、アキラ～、そしてカオス盛り合わせ～

レイＰＡＲＴ

とある夜中

メイド服を着た白髪無表情の美少女レイは家の廊下を静かに歩く。
まるで他の者には気づかれてはいけないように気配を殺しながら。
そして１つの部屋の前に着き止まる。
その部屋の扉にあるプレートには

〈霞の部屋〉

と。
レイはそれを見やりながら思う。無表情だが……。

（マスター……あなたが悪いのです。マスターがいつまで経っても……。
だから私はこうして……。）

そしてドアノブに手を掛け、回し

キィ
パタン

部屋に入った。
レイは部屋を見渡し、ある一点を見やる。

そこにあるのは1つのベッド。
そこにいるのは部屋の主である霞。
本日の霞は1人で寝ている。
勿論、レイはその情報をｇｅｔしていた。
レイはそこに近づく。

シュルッ
ファサ
パサ

……服を脱ぎながら
もうここまで来ればわかるであろうが、レイの目的は霞を襲うこと。
無論、性的な意味で。
俗に言うぎゃｋ《放送禁止》である。
レイは霞に幾度となく且つさりげなく（？）ＯＫサインを送っていたのに霞はそれを悉くスルー（勿論意図的に）してきた。
そのため業を煮やしたレイは最後？の手段に出た。
それは……夜討ち。
漢女（おとめ）なら必ずやる行為の1つ。
ちなみに朝駆けも同。
レイが漢女の知識をどこで手に入れたのかというのは割愛する。
レイは裸のまま霞の布団に潜り込む。

モゾモゾ
ガサガサ
ヌギヌギ
……ジュルリ

霞の部屋から何かの擬音が聞こえる。
余談だが、霞は寝ていても敵意には反応する。

それ以外だとあまり気にせず寝続ける。
特に家族の気配になると無防備に等しい。故にレイが夜討ちに来ても起きない。
今回はそれが仇となった。

「これが……。マスター、レイは今から大人の階段を昇ります。ああ、愛しのマスター。レイはもう、もう……我慢できません！？」

パクッ
チュパッ
チュル
……
……
……
※ここからは放送禁止で～す♪一応、全年齢対応ですので～

朝方

「ん？う～ん……ふぁあ……何だ～？……って！？ナンジャコリャーーーーーーーーーーーー！！！！」

霞は混乱した。
何故なら自分の横に裸のレイが寝ていた。
それはまだいいとしよう。

だが……何故、自分の下半身までもがスッポンポンなのか？
霞は混乱から何とか立ち直った後、はっ！？と気付いたかのように
布団を捲り上げた。
そこには……ナニカノチガシーツニ
アリマシタ。

ピシッ！

霞は石化の呪文を喰らいました。
そして

ガチャッ

「霞く～ん。何か叫び声が聞こ……えて……きた……。
」

白い魔王様もといなのは様が到来なされました。
部屋に入り、自身が目にした光景に言葉が途切れ、固まるなのは様。
霞も未だに石化。
そこに

「霞。朝から凄い叫び声が聞こえたんだけど、どうした……
……ノ……。」

金髪美少女のフェイト様が御光臨なされました。
なのは同様、固まるフェイト様。
更に

「朝くらい静かに起きれんか、霞。今度はどう……した……
…」

朝食の準備をしていたアリカ様がエンカウントしました。
最後に

「ふぁあぁ～。どうしたのじゃ～？まさかレイに夜這いでも喰らったのか～……おと？」

まるで見ていたかのようにズバリと当てながら登場するテオドラ様。
そして４人？は今の霞の状況を見て考える。

１：下半身裸の霞と全裸のレイが共に寝ている。

２：シーツにはナニカノチがこびりついている。

３：よし、殺ろうか。

何か２と３の間が飛んでいるが気にしてはいけない。
霞は我に帰りなのは達の方に顔を向けると……
なのはとフェイトとアリカが無表情・無言のまま霞に近寄ってきていた。
慌てる霞。

「ちょっ！？俺は知らないよ！！っていうか俺自身も何が何やらわからん「うぅ～ん、マスター……激しいです～……ｚｚ。」……ｏｒｚ。」

絶妙なタイミングでレイの寝言が投下された。
これにより霞の言い分は最早、右から左へスルーされるのは当たり前。
３人は霞の側に立ち

「「「で、最後に言い残す事は？」」」

もう執行は確定済の発言。
霞は諦めた。
故に

「……ちゃんと堪能したかったです（泣）」

男としては尤もな意見。
それを皮切りに

ドガッ
バギッ
ズバッ
グシャッ

霞、フルボッコタイムが開催された。
これに何故テオドラが参加していないかというと

「……まさか、本当に夜這いを実行するとは思わなんだ（汗。霞には悪いことをしたのぅ。」

元凶はここにいた。
そしてレイは

「マスター……これが嬉しい……でしょうか～……ｚｚ。」

そんな寝言を言いながら……微かな笑顔を咲かせていた。

「ァァアアーーーーーー……。」

……自分の主を犠牲にして。

アキラＰＡＲＴ

レイの夜這い事件から数日が経ち、学園都市は休みの日。
現在、霞は散歩というかとある用事で出掛けていた。
ちなみにレイの件は起きたレイから夜這いをしたという発言により霞の無実が証明され霞は無罪？放免となった。
それはさておき

「ん～、どこの店がいいかさっぱりわからん。前は偶々目に入った店に行ったからなぁ～。」

と言いながらキョロキョロして何かの店を探している。
一応は霞の探している店は幾つか見つけているのだが、どれがいいのか見当がつかない霞。
なので悩みながらさ迷っていた。
と、そこに

「やめてください！」

「いいじゃん～。ちょっと俺と遊びにいってくれたらいいだけだからさ～。」

どこかで見たようなテンプレ展開が……。

「……流行りか？流行なのか？千鶴の時といい、何であんな展開に遭遇するんだろう？」

※それはあなたが主人公で、ハーレムフラグだからです（笑）。

ぼやきながら霞はそれを止める為に歩き出す。

アキラｓｉｄｅ

今日は部活もなく、久しぶりの自由な時間だったから買い物に出掛けた。

悠奈と亜子は部活があったから1人で出掛けたんだけど

歩いていたら男の人に声をかけられた。

いわゆるナンパだった。

街を歩いていたら時々、こういう相手が現れる。なのでいつものように断り歩き出すと、今回の男の人はしつこく声を掛けながらついてくる。

正直、怖い。

そんな思いが出たのと男が私の肩を馴れ馴れしく触ってきたので少し強い口調で「やめてください！」と言った。

だけど男は意に介さず私に迫ってくる。

（誰か助けて！！）

と思った瞬間

「嫌がる女の子に無理矢理迫るのは見苦しすぎて見るに堪えんな～。」

という声がしたと同時に私の体は何かに引っ張られた。
そして視界に入ったのは……前髪が長くて目が隠れている男性の横顔だった。
私はその顔というか男性の前髪の隙間から見える瞳に少し見とれた。
強い瞳。
強い意志がある瞳。
同時に優しさを感じる瞳。
私はソレを見え隠れする瞳から感じ取り、少し惚けてしまった。

これが私と彼の初めての出会い。

アキラｓｉｄｅ　ｅｎｄ

霞がアキラをナンパしていた男を裏路地に連れて行きＯＨＡＮＡＳＨＩした後、アキラの元に戻った。
アキラは霞に

「あの、ありがとうございました。」

お礼を言う。

「ん、いや気にしなくていいぞ。勝手にやったことだし。」

「いえ正直困っていましたし…それに少し怖かったので助かりました。」

アキラは少し俯きながら言う。

霞は苦笑しながら

「まあ、仕方ないわな。ああいう男はしつこい上に下手な行動を取れば何するかわからんし。

そんな時は大声を出して助けを求めるか、警察がいるとこに駆け込みな。もしくは……なんだ、男の急所に一撃加えた後に逃げるのもありだな。」

「／／／……それは…流石に無理そうです／／／」

霞の最後の発言に少し顔を赤くして言うアキラ。

「はは、いざという時の対処法ということで覚えとけばいいよ。」

「はい。」

「じゃ、俺は行くな。」

霞がアキラと別れようとすると

「あの、何かお礼をしたいんですけど……。」

とアキラが言う。
霞は似たような事を聞いたな～と思いながら考え、ふと閃いた。
「そうだな。少しそれに甘えて良いか？ちょっと悩んでいる事があるんだわ。」
霞がそう言うとアキラは「はい。」と言いながら聞く態勢に入る。
「あのな……ここらへんで手頃な美容院もしくは床屋ってどれがいいんだ？」
「……えっ？」
本日の霞の用事。
髪を切ること。
アキラはある意味で凄く重要な選択を聞かれた。
……喜劇の幕は上がった。

なのは's side

なのはは休日の今日、クラスメイトであり昨年末に仲が良くなった千鶴とその同居人である夏美の3人で買い物に出掛けていた。
「けど、少し意外だったかな～。ちづ姉となのはちゃんがこんなに仲が良くなってたなんて。」

「にゃはは。千鶴さんとは去年の12月にちょっとね～。」

「そうね。後、フェイトさんとも仲良くなったわよ～。」

夏美はそれを聞き

「へぇ～、テスタロッサさんとも。っていうかテスタロッサさんって結構クールなイメージがあるんだけど、どうなの？」

と2人に尋ねる。

千鶴は

「そうでもないわよ。というかフェイトさんってああ見えて天然な感じがするわね～……本人は自覚ないでしょうけど、ふふふ。」

なのはは

「千鶴さんの言う通りだよ～。フェイトちゃんは無自覚の天然さんな上に子犬属性も持ってるからね。なかなかの猛者だよ。」

それを聞いた夏美は

「ほへ～、全然イメージと違うんだ。何かピシッとして将来は何かこうキャリアウーマンみたいな気がしたんだけど。今度、話してみようかな」

と言う。

なのはは思った。

ワーカーホリックにはなってたけどね～と。

霞が聞いたら「なのはもだろ。」と言うのは間違いない。
千鶴はなのはの言葉を聞き

「子犬属性のフェイトさん……あらあら、可愛いわ～♪」

何やら妄想して微笑んでいた。
夏美となのははそれを見て……スルーする事にした。
そこでなのはが前を見ると

「あれ？……あれって大河内さん？かな。」

「うん？あっ、ほんとだ。アキラだね。」

2人は何やら店の前で所在なさげに立っているアキラを見つけた。
千鶴も遅れて気づき

「ほんとね。でも、どうしたのかしら？店……美容院の前で。予約待ち？」

「なら店内で待つでしょ。ほんとどうしたんだろ？アキラーーー。」

夏美がアキラに声を掛ける。
アキラはその声に気づき顔を向け

「村上。それに那波と高町。」

少し意外な組み合わせに驚きながら近付いてきた3人に笑顔を向ける。
アキラの元に向かい

「こんにちは～。大河内さん。それよりどうしたの店の前で立ったまま。」

なのはがそう聞くとアキラは苦笑しながら答えようとした時

「なのは、それに千鶴と村上さんに大河内さん。こんな所で固まってどうしたの？」

反対側からなのはにとって聞き慣れた声がした。

なのは's side end

フェイト's side

「今日はどこにいこうか？」

「私はどこでもいいよ。刹那は行きたい所はないのかい？」

「いや、私は特に。……あの、長谷川さんは？」

「……特にない。というかちょっと待て。何で私がここにいる？というかどうしてこうなった？」

フェイト、真名、刹那そして千雨がそれぞれ声を上げる。
千雨の言葉にフェイトは首を傾げ?顔。
真名は苦笑。
刹那は……少し困惑気味。
簡単に纏めると

フェイトが真名と出掛ける約束をした→なら刹那も連れていこうとフェイトが提案→刹那、拉致→3人で歩いていると千雨を発見→フェイトが千雨を誘うというか有無を言わさずフェイトが千雨を拉致→現在に至る。

全てはフェイトが原因です。
千雨は頭を抱えながら

「私はかえ「千雨、帰るの」……ウッ!?」

帰る発言をしようとするとフェイトが遮る。……悲しそうな瞳で、というか捨てられたような子犬的雰囲気を醸し出しつつ千雨を見ながら。
千雨はこれに弱い。
というか、勝てる気がしない。
同時にフェイトの頭に犬耳を幻想した千雨。
真名は思った。

(長谷川の負けかな。)

刹那は思った。

(長谷川さんの負けだな。というかフェイトさんって可愛いな~)

そして

「……わかったよ。わかったからそんな目で見るな。何か私がイジメてるみたいだから。」

陥落。

フェイトはそれを聞き笑顔になる。

「じゃ、行こ！……って、あれ？」

フェイトが声をあげ前を見て疑問の声を上げる。

3人はつられて前を見ると

「あれは大河内に……なのはさんと……」

「村上さんに那波さんだな。」

「あいつら、美容院の前で固まって何やってんだ？」

真名、刹那、千雨が順に声を出す。

理由が分からない4人は前方の4人に近づいて代表してフェイトが声をかけた。

「なのは、それに千鶴と村上さんに大河内さん。こんな所で固まってどうしたの？」

呼ばれた4人はフェイト達の方に振り向き

「あ、テスタロッサ。龍宮に桜咲と長谷川も」

「フェイトちゃん、今朝ぶり～♪それと真名ちゃん、千雨ちゃん、桜咲さん、こんにちは～。」

「あらあら♪大所帯ね～。」

「っていうか、皆が美少女すぎて私は場違いな雰囲気が……ｏｒｚ」

アキラ、なのは、千鶴、夏美がそれぞれが声を出す。

なのはがフェイトに事情を説明し、アキラが何故店の前に立っていたのか再度説明しようとすると

「おまえら、こんなとこで固まって何をしているんだ？」

「皆さん、こんにちは。」

「ふむ。なのはにフェイト、真名と千鶴と千雨に刹那は見知っておるが他は初めてじゃの。」

「そうじゃな、というか何を固まっておるんじゃ？」

「クンクン。この匂いは……」

更なる闖入者が現れた。

フェイト's side end

エヴァ's side

「なら今は店は閉めているのか。ここで会えて僥倖だったな。」

「じゃな。霞達もそれぞれ家を出ているからな。」

エヴァとアリカが会話をしている後ろで

「でな、レイがその晩な……。」

「……レイさん。締めてよろしいでしょうか?」

「拒否します。茶々様も迫ればよろしいでしょう?マスターなら押し切れますよ。」

テオドラの話を聞いた茶々丸がレイに嫉妬をしており、レイが上手く?流しながら茶々丸に不穏な提案をしていた。
エヴァと茶々丸は買い物帰りに霞の店に向かう途中、アリカ達3人を見かけて声を掛けた。
アリカ達も店の買い出しに出掛けて、その帰りだということで一緒に向かっている最中であった。
エヴァは後ろの3人の会話を聞き

「アレは本当なのか?」

「本当じゃよ。テオがレイに妙な入れ知恵をしおったからのぅ。全

く。」

「霞も霞だな。幾ら家族といえど不用心……ん？」

エヴァが不意に言葉を途切らせたので疑問に思ったアリカはエヴァの視線を追うと

「あれは……」

「なのは様にフェイト様、真名さんに……」

「刹那と千雨、千鶴もいるの～。後の2人は初見じゃな。」

「……ん？」

茶々丸とテオドラが美容院の前の集団について声を上げる。

レイは何やら首を傾げていた。

5人は集団に近づき

「おまえら、こんなとこで固まって何をしているんだ？」

「皆さん、こんにちは。」

「ふむ。なのはにフェイト、真名と千鶴と千雨に刹那は見知っておるが他は初めてじゃの。」

「そうじゃな、というか何を固まっておるんじゃ？」

「クンクン。この匂いは……」

声を掛けた。
ここに総勢１３人の美女、美少女が勢揃いした。

エヴァ－ｓ　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

エヴァ達の声になのは達、フェイト達は揃って振り向き

「エヴァちゃん、アリカさん達も。」

「エヴァ♪相変わらず可愛いなぁ～」

「あら、こんにちは。」

「あわわ、何？何なの！？この美女、美少女軍団は。」

「こんにちはアリカさん、テオドラさんにレイ。」

「どうも。」

「アリカさん達は買い物帰り……というか買い出しかい？」

「えと（汗。初めまして。」

なのは、フェイト、千鶴、夏美、千雨、刹那、真名、アキラが口々に挨拶をしだす。約１名は混乱しているが。

なのはが改めてエヴァ達に現状を説明して、アキラがようやく全員に話そうとした時に

「クンクン……やはり。この人からマスターの匂いがします。」

レイがおもむろにアキラに近づきそんな事を発言する。
嫁'ｓ達は一様に顔を強ばらせ、千雨、千鶴、刹那はレイが霞の事をマスターと呼んでいるのを知っているので「ん?」という顔。
夏美は全くわからなかった。
そしてアキラは

「えっ?えっ?」

困惑気味。
なのはがアキラに聞く。

「えと大河内さん。前髪がこんな風に長くて目が隠れていて、更に眼鏡をかけた地味な感じの男の人って知ってる?」

「えっ、うん。その人なら「（ガチャッ。チリ～ン。」……えっ?」

なのはの問いにアキラが答えようとしたら美容院の扉が開き……元凶の男が出てきた。

「いや～、サッパリした。あっ、アキラ。ありがとな、店教えてもらって……なにしてんの、なのは?あれ?フェイトに千鶴、エヴァ、千雨、真名に茶々丸、刹那にアリカにテオ、レイまで。そっちの可愛い女の子は初めまして～。」

「……えっ？／／」

「「なっ！！？」」

「あらあら、もしかして……／／／」

「／／／まさか……。」

「／／／その顔は……」

「／／ふわぁ～。」

アキラはわからなかった。
なのは、フェイト、アリカは「何で！？」と言った感じの叫び。
千鶴、千雨、刹那は少し見惚れながら思い至ったような声。
夏美は純粋に感嘆していた。
続いて

「／／／……（パクパク」

「／／／これはまた、見違えるというか……もはや別人だね。」

「／／／（カシャッ、カシャッ、ジィー。」

「／／／ああ、神々し過ぎます♪」

何気に初めて見るエヴァは口を開閉しながら霞を指差し驚愕。

真名も同じく初めて見る霞の素顔に見惚れながら感想を言う。
茶々丸は撮影、撮影、撮影、保存、保存、保存に大忙し。
レイはもう霞を神扱い。
最後に

「／／／おぉ～霞～、相変わらず格好綺麗じゃな～。惚れ直したぞ～♪」

テオドラが元凶の名前を呼びながら感想を言う。
瞬間

「「「何で切ってるの（おるのじゃ）ーーーーーー！！！！！」」」

なのはとフェイトとアリカの叫び声。

「やはり霞さんでしたか。」千鶴

「顔のラインは整ってるなと思ったけど、ここまでとは」千雨

「かーくん……かっこええ～」刹那

「ほんとに……霞さん？」アキラ

「うぅ～、場違いだよ～（泣）」夏美

「誰だ、あれは……」エヴァ

「いや、エヴァンジェリン。現実を見ろ。」真名

「（ジィー。カシャッ、カシャッ。」茶々丸

「正に神。マスターは私の神。流石過ぎて私は（略）」レイ

「レイよ。鼻から愛が出ておるぞ～。」テオ

この場を一言で現すなら……カオスであった（笑）。

その他ｓｉｄｅ

美容院内

「店長……店の前の集団……どうしますか？」

「……／／／／はぁ。眼福だったわぁ。」

「／／ですよね！？店長！あんな美青年、見たことないですよ！！」

「髪の毛もサラサラだったよね～」

「店の前にいる女の子達もクオリティ高過ぎない？」

「ケッ、リア充が……けどあの男になら、俺も……／／／」

「……もういいや。私も観賞しとこ。」

店内もカオスになっていた。

続く……たぶん。

レイ～、アキラ～、そしてカオス盛り合わせ～（後書き）

女性陣のエンカウント率が高過ぎるのはご都合主義です。
そして、エヴァ・真名・茶々丸・レイは何気に霞の素顔を見てないんですよね～。
表記した話が無かった（恐らく）のでついでとばかりに加えました。

さて、これで後はフラグ回収していくだけだ。

次の投稿は早ければ今日中にします。

嫁'ｓの甘い話を期待した方々、申し訳ありませんｍ（＿＿）ｍ

しかし現在の原作でラブ臭増量中らしいので負けずにこちらもラブ臭を増量したいです。
今週のマガジンの千鶴を見て千鶴のラブ臭を無性に書きたくなった作者は間違っていない筈だ。

とにかく次回もまたよろしく～

俺は無実だ！？（前書き）

前回の続きです。
あまり面白くない……です。

そして作中で行われている役名とかは適当に書いてますので、間違っている所もあります。
それについて詳しい方々は気にせずお読み下さい。

すいません

俺は無実だ！？

「では今から裁判を始めます。」

なのはが厳かに言う。

両脇には金髪美少女フェイトに同じく金髪美女アリカが佇んでいた。

3人の前には

「あの……何で俺は縛られているんですか～？（汗」

縄でぐるぐる巻きにされている霞が転がされていた。

「検察にはエヴァンジェリンさん、お願いします。」

なのはは霞の言葉を無視して進める。

「あ、ああ。わかった。」

なのは達3人の雰囲気に少し引き気味のエヴァ。

霞達から少し離れた席には傍聴席と書かれた札が建てられ

「あらあら、何か楽しそうね～♪」千鶴

「いや、ちづ姉。全然、楽しい雰囲気じゃないから。」夏美

「あの、えと（オロオロ。」アキラ

「……なあ帰っていいか」千雨

「長谷川さん、無理です。出入り口を龍宮が押さえてます。……というか私も正直帰りたいです。」刹那

5人がいた。

なのはは気にせず進める。

「被告人の弁護にはレイさんが務めます。お願いします。」

「わかりました。微力ながら務めさせてもらいます。」

呼ばれたレイがお辞儀をしながら答える。

「検察のエヴァンジェリンさんの補佐に茶々丸さん、弁護の補佐にテオドラさん、両名が付きます。それと被告人が逃げてしまわないように警備担当には真名さんが務めます。お願いします。」

「よろしくお願いします。」茶々丸

「了解じゃ。」テオドラ

「了解。」真名

「それでは裁判を始めます。……判決、死刑「ちょっと待てーーーーー（泣）！！」……チッ。何ですか？」

霞の抗議になのはは舌打ちしながら聞き返す。

「いきなり死刑って何でだよ!?というか裁判される意味も分かんない!!俺は何もしてないじゃん!!」

訴える霞。
それを聞いたなのは、フェイト、アリカはピクリと眉を動かし

「何も…」

「してない……」

「じゃと…?」

実に息のあった発言。
霞は怯む。
そこでなのはは

「エヴァンジェリンさん。お願いします。」

「……ああ～、何だ。えと、霞が悪い……うん、霞が悪い。」

「素晴らしい意見ありがとうございました。判決、死k「おかしいって!?違うじゃん!!それに今のエヴァの発言って全く根拠無いよね!!そこのエターナルロリータ!!もっと的確な発言しやがれ、バカ!?」「なっ!?誰がエターナルロリータだ!!それにおまえの方がバカじゃないか!このバカスミ!!」「てめっ!?バカと霞をくっつけやがったな!!キティなんて可愛らしい名前をつけてやがる癖に!」「キティ言うな!!」（カンカン。2人共、静粛にしなさい。」

言い争う霞とエヴァはなのはの言葉に黙る。

お互いウゥ～と唸り合いながら。
その頃、傍聴席では
「エヴァンジェリンさん、可愛いわ～♪」千鶴
「あんなエヴァちゃん初めて見た～。」夏美
「っていうか、これ裁判というより、もうただの吊し上げだろ。」
千雨
「ですよね。どう発言しても結果は決まりきってる感がします。」
刹那
「あの、止めなくていいのかな。」アキラ
アキラ以外はもう観客として見る態勢になっていた。

「それでは弁護人。何か弁護する事はありますか？」
なのはがそう言うとレイが立ち上がり
「はい。それでは発言します。マスターは……最高です。
以上。」
座るレイ。
「わかりまし「だから待とうよ！今の弁護っておかしいよね！？明らかに弁護じゃなかったじゃん！？ていうか、レイ！おまえ、ちゃんと弁護する気ないだろ！！」「何を言うのですか、マスター。私

は常にマスターの味方です。先の発言は全ての意味合いを込めた一言なのです。なのは様もわかってくださったじゃないですか。」「いやいや、わかってないから。今のなのは達はそんな優しくないから。どっちかっていうとまお……ゲフン。何でもないです。」……続きが非常に気になる発言でしたが、それは後で聞きましょう（もとい問い詰めましょう）。」

最後の口に出してないなのはの言葉は残念な事に霞には伝わってしまった。
青ざめる霞。
しかし無情にも裁判?は進行する。

「というか面倒くさいのでひとまず霞くんの死刑を執行して、みんなでお茶にしようか。」

「「「「賛成」」」」

なのはの言葉に嫁'ｓは声を合わせる。
霞は

「何だそりゃ!?だからなんで死刑執行すんのさ!!クッ、こんな時だけ一致団結しやがって。こうなりゃ……助けてくれ!千雨、刹那、アキラ!?」

霞が考えうる中で良心的存在である3人に助けを求めた。
だが

「……ごめん、霞さん。高町達が怖い目で睨んできてるから無理だ。」千雨

「……（サッ。」同意見の刹那

「あの……ヒッ、何でもない！？」アキラ

アキラのみ助けようとしたがなのは達の一睨みで竦み上がり諦めた。
霞は絶望した。
そして

「さぁ、霞くん♪」

「自分がした罪の重さを」

「思い知るがよいぞ。」

なのは、フェイト、アリカがそう言いながら霞を引きずり奥へと消えていく。
霞は

「ただ髪を切っただけなのにｏｒｚ」

と。
それを見送った者達の中、千雨が

「なあテオドラさん。あれ……いいのか？」

「よいよい。お主らは気にしなくてよいぞ。さて、皆の注文を聞こうかの。レイ、手伝ってくれ。」

「はい。」

テオドラがそう言いエプロンを羽織りながら厨房へ向かう。
レイは皆の注文を聞き始めた。

少し時間が経ち、全員が霞の店内に揃った。

「はあ、酷い目にあった。」

「霞が悪い。主が妾達の約束を守らずに無断で散髪するから悪いのじゃ。」

霞の一言にアリカがむくれながら言う。
それを聞きテオドラは笑いながら

「ははは、アリカも勘弁してやったら良いのに。それに妾は今の霞の方が好きじゃぞ。」

「それは…妾も同じじゃが……これだと悪い虫が……（ブツブツ。」

アリカはテオドラの言葉に同意しつつもブツブツと小さく文句を言う。
レイは言わずもがな霞をひたすら見続けている。
そして

「そんな事があったんだ。だから大河内さんは霞くんと……。」

「私と殆ど同じね～。」

「えっ!?ちづ姉も絡まれた事があるの!!」

「那波もなんだ。」

なのは、千鶴、夏美、アキラが会話している。
隣のテーブルでは

「霞はまた……（呆）。」

「フェイトさん。もう諦めた方がいいんじゃないかな?」

「だな。霞さんはトラブル体質だし。……ふぅ、旨いな。」

「あ、これ美味しい。」

フェイト、真名、千雨、刹那がそれぞれ会話?をしている。
そしてカウンター席では

「……はぁ、ここも騒がしくなったか。」

「マスター……本音は皆さんと一緒で嬉しいんですね。……ツンデレ乙です。」

「ボケロボ……巻くぞ。」

エヴァと茶々丸が何やら漫才をしていた。
霞はふと思い出したかのように顔を上げ

「そうだ。お～い、千鶴。ちょいと聞きたい事があるんだが……。」

千鶴に声を掛ける。
千鶴は霞に顔を向け
返事をする

「はい？何ですか？」

「今度あの幼稚園に行くのはいつだ？」

「次は……来週の土曜ですけど……それが？」

「そっか。なら幼稚園に行く前にここに寄りな。あの子供達にケーキを作っとくから。」

と霞は言う。
千鶴はそれを聞き

「あの、ありがたい事ではあるんですが……いいんですか？」

尋ねる。
すると側にいたアリカがそれに答えた。

「よい、千鶴。霞は平日の昼間に件の幼稚園に顔を出しておるようでな。その際、子供達と約束したそうじゃ。じゃから主は気にする必要はないぞ。遠慮なく持っていけ。」

続いてテオドラが

「うむ。あそこに行って帰ってきた霞は泥だらけで帰ってくるからの～。どこに行ってきたのかすぐに解るわ。初めは少し驚いたが。」

アリカとテオドラの言葉に千鶴は少し驚いたもののすぐ笑顔になり

「はい♪では遠慮なく。というか、あの子達が最近「大きいお兄ちゃんが出来た」と言ってたのは霞さんだったんですね。」

それを聞いた霞は苦笑しながら返事をした。

横で聞いていた嫁'ｓは

「霞くんは結構子供と遊ぶのが好きだからね～。」

「そうだね。悪戯好きな所とか馬が合いそうだよね。」

「霞さんらしいね。」

「霞様の魅力の1つですね。流石です。」

「マスター、素晴らしいです。」

と皮切りに言う。

そして

「精神年齢が同じだからだろう。ガキだな霞は（笑）」

エヴァがニヤニヤしながら言った。

霞は少しカチンと来たのか

「エヴァも精神年齢低いだろが。知ってるぞ。少し前にホラー映画を自宅で見た後、夜に怖くてなかなか寝付けなかったんだってな。……プッ、情けな。」

「ッッッ!?貴様!何故それを!!茶々丸!おまえか!?」

「……いえ、私ではありません。」

「じゃあ誰がこいつに「チャチャゼロだ」あいつかーーーー（怒）」

エヴァは叫ぶ。
しかし霞は止まらない。

「しかも寝付けないからって自分のベッドの中に「それ以上喋ると殺すぞ!?」わかった、わかった。……寝言で「うぅ、霞ィ～」なんて言ってた事は内緒にしてやるから。」

「そんな事は言って「マスター…残念ながら……」っっ!?馬鹿な!というか霞、ないｓ「何だ?それともこの前、通販で下着を買った事を話題にした方が良かったか?」それは!?またチャチャゼロ「私ですね。」おまえか!?このボケｒ「……寄せ上げブラ……野望叶わずか……フッ、悲しいな」ッッッ!?そん「霞様、訂正してください」茶々丸?何を?「マスターは……装着だけは出来ました。」「馬鹿な!?……まさか、オーダーメイドですか（ゴクリ。」「ｙｅｓ。……寄せは……できませんでしたが（哀）」余計な事を言うなァーー!!」

霞によるエヴァ弄りが始まり慣れている面々は溜め息を。
初めて見る者達は

「仲が良いわね～。」千鶴

「まああれは仲が良い……のかな?エヴァちゃんが一方的にやられ

てるんだけど……。」夏美

「あぁ、マクダウェルも霞さんの的なんだ。私だけじゃないんだな。」千雨

「（かーくん、変わってないんだ……あれ？ということは私も昔みたいに……（汗））」刹那

それぞれが感想を。

霞の店内はこうして終始賑やかな状態で1日を終えた。

おまけ

「これは……／／／」

「うわぁ、凄い美青年ですね～／／」

超と葉加瀬が茶々丸のメンテナンス中にとあるフォルダを見掛けて開いてみたら、それには霞の髪を切った状態の写真が様々な角度で撮られていた。

……茶々丸、夢中で撮っていたためロックを掛け忘れていた。

おまけ2

「そういえば……霞よ。何故、散髪しようと思ったのじゃ？」

「ん？ああ、子供達と遊んでると前髪とかを引っ張られるんだよ。だからな。」

「なのは達に止められてたのは忘れておったのか？」

「いや……事情を話せば許してくれるだろうと……甘い考えだったｏｒｚ」

「成る程のぅ」

報・連・相は大切に。
今回の教訓です♪

俺は無実だ！？（後書き）

ふぅ……最近思うんです。

……霞がハッちゃけてないなぁと。

そろそろ何か刺激的な話を入れた方がいいのかと。

そして……ラブ臭を作ろうとしても何故か笑いの方向に持っていってしまう自分が嫌だ。

というわけで

次回はあまりスポットをあてられていない木乃香の話にします。

時間も少し進めますよ～。

では、また

今日か明日にでも～

着物→悪代官プレイ……そう思う俺は汚れてる（前書き）

木乃香お見合い編です。
これでネギと木乃香のお見合い騒動が無くなりました。

後、千鶴の話し方に違和感が出ていると思います。
なるべく口調を近づけるように努力します。

では始まります

着物→悪代官プレイ……そう思う俺は汚れてる

時は少し経ち
あの散髪事件からは
なのはとフェイトの２－Ａについての報告を聞いたり
ネギが来てからちょくちょく来るようになった千雨の話相手をしたり
刹那にはたまに模擬戦（外、さらには木刀で）の相手をしたり
千鶴と一緒に幼稚園の子供達と遊んだり
アキラも店を教えてからはたまに来たりする。
刀子さんは夜の警備で会ったり、来店しにきたりなど見た感じ普通に生活していた。（チラチラと霞に視線を送っていたが……）
超とは超包子に行って飯を食べながら超をからかったりして“今は”仲良くしている。
まあ霞にしては概ね平穏な時間を過ごしている。
そして三学期が終わり、学生達が春休みという期間に突入した。
そのとある１日
学園長から急に来て欲しいと言われた霞は

（まあ、今日は暇だったからいいか）

と思いながら学園長室へ向かった。
この選択肢が間違いだったと後に霞は語る。

「爺さん、来たぞ～。」

バンッ！？

学園長の扉を開け、入室する。
学園長は霞だからと諦めているのかあまり気にせず

「すまないのぅ、霞殿。急に呼び出してしまって。」

「構わんよ。他の家族はエヴァの家に遊びに行ってて暇だったしな。
所で、何の用だ？」

「フォッフォッフォッ……本当になのは殿達ってついてきてないじゃろな？」

学園長がいきなり小声で聞いてきた。
霞は訝しげな顔をしつつ頷く。
学園長は神妙な顔をしながら

「……霞殿、実はの～……その～……お見合いしてくれんかのぅ。」

と言い出した。
霞は

（何言ってんだ、この爺。……いや、待てよ。確か爺って木乃香にやたらお見合いをセッティングしてたって聞いてたな。それか？でも、爺には確か……）

そこまで思考して聞いてみる。

「確か…あんたには俺が結婚というか嫁さんがいる事を教えてたよな？というか知ってるよな？
何故、俺に振ってきた？」

この言葉に学園長が意外な言葉を出してきた。

「いやのぅ、儂のミスといえばミスなんじゃが……木乃香が霞殿を指名したのじゃよ。」

「……はへっ？」

一瞬、意味が分からなかった霞は変な奇声を上げた。
学園長は説明しだす。

・木乃香にお見合いの写真を見せた。
・木乃香は建前上、一通り見た後に嫌だと言おうとした。
・すると木乃香の動きが止まった。
・そのまま写真を手に取り上げジッと見る木乃香。
・今までにない反応とお見合い写真じゃない普通の写真が入っていた事に学園長はおや？と。
・その時、木乃香が写真を突き出し、この人とならやると言い出した。
・学園長はそれを見て……狼狽した。
・写真は……何かの手違いか霞の写真だった。
・学園長は木乃香に霞が妻帯者で間違って写真が入っていたと説明した。
・木乃香はそれを聞いても何故か引き下がらず、させてくれないなら学園長とは二度と話さないと脅してきた。
・学園長は相手に聞いてみると渋々ながら了承した。
・現在に至る

「なんじゃよ。木乃香が何故あんなに強引だったのかはわからんのじゃが……引き受けてくれんか？お見合いに出てくれるだけでいい

んじゃ。このままじゃと儂……木乃香に無視されてしまうｏｒｚ」

凹んでいる学園長。

それを見た霞はキモいと思いながら考え……学園長に告げる。

「まあ…出るぐらいならいいぞ。ただしこっちも条件がある。」

霞の言葉に希望を持った学園長が顔を上げ聞く姿勢に入った。

「金輪際、木乃香にお見合いの話を持っていくな。ただ、それだけだ。それを了承するなら出てやるよ。」

「ＯＫじゃ。約束しよう。」

即答だった。

それほど木乃香に嫌われたくなかったのか…と思わせるぐらい速かった。

ならお見合いをさせるなと突っ込みたいのは我慢してください。

さておき

「で、日程は？」

霞が聞く。

学園長は……視線を逸らしつつ

「……今日じゃ。……すみません。」

と宣った。

霞はそれに呆れつつ、溜め息を吐き

「まあ、いいか。とりあえずそれなりの格好を「大丈夫じゃ、スーツはこちらで用意しよう。」……わかったよ。なら行くか。」

立ち上がる霞。
学園長は何とかなったと安堵の息を吐き、霞と共に歩き出す。

バタン。
2人は学園長室を後にした。

どこかのそれなりな高級料理店

着物を着た大和撫子を体現しているような美少女と普段着慣れないスーツを着た美青年こと霞が向かい合って座っていた。
木乃香は

「（ニコニコ。」

何やら満面の笑顔。
それを見ている霞は……冷や汗ダラダラ。
何故なら

「失礼します。料理をお持ち致しました。」

と着物を着た店員さんが入ってきた。

その店員さんは……栗色の長い髪をアップにして結い上げ、ピンクの着物を着た二十歳ぐらいの美女。
……なのはだった。
ちなみに店に入ってこの部屋まで案内した店員は……美しい金の髪を結い上げ黄色の着物を着た美女……フェイトだった。
フェイトを見た瞬間、霞は石化。
学園長も同じく。
学園長はそのまま別室に連れて行かれ、霞は木乃香が待機している部屋へと案内された。
ちなみに案内されている最中、両者の間に会話はなかった。
霞はそれが恐ろしかった。
なのはが料理を2人に配膳した後

「それでは失礼します。何かあればお呼び下さい。すぐに（…）参りますので。」

「はい。ありがとうございます～。」

「……はい、ありがとうございます。……絶対に呼ばないけどね（ボソリ。」

木乃香と霞はお礼を言う。霞は小さい声で付け足したが……それがいけなかった。

「あら？お客様、背中に埃が……（ミキィ。」

なのはが霞の後ろに回り……点穴を渾身の力で突いてきた。
激痛が走る点穴を。

「ッッッッ！？！！！？……（泣）ありが…とう…ございます。」

それに何とか堪えつつ言葉を捻り出した霞。

「いえ、お気になさらず。それでは。『霞くん。帰ったら……楽しいＯＨＡＮＡＳＨＩが待ってるからね。くふふふっ♪』」

退室する際に、なのはからの念話が届いた。

……ｏｒｚ

もはや退路は無いと悟った霞は最後に目の前に居る美少女との会話を楽しんでから逝こうと思った。

両者のお見合いが開始される。

……の前に

別室に行った学園長は……

「ふごぉ！！ふぐっ！！」

猿轡を咬まされ、簀巻き状態にされた学園長……ここに裁判という名だけのリンチが始まる。

学園長は視線で問いかける。

〈何故！？今日の事が！！〉

それを読み取ったフェイトは

「以前、エヴァの封印解除の件の時に私も居たんです。その際、部屋にこっそりと盗聴器を仕掛けてたんですよ。」

ニコリと微笑む。
普通なら見惚れてしまうが、学園長からしたら死神の微笑と同義。
恐怖しか感じない。
続いて

「そして、その盗聴器は随時茶々丸ちゃんが受信、保存していてね。あ、安心して下さい。基本的に情報は破棄してます。ただ……今日の件は見逃せないカナ（ニコリ。」

なのはが眩しい笑顔で学園長に告げる。
これもまた普通なら見惚れるが……学園長にとっては死神の微笑にしか見えない。

「ふぉごっ!?ふぐぅっ!!〈違うんじゃ!!誤解じゃ!?儂だって木乃香に説得はしたんじゃ!?〉」

必死に弁解する。
涙目で見てくる簀巻き状態のぬらりひょん……正直キモい。
学園長の弁解を理解した……金の髪と神秘的なオッドアイを持つ美女ことアリカが口元を歪めながら告げる。

「翁よ。そなたが説得したとかはもう良い。結果的にお見合いは決行された。故に……お主の末路は決まったのじゃ。」

学園長は血の気が下がった。
だがまだ続く。
フェイト、アリカと同じ金の髪を靡かせる美幼女ことエヴァが学園長を踏みつけながら告げる。

「ジジイ。私の夫にお見合いを持ちかけた罪。覚悟は出来ているん

だろうなぁ（ニヤリ。」

真祖の吸血姫の本領発揮……こんなとこで発揮すらなと言いたいが、今の学園長には効果的。
学園長は無駄とは思いつつエヴァに懇願の視線を向けたが

「ん？どうした……ああ、そうか。早く断罪して欲しいか。ジジイはせっかちだなぁ。」

「ぅごぉっ！！〈ちゃうわい！そうじゃ！？念話で「学園長、部屋には私達が多重結界を展開しているので、御安心を♪」……ワシ、オワタ〉」

絶妙なタイミングでなのはが学園長に告げ、学園長は絶望の淵に潔く立った。
その時、部屋に入ってくる人物を見て学園長は驚いた後に、恨みがましい視線を送る。まるで〈裏切ったな！！〉と言わんばかりの……

「……皆さん、店の従業員の方々の避難は完了しました。……何で僕までｏｒｚ」

それはタカミチだった。
久しぶりに麻帆良に戻って休日を堪能しようとした矢先にいきなりなのはとフェイトが押し掛けてきて有無を言わさず拉致し、店に着いた瞬間にパシらされた。
抗議をしようとしたら2人の凄まじい睨みに一瞬で白旗を上げ、大人しく従った。……哀れ。

「むごぉっ！！ふぉぐっ！！ふがっ！！〈タカミチ君！！裏切った

な!?少しは助けようと思わんのか!!〉」

「というか出張明けの僕が何でこんな目にあったと思ってるんですか!!元凶は学園長でしょ!!僕の休みを返して下さいよ!!」

「ふんっ!!ふぐっふぉんっうごぉっ!!〈知らんわい!そもそもタカミチ君に休日なんていらないじゃろ!ワーカーホリックなんじゃから!〉」

タカミチと学園長が醜い争いをしていると

「「「黙れ」」」

「「「……。」」」

これぞ正に鶴の一声。

そこに

「皆様、会話が始まりました。」

静かに佇んでいた茶々丸が声を掛けた。

そして霞と木乃香の対話が開始された。

※霞達へリターン

霞は木乃香に一番聞きたかった事をまず聞いてみた。

「あ～、先に聞いときたいんだが……何で俺を指名したか聞いていいか?爺さん……あんた「木乃香って呼んでええよ～」……はい。

じゃあ木乃香の祖父から聞いたと思うんだけど、俺は妻帯者だぞ？普通は選んじゃダメだろ。」

これに対し木乃香は

「それについてはごめんなさい。ただ……何でかな～…お兄さん「霞でいい」わかったえ。霞さんと会わなあかんと思ったんやえ。それとウチも聞きたい事があったし。」

木乃香の言に霞は

（……認識阻害効いてるはずなのに……女の勘ってやつか？恐ろしい娘だ、木乃香（・―・；））

そう思いながら木乃香に先を促す。

「えっとな、霞さん。間違ってたら悪いんやけど去年の末に麻帆良でウチと会わんかった？霞さんがタバコを落としてウチが拾ったんやけど……。」

霞はそれを聞き、別段隠す必要はないので頷いた。

「やっぱりや。でな聞きたい事ってな……別れる時にウチの名前呼んだやろ？あの時、名前なんて教えてなかった筈やのに何で知ってたんやろ？って思って。」

それを聞いた霞は表情はポーカーフェイス、内心では

（俺のバカァァ！！そういやあの時、少し焦ったから昔みたいに呼んじゃったんじゃねぇか！！？っていうか、それを気に留める木乃

香が何かコワいよーー！！）

頭を抱えゴロゴロと転がっていた。
霞は何とか言葉を紡ぎ出した。

「それは……アレだ。俺は麻帆良の美女、美少女の情報は網羅してるからだ。だから、木乃香の名前を知ってたんだ。それに俺はチェックした美女、美少女に関して名前で呼ぶことにしてるからな。」

どや顔する霞。
別室で聞いていた者は

（（（それ、ただのイタい子だ））））

とシンクロした。
しかし木乃香はジトッとした目で霞を見やり

「……何でやろ？霞さんが嘘吐いてるのがわかるんやけど……。」

と言う。
霞及び別室組は

（（（（鋭っ！？））））

シンクロ率１２０を超える驚愕の感想。
木乃香はジトーとした目で見続ける。
霞はポーカーフェイスを何とか崩さないようにしながら話題を変えようと何かを探した……その時

「そうだ!?木乃香にいい情報があるぞ!」

学園長との約束を思い出しそれを話題にする事にした。

木乃香は「ん?」と首を傾げる。

「爺さんとな、約束したんだよ。金輪際、木乃香にお見合い話を持ち掛けるなって。木乃香ってまだ１４歳だろ?まだまだ遊びたい盛りだろうから、お見合いなんてしたくないだろうなぁと思って爺さんを説得したんだ。だから、今日でお見合いなんてしなくなって良くなったからな。」

それを聞いた木乃香は嬉しそうな表情をして答える。

「ほんまっ!?ありがとうや、霞さん!お爺ちゃんのお見合い話って正直なところイヤやってんよ。やから、お見合い話の時はずっと逃げたりしてたんや。良かったぁ～、これで１つ肩の荷が降りた気分や～♪」

そんな木乃香を見て霞は苦笑する。

「だろうな。１４歳の身空でお見合いして結婚相手なんて決めたくない「あっ、それちゃうよ～」……へっ?」

木乃香の否定に霞は呆けた声を出す。

木乃香はそんな霞を見て笑いながら、自分の左手に着けている指輪（：）を愛おしそうに触りながら告げる。

「うちな～、ちっちゃい頃にある男の子と結婚の約束したんよ。子供同士の約束だって皆は笑うんやろうけど……ウチにとっては大事な約束。相手の子はもしかしたら忘れてるかも知れへん。それで

も……その男の子と再会して想いを伝えるまではウチはその子のお嫁さんなんよ。」

木乃香の嬉しそうで優しい声……同時に少し悲しい声。

霞は

「……もしその男の子が断ったら？」

「そん時はウチの初恋が終わって、新しいウチを始めるだけ。……それにな、ウチの勘なんやけど…かーくんは約束守ってくれるって思うんよ。だから…ちょっとだけ怖いけどそれ以上に再会したい気持ちがあるんえ！！」

花が咲いたような笑顔をする木乃香。

それを見た霞は

（……なのは達って…この会話、絶対聞いてるよね（冷汗。……後で言い訳を聞いてくれたら嬉しいんだけど……だって、この笑顔見たら否とは言えないんだよーーーー！！）

ちなみに別室ではフェイトが他の者に当時の事を説明したので木乃香の言う相手が霞だと理解した。

霞は

「木乃香……いきなりだけど、木乃香って占い研究部……か？それに入ってるんだって？」

唐突に切り出す。

木乃香は

「ふぇっ？うん、そうやけど……それがどうしたん？」

「俺も多少は占いが出来てな。木乃香を占ってやるよ。結構当たるんだぜ。」

霞がイタズラする時のような笑顔を木乃香に見せる。
木乃香はキョトンとした後、笑い

「あはは、なら占ってもらおかな。」

とお願いする。
霞は木乃香の手をとり見やる。
この時、木乃香の顔が少しばかり赤くなったのには気づかなかった。
霞はジッと見た後、木乃香の瞳をジッと見る。
……端から見ると見つめ合う恋人のようだ。
さておき
この占いは単なる形だけ。
霞は占いなんて出来ない。
だから木乃香に告げる託というのは少し先の……霞が実現しようとする事象。

「まずは……木乃香の周り。様々な事件が少し先の未来の木乃香に降りかかる。怖い思いをするだろう。……だけどその時、幼き頃に供にいた親友達が木乃香を守るだろう。それは白き翼を持つ天使のような少女。次にこの世で5指に入る程の力強い金色の姫。最後に……この世界で最強に等しい存在もまた木乃香を守護をする。
そして、その事件を乗り越えた後、親友との絆が蘇る。同時に再会する親友である金色の姫。そして……約束を守る為に木乃香の下へ訪れる男の子。

……そう出てるな。」

霞は破顔一笑し木乃香に顔を向ける。
木乃香は

「……。」

何か呆けている。
霞は「あれ？何で？」といった表情。
木乃香は

木乃香ｓｉｄｅ

霞さんが占いをしてくれる言うからしてもらった。
おもむろに手をとりウチの手を見る。
……少し照れるなぁ～、霞さんめちゃくちゃかっこええし。
その後、霞さんがウチの瞳を視てきた。
……あかん、恥ずかしくて視線逸らしそうや／／／。
だけど
霞さんの言葉にウチは固まる事になった。

「まずは……木乃香の周り。様々な事件が少し先の未来の木乃香に降りかかる。怖い思いをするだろう。……だけどその時、幼き頃に供にいた親友達が木乃香を守るだろう。それは白き翼を持つ天使のような少女。次にこの世で５指に入る程の力強い金色の姫。最後に……この世界で最強に等しい存在もまた木乃香を守護をする。

そして、その事件を乗り越えた後、親友との絆が蘇る。同時に再会する親友である金色の姫。そして……約束を守る為に木乃香の下へ訪れる男の子。

……そう出てるな。」

事件って言うのが何やわからんけど……幼き頃の親友って言ったら……まずはせっちゃん。今は疎遠やけどウチは親友やって自信を持って言う。次は…今はどこにいるかわからんけどふぇーちゃんや。綺麗な金色の髪と綺麗なルビーのような瞳が印象的な女の子。もう1人、ウチの想い人で助けてもらった事もあるウチの中で世界で一番格好ええかーくんや。白き翼やら姫やら最強ってのがようわからんけど…何となく白き翼＝せっちゃん、金色の姫＝ふぇーちゃん、最強に等しい＝かーくん、ってのが当てはまるような気がする。そして最後の方、絆が蘇る……占いやって分かってても嬉しい言葉。希望を持てる言葉。せっちゃんと仲直りできて、かーくんやふぇーちゃんと会える。

そんな未来を想像したウチは……

木乃香ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

沈黙していた木乃香だったが

「……ハァ。……ほら。」

霞は溜め息を吐き、ハンカチを取り出す。

霞の行動に木乃香は意味が解らなかったが……すぐに解った。

「あっ……あはは、霞さんごめんな。みっともない所を見せて。」

涙が出ていたのだ。

温かい未来を想像しあまりに嬉しくて知らず知らず涙が溢れたのだ。

「別にいい。理由も聞かん。ほれ。」

なかなか受け取らない木乃香に業を煮やした霞は身を乗り出し、持っていたハンカチで木乃香の涙を拭う。

「あ～、化粧が落ちるやん～。」

「アホか。化粧が落ちたぐらいで文句を言いなさんな。それに化粧が落ちたぐらいじゃ木乃香の可愛いさに変化はない。ほれ、終わった。」

霞は元の位置に戻る。

木乃香は可愛いと言われ顔を赤くしたが、何か子供扱いされた気がして腹が立ったのか頬をプクッと膨らまして拗ねていた。

「む～～、霞さんは意外にイジメっ子や。奥さんも苦労してそうやね。」

霞は苦笑しながら木乃香に答えてやった。

「ははは、俺の奥さんは耐性が出来てるのか上手く交わすんだ。逆に俺がイジメられてるぞ。まっ、そんな彼女（達）にベタ惚れしてるから何も文句言えないがな。」

この時、別室組の嫁達は霞のベタ惚れしている発言に身をくねらせ

たり照れていたりしていた事を追記しておく。

「尻に敷かれてるんやね、霞さんは。……（あれ？何やムカムカしてきた）」

「……（笑顔なんだけど……黒いオーラが滲んでる……何で（汗））」

無意識で霞と理解して嫉妬をしてるのか、木乃香から黒いオーラが滲み出て、霞は狼狽する。

「それより！？もう結構な時間が経ったな。そろそろ解散するか。途中まで送るぞ、木乃香。」

「……うん、そやね。今日の所は帰ろか。……今更なんやけど……敬語使った方が良かった？」

「いい、いい。敬語使われるのは慣れていないからな。気にしなくていい。」

「そうなんや。……ふふっ、やっぱり霞さんに会って正解やったかな。今日は凄く楽しかったえ。」

「それは光栄だな。木乃香的には合格ラインに達していたかな？」

「もちろんや♪かーくんがおらんかったら、たぶん霞さんに惚れたんちゃうかっていうぐらいやで～。」

「……反応に困るな、それは。」

軽快なやり取りで料理店を出る2人。
……2人の未来はきっと今の雰囲気のように明るいものであろう。

お見合い編……ひとまず終了。

おまけ
霞宅

「さて、家族裁判を始めます。」なのは

「いやね、解っていたよ。無事に終わるなんて1ミクロンも思ってなかったから。……ただ、あそこにいる黒い物体×2をまず何か教えて。」霞

「何言ってるの?霞?」フェイト

「どう見ても翁とタカミチではないか。」アリカ

「視力が落ちたか、もしくはボケたのか?霞。」エヴァ

「……もういいです。(あれが一寸先の未来なんですね、解り

ます（泣）」霞

「それでは判決を下します。」なのは

「（フッ、諦めた俺にもう怖いモノなど……あるけど、ばっち来いやーーー）」

「「「今回は無罪とします。」」」嫁's

「……Ｗｈａｔ？」

「ただ条件があるよ。」なのは

「ちゃんと木乃香との約束を守る事。」フェイト

「それを守ると言うならば……今回は許してやろう。」アリカ

「あっ、はい。勿論守ります。……へっ？」霞

「はい、みんな解散だよ～」なのは

「エヴァ～、一緒に寝よう～♪」フェイト

「嫌だ。お前と寝ると抱きついてくるから嫌だ。」エヴァ

「妾も寝るか。」アリカ

「……マジで。あのなのはが……率先して許した…だと。これは夢か？なのはだぞ？あの魔王よりも魔王らしいな

のはが？ＯＨＡＮＡＳＨＩと説いてスターなライトでブレイクしちゃうなのはが？……逆に不気ｍ「へぇ～……霞くんの中の私はそんな感じなんだぁ。」……アラ、イヤダ。ナノハ様、マダイラッシャッタンデスネ（。∀ ；ノ）ノ」

「今日は霞くんと一緒に寝たくなったから戻ってきたんだよ。……正解だったね♪」

「……デスネー（泣）。」

「じゃあ、寝る前に少し……頭…ヒヤソウカ。」

「口は災いの元。……身に染みた思いです。」

「スター・ライト・ブレイカァァーーーー！！！！」

「所詮はこんなオチだろうよォォーーーーー……。」

「のうタカミチくんや。」

「……はい？」

「儂ら……放置なのかの？」

「僕なんて……今回、完全に無関係ですよ（泣）」

「「ハァ」」

おわり

着物→悪代官プレイ……そう思う俺は汚れてる（後書き）

学園長とタカミチは霞と木乃香のやり取りの際に八つ当たりでヤられました。
大丈夫。彼らはオチ担当だから。

それとどっかで霞と男キャラ（モブ共）を絡ませる話を作ろうかと思います。
なので、その時は生温かい気持ちで見守って下さい。

追記しますが、この話の最後の霞はＯＳＨＩＯＫＩを喰らった後に、しっかりなのはとニャンニャンハァハァしてます。

後は～……また思い出したら前書きか後書きに記します。

次回はようやく桜通り吸血鬼編。
少し原作内容を変えます。
そして当作品のネギっ子がようやく現れます。
長かった……ＳＨＩＫＡＳＨＩ駄菓子菓子……この作品に於いて所詮ネギもオチ担当になるんだよ（笑）

それでは再見♪

エヴァの説得？お安い御用だ！！（前書き）

とりあえず前兆編

ついでに1話が出来次第
随時更新します。
吸血鬼編を纏めて出そうと思いましたが、時間がかかる上に明日までに仕上がる気配が無いためです。
ですので吸血鬼編は途中で途切れるかも……

それよりキティちゃんの魅力タップリのストーリーの開幕で～す♪

エヴァの説得？お安い御用だ！！

春休み後半

学園長室にて
霞はエヴァと共にソファーに座っていた。
向かいには学園長。
後ろに待機するのはタカミチ。
霞はこの時期にエヴァが呼ばれた事に関して1つ心当たりがあった。
それは原作でいう

《桜通り吸血鬼事件》

である。
ただエヴァがあれを行ったのは呪いの解呪のためだから、今世界に至ってはエヴァは断るだろうなぁ～と霞は考えていたらいつの間にか話し合いが始まっていた。

「要するにネギ君とエヴァを対決させたいんじゃよ。引き受けてくれんか？エヴァ。」

「断る。呪いがあった頃ならまだ受けていただろうが、今の私には全く関係ない。受けるメリットもない。だから嫌だ。」

案の定であった。
タカミチも加わりエヴァの説得にあたっているが、エヴァは拒否の一点張り。
すると学園長は矛先をエヴァから霞へと向けてこようとしたので

「断る。」

「……何も言ってないんじゃが……。」

「エヴァを説得して欲しい視線を向けてきたから拒否っただけだ。悪いか？」

それを聞いた学園長はうなだれる。

霞は聞いてみた。

「というか何で俺も呼ばれたんだ？エヴァの説得に加わるなんざ間違いなく断るのはわかってただろうが。もしかして、解っていなかったのか？爺さん。」

その質問の答えには学園長の変わりにタカミチが答えた。

「僕が提案したんですよ、霞さん。エヴァに頼み込むなら霞さんにも話を通しておかないと……あなた暴れそうじゃないですか。」

「俺の嫁に変な依頼すんな。」って感じで。だから僕が学園長に進言したんですよ。学園長は最初、霞さんに黙ってエヴァに依頼しようとしたんですから。」

「はっ。それはタカミチに感謝するんだな、ジジイ。面白い話をしてやろう。以前、フェイトがナンパに会ったと聞いたこいつはな……そのナンパした男を見つけ出し、ボコボコにした後、世界樹の木に素っ裸で吊し上げたそうだ。ククク、なのは達がやり過ぎだと怒ったら霞は「俺の嫁に手を出そうとしたあいつが悪い！」の一点張りで言うことを聞かなかったみたいだぞ。

長くなったが、何が言いたいかと言うとな《私達に妙なチョッカイをかけると霞の琴線に触れる》ということだ。わかったか？」

これを聞いた学園長はタカミチの進言に従って良かったと安堵する。
タカミチは
「っていうか、それって霞さんだったんですか？あの男の人、もう麻帆良は歩けないとか言って引っ越したんですから。ちょっと可哀想でしたよ、全く。」
霞に文句を言う。
霞はどや顔をしながらタカミチに告げた。
「大丈夫だぜ、タカミチ。引っ越した先の街でも素っ裸の写真をバラまいてやったから、街中にな！どうよ？アフターケアも万全だろう。」
「「「……」」」
3人は流石に相手の男が可哀想になった。
妙な雰囲気になった学園長はゴホンと咳払いをした後、
「まあ仕方ないのぅ、こればか「あい、ちょっと待った。」ヒョッ？何じゃ？霞殿。」
「ん？」
「？」
学園長に待ったをかけた霞。
エヴァとタカミチは疑問に思った。
……同時に嫌な予感もした。
霞は学園長に聞く。

「確認したいんだが、まずは

1．現在、魔法学校を首席で卒業し魔法の秘匿のひの字も理解してないネギの鼻っ柱を折るため

2．ついでに魔法使いには良いやつしかいない等というネギの歪んだ考えの矯正のため

3．できれば凝り固まった“正義”思想を砕かせ柔軟な…例えば正議の反対は必ずしも悪ではないこと…思想も教えたいため

4．エヴァを選んだのはネギを程良く半殺しにする悪役に適しているため

……大雑把に分けるとこんなもんか。これらの理由で依頼したんだよな？」

「まあ……そうじゃの（半殺しなんて言ったかのぅ、儂？）」

「（ジジイは確か痛めつけると言っただけで……半殺しとは言ってなかったよな？）」

「（半殺し？学園長はそこまで言ってなかったような……？）」

学園長、エヴァ、タカミチはある単語において疑問を覚えたが、今は黙っておく事にした。

霞は気にせずに思考に耽る。

……

……

……

5分ぐらい経った後、霞は「よし」と言った後に学園長へ提案した。

「今から言う条件を飲むならエヴァの説得をしてやるぞ、爺さん。」

「ヒョッ!?本当か!!」

「なっ!!?」

「……（ああ、厄介な事になりそうだなぁ（泣））」

学園長とエヴァは驚き、タカミチは少しだけ胃が痛くなった。

構わず霞は告げる。

「条件は

《長谷川　千雨に魔法の事を教えるのを許可する》

これを飲めばエヴァの説得というかエヴァに依頼を受けさせてやる。」

それを聞いた学園長は何故その条件なのか理由を聞く。

霞は答える。

千雨の特異性と現在の情緒不安定さを。

幾ら霞が話し相手になってやっても認識のズレのストレスは完全には解消されない。

以前ならまだしも今はネギの魔法秘匿の緩さとネギの年齢で教師をするという事でストレスの溜まり具合が半端じゃない。

それが原因でいつ爆発するかわからない為、いっその事魔法をバラそうと考えた霞。
一応、管理の最高責任者の近衛ェ門に話しを通そうかと思ってた所で今回の話し。
エヴァ説得の代わりに条件として提案しようかと
霞はそう伝えた。
学園長とタカミチはそこまでの状態になってたとは思っていなかった。
故に

「あいわかった。それを飲もうではないか。」

「学園長!?いいんですか?」

「仕方なかろう、長谷川君がまさかそこまでの状態になっていて見過ごしてしまっていたのは儂らの責任なんじゃから。それと霞殿、長谷川君に魔法について教えた後はこちらが「なのはとフェイトがやる気満々なんですが……」……(フルフル。」↑勘弁してという思いで首を横に振る学園長

「……拒否したら2人の魔砲が零距離で炸裂するんだぜ?しかも、あの2人の魔砲は特殊でさ……どんなに強烈な一撃でも……死ねないんだ……解るか?要するに死ぬよりも苦しい且つ激しい地獄の痛みにのたうち回る結果になるんだぜ?……いっそのこと殺した方が相手の為になるとマジで思ったよ……アレは。」

何やら虚ろな感じの目をして語る霞。
学園長は想像して……震えだした。
タカミチは大戦時の噂を思い出した。

（……そういえば……なのはさん達の魔法を喰らった敵の人間は死にはしなかったけど……廃人一歩手前になったと聞いた事が……アレってマジだったんだ（冷汗。）

恐るべきは魔王と死神の夫婦コンビ。
学園長は即座にＯＫを出した。
懸命な判断である。
となると最後の問題は……

「霞、私は受けないぞ。幾らお前のたの「キ～ティ～ちゃ～ん、これ……何だろうね？」…み…といえ……ど……ッッ！？お前ソレは！！」

霞がエヴァの目の前に何やら写真を突き出す。
学園長とタカミチには見えないように。
霞はニヤニヤしながらフリフリとエヴァの前で写真を振る。

「いやいや、キティも可愛いよね～。まさかに「言うナァァァァァーーー。」……およ？盗られた。」

エヴァは神速と言うべき速さで写真を奪い取った後、ビリビリと破り去り隠滅と言わんばかりに燃やした。
ハァハァと大きく息を乱したエヴァは

「ふ……ふはは…アーッハッハッハッ！！油断大敵だぞ、霞！！これで私を脅迫するネタはなくなっ……た……。」

高笑いしながら振り向き……固まった。
何故なら

「ジャ～ン。まだまだあるから思う存分切ってくれてもいいヨン♪
どうぞ～（ポイッ」

霞は無造作に放り投げた……写真の束を……。
エヴァは狼狽しつつ

「ウァアアァーーーーー！！ちょっ！ジジイ！タカミチ！！見るな！絶対に見るな！！！見たら殺す！？殺すって言ったら殺すんだからなぁ！！！」

学園長とタカミチに忠告する。
2人は訳が分からないまま、とりあえず後ろを向く。
その状態になると当然、会話だけしか聞こえなくなる。

「キティちゃん……実はこんな物まであるんだけど……（ゴソゴソ。」

「ああ！？それ！私の……！？返せ！」

「いいぞ。コピーして大量に保存したから。」

「破棄しろ！？」

「いいけど……なのはとフェイトも大量に保存してたぞ。」

「ヌァアアアァーーー！！」

「引き受けてくれたら……交渉してやってもいいけど……どうする？ちゃんとこの（・・）写真も破棄してやろうではないか。」

「分かった！！引き受ける！！受けるからあの２人（・）にも破棄するように伝えろ！！！いいな！？」

「話が早くて助かるよ～、愛してるぜ～エヴァ～（スリスリ。」

「グヌヌッ……離せ。抱きつくな。頬を寄せるな。」

「はいはい。爺さん、タカミチ。エヴァは引き受けるってさ。っと、その前に《消えろ》。……もう振り向いていいぞ。」

霞の合図で２人は振り向いた。
霞はニヤニヤとした笑顔。エヴァは……ブスッと拗ねた顔。
若干涙目。
２人は何をしたらエヴァがあんな状態になるのか非常に気になったが……触れないようにした。

「ンン！？……じゃあ、ひとまず引き受けてくれる……でいいんじゃよね？……エヴァ？」

「……受ける（ボソッ。」

余りに低く小さい声で言うエヴァ。
学園長は「こらあかん」と考え

「なら一旦解散と言うことで……。後日、詳細を決めよう。きょ、今日はもうよいぞ。」

それを聞いた２人は了解と返事をして退室していった。
……

……

……

2人が出て行った数分後

「のう、タカミチくん。」

「……はい。何でしょう？」

「霞殿に説得させたの……間違いじゃったかな？」

「……半々ですね。霞さんに任せたからアレだけで済んだか、霞さんに任せたからあそこまで発展したのか……。」

「……ちなみにタカミチくんはどっちじゃ？」

「……後者です。」

「儂も。」

「「ハァ～」」

室内に2人の疲れた溜め息が木霊した。

続く

エヴァの説得？お安い御用だ！！（後書き）

ふっ、霞にとってエヴァの説得なんぞ簡単なモノだよ。
ちなみに家族で簡単に説得できる人物は霞・フェイトだけです。
霞は今話の様に。
フェイトは……エヴァに対する溢れる愛によって説得？します。

そんな訳で
サヨ～ナラ～
（；∇；）／～～

吸血鬼事件……より先に千雨の方が大事件（前書き）

……ごめんなさい。
エヴァの愛らしさを期待した皆様。
ひとまず千雨の話を入れさせてもらいました。

すいません

吸血鬼事件……より先に千雨の方が大事件

エヴァ説得から幾日か経ち
学園長、タカミチ、エヴァは計画を練っている最中、霞の方では…
……

「いらっしゃい、千雨。よく来てくれたな。」

「別にいいんだけど……。今日は一体どうしたんだ?霞さん。」

「まっ、座りなさいな。注文はどうする?」

千雨がカウンター席に座り霞の言葉に「今日は紅茶で」と答える。
霞は了解といい厨房に下がる。
千雨は昨日の夜に霞から連絡があり、今日の昼前後辺りに店に来てくれと言われたので、来店したのだ。
ちなみになのは達にはひとまず遠慮してもらっている。
霞が厨房から出てきて紅茶を出す。
千雨はそれを飲みながら

「で、霞さん。話って何だよ?」

「ん、ああ。実はな……俺…千雨に惚れたんだよ……。」

「ブフォッ!?」

吹き出す千雨。

「とまあ冗談は置いておき……ほい、ハンカチ。」

「ゲホッゲホッ、ありがと霞……って違うわ!!吹き出した原因はあんたの一言だから!!お礼を言う私は間違ってるだろ!?」

「?何を当たり前の事を言ってんだ?」

「何で平然としてんだよ!!何か私がさも間違ってるような雰囲気なのに言ってることは正論だよ!?ダメだ!混乱してきた……落ち着け、落ち着け、私……「千雨って……ツッコミもボケも上手いのな。」ッッ!?アンタのせいダァァァーーー!」

霞の千雨弄りは3分程続いた。

「ハァハァ……霞さん……もしかしてだけど…私をおちょくる為に呼んだんじゃないだろうな?」

「んなわけないだろ。流石にそこまでしないぞ、チウたんは疑り深いなぁ。」

「チウたん言うな……へっ?……霞さん、今…何て?」

霞の単語に反応する千雨。
霞は首を傾げながら答える。

「?チウたんだが……。千雨って読み方変えるとチウだろ?だからそう呼んだんだけど……。」

それを聞き千雨は心底安堵したように息を吐き

「ハァ～……いや、何でもない。気にしないでｋ「それにネットのハンドルネームも千雨はチウにしてるじゃん。」……オワタｏｒｚ」

叫ぶ気力も無くした千雨はカウンターのテーブルにゴン！と言う音を立てながら頭をぶつけた。

霞は千雨にとって更なる追い討ちをかけた。

「ちなみに見つけたのは、なのはとフェイトだぞ。２人がネットをさ迷ってたら見つけたって言ってたから。」

「（グサグサ。……マジかよｏｒｚ。」

「マジだ。さらにさらにアリカとテオとレイもそれを見たから知ってるぞ～。」

「（グサグサ。……もう生きていけない（泣）。死のうかな……。」

千雨がいい感じで落ち込んでいるのを見た霞が

「ちなみに俺ってば魔法を使えるんだぜ～。」

このタイミングで切り出した。

千雨の反応は

「はいはい。魔法を使えるんですか～、良かったですね～、私はそれどころじゃありません～、知り合いに自分の黒歴史を知られて絶

望のどん底なんです～ｏｒｚ」

見事なまでに無反応。

霞はそんな千雨をしばらく観察してみることにした。

「霞さんにわかるか～、知り合いに黒歴史を知られた羞恥プレイが～、あの修正に修正をかけた画像を見られたんだぞ～、更に掲示板にはカマトトぶった言語使いまくりなんだぜ～、あんなん見られたら恥ずかしくて生きてられないって～の～、幾らここが異常だからってアレを見たら流石に引くぞコンニャロ～、いっその事ゲームみたいな魔法で吹き飛ばし……魔法？」

千雨はようやく反応した。

霞はおっ？と思いつつまだ観察。

「魔法？霞さん、今、魔法を使えるって言ったよな？」

その言葉に頷く霞。

千雨は……

「よし！？霞さん、今すぐこの土地を吹き飛ばしてくれ！！」

なかなか愉快な発想に至りついた。

「ククククッ、落ち着け、落ち着け。できん事もないが俺と千雨が指名手配を受ける事になる。流石に犯罪者は嫌だろうが。」

「クッ！？確かに……ってあれ？……魔法？」

千雨は再度、呟く。

霞は笑いを堪えてまた頷き

「俺は魔法使いだから魔法を使えるぞ。……まあ、正しくは違うんだけどな。」

千雨はようやく脳が理解し

「……もしかして話しっていうのは……。」

霞にそう切り出した。

霞は内心で流石、回転が速いと思いながら千雨に説明しだした。

千雨の特異性

麻帆良の結界のせいによる異常の認識不足

この学園都市が魔法使いの国が建てた都市

千雨自身と麻帆良の簡単な（…）部分を教えてやった。

それを聞いた千雨は頭を抱え

「はぁ～、マジかよ。それが本当……というか、それだと大部分が説明できる。」

と言う。

霞は付け足す。

「ちなみに千雨はなかなか希有な存在なんだぜ。」

「えっ？」

「千雨が麻帆良の結界が効かない存在だと教えたよな。」

千雨は頷く。

「千雨はな、精神に干渉する類の魔法の抵抗値が異常なまでに高いんだ。例えば……そこらの魔法使いが幻術やら誘惑やらを今の千雨にかけても効かないぐらいな。そうだな～……分かりやすく言うと一般魔法使いの幻術等に対する抵抗値を1としよう。何の訓練もしていない只の一般人の千雨は……30～50ぐらいだな。精神状態で数値が変動するが、大体この間に収まってる筈だ。訓練すると多分そこらの一流魔法使いが幻術かけても普通に「何やってんだ、おまえ？」状態になるぞ～。今んとこはこんぐらいにしとくか。……理解できたか？」

「……あんまり理解したくないけど、理解した。……聞きたい事があるんだけど、いいか？」

霞は頷く。

「霞さんは初めから私の事は知ってたのか？」

「まぁな。最初にあった時に聞いた時点でな。あの時は千雨の愚痴を聞くぐらいで千雨の気が晴れるだろうと思ってたんだがな……。さっき説明したけど、基本的に魔法は秘匿もんだしな～。」

「それはありがたかったよ／／／……じゃあ今になって私に教えた理由は？」

「千雨なら解っているんじゃないか？」

「……ネギ先生……か。」

「正解。千雨のストレスの溜め具合が半端なさそうだったからな。

もし今、別の要因が千雨に降りかかったら……まあ、間違いなくキレそうだったんでな。」

「うっ……否定できない。……なら、私に教えて大丈夫なのか？魔法って秘匿するもんなんだろ？」

「ここの最高責任者には話をつけてあるから大丈夫。……まっ、文句を言ってきたらフルボッコにするつもりだったが（ボソッ」

「？……まあ一通りわかったよ。」

千雨の言葉に霞は頷き

「じゃ、千雨。これから魔法使いになる訓練な♪」

そう宣言した。
千雨は鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をした。
霞はそれを見て？顔。
千雨はハッと我に帰った後

「いやいやいや、ちょっと待っ「待たない♪」待てよ！？最後まで言わせろよ！！「千雨は我が儘だなぁ」チッガーーウ！？普通は！？私に！！選択させるもんじゃないのか！？」

千雨のその言葉に霞は失笑し告げる。

「ハッ。そんなテンプレ展開なんぞ俺はやらないＺＥ☆
というか、選択肢って

1．記憶を弄られて無かった事にする。

2．現状維持的な感じ

3．魔法を習い、異常に対抗する。

4．逝っちゃう？

ぐらいだぞ？

千雨の性格なら3しか選ばんだろう。」

これを聞いた千雨はウグッと黙り、考え、渋々頷いた。

「はい決定、決定。千雨は今日から魔法使い見習いに決定。……ちなみに俺が千雨の身の安全を保障して普通の生活を送らすってな選択もあったな。」

それを聞いた千雨は凄い勢いで顔を上げてそれにすると言おうとしたが

「そうなると千雨は俺に養われなきゃいけないんだけどな～（笑）。魔法って意外にどこにでもあるから。……どうする？俺は別にいいぞ。千雨の事は好きだしな。家族も千雨なら歓迎するだろうし（ニヤニヤ。」

意地の悪い顔をする霞。

千雨は……悔しそうな表情をしつつ顔を赤らめながら

「グググッ……わかったよ。習うよ、習います！！習えばいいんだろ！！っていうか！霞さん、アリカさんと結婚してるんだろ！私にそんな事言っていいのかよ！！」

ウガァーと叫ぶ千雨。
霞は笑みを崩さない。

「そだな。ちなみにテオも奥さんだぞ。付け加えるなら俺には現在7人の嫁さん＋婚約者(レイ)が1人いるな。どや？」

それを聞いた千雨はポカンとした後

「……はっ？それって一夫多妻って事か？大丈夫なのか、それ？っていうかアリカさんとか納得してるのか？」

聞く。
すると霞は

「……まぁな。なんでか皆、こんな俺の事を慕ってくれてなぁ。ほんと良く出来た嫁さん達だよ。だからと言っちゃなんだが俺は皆を全力で愛するし彼女達に降りかかる火の粉は例え神の怒りだろうが、魔王の攻撃だろうが、三千世界の全てが敵に回ろうが、守ってみせる。……まっ、皆も黙って守られる性格じゃないんだけどな、ハハハッ。」

千雨ｓｉｄｅ

「……まぁな。なんでか皆、こんな俺の事を慕ってくれてなぁ。ほ

んと良く出来た嫁さん達だよ。だからと言っちゃなんだが俺は皆を全力で愛するし彼女達に降りかかる火の粉は例え神の怒りだろうが、魔王の攻撃だろうが、三千世界の全てが敵に回ろうが、守ってみせる。……まっ、皆も黙って守られる性格じゃないんだけどな、ハハハッ。」

そう言った時の霞さんの表情は凄く優しそうな、それでいて見た者が「本当に愛してるんだな」と想わせるモノだった。
それを見た私は浮気者だとかチャランポランだとかそんな気持ちは一切出てこなかった。
出てきたのは

トクン

羨ましい

トクン

私も……

トクン

そんな気持ちだった。
最初に助けてもらい、私の愚痴を聞いてもらい、時にはおちょくられる時もあった霞さんは今までは兄のような存在だった。
今は……
……まだだ。まだ決めつけるのは早い。
とにかく今は魔法に関しての整理をつけてから。
それからゆっくりと考えよう。
その時、私の気持ちがーーだったなら……覚悟しとけよ、霞さん。

千雨ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

惚けている千雨に気付かずに霞は千雨に声を掛ける。

「今日はひとまず終わりな。こっちも準備とかがあるから、魔法に関してはまた後日にしよう。それでいいか、千雨？」

「……へっ？うぇっ！？あああっ！うん、それでいい！今日は終わりなんだな！？わかった、じゃあ私は帰る！！それじゃ、霞さん。またな！！」

ドドドドッ
バンッ！ジャリィーン
……バタン。

アタフタしながら嵐のように去った千雨にポカーンとする霞。

すると

チリィ～ン

「霞くん。何か千雨ちゃん、凄い勢いで走ってたけど……どうしたの？」

丁度、なのはが帰ってきた。

「いや……本当にサッパリ。いきなり慌て出していきなり帰った……本当にわかんない。」

霞の表情と言葉に嘘を吐いてないことをなのはは感じ取り

「「？？」」

2人揃って首を傾げた。

吸血鬼事件……より先に千雨の方が大事件（後書き）

うん。
作者にはシリアスとかラブ的な展開はどうも似合わない。
というか上手く書けない。
書けるとしたらギリギリ、ハッチャケたストーリーだけだ。

だからラブ描写とかにおかしな所があってもツッコまないで欲しいです！！

イタッ！
モノを投げないで！

すいません！！
では、また次回！

吸血鬼事件……見ろよ、蹴られてるぜ（笑）（前書き）

ネギの出番があまりない。
ネギが大好きな方々。
ゴメンナサイ
m（＿＿）m

場面を飛ばし飛ばしにしていっています。
スイマセン。

あまり笑いがない話ですが
始まりま～す

吸血鬼事件……見ろよ、蹴られてるぜ（笑）

学生にとって春休みが終わり
２－Ａは３－Ａと学年が上がり、その初日。
Ａ組が身体測定をしている最中、桜通りの吸血鬼の噂が持ち上がり
ワイワイと騒いでいる。
以前の千雨なら馬鹿にしていたが

（魔法使いがいるんだし、吸血鬼もいるのかな？……いやいや、
流石にそれは……、一応帰りに霞さんの所に寄って聞いてみよう）

そう考えた。
千雨はあの魔法を知った日から実を言うと全く店に行ってない。
霞から連絡がないため。
千雨は霞が準備もあるとか言っていたのもあったため大人しく待っ
ているのだ。
すると

「お～い、千雨ちゃん。」

後ろから声を掛けられ、振り向く。
そこには霞の家に住んでいるなのはがいた。

「霞くんがね、今日の夕方に店に来てくれって。」

なのはの言葉に千雨はいよいよかと思いつつ

「そういや高町……（あれ？聞いてもいいのか？もし魔法を秘匿する
んなら……止めとこう、霞さんに聞いてからだな。）……や、

悪い。何でもない。わかった。授業が終わったら行くわ。」

そう言った。

そんな千雨を見て、なのははニコニコして

「うん、霞くんに伝えとくね。それと

今日から千雨ちゃんは私の（教え子的な意味で）だからね！

フェイトちゃんにも渡さないんだから！！」

なかなか過激な発言をした。

周りにいた生徒と千雨の時が凍りついた。

なのはの少し後ろにいたフェイトは

「あの、なのは。さっきの言葉はごか「何々何々！？高町と長谷川ってそういう関係だったの！？」「百合？百合なの！？」「高町さん！！テスタロッサさんとはどうなったの！？」……ああ、やっぱり……。」

囲まれるなのは。

「にゃっ？えっ？……ああ！？違う！違うよ！！そういう意味じ

ゃないよ!!ちょっ!皆、落ち着いてーーーーーー!!!」

質問攻めに慌てながら興奮するA組の生徒をなだめる。
千雨はこっそりとその包囲から抜け出し、フェイトの側にきて

「……一応、聞いとくけど……高町の発言は……そういう意味じゃないんだよな?」

「うん、ごめんね。なのはってば久しぶりに誰かに教える事ができるから、ちょっと舞い上がってるんだ。」

フェイトがそう答えた時、千雨は何の事かすぐに察した。
なので、聞いてみた。

「ん?教えるのって霞さんじゃないのか?」

「……え?千雨、霞の教育…受けたいの(驚)?」

フェイトが驚愕しながら千雨に聞く。
千雨はそんなフェイトの反応に嫌な予感を感じたのか

「ちょっと待ってくれ。……もしかして、霞さんが教えるのってマズいのか?」

その千雨の発言にフェイトは合点がいったのか

「ああ、知らなかったんだ。じゃあ、しょうがないか。あのね霞の教え方って……(略)……なんだよ。ちなみに今言ったのは霞的に入門編なんだって。……どうする?受ける?」

その問いに

「絶対嫌だ。良かった。ほんとに良かった。高町とテスタロッサが常識的でほんとに良かった。」

そう答えた。

フェイトはそんな千雨を見て

（あはは……なのはも大概スパルタなんだけど……言わない方がいいかな…。）

声には出さなかった。

少し離れた所で

（ふん、霞のやつ。早速、教えたのか。まあ、いい。私には関係ない事だ。）

（長谷川に教えたのか。……なのはさんが師…か。冥福を祈るしか私にはできないかな。）

エヴァと真名がそれぞれ思った。

ちなみになのはは

「落ち着いてーーーーー！私にはちゃんと彼氏がいる「「「マジかーーーーーーーー！！」」」きゃーーーっ！逆効果だった～～っ！？フェイトちゃ～～ん！助けてェ～～～～～～（泣）」

火に油を注いでいた。

放課後
千雨がそこそこ通い慣れた道を歩き、店に到着し

チリィ～ン

店内に入った。

「ん？あぁ、千雨か。」

「こんにちは、アリカさん。霞さんに呼ばれて来たんだけど……。」

応対してくれたアリカにそう告げる。

「ああ、待っておれ。呼んでくる故。それと何か飲むか？」

「あ、はい。じゃあアイスコーヒーで。」

「了解じゃ。」

アリカはキビキビした動作で厨房に入っていった。
千雨はそれを見送り、カウンター席に座った瞬間

「ち～さ～め～♪（ギュゥッ」

背後から抱きつかれた。

「うわっ!?ちょっ!テオドラさん!!離れろ!!」

「イヤじゃ～♪こうやって千雨分を補給するのじゃ～♪」

「千雨分って何だよ!?私にそんな変なモノはーーって、どこに手を「胸のとこじゃよ」チッガーーウ!触るなって言ってんだァーーーー!」

じゃれ合うテオドラと千雨。
そこへ

「おい、テオ。妾の妹分に手を出すな。」

アイスコーヒーを持って出てきたアリカがそう言ってきた。
テオドラは口をεの形にして

「はいはい、怖い姉弟子が来たから離れるかのぅ。」

と言い、千雨から離れた。
千雨はホッと安堵した後

「あの、アリカさん。今のって?」

「ああ、それは「俺から説明するぞ～」…だそうじゃ。」

店の奥から霞が出てきた。

霞達はひとまず一息入れ落ち着き

「とりあえず千雨を教えるのは「高町だろ」って、聞いてたのか。」

「……朝に妙な発言をしてクラスを騒がせた。勘弁して欲しかったよ。」

千雨の疲れた声音を聞き霞達は苦笑する。

「一応説明するけど、聞いての通り基本的に千雨に教えるのはなのはになる。千雨は《なのは組》だな。（……可哀想に）」

霞とテオドラが一瞬だけ憐れんだ目で千雨を見たのに千雨は気づかなかった。

そんな彼女は

「霞さん。なんだ?その《なのは組》って?」

「これは単純になのはが教えている組とフェイトが教えている組って事。ちなみにアリカがなのは組でテオがフェイト組。」

これを聞いた千雨は先程のアリカとテオドラの発言の意味が理解できた。

ただ千雨は

「アリカさんが高町の先生じゃなくて、高町がアリカさんの先生なのか?普通に考えたら逆だと思うんだけど……。」

その疑問は知らない者からすれば尤も。
それにテオドラが答えた。

「なのはとフェイトはああ見えて妾とアリカより年上じゃぞ。」

「……えっ？」

「テオの言う事は本当じゃ、千雨。実年齢で言えば霞、なのは、フェイトの3人は妾2人より大分年上じゃ。霞よ。お主、自分の年齢を覚えておるか？」

アリカの問いに霞は考え始め……

「……２００歳から数えてない。別荘使ったりもしたし。ちゃんと計算すれば解るけどめんどいからしない。」

と答えた。
それを聞いた千雨は口を開けたまま呆けていた。

「ちなみに妾も覚えておらぬな。アリカは？」

「同じじゃ。１００歳は確実に超えておるはずじゃがの。」

トドメと言わんばかりに告げる2人。
数秒後

「ハァァアアァァアーーーーーーーーッ！？！！？！！」

千雨の驚愕の声が店内に響いた。

あれから千雨を落ち着かせ自分達が不老長寿だからということを教えた。
それだけを教えてひとまず話しの続きを開始する。

「話しを戻すな。なのはが千雨の教育をするんだが、あくまで基本で偶にはアリカやテオ、フェイトが教える事もある。それはいいか？」

「うん。」

「よし。本当は今日から魔法の講義……と言いたいんだけど、丁度今な面白い催しをやってるんだ。その現場見学をしながら魔法ってやつがどんなものか、それを教えていこう。」

霞がそう言いながら、千雨の方に顔を向ける。

「いや、それでいいけど……催しって何だ？」

千雨の疑問にニヤッと笑みを浮かべ

「それはな

《桜通りの吸血鬼》

だ。」

夜
桜通りにて

バキキキンッ！！

「僕の呪文を全部はね返した！？」

そう言いながら、ネギは倒れている生徒、宮崎のどかを抱える。
そんなネギに相対するは

「ふん。なかなかの魔力。……流石にあの鳥頭（バカ）の息子だけはある。」

真祖の吸血鬼、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルであった。

相対する2人のやり取りを少し離れた桜の木の下で

「ネギ先生とエヴァンジェリン？」

「だよ、千雨ちゃん。噂の吸血鬼はエヴァちゃん。ネギ先生は、予想していたと思うけど魔法使い……の見習いなんだけどね。」

千雨となのはがいた。2人はなのはの認識“妨害”により知覚の範囲外のため、気づかれない。

「……止めなくていいのか、あれ？」

当然の反応をする千雨。

なのはは苦笑し

「ちょっとね。追々説明はするから。今は2人が使う魔法の……危険さを感じて。」

なのはの言葉に戸惑いながら頷く千雨。

そうしている間にエヴァが去り、ネギが追いかける。

場面はとある家屋の屋根。

エヴァの側に従者の茶々丸が降り立ち、ネギの魔法を悉く妨害しネギを拘束する。

「ふん。今になっては意味がないが……とりあえず吸っとくか（ニヤリ。」

「うわぁ～ん！誰か助けて～～。」

その時

『ちょっ！？エヴァちゃん！！ネギ君から離れ、霞くん！お願いだから我慢して～～～～！！！』

なのはから念話が入った。

エヴァは「はっ？」と言う顔をしながら停止する。

そして

「コラーーッ！この変質者どもーーーーーーッ！！ウチの居候に何すんのよーーーッ」

ドガッ

「「はぶぅっ／あっ」」

アスナが現れ、２人に蹴りを喰らわせた。

場面は変わり

霞達は

「アスナ！良いタイミングだよ！？」

「うむ、良い蹴りである。流石、アスナじゃ。」

「チッ！クソ坊主を八つ裂きにしようと思ったのに！？……しかし、蹴られた時のエヴァのリアクションはなかなかだ。フェイトはちゃんと録画したかな？」

「いや、その前に霞さんは何でそんなに怒ってんだよ？」

なのは、アリカ、霞、千雨がそれぞれ声を上げる。
千雨の疑問にアリカが答えた。

「あそこにいるエヴァと茶々丸は霞の嫁じゃからな。さっき、霞が怒ってたのはエヴァがネギに抱きついていたからじゃろ。要するに嫉妬よ。」

それを聞いた千雨は信じられないような視線を霞に向け

「……霞さん、流石にマクダウェルはマズいぞ。捕まるんじゃないか？」

ごもっともな意見ありがとうございます。
なのはとアリカはプッと吹き出し顔を明後日の方向に向ける。
霞は

「千雨……ああ見えてエヴァは……６００歳の……ババァ……なんだぜ。所謂……合法ロリ……だ。」

「……なん……だと……。」

「ダメッ！？アハッ！アハハハハハ！？」

「クッ（笑）。これ……なのは……笑っては……ダメじゃ、クッ、ククククッ（笑）」

霞と千雨のやり取りになのはとアリカは爆笑する。
そこに

「おい……貴様等……何を笑っている（怒）」

「こんばんは、皆様。」

件のエヴァと従者の茶々丸がネギ達の元から去り４人の元に降り立った。怒りながら。
だが

「出やがったな。ロリババァめ。いや、ショタババァが……。」

「誰がロリババァだ!?ついでにショタじゃない!?……って、おまえは何を怒っているんだ?」

霞の態度にエヴァが疑問を感じた。
茶々丸も首を傾げる。
２人になのはが教える。

「エヴァちゃん、ネギ君に噛みつこうとした時、抱きついたでしょ？それが許せなかったんだよ。もう少しでネギ君……入院生活する事になってたよ……本当、アスナはナイスタイミングだった。」

それを聞いたエヴァはニマ～ッと口を歪め

「ほほう。ようするに嫉妬をしたと。たかが１０歳のガキに１００

歳など有に超えている道士様が……嫉妬をした……と。ククククッ、成る程、成る程♪いやいや、私としては夫であるおまえが嫉妬をしてくれるのは嬉しいが……クククッ、いささか大人気ないのでは？アーッハッハッハッハッ！！」

優越感を感じまくるエヴァ。
エヴァに馬鹿にされグウッと悔しそうな表情をする霞。
そんな2人のやり取りが慣れてしまった3人と少し困惑気味な千雨。

「あの2人、いいのか？」

「いいの、いいの。あれはあれで仲が良い証拠だから。」

「霞様といるマスターはいつも生き生きしておられますので。」

「それより千雨。今日はもう終いのようじゃ。寮まで送ろう。」

そう言いながら4人は去っていった。
残った2人は

「アーッハッハッハッハッハッハッハッ！？」

「エヴァっ！いい加減にしやがれ！このっ」

「うぁっ！何をする！やめろ、馬鹿者！！」

遅くまでじゃれ合ったそうな。
こうして吸血鬼事件の開幕の一夜と千雨の魔法講義1時間目は終了した。

続く

吸血鬼事件……見ろよ、蹴られてるぜ（笑）（後書き）

次話の投稿

今日中にできたらいいんだけど

ついでに明日は祝日と言えど
作者は仕事
更新できない可能性が高いです。

なので
この話か次話でとりあえず連続投稿は終いで～す。

土日で４話か？投稿したの。
頑張った。

では～
（；∇；）／～～

吸血鬼事件……魔王……まだ大丈夫！？（前書き）

こんな感じ……で勘弁して下さい
m（＿＿）m
ヌルい上に、チグハグしてる感じがたっぷり。

文章力上げたい
（T＿T）

吸血鬼事件……魔王……まだ大丈夫！？

吸血鬼事件の開幕から概ね原作の通りに進んでいった。
現在はカモがネギとアスナを唆して茶々丸を尾行している最中
そう、茶々丸襲撃イベントである。
そのネギ達と茶々丸から少し離れた所に

「なあ、なのはさん。」

「さんはいらないよ～。で、何？千雨ちゃん。」

千雨となのはがいた。千雨はなのはから《なのは》って呼んでと（しつこく）言われたので名前で呼ぶ事にした。ちなみにさん付けしたのは年を聞いたから……。
それは置いといて
千雨は幾つか尋ねる。

「まず……ネギ先生達は…もしかして絡繰を襲撃しようとしてるのか？」

「……みたいだね。戦術として各個撃破というのはいいんだけど…今のネギ君の立場で……あれはちょっといただけないかな～……クスクス、ＯＨＡＮＡＳＨＩが必要カナ～♪」

なのはの雰囲気に千雨は引く……というか背筋に寒気が走った。

「……えっと……今日は！霞さんはいないのか？」

そう。

今いるのはなのはと千雨のみ。
霞はいない。

「ああ～、霞くんはね。今、フェイトちゃんとアリカさんが家で抑えつけてる。今の状況を霞くんが見たら……ネギ君がね……死んじゃうかも…だし。」

目を逸らしながら言う。
千雨は先日の霞を思い出す。
エヴァがネギに抱きついただけでアレだった。……理解した。

「代わりにテオが別で待機してるよ。今回はテオと私でネギ君にお灸を据えようかなと……。」

千雨は何故？と聞く。

「今のネギ君はね、千雨ちゃんと同じ魔法使いの見習いで未だ修行中。ネギ君が来てから観察してたけど、
無闇やたらに魔法を行使する又は制御失敗による魔法の暴走。
魔法の秘匿の緩さ。
アスナに対する魔法バレ。
禁止されてる魔法薬の使用。
まだ細かい所はあるけど、大きく挙げてこれぐらいかな。
そして今の立場は３－Ａの担任。茶々丸ちゃんはネギ君の生徒。
常識に照らし合わしたら、先生が生徒を襲ったりしちゃダメでしょ？
襲ってきたなら話は別だけど。
それに……今のネギ君は自分でしっかりと考えて行動してない。
あのオコジョに唆され流されてるだけ。
だからね、ちょっとＯＨＡＮＡＳＨＩしないとダメなんだ。」

その説明を聞き納得した。

「わかった。それじゃあどうやってお灸を据えるんだ？」

「ふふっ、実は仕込みはもうしてるんだよ。（アスナにも何とか効いたみたいだね、よかった。）ほら、見て。」

促された千雨はネギ達の方を見ると

「……何してんだ？あいつら？絡繰の前でぼっーと突っ立って……？」

千雨の言うとおり、茶々丸の前でネギ・アスナ・カモはボケッと突っ立っている。

「あれがテオの能力の１つ。無味無臭の鱗粉を吸わせて幻惑を見せてるの。本来の用途は麻痺が主なんだけどね。今のネギ君達は茶々丸ちゃんと対峙して襲撃してる最中。……っと、そろそろかな。じゃあ、千雨ちゃん。ここで待っててね。」

なのははそう言いながら

カァアアッ！

元の姿＋セットアップをしてネギ達の元へ飛翔した。

千雨は

「……はっ？大人？えっ？」

混乱した（笑）。

茶々丸ｓｉｄｅ

「？？？あの、ネギ先生？神楽坂さん？」

私は非常に混乱しています。
猫達に御飯を上げ終わったとき、ネギ先生達が私の前に現れました。
各個撃破する気でしょう。
すぐに予想できました。
あまり気が進みませんが私は迎撃態勢に入ったのですが……
ネギ先生達はいきなりボーッとしてしまい、声を掛けても無反応です。
困りました。
どうしようと思考していると

「こんにちは、茶々丸ちゃん。」

という声がしたのでそちらに顔を向けると

「なのは様。」

成人した姿で白い衣装を着た《白き仙姫》としてのなのは様がいました。

「……もしや、ネギ先生達はなのは様が？」

「正しくはテオだよ。ちょっと見過ごせなくて……彼等にＯＨＡＮＡＳＨＩを……ね♪」

笑顔で言うなのは様。

……状況が理解できた上で、こう思いました。

ネギ先生、神楽坂さん……ご愁傷様です。

茶々丸ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ネギ－ｓ　ｓｉｄｅ

「茶々丸さん、あの……、僕を狙うのはやめていただけませんか？」

「……申し訳ありません、ネギ先生。

私にとってマスターの命令は絶対ですので（ぺこ。」

「うぅっ……、仕方ないです…」

ネギ達は戦闘態勢に入る。

茶々丸も迎撃態勢に。

「行きます！！
契約執行、１０秒間！！
ネギの従者『神楽坂　明日菜』！！！」

ネギから魔力供給を受けたアスナが飛び出る。

「えいっ！！」

デコピンを放つアスナ。
喰らう茶々丸。
そして

「光の精霊１１柱、集い来たりて……ううっ‥、ッッ！？『魔法の射手・連弾・光の１１矢』！！」

ネギが放った。
それを見た茶々丸は

「追尾型魔法、至近距離多数、回避不能……」

と言う。
直前、ネギは思い直し魔法を曲げようとしたが

「ッッ！？あっ！」

失敗した。
結果

ドカカカンッ！！

着弾。

「あっ、あっ、」

「ネ、ネギ!?やり過ぎよ!?」

「兄貴!」

カラカラ

ネギ達の前に機械仕掛けの腕が……
それは
茶々丸の腕

「うぁっ、あっ、」

「……ッッ!?」

ネギとアスナが息を呑んだ瞬間、声が聞こえた。

「夢は終わりじゃ。目覚めよ。」

そして

パリィィィン!

「……えっ?」

「なに?」

「何じゃーっ!?」

風景が割れ砕け
目の前に

「こんにちわ、ネギ・スプリングフィールド君、神楽坂　アスナちゃん。」

「……（ぺこっ」

白き衣装を纏い栗色の髪を靡かせた美女と無傷の茶々丸が立っていた。

ネギ's side end

ネギ達が混乱しているのでなのはが声を掛け教える。

「さっきまでネギ君達が見ていたのは幻だよ。悪いと思ったんだけど、現実を見てもらう為にね。」

そこでカモが口を挟んできた。

「やいやい、誰だ、あんたは!?部外者「シュート（バシュッ」ギャァーーー……（プスプス。」

なのはは問答無用でカモを黙らせた。

「カモ君！！」

「カモッ！」

吹っ飛ばされたカモに向かおうとするネギとアスナ。

だが

「動かないで」

「「ッッッ！？」」

静かに低い声で告げる。

覇気を出しながら。

あまりのプレッシャーに2人は動けなくなった。

「あのオコジョ君は大丈夫。余計な事しか言わないみたいだから、少し黙ってもらっただけ。死んでないから安心していいよ。」

なのはの言葉に少しだけ安心した2人。

そこでアスナが尋ねる。

「あんた誰よ？」

「ちょっと事情を知ってる通りすがりの魔法使い…かな。私の事よりも……ネギ君に聞きたい事があるんだけど？」

呼ばれたネギはビクッとした後

「は、はい。」

「……今の心境はどうかな？幻といえど茶々丸ちゃんを“殺した”事について……どう？」

そこでアスナが

「ちょっと！？実際には茶々丸さんは無傷なんだから、そこまで「少し、黙ろうか？」……ヒッ！？」

文句を言おうとした時、かなりの殺気と共にアスナを黙らす。

「神楽坂さん。もし私が幻を掛けずに現実に戦闘をしていたら……幻と同じ結果を迎えた可能性がある。その時、あなたとネギ君は殺人をしたと同義なんだよ？
それとも……茶々丸ちゃんがロボットだから殺人じゃないと主張するのかな？
ここにいる茶々丸ちゃんはこの世でたった1つの存在……代わりなんていないんだよ？
どうなの？」

なのはの言葉の意味を理解できたのか真っ青になるアスナ。
なのははネギに視線を向け

「で、ネギ君。君は？」

問う。
ネギは

「……気分は最悪です。いくら茶々丸さんがエヴァンジェリン

さんの従者っていっても茶々丸さん自体は優しい方で……何より僕の生徒です。なのに幻といえど手に掛けてしまった僕は……最低です。」

うなだれるネギ。
そんなネギを見てアスナは何と声を掛けていいかわからない。
2人を見てなのはは

「……反省してるようだね。……ならネギ君、アスナちゃん。茶々丸ちゃんに言うことがあるんじゃないかな？」

告げる。
ネギとアスナは茶々丸の方を向き

「「茶々丸さん、ごめんなさい（ぺこっ」」

素直に謝った。

「いえ、あの、私は特に被害を受けなかったので……あの御2人とも頭を上げて下さい（オロオロ。」

その光景を見てなのはは笑顔になり

「よろしい♪……ネギ君、ちょっといいかな？」

「っ！？はい！？」

ネギに声を掛けた。
ネギはビクッとなり、背筋を伸ばした。
なのはは苦笑しながら

「もう怒ってないから、そんなに緊張しないで。それでね、ネギ君。
魔法って使い方を間違えると危険なモノ。
魔法の射手1つで人を重体にする、下手をすると殺してしまう。
これは今回の事でわかったよね？」

「……はい。」

「でね。
ネギ君の中での魔法使いって、多分全員が善い人だって思ってるんじゃないかな？」

「……違うんですか？」

「うん、残念だけど。今は納得できないかも知れないけど、覚えておいて。魔法を悪用する魔法使いは必ずいる。これは人が人である限り、避けられない事だと思う。……ネギ君、君は君自身が正しいと思う事に魔法を使ってね。後、よく考えて自分自身の判断で行動すること
じゃないと、君自身がいつか後悔しちゃうよ。」

「……はい。」

「うん……後は…彼等に任せようかな。あぁ、そうだ。
アスナちゃん。」

「はい！？」

いきなり呼びかけられ驚くアスナ。

「パートナーがもし間違った道に進もうとした時には手をあげてでも間違っている事を教える。それがパートナーなんだからね。今回みたいな時はアスナちゃんがしっかりしとかないと。」

そう言われたアスナはシュンとして

「すいません。」

と、もう1度謝る。

「まあ“明日菜”として魔法の事を知ったのは最近だから、仕方ないかな～。
これからは気をつけてね。
じゃあ、茶々丸ちゃん、行こうか。」

なのはは茶々丸に向き直り、言う。
茶々丸は頷き、なのはと共に空へ浮かび上がる。
それを見たネギは

「あの!?あなたは一体!?それとエヴァンジェリンさんの協力者なんですか!?」

聞いてきたので

「それも自分でよく考える事。私に関しては……いずれね。それじゃ。（シュン」

なのはは虚空瞬動でネギ達の視界から消える。
茶々丸はそのまま飛び去っていった。

残されたネギとアスナもカモを拾い、なのはに言われた事をよく考えて帰途についた。

なのはは千雨の元に帰り

「ごめんね、千雨ちゃん。長い事、待たせちゃって。」

千雨に謝罪する。

「いや、いいよ。私も聞いててタメにはなったし。……なあ、何で大人になってんだ？いきなりでめちゃくちゃビビったんだけど……。」

「あれ？霞くんから聞いてなかったの？」

千雨の質問になのはは逆に疑問を抱いた。

千雨は首肯する。

「私とフェイトちゃんの能力の1つで肉体操作が出来てね。それで大人になれる……というか元がこっちだから、いつもの姿が操作している状態かな。ちなみに霞くんもできるよ。」

「ふ～ん……成る程。……何で、わざわざ中学生になってるか聞いてもいいのか？」

「あ～、う～～ん、私からはちょっと……霞くんに聞いて欲しいかな。深刻な事じゃないから教えてくれるはずだよ……聞いて後悔するかもね（ボソッ。」

「？？」

なのはの小声は千雨には届かなかった。
気にしないでと千雨に声をかけ

「じゃぁ、今日はこれで帰ろっか。……次で現場見学は最後にして、その後は講義及び練習にしよう♪」

「お手柔らかにな。」

2人も自宅と寮に戻っていった。

おまけ

「なあ、霞さん。なのはに聞いたら霞さんに聞けって言われたんだけど、何でなのはとフェイトは中学生活してんだ？」

「……遂に聞いてきたか……一応、機密なんだが……千雨には教えてもいいか……。」

「うぇっ、何かヤバいのか？無理なら別にいいぞ。」

「いや、気にしなくていい。何であの2人が中学生姿になってるか

というとな……。」

「（ゴクッ。」

「……麻帆良女子中の制服姿を着てる2人が見たかったからだ。アリカとテオは肉体年齢操作が出来ないから断念した、残念！！」

「……馬鹿だろ、あんた（呆）」

「馬鹿で大いに結構さ！？……ちなみにいい事を教えてやろう。フェイトが元の姿に戻った時に制服を着たらな……エ「霞ィーーーーー！！千雨に変な事教えないで！！！！（サンダー！レイジ！！）」ァアアァーーーーーー……。」

「……（エロかったんだ……）」

つづく

吸血鬼事件……魔王……まだ大丈夫！？（後書き）

次で吸血鬼事件を終わりにしようかと……たぶん。

バカなネタを思いついたら引っ張りますが。

……最近の話を振り返ると……全然、ハッチャケさせてない……

何とかしなければ！！

では（；∇；）／～～

吸血鬼事件……最後は……（前書き）

きっとナニカが囁いちゃったんだ。
だから作者は悪くない。

……いや、本当にすいません。

吸血鬼事件……最後は……

ネギがなのはに軽い？説教を受けた日から数日

「でだな、正直めんどくさくなったからサッサと片付けようと考えてたら、坊やの方から果たし状なんてモノを寄越してきたのでな。次の満月に決着……というか痛めつけて終わらすぞ。」

「好きにすればいいさ～。千雨の見学も次で終わりにしようと思ってたし。」

エヴァの言葉にそう返す霞。
昼の時間帯になってエヴァが茶々丸を伴い来店してコーヒーを飲みながら言ってきたのだ。

「じゃあそんなエヴァに1つ忠告。
スプリングフィールドの一族とエヴァは相性が最悪。
それとあいつらは何をヤらかすかわからんから、注意だけはしときな。」

「……わかった、一応聞いておこう。」

そんなやり取りをした後、エヴァと茶々丸が店を出た。

ネギ対エヴァの決戦当日の夜
某所にて

「……なあ、聞いていいか？」

「……うん、何かな千雨ちゃん。」

「霞さんは……何をやってるんだ？」

「……撮影準備……なのかな。」

千雨となのはの２人が会話をしながら見ている先には

「フェイトー、もうちょい左「わかった～」……ＯＫ。あー、テオ！そこの設置は後３０ｃｍ上で！「このへんかのぅ」……バッチシ！……こんなもんかな。２人共～、完了した～。お疲れ～。」

霞がフェイトとテオドラを誘導しカメラやビデオカメラを設置していた。

「アリカさんは、何か聞いてる？」
「いや、何も。レイ、お主は？」

「私も特に。ちなみにテオ様も知らないようです。ただ……マスターはフェイト様にこう告げて手伝って貰っているようです。「エヴァの愛らしい姿を撮りたいんだ。」と。」

それを聞いたなのはとアリカはエヴァに対して同情のような気持ちを抱いた。
そして霞達が４人の元に戻ってきた。

「準備完了～。さて……千雨さん。本日の見学にはテーマがあります。」

「テーマ？」

千雨は頭の中に？を浮かべ、聞く態勢に入る。

なのはとアリカは訝しげ。

そして霞は

「そう。本日のテーマは……《油断は禁物》……です。ちょうど本日、油断を体現しまくってるぅｊ……ゲフンゲフン……油断をしてる強者がいるのでその方を実際に見て感じてください。……油断をしていると大変な目に遭うということを。ククククッ……。」

「はあ……（マクダウェル……の事だよな？）。」

千雨は生返事をしながらそう思った。

なのはとアリカは霞の言葉を聞いて一応納得はしたが……エヴァに対する同情の気持ちもまた大きくなった。

ちなみにフェイトは早くもエヴァに対する愛で妄想の世界へ。

テオは鼻歌をしながらワクワクしている。

そんな霞達一行は仕掛けをした場所から離れ、見やすい位置に移動した。

被害者ｓｉｄｅ

ネギとエヴァ、両者の戦闘が開始されネギが逃げながらエヴァをある（・・）場所へと誘導していく。

（……坊やの逃げ方……ふん、成る程。何かを仕掛けているな？……坊やの性格からして…捕縛系統の罠……か。父子揃って似たような事を。）

エヴァはそう考えながらネギをジワジワと追いかける。
昼の時に霞に忠告されたものの、封印が解けている自分に負けはないと思ったエヴァはネギがどんな小細工をするか見た後で終わらすか、と考えたのだ。
一方、ネギはネギで苦戦しながらも上手く誘導できていると思っている。

そして両者が学園都市の端にある麻帆良大橋にて対峙した。
両者の決着はもうすぐ……

そしてエヴァに付き従っている茶々丸は

『……はい。解りました。……了解です。お任せ下さい……ーーー。』

何やら念話で誰かと会話をしていた。

ネギがエヴァの魔法で吹っ飛ばされ、エヴァがネギを嘲笑しながら近づく。

「う……ぐっ……（よし、そのまま真っ直ぐ……）」

ネギはそう考える。
エヴァは

「ふふ……（ククク、そろそろか。）」

予想する。
エヴァが更なる一歩を踏み出した時

パシィィィン！

エヴァ（…）の足元に魔法陣が展開され……

ビシュッ、バシッ、ガシッ、ガシッ！

拘束魔法がエヴァを縛り付け……

ブゥゥン！！
シュンッ

「はっ？」

ドボーンッ！

「あぷっ！ブハッ！」

「……えっ？」

「……（ジィー。」

「坊や！？貴様！！」

「ーーーーえぇ～～～～！？」

2人の反応

エヴァはネギに対して憎悪にも等しい憎々しげな視線を向けつつ……溺れている。

ネギに至っては……訳が分からず驚くのみ。

ただ

「マスター……溺れている姿もまた愛らしいです（フルフル。」

茶々丸のみ慌てず騒がずエヴァの姿を撮り続ける。

そこに

「コラーーー……ぁ……ぁぁ……？？？……何？コレ？」

「……俺っちも……流石に……」

途中でネギと別れたカモが明日菜に助けを求め、それを聞いた明日菜が駆け付けてきたが……予想外の展開に困惑した。

無理もない。

被害者ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「……なあ、あれ……いいのか？」

千雨が尋ねる。

それを聞いたなのははは

「あ…は……は……ハァ、もういいよ。確かに油断してたエヴァちゃんも悪いし。」

アリカは

「まぁ……確かにそうじゃが……些か不憫じゃぞ、あれ。」

霞は

「ブハハハハハッ！！昼に忠告はしてたのに！？見事に引っ掛かったよ、エヴァのやつ！アハハハハハハッ！！」

フェイトは

「あぁっ！？溺れてるエヴァ！可哀想だけど……腕を必死に掻い

てるエヴァが可愛すぎるよ、はぅ～。」

テオは

「アハハハハハハッ！！エヴァの奴！“亀甲縛り”をさせられて溺れておるぞ！シュールすぎじゃろ！？〈幼女が亀甲縛りされて溺れている〉、どんなプレイなんじゃ！コレは！！ニャハハハハッ！！」

様々な反応。

霞がしたのは

・ネギの捕縛結界陣を弄り“特製”の捕縛結界陣に変更する
・時間差で太極図で作った“特製”の落とし穴を発動させる

この2つである。

……見事に引っ掛かったエヴァ。

それを見て笑う霞とテオ。

呆れる千雨となのはとアリカ。

フェイトは……言うまい。

霞達はしばらくの間、このような状態になっていた。

被害者2ｓｉｄｅ

遠見の魔法でネギとエヴァの様子を伺っていた2人。

そしてエヴァが霞の悪戯？に引っ掛かったのを見て

「……のう、タカミチくん。」

「……言いたい事は解ります。……間違いないでしょう。」

「……やはりか。これ……収拾つくのかのぅ？というか、儂の予感というか何というか……後始末……丸投げされそうなんじゃが……。」

「……ええ、ええ。ええ！そうでしょうね！！っていうか！あの人！やたら静かにしていたから今回は大人しくしてくれるのかな？なんて思ってた矢先にコレか！？どうすんだよ！ネギくんなんか混乱してるじゃん！？エヴァなんかもう涙目で溺れてるじゃん！？あの人！？依頼の主旨を忘れてるじゃないか！？いや、そういう人なんだけども！！収拾するこっちの身にもなれよーーーー！！！」

「ヒョォッ！落ち着け、落ち着くのじゃ！！タカミチｋ……いｔ……あれ？何かお腹の辺りが……イタッ……ヌォッ！！」

「学園長！学園長ォーーーーー！！」

学園長はお星様になりましたとさ☆

被害者２ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

おまけ

アルの元に一本のビデオテープが送られてきた。

「今度は何でしょうかね？……そういえば先日、学園長が緊急入院したようですが……まぁ霞のせいでしょう。」

そう言いながら再生し始めるアル。

それはエヴァが亀甲縛りで溺れているシーン……のテープ切れまでのループ録画。

……しばらくお待ち下さい……

数時間に及ぶループするエヴァの溺れているシーンを見たアルは

「……ふぅ……キティコレクションＮｏ．３５７として保管ですね。霞……グッジョブです。」

正に変態という名に相応しい台詞を霞に送った。

おわり？

吸血鬼事件……最後は……（後書き）

一応
対決イベントとしては終わり。
次回は
短いですが、後始末編……みたいな感じと小ネタ集？みたいな？
……特に考えてにぃ（テヘッ

キンクリして修学旅行前までいっちゃう？

……流石にしませんがね

最後に……エヴァが涙目で溺れて助けを求める姿を妄想し萌えた作者は手遅れだと思った。
……いまさらか

後日談＋α（前書き）

短い上に強引に終わらせました

吸血鬼事件は作者にとってやっちまった感がたっぷりでした

本当にごめんなさい

m（＿＿）m

後日談＋α

ネギエヴァ対決が終わってから2日後の夕方
学園長とタカミチがネギを呼び出し、吸血鬼事件の真相等を説明している時
霞の店では

「……。」

「～～～♪」

「（オロオロ。」

「……（帰りてー）」

エヴァは霞を睨み
霞は素知らぬ顔で鼻歌。
2人の雰囲気に茶々丸はあたふた。
千雨は授業が終わり、魔法の修行を始めると言われていたので店に向かい店内に入ると既にこの状態であった。
回れ右をして出ていこうとしたが霞にいらっしゃいと言われてしまったので渋々と席に着いた。
それから20分は経ち、現在に至る。
そして沈黙していたエヴァがようやく口を開く。

「霞……何故、邪魔をした？」

それを聞いた霞はいつもの如く笑いながら

「邪魔……ねぇ。逆に聞きたいんだけど……忠告していたのに何で罠にかかったのかにゃ～？エヴァちゃんは？」

「ぐっ……それは……」

「普通サッサと終わらすなら問答無用で終わらしたら良かったんじゃないかにゃ～？それをせずに遊びに走ったエヴァちゃんが悪いんじゃないかにゃ～？百歩譲って遊ぶのはいいけど、その遊び心のせいで罠にかかったのはエヴァちゃんが悪いんじゃないかにゃ～？更にナギの時にやられた〈落とし穴〉という罠の可能性を何で考えなかったのかにゃ～？更に更に言うなら実戦においては第三者の横槍を考えておくのも必要なんじゃないかにゃ～？そこんとこどうかにゃ？エヴァちゃん？」

「グッ……ゥウゥ～～……。」

まくし立てるように言った霞の言葉にエヴァは唸る事しかできない。
実際、霞の言うとおりエヴァはネギがどのような抵抗をするのか見てやろうという気でネギを追い詰めたのだ。
サッサと終わらすなら最初の方で茶々丸にネギの拘束を命令した後でそれなりの魔法をぶち込めばよかった。
なので

「結論。
慢心したエヴァが悪い。
それから千雨。」

そう締めた霞は千雨に声をかける。
いきなり呼ばれた千雨は少し驚きながら、霞の方に顔を向ける。

「先日言った通り、油断をすればエヴァのような最強クラスでも足を掬われる可能性がある。千雨が実戦をするかどうかはまだわかんないけど、もし何かの拍子で実戦をする羽目になるならありとあらゆる可能性を考え戦う事。……まっ、それはなのはの訓練をしながら考えていけばいいか。千雨はなのはが帰ってくるまでのんびりとしてな。……ほら、エヴァもいつまでもむくれてないで何か好きな物を作ってやるから機嫌直せ。酒もＯＫにしてやるから。」

「……紅茶。酒は持って帰る……日本酒を出せ。」

「りょ～かい。日本酒はちょい辛口？辛口？」

「少し辛口だ。」

エヴァの返事を聞きながら厨房に入っていった霞。
茶々丸は霞の手伝いをしようと思い厨房へと向かった。
そうなると店内に残ったのはエヴァと千雨の２人。
あまり……というか殆ど会話をした事がない両者の間に訪れるのは沈黙のみ。
と思っていたら

「おい、長谷川　千雨。」

意外にもエヴァの方から声を掛けた。
その事に内心で驚きながらもそれを表情には出さず千雨はエヴァの方に顔を向けた。

「さっき霞が言っていたが、おまえはなのはに魔法を教えてもらうのか？」

「あ、あぁ。そうみたいだけど……それが？」

「いや……あのバグキャラに修行をつけてもらうお前もなかなか肝が据わっているな、と思ってな。ククッ。」

「バグキャラ？……なのはがか？」

エヴァの言った言葉に首を傾げながら千雨は問い返す。

「ああ。まあいずれわかるさ。「ただいま～」っと、噂をすれば戻ってきたか。」

なのはの声に千雨は振り向き、エヴァは再び前を向く。
なのはが千雨に近付き声を掛け、早速魔法の練習をしようと言い千雨を引っ張っていった。
エヴァはそれを見送りながら

（さて長谷川　千雨はどのように化けるか……）

と思いながら霞の掛れる紅茶を待つ事にした。

◆とある幕間◆

「……久しぶりだな、ーー。」

「……。」

「聞こえてんのかわかんねぇ（呆）。……ーーを見てみたぞ。」

「ーー……。」

「反応したか。一応、聞こえてるという前提で話すぞ～。っつってもあんまり長居すると怖い監視人に見つかると厄介だからな。簡潔に言う。」

「……。」

「おまえのバカな考えを……ぶち壊してやるよ。それと『ーーー』。おまえの考えもな。……そんだけだ。じゃ、《またな》。」

「……。（……。）」

終わり。

後日談＋α（後書き）

最後のは
なんとなく書いてみた。

次からは日常のドタバタ編と修学旅行前の買い物をするついでにフラグ強化（千鶴かアキラ）をしてササッと修学旅行に移ります。
……もう原作乖離しまくっていいよね？
作者は作者はそう思ってみたり☆

それと読んで下さってる神様（読者様）達に尋ねたいんですが……
……

・千雨達の修行風景
・ネギｓｉｄｅをもっと書く

上記ってやった方がいいのかな？

良ければ感想でお答えしてくれれば嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1929u/

ネギま～道士の破壊物語～

2011年10月21日02時09分発行